

北海道立農試資料
Misc. Pub. Hokkaido
Prefect. Agric. Exp. Stn.
No. 9, p.1-213 March, 1979.

北海道立農業試験場資料 第9号

Miscellaneous Publication of Hokkaido
Prefectural Agricultural Experiment Stations
No. 9. March 1979

農作物優良品種の解説

(1961-1977)

Varieties of Field Crops in Hokkaido

(1961-1977)

昭和54年3月

北海道立中央農業試験場

Hokkaido Central
Agricultural Experiment Station
(Naganuma, Hokkaido, 069-13 Japan)

序

北海道農業は過去一貫して全国への食糧供給の重責を担って発展してきた。また、個々の生産農家は広大な農耕可能地を背景として、大型事業経営を指向して著しく発展してきた。しかし最近になって、漸く規模拡大が停滞し、内面的、質的向上へと転換が余儀なくされてきている。

一方、水稲をめぐる社会情勢はますます厳しくなり、昭和53年度より水田利用再編対策実施要綱が定められ、水稲の作付制限と水田の畑転換に伴う畑作物の積極的導入が図られている。

このような農業情勢下における営農では、適地、適作を基本とし、生産向上のための各種条件の整備が急がれるが、なかでも栽培作物およびその品種の選定は最も重要な課題になると言えよう。

この時に当って、しばらく改訂をみなかった「農作物優良品種の解説」を発刊し、大いに斯界に役立てようと考えた。本書については、昭和2年を初版とし、昭和27年および35年に改訂版を発刊してきた。その後今日に至るまでの約20年間は、道内の農業技術が大きく変革し、作物や品種の変せんもまた激しかった時期に当る。この間に道内研究機関から新たに育成された農作物優良品種は多数にのぼり、さらに奨励品種改廃も各作物について行われてきているので、その後の研究成果を併せて、優良品種解説を中心とした改訂版を刊行することとした。

本書の利活用が、北海道農業の一層の発展を果たす一助ともなれば幸甚である。

昭和54年3月

北海道立中央農業試験場長 島 崎 佳 郎

は じ め に

1. 解説には、1961年（昭36）から1977年（昭52）の17年間に、北海道農業試験会議（成績会議）の検討を経て、北海道種苗審議会で優良品種に決定された全品種をとりあげた。
2. 北海道登録品種一覧には、1971年（昭46）に定められた北海道農作物奨励品種登録要領、同準奨励品種記録要領によって、登録（記録）簿に登載すみの全品種をとりあげた。
3. 内容は、北海道農業試験会議で検討された資料に基づいているが、その後に変更または追加され明らかになっているものは、それに従って書き改めた。ただし、調査項目の用語は作物別に統一したので、最近の調査基準と一致しないところがある。
4. 水稻品種の字体は、1968年（昭43）1月の北海道農業試験会議の決定によって、1957年（昭32）以前の品種は漢字で、1958年（昭33）以降の品種はひらがなで、また、農林省登録品種は従来どおりカタカナで書いた。
5. 北海道立各農業試験場は、1964年（昭39）11月の組織改正によって改称され現在に至っているが、名称は交配、検定、発表などの当時にさかのぼって用いた。

旧 名 称	新 名 称
北海道立農業試験場本場	北海道立中央農業試験場
空知支場	同稲作部
江部乙りんご試験地	同園芸部に統合
岩宇園芸試験地	廃止
渡島支場	北海道立道南農業試験場
上川支場	北海道立上川農業試験場
十勝支場	北海道立十勝農業試験場
北見支場	北海道立北見農業試験場
根室支場	北海道立根釧農業試験場
宗谷支場	北海道立天北農業試験場
天北支場	同天塩支場
原原種農場	北海道立中央農業試験場 原原種農場
北海道立新得種畜場*	北海道立新得畜産試験場
北海道立滝川種畜場*	北海道立滝川畜産試験場

・は1962年（昭37）組織改正

6. 企画・編集担当

手塚 浩 森 義 雄 長 内 俊 一	
細 貝 節 夫 及 川 寛 尾 上 駿 策	
大 橋 尚 夫 竹 川 昌 和 田 北 辰 雄	

7. 執筆担当（ABC順）

浅 間 和 夫	ばれいしょ
千 葉 一 美	小豆
細 貝 節 夫	りんご，りんご台木
犬 塚 正	陸稲
加 藤 俊 介	野菜
北 村 亨	ラベンダー，なたね，ライ麦
古明地 通 孝	えん麦，えん豆
国 井 輝 男	除虫菊，亜麻
松 井 文 雄	ぶどう，オウトウ
三 木 英 一	野菜
峯 岸 恒 弥	なし
三 浦 豊 雄	菜豆
森 村 克 美	水稻
村 松 裕 司	ハイブッシュブルーベリー
仲 野 博 之	とうもろこし
成 田 秀 雄	大麦，裸麦
野 村 信 史	はっか
及 川 寛	ルタバガ，飼料カブ
及 川 邦 男	花豆
男 沢 良 吉	てん菜
尾 関 幸 男	小麦
佐々木 多喜雄	水稻
沢 田 一 夫	野菜
白 金 茂	スモモ，モモ，ウメ
砂 田 喜与志	大豆
田 北 辰 雄	水稻，トマト，ユリ
後 木 利 三	大豆
脇 本 隆	牧草
渡 辺 久 昭	カーランツ，グースベリー，きいちご
山 谷 吉 藏	花ゆり，野菜

農作物優良品種の解説

目 次

1 普通作物	1
1. 水 稲	
<梗種>	
(1) なんぎよく (渡育143号)	1
(2) みちひかり (渡育146号)	1
(3) かんまさり (北育7号)	2
(4) はやみのり (北育15号)	3
(5) ささほなみ (空育4号)	4
(6) ティネ (北海180号)	5
(7) ユーカラ (北海182号)	6
(8) しおかり (上育234号)	7
(9) ほうりゅう (空育24号)	8
(10) うりゅう (空育22号)	9
(11) きよかぜ (上育254号)	10
(12) ほくせつ (上育265号)	11
(13) ひめほなみ (空育39号)	12
(14) はつとかち (十育7号)	13
(15) そらち (空育51号)	14
(16) 照穂	15
(17) かしほなみ (十育12号)	16
(18) はやゆき (北育33号)	17
(19) シモキタ (ふ系56号)	18
(20) マツマエ (北海222号)	19
(21) なるかぜ (上育314号)	20
(22) イシカリ (道北1号)	21
(23) ゆうなみ (空育87号)	22
(24) きたこがね (北育51号)	23
(25) さちは (空育97号)	24
(26) キタヒカリ (北海230号)	25
(27) はやこがね (北育64号)	26
(28) ともゆたか (空育103号)	28
<糯種>	
(29) はやもち (北育26号)	29
(30) かむいもち (上育266号)	30

(31) 工藤糯	31
(32) おんねもち(北育糯47号)	31
2. 陸 稻	
(1) 北海早生1号(北海早生純1号)	33
3. 大 麦	
(1) ほしまさり(訓系16号)	33
4. 裸 麦	
(1) マリモハダカ(北海春裸13号)	34
5. 小 麦	
<春播小麦>	
(1) ハルヒカリ(北見春2号)	35
(2) ハルミノリ(北見春17号)	36
<秋播小麦>	
(3) カチミノリ(十系4号)	38
(4) ムカコムギ(北見11号)	38
(5) イービス(IBIS)	39
(6) ホロシリコムギ(北見23号)	41
(7) タクネコムギ(北見30号)	42
6. えん麦	
(1) オホーツク(北海1号)	43
(2) モイワ(北海7号)	44
7. とうもろこし	
<飼料用>	
(1) ジャイアンツ(本交3304)	45
(2) 交6号(月交431号)	46
(3) 交504号(Ohio W64)	47
(4) 交8号(長交347)	48
(5) ヘイゲンワセ(道交16号)	49
(6) ホクユウ(北交22号)	50
(7) ワセホマレ(道交S1号)	51
(8) P3715	52
(9) C535	52
(10) P3575	53
(11) P3390	53
(12) JX188	54
(13) JX162	54
<生食用>	
(14) ゴールデン・ビューティ(ゴールデン・ビューティ)	55
(15) ビリカスイート(十生7号)	56
(16) 北缶3号(HLC145)	57
(17) ホワイトワキシ	58

8. 大 豆

(1) ナガハジロ (札育3号)	59
(2) シンセイ (十育92号)	59
(3) コガネシロ (十育95号)	60
(4) トカチシロ (十育96号)	61
(5) テンボクシロメ (天系48号)	62
(6) アサミドリ (大袖振一1)	63
(7) ワセコガネ (十育97号)	64
(8) オシマシロメ (札育12号)	65
(9) ホウライ (十育109号)	66
(10) トヨスズ (十育118号)	67
(11) キタムスメ (十育122号)	68
(12) ユウヅル (中育3号)	69
(13) ヒメユタカ (十育161号)	70
(14) キタコマチ (十育167号)	71

9. 小 豆

(1) 光小豆 (十育7号)	72
(2) 晩大納言 (十育62号)	73
(3) 寿小豆 (中育1号)	74
(4) 栄小豆 (十育70号)	74
(5) アカネダイナゴン (十育69号)	75
(6) ハヤテショウズ (十育85号)	76

10. 菜 豆

(1) 改良大手亡 (大手亡一清水)	77
(2) 改良中長 (中長鶉一上士饅)	77
(3) 新金時 (十育B一1号)	78
(4) 昭和金時 (十育B一11号)	79
(5) 北原紅長 (紅長2号)	80
(6) 大正大手亡 (大正大手亡)	81
(7) 十勝白金時 (十育E一6号)	82
(8) 銀手亡 (十育A一22号)	83
(9) 福粒中長 (中育D一7号)	84
(10) 福白金時 (十育E一10号)	84
(11) 姫手亡 (十育A一29号)	85
(12) 改良虎豆 (中育T11号)	86
<花豆>	
(13) 大白花 (中育M5号)	87

11. えん豆

(1) 小緑 (十育14号)	88
(2) 大緑 (北育37号)	89
(3) 北海赤花 (北育B一2号)	90

12. 馬鈴しょ	
(1) エニワ (北海22号)	91
(2) ユキジロ (北海30号)	92
(3) ホッカイアカ (北海41号)	93
(4) シレトコ (根育3号)	94
(5) ビホロ (北海45号)	95
(6) タルマエ (北海47号)	96
(7) ワセシロ (根育11号)	97
(8) トヨシロ (北海48号)	98
(9) ツニカ(Tunika)	99
II 特用作物	101
1. てん菜	
(1) つきさっぷ (E-6)	101
(2) ポリラーベ (Polyrave)	101
(3) カーベエルタ (Kaweerta)	102
(4) エージェポリー1 (AJpoly-1)	103
(5) カーベポリ (Kawepoly)	104
(6) 台糖1号 (台糖1号)	105
(7) 台糖2号 (台糖2号)	105
(8) 台糖3号 (台糖3号)	105
(9) てん研1号 (T1002)	106
(10) キタマサリ (支7号)	107
(11) ソロラーベ (Solorave)	108
(12) カーベメガモノ (Kawemegamono)	109
(13) モノヒル (Monohill)	109
(14) モノホープ (T1013)	110
2. 薄 荷	
(1) おおば (27-104)	111
(2) ほうよう (北交8号)	112
(3) あやなみ (北交12号)	113
(4) わせなみ (北系J15号)	114
(5) さやかぜ (北系J16号)	114
3. 除虫菊	
(1) わっさむ (26S-6-1)	115
4. ラベンダー	
(1) ようてい (早咲1-3)	116
(2) おかむらさき (遅咲1-4)	117
(3) はなもいわ (中咲2-2)	117
5. 亜 麻	
(1) ヒブラ (Fibra)	118

(2) レイナ (Reina)	119
6. なたね	
(1) タイセツナタネ (北系87号)	119
(2) イワオナタネ (MR 1号)	120
III 果 樹	122
1. ナシ	
(1) 北星 (北農1号)	122
(2) 北都 (北農2号)	122
2. ブドウ	
(1) バッファロー	123
3. リンゴわい性台木	
(1) EMIX (M9)	124
(2) EMVII (M7)	124
(3) MM111	125
4. ハイブッシュブルーベリー	
(1) ジューン	126
(2) ウェイマウス	127
(3) ハーバード	127
(4) ランコカス	128
5. グースベリー	
(1) ピックスウェル	129
(2) グレンダール	129
(3) ホートン	130
(4) オレゴンチャンピオン	131
6. キイチゴ	
(1) フレミングジャイアント	131
(2) セブテンバー	132
(3) カスパート	132
7. ウ メ	
(1) 大野豊後 (大野優良豊後梅)	133
IV 野 菜	135
1. トマト	
(1) ウルバーナ (Urbana)	135
(2) ファイアボール (Fire ball)	136
(3) あかぎ	136
(4) 宝冠1号	137
(5) 新豊紀	138
(6) 豊緑	138
(7) スーパーキング	138

(8) 早生だるま	139
(9) 交1号(交1号)	140
00 れいぎょく	140
2. キュウリ	
(1) 長日青節成	141
(2) 久留米落合H型	141
(3) 夏崎落3号	142
3. イチゴ	
(1) 盛岡16号	142
(2) ホレラ (Gorell)	143
4. タマネギ	
(1) オータムブライド	144
(2) 北見黄(札幌黄:上常呂系)	145
5. 食用ユリ	
(1) 北海白百合(空系1号)	145
V 花 卉	147
1. 花ゆり	
(1) ホノオ(交配1号)	147
(2) ハゴロモ(交配2号)	147
(3) 岩内透1号(99号)	148
(4) 岩内透2号(30号)	148
(5) 岩内透3号(146号)	148
(6) 岩内透4号(10号)	149
(7) 大井(岩字3号)	149
(8) 神恵(岩字5号)	149
(9) 雷電(岩字8号)	150
00 積丹(岩字9号)	150
01 えぞあか(岩字7号)	150
02 えぞこがね(岩字16号)	151
03 岩内黄金(4503)	151
VI 飼料作物	152
1. アカクローバ	
(1) サッポロ(月系37-1)	152
(2) ハミドリ	152
(3) レッドヘッド (Red Head)	153
2. シロクローバ	
(1) ロディギアーノ (Ladino Gigante Lodigiano)	154
(2) リーガル (Regal)	154
3. アルファルファ	

(1) ウィリアムズバーグ (Williamsburg)	155
(2) ライゾーマ (Rhizoma)	155
(3) サラナック (Saranac)	156
(4) ヨーロッパ (Europe)	157
(5) ソア (Thor)	157
4. ベレニアルライグラス	
(1) リベール (Reveille)	158
(2) ピートラ (Petra)	158
(3) マンモス.....	159
5. オーチャードグラス	
(1) キタミドリ (月寒在来)	159
(2) フロンティア.....	160
(3) オカミドリ (北海2号)	161
(4) ケイ (Kay)	162
6. チモシー	
(1) クライマックス (Climax)	162
(2) センボク (北系4305)	163
(3) 北王 (雪印改良1号)	164
(4) ノサップ (北見2号)	164
(5) ホクシュウ (北見7号)	165
(6) ノースランド (ハイデミー) (Heidemij)	166
7. トールフェスク	
(1) ホクリョウ (北海1号)	167
(2) ヤマナミ (北海2号)	168
8. メドーフェスク	
(1) タミスト (Tammisto)	168
(2) トレーダー (Trader)	169
(3) ファースト (雪印合成1号)	170
9. ケンタッキーブルーグラス	
(1) トロイ (Troy)	170
10. ルタバガ	
(1) グリーントップ (Green top)	171

I 普通作物

1. 水 稻

〈梗 種〉

(1) なんぎよく (渡育143号)

来歴 「なんぎよく」は、1950年(昭25)北海道立農業試験場渡島支場において、「新栄」を母とし「渡育130号」(「陸羽132号」×「晩生栄光」)を父として人工交配を行い、以米系統育種法により選抜固定をはかったものである。1956年(昭31)「渡系152」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、1958年(昭33)「渡育143号」の系統名をつけて生産力検定試験、特性検定試験を行い、1959年(昭34)から原種決定現地試験に供試し、地方的適否を確かめ1961年(昭36)、優良品種に決定し、「なんぎよく」と命名された。

特性の概要 1.草状 稈長は「南栄」より短く中位穂数型に属する。穂長は中、粒着はやや密に属し、芒は1穂中に無～中芒のものが相半し、稈先色は褐色である。

2.玄米の性状 形状は中形、中粒で艶色を呈し、腹白は比較的少なく、品質は「巴まさり」と同程度かむしろ良質の上の下で食味も良好である。

3.熟期出穂期、成熟期ともに「南栄」にくらべると1両日おそく、「巴まさり」より3日内外早い中性種に属する。

4.障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は「南栄」よりやや劣り「巴まさり」よりは強いやや強、耐冷性は「南栄」よりはやや弱く中程度である。耐倒伏性は「南栄」程度でやや強である。

5.収量その他 「南栄」と大差ないが、品質は良好である。

栽培適地と奨励態度 道南部の条件の良い地帯で「南栄」の品質改善のために置換える。〔1966(昭41)廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 歩 台	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 粒重	1,000 粒 重		
渡島支場	冷床	8.8	9.24	154	81	16.0	21.0	416	472	818	21.3	82.0	1956～ 1960

(2) みちひかり (渡育146号)

来歴 「みちひかり」は、1951年(昭26)北海道立農業試験場渡島支場において「渡育130号」(「陸羽132号」×「晩生栄光」)を母とし「渡島白毛」を父として人工交配を行い以後選抜固定をはかったものである。1957年(昭32)「渡系161」の系統番号をつけ生産力検定予備試験に供試、1958年(昭33)「渡育146号」の系統名をつけ、生産力検定ならびに特性検定試験に、また1959年(昭34)から原種決定現地試験に供試し、1961年(昭36)優良品種に決定し、「みちひかり」と命名された。

特性概要 1. 草型は中間型に属し、稈長は「新栄」よりやや長い。粒着は「栄光」「新栄」程度のやや密である。

2. 稃先色は黄白鮮明で穂の穂半々くらいに白色短～中芒が散在している。

3. 玄米は中形、中粒で腹白はほとんどなく極めて良質である。なお食味は「栄光」と遜色ない。

4. 出穂期・成熟期は「新栄」よりも2～3日早い。早生種に属し、登熟日数は他品種に比し短い。

5. 「いもち病」に対しては「栄光」と大差なくあまり強くない。

6. 耐冷水抵抗性は弱の部に属し、不稈粒の発生は多い方である。

7. 収量は多収性ではなく「新栄」にほぼ匹敵する。栽植密度を増すことにより増収の傾向が認められる。

栽培適地と奨励態度 早生種に属するので「新栄」などの栽培地帯で冷水、いもち病の被害の少ないところで良質米の生産を目的とする地帯に適する。

栽培にあたっては次の注意が必要である。1. 登熟期間は短かいが耐冷性が弱いので注意を要する。2. 中間型で穂数が少ない方なので多少密植が有利である。3. 登熟日数が短かく、草体の褪色に先立ち登熟が進み、過熟に陥り易いので、早目の刈取が必要である。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場名	苗代 機式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 粒重	1,000 粒 重		
渡島支場	冷床	8.3	9.17	149	86	16.0	18.0	421	459	818	21.0	82.6	1957～ 1960

(3) かんまさり（北育7号）

来歴 「かんまさり」は、北海道立農業試験場美深分場で1948年（昭23）に「農林15号」を母とし「北見赤毛1号」を父として人工交配を行い、F₂で北海道立農業試験場北見支場で分譲を受け、以来選抜固定をはかってきたものである。1955年（昭30）に「5501」の系統番号をつけ生産力予備試験に供試した。1956年（昭31）より「北交7号」の系統名をつけ、原種決定本試験に供試すると共に、原種決定現地試験にも供試し、地方適否を確かめた。その間、1958年（昭33）系統名改称により「北育7号」と改めた。1961年（昭36）、優良品種に決定し「かんまさり」と命名された。

特性概要 1. 出穂期、成熟期共に「農林20号」と同程度で、中生種に属する。

2. 草型は穂数型で、草丈は中位。穂長は、中～やや短、粒着は中～やや疎で長芒を有する。稃先色は、成熟前は黄白であるが成熟後は赤褐色となる。

3. いもち病抵抗性は、「農林20号」と同程度で、やや弱に属する。

4. 冷水抵抗性は、障害型には強に属し、「農林34号」よりはるかに強く「農林9号」「北見赤毛1号」より強い。

5. 耐倒伏性は、「農林20号」よりやや劣るが「農林15号」より強く、中の部に属する。

6. 収量は、豊作年には「農林20号」に比べて同程度かやや劣るが、冷害年には、かなりの増収が期待できる。

7. 玄米の形状は中、大きさは中～小で、品質は「農林20号」とほぼ同じで中である。

栽培適地と奨励態度 耐冷性は極めて強い部類に属するので、冷涼な北海道東北部の網走支庁管内に適する。特に本品種の特性より見て、冷涼な気象の地帯に、または冷水灌漑の水田用および水口用品種として奨励する。

栽培上の注意としては、直播よりも移植に適する、熟期より見ても出来るだけ移植栽培が望ましい。また、いもち病抵抗性、耐倒伏性の面から見ても極端な多肥栽培はさけること。直播する場合は多肥にならぬよう注意を要する。いもち病発生に注意し、多発の年には適期防除を必ず励行すること。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					穂長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北見支場	直播	8. 13	10. 2	129	82	15. 0	28. 0	396	646	794	18. 0	82. 1	1958～ 1960
	冷床	8. 8	9. 30	152	83	16. 9	20. 0	414	499	805	18. 3	82. 7	1957～ 1960

(4) はやみのり（北育15号）

来歴 「はやみのり」は、北海道立農業試験場美深分場で、1948年（昭23）「農林15号」を母とし「北見赤毛1号」を父として人工交配を行い、F₂世代に北海道立農業試験場北見支場で分譲を受け、以来選抜固定をはかってきたものである。1956年（昭31）に「3102」の系統番号をつけ、生産力検定予備試験に供試した。1958年（昭33）より「北育15号」の系統名をつけ原種決定本試験に供試すると共に、原種決定現地試験にも供試し、地方適否を確かめた。1961年（昭36）、優良品種に決定し、「はやみのり」と命名された。

特性概要 1. 出穂期、成熟期共に「農林20号」より早く「農林15号」よりわずかに遅く、「農林19号」程度の早生種に属する。

2. 草型は穂数型で、草丈は中位。穂長は中で粒着は中～やや疎。長芒を有し、稃先色は黄白である。

3. いもち病抵抗性は、「農林20号」と同程度か、やや劣る程度でやや弱～弱に属する。

4. 冷水抵抗性は、障害型では「かんまさり」よりやや劣るが「農林9号」なみの強さである。

5. 耐倒伏性は、「農林20号」より劣り「農林15号」程度である。

6. 収量性は、豊作年には「農林20号」に比べて同程度かやや劣るが、冷害年においてはかなりの高収を示し、「かんまさり」よりも優っている。

7. 玄米の形状は、中、粒大は中～小。品質は中の下で「農林20号」並である。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					穂長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北見支場	直播	8. 8	9. 27	124	82	13. 6	31. 0	414	554	806	18. 9	82. 9	1958～ 1960
	冷床	8. 3	9. 25	148	84	15. 3	22. 0	458	463	814	19. 3	83. 4	1958～ 1960

栽培適地と奨励態度 耐冷性は「かんまさり」よりわずかに弱い、極めて強い部類に属する早生であるから、網走支庁管内で「かんまさり」より更に早い品種を望む地方に奨励したい。

栽培上の注意については「かんまさり」と同様直播より移植栽培に適する。また、多肥栽培をさけ、特に直播においては倒伏の危険性があるので注意を要する。いもち病の発生にも注意し、適期防除に心がけること。〔1966年（昭41）廃止〕

(5) ささほなみ（空育4号）

来歴 「ささほなみ」は、1951年（昭26）北海道農業試験場において「藤坂5号」を母とし「農林15号」を父として人工交配を行い、引続き同場においてF₁養成、F₂個体選抜を行い、1954年（昭29）F₃より北海道立農業試験場（岩見沢水稻試験地）にゆずりうけて、いもち病耐病性、稈質などを重点に選抜固定をはかってきたものである。1956年（昭31）に「空系3110」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、1958年（昭33）に「空育4号」の系統名をつけ生産力検定試験を行うと共に関係試験機関等において適応性を検定し、1959年（昭34）より原種決定現地試験に供試し地方適否を確かめた。1961年（昭36）優良品種に決定し、「ささほなみ」と命名された。

- 特性の概要 1. 稈長は「みまさり」よりやや短程でこの熟期のものでは最も短く、穂長は長穂、穂数は中程度の中間型品種である。無芒で稈先色は黄白、粒着密度は「栄光」程度のやや密、1穂着粒数は「栄光」より多い。
2. 稚苗の状態は草丈中位、葉身狭く濃緑色を呈する。本田における分けつ始は「みまさり」同様遅く、生育中期においても葉身狭く、濃緑で直立しており、分けつ数が少ないため株間の透しが大い。登熟後期でも止葉が立っているため「栄光」より草丈が高く見える。
3. 玄米はやや小粒で長粒銚色を呈し、光沢は「栄光」より劣り、「みまさり」程度であるが、腹白がなく縦溝は浅く品質は中の上である。
4. 出穂期、成熟期とも「栄光」と同じ程度の中生種、しかし穂揃日数やや多く登熟不整の傾向があり、特に多肥栽培で成熟期が遅れる。
5. 稈は強稈で多肥栽培でも倒伏はほとんど見られないが、柔軟性に欠けるため極度の多肥栽培では根際から倒伏減収する。
6. いもち病抵抗性は「新雪」程度の強さを有す。
7. 収量性は瘦薄地では「栄光」より劣るが、中位以上の地力条件下では「栄光」程度の多収を

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 数	玄米重	稈重	1ℓ重	1,000 粒重		
空知支場	冷床 (沖積土)	8. 6	9. 23	151	66	17. 3	18. 7	454	343	820	21. 0	79. 8	1958～
	冷床 (帯泥炭)	8. 9	9. 27	154	65	17. 8	19. 5	502	368	819	22. 1	80. 0	1960 〃
渡島支場	冷床	7. 29	9. 10	141	82	16. 0	17. 0	413	389	811	20. 4	81. 0	1958～
上川支場	冷床	8. 2	9. 27	158	68	18. 4	21. 0	516	404	829	21. 0	83. 0	1959～
	直播	8. 6	9. 26	135	61	14. 7	33. 0	509	442	837	20. 8	82. 8	1960 〃
原原種農場	冷床	8. 7	9. 23	153	63	17. 4	16. 1	433	336	822	20. 4	83. 7	1958～
													1960

示し、特に登熟の進む地帯の多肥条件では「栄光」より優る。しかし登熟期間、不順な天候にあうと登熟不整となり、青、屑米が多くなり収量が低下する。

栽培適地と奨励態度 本品種は本道中央部、中生種地帯全域に適する。中央空知以北の内陸的気象の登熟の進む地帯では普通肥より多肥栽培において多収を示すが過度の多肥栽培は避け、栽植密度を高め収量性を増加させるべきである。〔1969年（昭44）廃止〕

(6) テイネ（北海180号）

来歴 「テイネ」は、北海道農業試験場において、外国稲のもつもち病高度耐病性を北海道品種に導入することを目的として、1950年（昭25）以来継続してきた水稻育種に関する試験において育成された品種である。

1953年（昭28）に「関東53号」を母とし、「栄光」を父として人工交配を行い、引続きF₁を養成し、1955年（昭30）F₂では人工接種による幼苗検定法によって葉いもち耐病性を検定して耐病性を主とする個体選抜を実施してきた。1956年（昭31）F₃以降は、畑地晩播による葉いもち病検定ならびに泥炭土壌水田における多窒素栽培による穂頸、枝梗、節いもち病検定を行い、また各世代ともいもち病に対する高度耐病性を重点にして、米質、稈質、収量等を勘案しつつ、通常の系統育種法により選抜固定をはかったものである。1958年（昭33）には「札系5806」の系統番号をつけ生産力検定予備試験を実施、1959年（昭34）には「北海180号」の系統名をつけ生産力検定試験を行うとともに、道内の試験機関において適応性を検定し、さらに冷水掛流法による耐冷性検定もあわせおこなった。1961年（昭36）には、原種決定現地試験により地方適否をたしかめ、1962年（昭37）優良品種に決定し、農林省に新品種「テイネ」（水稻農林137号）と命名、登録された。

特性概要 1. 稈長は「新栄」よりやや短いが「栄光」より長いやや短稈種に属し、穂数は「新栄」より多く穂数型で、稈の太さは中位、剛さは「新栄」より柔軟であるが中位である。
2. 穂はやや短く、粒着はやや密である。無芒で稈先には着色しない。成熟期における熟色が良好で、葉の枯れ上りはややおそい。
3. 苗の生育よく、初期分けつはとくに旺盛である。
4. 玄米の形状は「新栄」と同様で中位、大きさは「栄光」なみの中、色は中程度の飴色を呈し光沢は極良、腹白少く、心白はごくまれにみられる程度、縦溝は「新栄」より浅い。

食味は中の上程度で「新栄」にくらべるとややおとる。

5. 出穂期は「新栄」と同じで晩生の早に属する。成熟期は「新栄」よりも早い。
6. 登熟の速さは普通肥条件では「新栄」「栄光」よりはやいが多肥条件では同程度となる。
7. いもち耐病性はN菌に対しては従来最も強いといわれた「石狩白毛」よりも強いが、C菌には弱い。
8. 倒伏抵抗性は中の上程度で、多肥すると倒伏し、登熟日数が長びく結果となる。
9. 耐冷性は障害型冷害に対しては「新栄」「栄光」と同程度か、わずかに劣る。ただし多肥栽培したときには不稔粒を発生しやすい。遅延型冷害に対しては「新栄」よりやや弱い。

栽培適地と奨励態度 熟期その他特性から見て、石狩中南部、空知、胆振、日高、後志の良地帯で従来「豊光」が熟期の点で十分安全限界内にあった地帯、および「新栄」の熟期がややおそすぎる地帯に適する。

初期生育が旺盛で多肥にしなくても茎数の確保が容易なので、初期生育の遅延する地帯の普通肥栽培に適する。

耐倒伏性もあまり強くなく、多肥による不稔も懸念され、しかも普通肥栽培でかなり高い収量をあげうる特徴をもっているので多肥栽培はさける必要がある。又遅延型冷害には弱いので冷水のかかる水田はさけなければならない。(1966年(昭41)廃止)

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 ℓ 重	1,000 粒 重		
北海道農試	冷床	8. 8	9. 21	152	73	12. 5	23. 7	509	565	844	21. 5	82. 1	1958～ 1961
空知支場	冷床 (空泥炭)	8. 10	9. 28	157	69	16. 4	23. 5	568	450	820	22. 5	81. 4	1959～ 1961
	冷床 (浮植土)	8. 11	9. 24	153	65	14. 7	23. 7	493	360	818	21. 9	82. 3	"
原原種農場	冷床	8. 9	9. 19	145	63	14. 7	19. 7	489	387	833	21. 8	84. 3	1959～ 1961
上川支場	冷床	8. 7	9. 26	157	67	15. 3	22. 0	520	451	848	21. 6	83. 5	1959～ 1960

(7) ユーカラ (北海182号)

来歴 「ユーカラ」は、北海道農業試験場で1953年(昭28)に「関東53号」を母とし「栄光」を父として人工交配を行い、その後は「テイネ」と同一の方法で選抜をくわえた。1958年(昭33)に「札系5819」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を実施し、1959年(昭34)「北海182号」の系統名をつけ生産力検定試験を行うとともに、道内の試験機関において適応性を検定、さらに冷水掛流法による耐冷性検定もあわせ行った。1961年(昭36)には、原種決定現地試験によって地方適否をたしかめ、1962年(昭37)優良品種に決定し、農林省に新品種「ユーカラ」(水稻農林138号)と命名、登録された。

特性概要 1.草状は「豊光」と同程度の短稈、穂数は「豊光」とほぼ同じで、穂数型に属し、稈の太さは中程度、剛さは「豊光」「新栄」と同程度でやや剛に属する。穂長は中位、粒着はやや粗、無芒で稈先に着色なく熟色は良好で葉の枯上りは比較のおそい。苗の生育は良く、初期分けつ力はきわめて旺盛である。

この品種の特異的な草状は、穂頭の抽出程度が普通より少なく、出穂揃いでは、穂が出すくんだ状態にみえるので草状はよくない。登熟の進むにつれて穂頭は抽出してくるが、穂頭が太く硬いためにあまり垂れ下がらない。

分けつ数は多いが生育途中葉身があまり垂れ下がらないので、過繁茂になることはさけられる。

2.玄米性状 稈種で粒形はやや長、大きさはやや大、色は中程度の飴色で光沢はごく良で腹白、心白がほとんどなく、縦溝も浅く、粒揃も良く総合的にみて品質はきわめてすぐれている。食味については「栄光」よりもまざっている。

3.熟期 出穂期は「新栄」と同じか、わずかに早く、晩生の早に属する。成熟期は「新栄」にくらべると早い。

4.登熟は穂内・株内ともに整一で、成熟期を判定し易く、道内品種のうちでは上位に位する。

又多肥栽培でも登熟が遅れず整一度も良好であり、屑米も少ない。

5. いもち病耐病性は菌系により異り、N菌に対しては「石狩白毛」よりも強いが、C菌には弱い。
6. 倒伏抵抗性は稈質やや剛で、短稈のため強く、「新栄」程度以上である。
7. 耐冷性は障害型冷害に対してはやや強い方では「新栄」程度である。遅延型冷害に対しては「新栄」より劣るが「栄光」より僅かに強く、中ないしやや弱である。
8. 収量は一般に多収であり、特に多肥、肥沃田での増収がみられる。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、上川中央部、留萌中南部の良地帯で、従来「豊光」程度の熟期の品種が十分安全限界内にあった地帯のうち、晩生種の配合品種として適する。

南部空知、石狩などの現在「新栄」が栽培されていて、収量の上らないところや、多肥栽培で登熟がおくれ良質米の得られない地帯では「新栄」に置かえる。胆振、日高、後志では耐肥性良質品種として他の中晩生品種と配合する。

初期分げつが旺盛なので、石狩および南部空知の一部のごとく、春季の強い偏東風のため初期生育のおくれる地帯にも適する。

多肥栽培に適するが、倒伏、不稔を考慮した場合、過度の多肥施用はさけるべきである。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1ℓ重 g	1,000 粒重 g		
北海道農試	冷床	8. 9	9. 22	153	73	15.4	23.5	523	553	848	21.6	82.9	1958～
	標肥												1961
	冷床 多肥	8. 9	9. 22	153	75	16.8	26.8	501	582	835	21.1	81.6	"
空知支場	冷床 (豊栄炭)	8. 10	9. 26	156	66	17.9	22.0	549	443	817	23.4	81.1	1959～
	冷床 (浮植土)	8. 10	9. 23	152	64	16.7	22.2	481	387	820	22.1	80.8	1961
原原種農場	冷床	8. 8	9. 19	146	62	17.1	18.3	483	411	828	22.8	83.6	"
上川支場	冷床	8. 4	9. 23	156	68	16.8	21.3	513	512	840	22.2	83.2	1959～ 1960

(8) しおかり (上育234号)

来歴 「しおかり」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場上川支場で(「目黒栄糯」×「共和」)F₁を母とし「共和」を父として人工交配を行い、それ以来選抜固定をつづけ育成したものである。1958年(昭33)に「上系33」の系統番号をつけ、1961年(昭36)に「上育234号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配付して地方適否を確かめ1963年(昭38)優良品種に決定し、「しおかり」と命名された。

特性概要 1. 成熟期は「ふくゆき」より3日位早く、早生種に属する。

2. 草型は偏穂数型で、中稈、穂長はやや短く、やや強稈で粒着は密、芒性は中の中で、稈先色は黄白である。

3. いもち病耐病性は「ふくゆき」程度ないしはそれ以上で中である。

4. 耐冷性は障害型に対しては「ふくゆき」と同程度のやや強くないし強で、出穂遅延度は「ふくゆき」より僅かに大きい。登熟速度が速いので、成熟期は「ふくゆき」より一般に早くなる。

5. 耐倒伏性は「ふくゆき」よりやや強く、道内品種のなかでは中である。

6. 収量は直播栽培、移植栽培ともに「ふくゆき」程度である。

7.玄米はやや円形で小さい。腹白は少なく、光沢良好で縦溝の深さは中位で、品質は「ふくゆき」よりすぐれの中の上で、食味もかなり良い。

栽培適地と奨励態度 上川、留萌および網走支庁管内の「ふくゆき」を栽培している地帯に適しているが、いもち病耐病性および耐倒伏性は中程度なので、多肥栽培には特に注意を要する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 割 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 粒重	1,000 粒重		
上川支場	直播	8. 3	9. 17	125	71	13. 7	32. 7	526	496	832	20. 8	81. 7	1961～ 1962
	冷床	7. 31	9. 26	155	80	13. 6	20. 4	499	475	844	20. 5	80. 6	1961～ 1962
十勝支場	冷床	8. 3	9. 22	149	69	14. 5	14. 2	387	415	818	19. 0	81. 6	〃
北見支場	冷床	8. 5	9. 24	152	64	14. 5	19. 0	501	628	815	19. 4	79. 3	〃
空知支場	冷床 (坪植上)	8. 3	9. 15	146	71	15. 7	23. 4	413	350	815	20. 0	80. 5	〃
	冷床 (壺元炭土)	8. 2	9. 16	148	73	15. 9	20. 0	462	372	832	21. 5	81. 6	〃
原産種農場	冷床	8. 3	9. 16	144	74	16. 2	21. 7	528	433	814	21. 0	83. 3	〃
北海道農試	冷床	8. 1	9. 15	—	—	—	—	430	—	826	19. 5	82. 3	〃

(9) ほうりゅう (空育24号)

来歴 「ほうりゅう」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし、「照錦」を父として人工交配を行ったF₂集団を、1959年(昭34)北海道立農業試験場空知支場で譲渡を受け、個体選抜を行ったものである。1960年(昭35)にF₇で系統栽培に移すと同時にいもち耐病性検定試験に供試し、1961年(昭36)に「空系3641」の系統番号をつけ生産力検定予備試験を行った。1962年(昭37)に「空育24号」の系統名をつけて生産力検定試験に供試すると共に、関係試験機関において適応性検定、1963年(昭38)に奨励品種決定本試験、同現地試験に供し地方適否をたしかめ、1964年(昭39)優良品種に決定し、「ほうりゅう」と命名された。

特性概要 1.草状 稈長は「栄光」程度、穂数は「栄光」よりやや多く穂数型、稈の太さは「栄光」程度の中位で剛さはやや柔軟、穂は「栄光」なみでやや長く、粒着もやや密である。芒性は無芒で稃色は黄白、稃先は「新栄」なみの暗褐色を呈する。苗の生育は「ささほなみ」に比べ優り、葉身が伸びやすく柔軟な感じを受ける。初期の分けつ性は「栄光」に比し劣る。出穂後葉身はたれ、穂頸の抽出が大きい。

2.玄米の性状 梗種で形状は中、粒の大きさも中粒であるが豊満、色は「栄光」よりやや濃い飴色を呈し光沢は良い。腹白は極稀、心白は無い。縦溝は「栄光」程度でやや浅い。

3.熟期 出穂期は「栄光」と同程度であるが登熟にはやや長日を要し「栄光」よりわずかに遅く、中生の中に属する。

4.障害抵抗性 いもち病に対しては「新雪」よりやや劣り中位。障害型冷害に対しては「新雪」より劣り、遅延型冷害に対しては「みまさり」程度で両者共中程度である。

倒伏に対しては稈がやや柔軟で穂が垂れ込み弱そうであるが、中肥条件では倒伏の懸念は少なくその程度は中位である。

5. 収量性その他 収量性は「ユウカラ」程多収ではないが「栄光」よりまさる。

食味は「新栄」と同程度の良。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、勇払、夕張、日高の「栄光」の栽培されている地帯。

品質がすぐれているので、上記地帯の「イワコガネ」「みまさり」その他雑多な中生種、「栄光」の1部、空知中北部の「新栄」及び晩生種にかえることが望ましい。

耐冷性、いもち病、倒伏性の点から見て冷水地帯、泥炭新田、排水不良田、多肥栽培は避けることが望ましい。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂指 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
空知支場	冷床 (安永炭)	8. 4	9. 25	157	72	17. 2	21. 5	505	391	829	23. 7	83. 1	1961~ 1963
	冷床 (沖橋土)	8. 6	9. 23	156	76	17. 9	19. 7	502	387	842	23. 7	83. 9	1963
北海道農試	冷床	8. 6	9. 23	—	78	14. 3	19. 5	475	—	—	21. 6	—	1962~ 1963
原原種農場	冷床	8. 6	9. 26	154	75	16. 6	23. 5	581	522	811	22. 1	84. 2	"
上川支場	冷床	8. 4	9. 23	152	80	16. 7	23. 0	545	548	826	22. 0	80. 7	"
渡島支場	冷床	8. 4	9. 12	142	100	17. 4	20. 1	528	560	790	22. 1	81. 0	1963~

(10) うりゅう (空育22号)

来歴 「うりゅう」は、1956年(昭31)北海道立農業試験場空知支場において「石狩白毛」を母とし「暁」を父として人工交配を行い、以来系統育種法により選抜固定を計り、1960年(昭35)に「空系3516」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を行うとともに、いもち病に対する検定試験を行い、1961年(昭36)に「空系3516-A」の系統番号をつけ、1962年(昭37)より「空育22号」の系統名をつけて地方適否をたしかめ、1965年(昭40)優良品種に決定し、「うりゅう」と命名された。

特性概要 1. 草状 稈長は「ささほなみ」よりやや短い短稈、穂数は中位で中間型、稈の太さは基部は「しおかり」並の太さを有するが上部はやや細く特に穂頭が細い感じを受ける。稈の剛さは「しおかり」なみのやや剛、穂長は「しおかり」なみの中ないしやや長、粒着はやや密で、無芒、稈先色は無く、稈色は黄白で成熟期の熟色は良い。

苗は葉身が短く、葉巾も狭く、葉色は濃く苗質は剛い、初期伸長性はやや劣り「ささほなみ」に類似する。

2. 玄米性状 梗種で中型、中粒で「ささほなみ」「しおかり」よりやや大きい。色沢は「しおかり」程度の鈍銀白で光沢良く腹白は少なく品質は「栄光」程度の良である。

3. 熟期 育成地に於ける出穂期は「ふくゆき」「しおかり」と同時期中生の早に属し、出穂揃は不揃でやや長日を要する。しかし初期生育の良好な地帯では出穂も早まり揃いも良い。

成熟期は初期生育の不良な地帯では遅発分げつ茎が多いため登熟が遅れるが、1穂内の登熟は「ふくゆき」より整一で、従って出穂揃が整一な処では「しおかり」なみの成熟期となる。

4. 障害抵抗性 葉いもち病の抵抗性は中位、耐冷性は障害型、遅延型ともに「ふくゆき」なみで

やや強、倒伏に対しては移植栽培では「ささほなみ」に比べやや劣る強である。しかし直播栽培では細稈となりややなびく傾向を有する。

5. 収量性その他 収量性は栽培環境による変動がやや大きく、「しおかり」に比し泥炭質水田ではやや多収を示すが、埴土質水田では劣る。

直播栽培では「しおかり」なみである。

砂土、ならびに耕土が浅い水田および有機質に乏しい水田等では、登熟後期に葉枯れを来し易い。

搗精歩留は「ふくゆき」に比べ高く碎米も少い。食味は「新雪」に比し佳良で特に冷飯の場合は粘性、食味共に優る。

栽培適地と奨励態度 空知中北部から上川北部地帯とするが、本品種は栽培環境による影響が大きいので、海洋性気象の影響を受ける地帯、砂土、耕土の浅い水田、漏水田等はさけるべきである。

また空知管内における直播栽培用品種として使用可能である。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 ℓ 重	1,000 粒 重		
中央農試	冷床 (全泥炭)	8. 5	10. 1	165	67	17. 3	18. 1	447	290	820	22. 3	82. 8	1962～ 1964
	冷床 (池畔土)	8. 6	9. 28	164	66	16. 6	16. 9	365	274	830	21. 5	83. 1	1963～ 1964
	直播	8. 16	—	—	62	14. 6	21. 5	414	409	—	22. 6	79. 8	1962～ 1964
北海道農試	冷床	8. 5	9. 24	—	75	13. 8	17. 3	429	—	—	21. 0	—	〃
上川農試	冷床	7. 30	9. 16	146	69	16. 3	23. 0	502	448	854	—	82. 3	1963～ 1964
	直播	8. 3	9. 18	140	69	15. 3	39. 0	502	533	843	21. 0	81. 9	〃
原原種農場	冷床	8. 6	9. 27	154	70	17. 3	19. 9	472	458	805	21. 7	83. 2	1962～ 1964

(11) きよかぜ (上育254号)

来歴 「きよかぜ」は、1956年(昭31)北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし「水稻農林15号」を父として人工交配を行い、それ以来、耐冷、良質、極早生を目標として選抜固定をつづけ育成したものである。1962年(昭37)に「上系36—355」の系統番号をつけ、1963年(昭38)に「上育254号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめたものである。1965年(昭40)に優良品種に決定し、「きよかぜ」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂期は「農林15号」より2～3日遅く、成熟期は大差なく極早生種である。
2. 草型は中間型で、中稈、穂長はやや長く、稈はやや弱く粒着はやや密、芒性のごく稀にごく短芒があり、稈先および芒は黄白である。
3. いもち病耐病性は、葉、穂頸いもち病ともに「農林15号」と大差なく弱である。
4. 耐冷性は障害型に対しては、「ふくゆき」とほぼ同程度でやや強で、「農林15号」よりかなり強い。遅延型に対しては、「農林20号」程度の中で、「農林15号」よりやや弱い。

5. 耐倒伏性は「農林15号」よりやや強いが「農林20号」より弱くやや弱である。
6. 収量は「農林15号」より安定して多収である。しかし、極端な多肥栽培では耐倒伏性が弱いために、「農林20号」より減収する場合がある。
7. 玄米は、形状および大きさともに中位で、腹白はやや少なく、稀に心白がある。光沢はやや良で、縦溝の深さは「農林15号」より浅い。品質は「農林15号」より優り、食味は「農林20号」とほぼ同程度である。

栽培適地と奨励態度 上川、留萌支庁管内の北部および中央部の山間地帯ならびにこれと類似の地帯で「農林15号」およびこれと同程度の熟期の品種を栽培している地帯に適している。しかし、いもち病耐病性および耐倒伏性はともに弱いので、多肥栽培は絶対に避け、普通肥ないしやや少肥で栽培することが望ましい。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂重 g	1,000 粒 重 g		
上川農試	直播	8. 1	9. 9	118	63	15. 8	38. 0	389	530	840	19. 6	82. 2	1964～
	冷床	7. 28	9. 9	128	72	17. 6	21. 0	455	446	847	20. 8	80. 2	1963～ 1964
十勝農試	直播	8. 12	達せず	—	62	15. 4	21. 8	106	614	808	17. 1	73. 1	1964
	冷床	7. 31	(9. 28)	(157)	70	17. 3	16. 7	(456)	451	810	20. 2	83. 0	1962～ 1963
北見農試	直播	8. 17	達せず	—	—	—	—	100	788	702	14. 8	56. 0	1964
	冷床	8. 3	達せず	—	75	16. 2	16. 2	389	577	801	18. 1	77. 0	1962～ 1964

(12) ほくせつ（上育265号）

来歴 「ほくせつ」は、1963年（昭28）北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし「上育161号」（「大国早生」×「福糯」）を父として人工交配を行い、その後、F₁種子を3年間貯蔵し、それ以来、耐冷、耐倒伏、良質に重点を置き選抜固定をつづけ育成したものである。1962年（昭37）に「上系130」の系統番号をつけ、1963年（昭38）に「上育265号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめたものである。1966年（昭41）に優良品種に決定し、「ほくせつ」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂期は「栄光」「新雪」と大差なく「ほうりゅう」よりは1両日遅い程度である。成熟期は「栄光」と大差なく中生種である。
2. 草型は穂数型で、稈長は「栄光」「ほうりゅう」と大差なく中稈、穂長は「新雪」よりも短い。
3. 粒着は中程度で、芒性は稀に極短芒があり、稃先色は黄白で葉の枯上りはきわめて少ない。
4. 登熟は「新雪」よりやや遅いが、「栄光」「ほうりゅう」よりは良好である。
5. いもち病耐病性は、葉、穂頭いもちのいずれに対しても「栄光」程度で「ほうりゅう」よりはやや強い。しかし、「新雪」よりは弱く中である。
6. 稈質は「新雪」程度でやや強く、耐倒伏性は、「栄光」「ほうりゅう」より強くやや強である。
7. 耐冷性は、障害型に対しては「新雪」よりやや強く極強で、「栄光」「ほうりゅう」よりかなり強い。

8. 収量は特に高くはないが、比較的安定した収量性を示し、地力のあるところでは僅かながら「ほうりゅう」を上回る。

9. 玄米、形状は中で「栄光」「ほうりゅう」と同程度、粒色は飴色を呈し光沢は良好で腹白は少ない。縦溝は「ほうりゅう」と大差ないが「栄光」よりやや浅く、品質は「ほうりゅう」程度である。食味は「ユーカラ」「ほうりゅう」と大差なく良い。

栽培適地と奨励態度 「栄光」「新雪」「豊光」などと同熟期の品種に配合または代えて栽培でき、上川支庁管内の中、南部、留萌支庁管内の南部、空知支庁管内の全域およびこれと類似の地帯に適している。特に、比較的地力の高い肥沃地帯に好適であるが、いもち病の常発地帯は除く。
〔1972年（昭47）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 ℓ 重 g	1,000 粒 重 g		
上川農試	直播	8. 12	9. 30	139	67	12. 7	37. 0	468	557	838	20. 4	81. 3	1964～ 1965
	冷床	8. 11	10. 1	161	72	14. 6	25. 0	508	560	821	20. 5	81. 8	〃
原原種農場	冷床	8. 13	(9. 28)	(156)	74	15. 4	20. 0	497	600	797	21. 4	82. 7	1963～ 1965
中央農試	冷床 (委託)	8. 14	10. 5	165	68	15. 2	20. 0	473	359	805	22. 4	82. 9	1963～ 1965
	冷床 (神橋土)	8. 18	10. 6	165	70	14. 5	19. 1	410	370	805	21. 0	82. 5	1964 1965
北海道農試	直播	8. 20	10. 9	145	(69)	(13. 6)	(28. 5)	346	546	—	20. 1	81. 4	1963～ 1965
	冷床	8. 15	10. 5	163	(76)	(13. 5)	(21. 3)	443	560	—	20. 6	82. 8	〃
道南農試	冷床	8. 8	9. 24	155	69	14. 6	20. 2	405	—	—	20. 7	82. 3	1964 1965

注) () 内は達せざる年を除く

(13) ひめほなみ（空育39号）

来歴 「ひめほなみ」は、「ヤチミノリ」の良質強稈化を目的として、1958年（昭33）に北海道立農業試験場空知支場において「空系26号」（「関東53号」×「栄光」）を母とし「ヤチミノリ」を父として人工交配を行い、以来世代短縮と系統育種法により選抜固定をはかった。1962年（昭37）に「空系37A19」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を行うとともに、いもち病に対する耐病性検定を実施し、1963年（昭38）より「空育39号」の系統名をつけて各試験機関で地方適否を検定した。1964年（昭39）より奨励品種決定現地試験において現地における適否を調べ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「ひめほなみ」と命名された。

特性概要 1. 草状 稈は短稈でやや細く「ユーカラ」なみで剛さは中位である。穂は短く、粒着は密で無芒、稈および稈先色は黄白で成熟期の熟色はやや良好である。草型は穂数型である。

苗は葉身やや短かく、伸長力は小さい。葉巾は中位、葉色はやや淡緑で草状はやや直立型である。育苗は概ね容易で、初期の分けつ性は旺盛であるが伸長力は「ほうりゅう」程度で小さい。

2. 玄米性状 梗種で形状はやや円く、粒大はやや小、色沢は鈍銀白で「栄光」よりやや淡い。

光沢は良好で腹白少なく稀に心白がある。品質は良である。

3. 熟期 出穂期は「栄光」より1～2日遅く「ユーカー」より2～3日早い、中生の晩に属し穂揃性は良好である。成熟期は「栄光」に比べやや遅く、登熟日数は「栄光」と同程度である。

4. 障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は「新雪」よりやや弱くやや強に属する。なお「ユーカー」と比較した場合N菌だけの分布下では劣るがC₁菌の存在下でははるかに強い。

耐冷性は、冷水掛流し検定結果から、障害型に対しては「新雪」よりやや劣り「栄光」程度でやや強に属し、ほ場における不稔の発生は、比較品種に比しいずれの条件でも少なかった。遅延型に対しては「栄光」よりやや強く「新雪」程度の中に属する。

耐倒伏性は「新雪」程度のやや強に属する。

葉の枯上りは普通土壌条件で葉枯れの大きい処では「栄光」に次いで多く、登熟後期に多くあらわれる。

5. 収量その他 標準肥では比較品種に比し多収を示し、極端な多肥栽培では、稈質、登熟が劣るため「新雪」「ユーカー」より減収する。土壌条件としては普通土壌より泥炭質土壌が収量性で優り、ことに砂土および普通土壌の耕土の浅い水田、有機質の乏しい水田では登熟後期に葉枯れをきたしやすく、登熟に悪影響をきたすため劣るものと思われる。

栽培適地と奨励態度 本品種の適応地帯は、空知、上川、石狩などの道中央部およびこれに類似の地帯でいもち病の発生しやすい地帯（泥炭地）に多く栽培されている「新雪」「ユーカー」あるいは「ほうりゅう」などにかえて栽培する。

本品種は初期分けつがよく、普通肥栽培に適しているので多肥栽培は避けること。

（1974年（昭49）廃止）

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 歩 合 %	試 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 ℓ 重 g	1,000 粒 重 g		
中央農試	冷床 (豊後土)	8.13	10. 6	166	64	14.7	25.1	488	303	797	21.2	82.8	1962～ 1965
	冷床 (沖積土)	8.16	10. 7	166	62	13.8	23.7	445	326	798	20.2	81.0	"
北海道農試	冷床	8.13	10. 4	—	68	12.7	28.2	432	—	—	19.5	—	1963～ 1965
上川農試	冷床	8. 8	9.26	156	70	14.6	29.0	517	500	(802)	20.3	81.1	"
原原種農場	冷床	8.12	9.30	156	66	14.3	27.4	499	484	786	19.9	82.6	"
道南農試	冷床	8. 7	9.26	157	62	14.5	25.7	430	—	—	19.9	—	"

(14) はつとかち（十育7号）

来歴 「はつとかち」は、1956年（昭31）北海道立農業試験場上川支場において「新栄」を母とし「水稻農林15号」を父として人工交配を行い、1958年（昭33）にF₂集団で同十勝支場が譲り受け、F₄で個体選抜、F₅以降系統選抜法により選抜固定をはかった。1962年（昭37）に「十系6203」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、1963年（昭38）以降は「十育7号」の系統名をつけて生産力検定試験を行うとともに、道内各試験機関で適応性検定ならびに特性検定試験を併せ行い、さらに1964年（昭39）から奨励品種決定現地調査を行い地方の適否をたしかめ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「はつとかち」と命名された。

特性の概要 1.草状 稈長は長、穂数は「農林20号」と同程度の偏穂重型に属す、穂は長く、粒着はやや密で無芒、稃ならびに稃先色は黄白色である。葉身の枯上りは「農林20号」より若干早目である。

2.玄米の形状 梗種で形状は長粒、粒大は中の部に属す、淡飴色で腹白、心白共に少く品質は中の上である。

3.熟期 出穂期は「農林20号」と大差なく「しおかき」に比べると2～3日早く十勝地方では中生の中に属する。成熟期は「農林20号」に比し若干遅く、「しおかき」と同程度である。

4.障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は「農林20号」より強いが総合判定の結果はやや弱、耐冷性は冷水掛流し検定の結果障害型に対しては中、遅延型に対しては中ないしやや強に属する。倒伏については「農林20号」と同程度で中に属する。

5.収量性 「農林20号」よりも安定多収である。

栽培適地と奨励態度 十勝支庁管内の全地帯の「農林20号」その他晩生種におきかえる。

本品種は長稈で耐冷性中、いもち病やや弱なので、冷水田、多肥栽培はさけ、いもち病防除に十分留意すること、又特性、収量性から見て穂数確保のため移植本数を増し安全確収につとめる事が望ましい。(1969年(昭44)廃止)

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		傾摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1穂 穂数	玄米重	稈重	1ℓ重	1,000 粒重		
十勝農試	冷床	8. 7	9. 27	156	75	17.4	16.6	337	450	815	20.8	80.8	1962～ 1965

(15) そらち (空育51号)

来歴 「そらち」は、1960年(昭35)「みまさり」の良質化を目標に北海道立農業試験場空知支場で「空育12号」(「関東53号」×「栄光」)を母とし「みまさり」を父として人工交配を行い、以後世代促進法により育成された。すなわち1960年(昭35)冬期温室でF₁養成、1961年(昭36)春温室でF₂集団、同年秋鹿児島晩期栽培でF₃、同年冬期温室でF₄集団を養成して穂選抜を行った。1962年(昭37)穂別系統として系統栽培に移し、1963年(昭38)「空系38C34」の系統番号をつけて生産力検定予備試験に供試すると同時に特性検定試験に編入、更に1964年(昭39)「空育51号」の系統名をつけて生産力検定試験に供試するとともに、道内試験機関において適応性を検定、1965年(昭40)奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に編入して地方適否を確かめ、1967年(昭42)優良品種に決定し、「そらち」と命名された。

特性概要 1.草状 稈は「栄光」より短いやや短稈。太さはやや細く、剛さは中位、穂は「栄光」なみのやや長穂で粒着は「ほうりゅう」よりもやや疎の中位である。芒は無く、稃色ならびに稃先色は黄白、穂数は「栄光」より多く穂数型に属する。

2.玄米性状 梗種で形状は中、粒大も中位で「ほうりゅう」なみである。

色沢は「栄光」より淡い飴色を呈し鈍銀白で光沢はやや良。腹白・心白は共にみられず溝は浅い。品質は「栄光」よりやや劣り上の下。

3. 熟期 出穂期は「栄光」「ほうりゅう」なみで穂揃は良好である。成熟期は「栄光」なみで中生の中に属する。

4. 障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性はC菌の存在下では「さきはなみ」なみのやや強、N菌系のみでは「ユーカラ」に近い耐病性を有する。耐冷性は障害型に対しては極強、遅延型に対しては中の抵抗性を示す。

耐倒伏性は「栄光」なみのやや弱であるが稈が柔軟なためなびく様相で倒伏する。

5. 収量性 年次、地域的な変動が少なく多収である。

栽培適地と奨励態度 「栄光」「ほうりゅう」等の中生種が作付されている道内各地帯に適応し、安全確収の中核的品種として作付させる。尚中晩生種地帯の冷水田にも適応する。倒伏性から見て多肥栽培はさける。

試験場名	苗代様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 本数	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂重 g	1 粒重 mg		
中央農試	冷床 (平壌上)	8.16	(10. 8)	167	68	15.8	22.6	453	—	800	22.6	83.9	1964～ 1966
	冷床 (平壌上)	8.16	10. 5	164	66	15.3	22.7	465	—	804	21.4	82.0	1964～ 1965
北海道農試	冷床	8.14	10. 2	159	67	14.5	25.6	476	536	—	21.2	82.4	1964～ 1966
上川農試	冷床	8.13	9.26	160	71	16.6	26.5	552	623	803	21.4	80.0	"
原原種農場	冷床	8.15	10. 3	161	67	16.5	23.9	438	483	798	20.9	82.4	"
道南農試	冷床	8.12	9.28	—	73	16.8	20.9	413	—	—	22.6	—	1965～ 1966

(16) 照 稔

来歴「照稔」は、北見市屯田町、江頭利雄氏の育成によるもので、1953年（昭28）に「照錦」の中より稔実良好な一株を選抜したことに始まる。翌年に一本植栽培を行い、分離した白毛と赤毛の中から良好なものを1959年（昭34）まで繰り返して選抜を行い、赤毛の後代より混りを除いたものを「照稔」と命名した。

1963年（昭38）に現地を含めて予備的に生産力を検定した。翌年、道内の関係試験機関において生産力検定並びに特性検定試験を行い適応性を検定し、1965年（昭40）より奨励品種決定調査および現地調査を行って地方適否を確かめ、1967年（昭42）優良品種に決定した。

特性概要 1. 稈長は、「しおかり」よりやや短い中稈。穂数は、「農林20号」より多く「しおかり」と同程度で、草型は、偏穂数型である。穂長は「しおかり」より長く、「ふくゆき」程度で中。粒着は「農林20号」よりやや疎で中程度。芒性は多の長で、稃先色は、成熟期には赤褐色となる。初期生育は「農林20号」程度でよい方である。

2. 玄米の性状については、形状は「農林20号」程度の中、粒大は「農林20号」より大きく、やや大、色沢は銚色の程度は少なく銀白に近い。光沢は「ふくゆき」よりよいが中程度で、平年では腹白が多く、品質は「ふくゆき」よりやや良いが中の下に属する。食味は江頭氏によれば、「ふくゆき」よりもよいとされている。

3. 出穂期は、「しおかり」に比べやや早い、北見地方では晩生の早に属する。登熟は、「しお

かり」に劣らず良く、成熟期では中生の晩に属する。

4. 耐冷性は、障害型に対しては「しおかり」程度でやや強とみられる。

5. いもち病抵抗性については、「しおかり」に比べいくらか強いようではあるが中に属する。葉いもち病に対しては「しおかり」よりも強い。

6. 倒伏性については、「しおかり」程度である。

7. 収量性については、初期生育もよく登熟も早いので、平年以上の年ではかなりの収量性を示す。一方、下葉の枯上りが早く、多肥にすると穂揃が悪く、いわゆる「ボケ」易く、好天の場合には葉は垂れ過繁茂の型になり易い。

栽培適地と奨励態度 網走支庁管内において、「ふくゆき」が栽培されている地帯と「しおかり」が遅すぎる地帯およびこれに準ずる地帯に適する。

栽培上の注意としては、1. 登熟が良好な系統ではあるが、北見地方の出穂の早晩では限界に近いものであるから、作付割合が多くならないようにする。2. 耐冷性は、「しおかり」程度で著しく強いものではなく、低温時には多肥で不稔が多発し、生育も遅延するので多肥栽培はさけること。3. 収量性の項で記したごとく、多肥栽培では玄米品質を低下させることがあるので充分注意すること。〔1971年（昭46）廃止〕

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北見農試	冷床	8. 14	(9.22)*	(116)*	67	16.5	17.0	326	733	796	19.9	77.8	1963～ 1966
上川農試	冷床	8. 8	9. 24	156	70	17.8	21.0	477	498	818	22.5	82.0	1964～ 1966
十勝農試	冷床	8. 15	(9.30)**	(155)**	67	17.6	19.3	367	609	803	21.2	75.8	”

・は3ヶ年平均、 **は2ヶ年平均。

(17) かちほなみ（十育12号）

来歴 「かちほなみ」は、1953年（昭28）北海道立農業試験場上川支場において（「豊光」×「大雪」）を母とし「上育161号」を父として人工交配を行い、その後F₁種子を2年間貯蔵し、1956年（昭31）F₁養成を行い、1958年（昭33）、「上28交15」の交配番号のF₂集団を同十勝支場が譲り受け、F₂で個体選抜したものである。1962年（昭37）に「十系6201」の系統番号をつけて生産力検定予備試験を行い、1963年（昭38）～1964年（昭39）に生産力検定試験を行った。1965年（昭40）以降は「十育12号」の系統名をつけて道内各試験場機関で適応性検定試験ならびに特性検定試験を行うとともに、奨励品種決定現地調査により、地方の適否を確かめ、1968年（昭43）優良品種に決定し「かちほなみ」と命名された。

特性概要 1. 草状 苗代、本田共にあまり伸長せず、本田においては比較的早期に分げつを始め、旺盛で初期の生育は良好である。稈長は短くやや短に属し、稈はやや細く剛柔性は中で「ふくゆき」と同程度であるがより柔軟性に富む。穂長はやや短、穂数は多く穂数型である。芒は無芒で粒着はやや密に属し、稈色、稈先色共に黄白で成熟期の熟色は良好である。

2. 玄米の性状 梗種で形状は「しおかり」と同じかやや円で粒大はやや小に属する。腹白中、心白は少なく色沢はやや良であるが、胴切米、不整形米が若干多い。

3. 熟期 出穂は「しおかり」と同程度の中生の晩、成熟期は中生の中に属し、冷害年における登熟は「ふくゆき」「しおかり」より若干早まる傾向がみられる。

4. 障害抵抗性 いもち病の耐病性は「農林20号」なみの弱に属する。耐冷性障害型に対しては「しおかり」「はつとかち」より強い強に属し、遅延型に対しては「ふくゆき」なみのやや強くない中に属する。耐倒伏性は「しおかり」なみの中に属するが、短稈で柔軟性があるので完全倒伏は少ない。

5. 収量性 多収で年次間における変動も少なく収量は安定している。

栽培適地と奨励態度 十勝管内、網走管内、上川北部およびこれに準ずる地帯。

耐冷性はなお不十分であり、いもち病には弱く、胴切米の発生は多いので充分注意して栽培する事が必要である。

試験場名	苗代 様式	出穂期		生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
		月日	月日		稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
十勝農試	冷床	8. 9	9. 25	153	69	15. 4	22. 6	382	502	821	20. 1	79. 8	1962～ 1967
北見農試	冷床	8. 13	10. 1	160	68	13. 4	23. 5	379	643	837	—	81. 0	1965～ 1967
上川農試	冷床	8. 6	9. 22	154	76	15. 2	30. 0	520	552	837	19. 9	80. 7	"

(18) はやゆき (北育33号)

来歴 「はやゆき」は、北海道立農業試験場上川支場で、1956年(昭31)に「新栄」を母とし、「農林19号」を父として人工交配を行い、F₂まで上川支場で集団養成したものを、1960年(昭35)に同北見支場がF₂集団として譲り受け、早熟、耐冷、良質を目標にして、1962年(昭37)に個体選抜を行い、以来選抜固定をはかったものである。1964年(昭39)「北系3901」の系統番号を付け、翌年には「北育33号」の系統名を付けて生産力検定試験を行うとともに、道内の関係試験機関において適応性検定および特性検定を併せて行い、1966年(昭41)より現地調査によって地方適否を確かめた。1968年(昭43)優良品種に決定し、「はやゆき」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「農林19号」「農林20号」より長く、長稈に属する。穂数は、「農林20号」並で、草型は中間型。穂は、「農林20号」よりやや短い中位である。粒着は中位。芒性は、少の短で稈先色は黄白。初期生育は「農林20号」よりは劣るが、良い方である。

2. 玄米性状については、形状は「農林20号」よりいくらか細いの中に属し、粒大は「農林19号」よりやや大きく中である。色沢は、いわゆる飴色は少いが「農林19号」より良く、腹白は「ふくゆき」と同程度ないしは少い。品質は「農林19号」よりいくらか良く中の中に属する。

3. 出穂期は、「農林19号」より遅いが「農林20号」よりわずか早く、北見地方では中生の早。登熟は、「農林19号」よりも良いので、成熟期でも中生の早に属する。

4. 耐冷性は、障害型に対しては、「農林19号」「かんまさり」など同熟期程度の強とされるいずれの品種よりも強く、極強である。

5. いもち病抵抗性は、「農林20号」と同程度で弱に属する。葉いもち病についても「農林20号」程度で弱であり。

6. 耐倒伏性は、長稈で稈質が柔かい方なので「はつとかち」よりは強いが「きよかぜ」「農林20号」

並のやや弱。しかし、長程のわりには倒伏しずらく、なびき型なので、倒伏による障害はある程度補われるものとみられる。

7. 収量性については、低温年には、本系統の耐冷性、早熟性により他の品種に比べ多収をあげ得る。平年以上の年にも、「農林20号」「しおかり」と同程の収量性を期待できる。

栽培適地と奨励態度 網走支庁管内における「農林20号」と「安斉系統」およびこれらと同程度の熟期のを栽培している地帯、「ふくゆき」「照稔」「しおかり」が遅すぎる地帯に適し、これら品種、系統に替えて、または配合種として栽培できる。

十勝および上川支庁管内や留萌支庁管内北部の低温冷水地帯、その他の支庁管内でも上記に類似した地帯は同様である。

栽培上の注意としては、長程で倒伏しやすい性質であること、いもち病に対しても弱なので多肥栽培は極力さけると共に、いもち病防除は「農林20号」に準じて十分に行うこと。また、草型が中間型で穂数が少なざみになる場合があるので、この場合、出来るだけ栽植株数または本数を多目にして増収を計ることが必要である。(1975年(昭50)廃止)

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 割 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1ℓ重	1,000 粒重		
		日 月	日 月	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	冷床	8. 8	9. 23	153	77	15.3	15.8	407	499	826	20.0	82.1	1964～ 1967
上川農試	冷床	8. 4	9. 20	149	88	17.0	20.0	460	477	824	21.2	80.6	1965～ 1967
十勝農試	冷床	8. 6	9. 23	149	79	17.3	17.6	371	429	817	21.2	81.5	"
北見農試	直播	8.15	—	—	79	14.2	23.3	378	435	822	19.2	79.8	1970～ 1971
上川農試	直播	8. 3	9. 19	127	82	14.1	34.0	447	496	815	21.2	80.8	1965～ 1967

(19) シモキタ (ふ系56号)

来歴 「シモキタ」は、1954年(昭29)青森県農業試験場藤坂試験地において「ハッコウダ」を母とし(「Pi」×「水稻農林29号」F₁)を父として三系交配を行い選抜固定をはかり、1962年(昭37)農林省に新品種「シモキタ」(水稻農林141号)と命名、登録されたものである。1963年(昭38)青森県農業試験場藤坂試験地より種子の分譲を受け適否を検討した結果、1968年(昭43)優良品種に決定した。

特性の概要 1. 草状 稈長は「巴まさり」よりも低いやや短稈種でやや細く、穂数は「巴まさり」よりやや少な目の偏穂数型で、稈の剛軟はやや剛である。穂長は「巴まさり」なみの長、粒着密度は中で、無芒、稈ならびに稈先色は黄白である。

2. 玄米性状 稈種で形状は「巴まさり」と同じ中、粒大は中粒、色沢はやや銀白色で光沢は中、腹白は中位で品質は「巴まさり」と同程度の中の上である。

3. 熟期 出穂期は「巴まさり」より3～4日遅く、成熟期は2～3日遅い晩生種である。

4. 障害抵抗性 いもち病に対する抵抗性は既存品種の中では最も強く、耐倒伏性もあきらかに強い。耐冷性は障害型冷害に対しては「南榮」程度の中、遅延型冷害に対してはやや強に属する。

5. 収量その他 普通栽培では「南榮」「巴まさり」よりやや多収であるが、密植、熟苗等の条件

下では多収を示す。

栽培適地と奨励態度 道南地方の良地帯で「巴まさり」が安全に栽培可能な地帯。

熟期の遅い品種なので、熟期の遅れる様な栽培法はさける事が必要で、熟苗等の利用をすべきである。(1971年(昭46)廃止)

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
渡島支場	冷床	月日 8. 14	月日 10. 4	日 166	cm 74	cm 17. 2	本 21. 4	kg 512	kg 491	g 827	g 20. 8	% 83. 5	1965～ 1967

(20) マツマエ (北海222号)

来歴 「マツマエ」は、1961年(昭36)北海道農業試験場において「ふ系51号」を母とし、「北海183号」を父として、人工交配を行い、F₁短日処理、1963年(昭38)鹿児島県立農業試験場に依頼、F₃, F₄世代を経過、1964年(昭39)穂別系統とし、F₅以降系統栽培にうつし、選抜固定をはかった。1966年(昭41)「札系6632」の系統番号をつけ生産力検定、系統適応性検定、特性検定試験に供試した結果、1967年(昭42)「北海222号」の系統名をつけて関係機関に配布して地方適否を検討した。1968年(昭43)から奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した結果、1970年(昭45)優良品種に決定し、農林省に新品種「マツマエ」(水稻農林209号)と命名、登録された。

特性概要 1.草状 稈長は「南榮」より短い中、稈の太さはやや太く剛い。穂数は「南榮」をみないしやや多の偏穂数型に属する。穂長はやや長、粒着密度は中で極稀に短芒を有し、稈色は黄白、稈先色は淡褐色で脱粒性は難である。葉長は長く、葉巾も広く厚い感じで止葉も長く巾も広く穂の上に直立する。

2.玄米の性状 梗種で形状は中、粒大は「南榮」より大きく大粒に属する。籾色を呈し、光沢は良好で腹白は極めて少なく、品質は「ユウカラ」なみで良好。食味は「南榮」よりやや劣り、中の上である。

3.熟期 出穂期、成熟期は「南榮」なみの晩生種であるが奨励地帯の道南地帯では中生種に属する。

4.障害抵抗性 いもち病耐病性は強と観察される。障害型耐冷性はやや強、耐倒伏性は強に属する。

5.収量その他 耐病性、稈質等の面から見て安定性が高く多収である。少肥栽培では穂数が少なく少収となり易い、又生育後半に肥料切れすると葉枯れが多くなる欠点がある。

栽培適地と奨励態度 渡島半島南部で「南榮」程度の晩生種を安全に栽培し得る地帯に適する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北海道農試	冷床	月日 8. 18	月日 10. 11	日 170	cm 68	cm 16. 3	本 20. 0	kg 457	kg 660	g —	g 23. 3	% 81. 5	1966～ 1969
道南農試	冷床	月日 8. 8	月日 9. 28	日 162	cm 73	cm 18. 5	本 18. 1	kg 531	kg 472	g —	g 24. 7	% 81. 6	〃

(21) なるかぜ (上育314号)

来歴 「なるかぜ」は、1960年(昭35)北海道立農業試験場上川支場で「北海182号」(「ユーカラ」)を母とし「ささほなみ」を父として人工交配を行い、同年冬期間に温室でF₁を、翌年F₂を集団として養成し、F₃を再度、冬期温室において世代促進を行い、それ以来、早熟耐冷性、良質に重点を置き選抜固定をつづけ育成したものである。1963年(昭38)に「上系173」の系統番号をつけ、1964年(昭39)に系統栽培において分離系統を選抜し、1965年(昭40)に「上育314号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめたものである。1970年(昭45)に優良品種に決定し、「なるかぜ」と命名された。

- 特性概要 1.出穂期は「ふくゆき」並で早生種の晩、成熟期は「農林20号」より1両日早い。
 2.草型は穂数型で、穂数は「ふくゆき」並、稈長は「ささほなみ」並でやや短程、穂長は「しおかり」程度でやや短い。
 3.粒着は中程度で、芒性は無芒、稈色、稈先色は黄白である。
 4.登熟は、多肥栽培で「農林20号」「うりゅう」よりやや早まり、葉枯れは遅く登熟性は極めて良好である。
 5.いもち病耐病性は、抵抗性遺伝子pi-aを持っていると推定され、C₃およびN₄菌には強く、葉、節、穂頭および枝梗いもちの圃場抵抗性では「うりゅう」よりやや強く、中である。
 6.短程で葉枯れが遅く耐倒伏性は「うりゅう」よりやや弱く、「かちほなみ」「しおかり」程度で中である。
 7.障害型耐冷性は「ふくゆき」より強く、「しおかり」程度かまたはやや強く、やや強である。
 8.玄米は、形状は中で「ささほなみ」に類似、粒色はやや飴色、光沢は良好で腹白は少ない。粒張りが良く縦溝は浅く、品質は「農林20号」「しおかり」並で、搗精歩合は「しおかり」並である。食味は「しおかり」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 玄米品質不良の「ふくゆき」「照稔」「かちほなみ」の早生種が栽培されている網走支庁管内および十勝支庁管内の良地帯並びに上記品種に加えて熟期的に不安定な「うりゅう」「しおかり」が栽培されている上川、留萌支庁管内の中北部、山間地帯および空知、石狩、後志、胆振、日高支庁管内の早生地帯に適しており、これらの品種の全てまたは一部に代える。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 株 穂数	玄米重	稈重	1 匁重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
上川農試	直播	8. 8	9. 23	131	62	14.3	38.0	520	539	799	22.0	83.0	1968～ 1969
	冷床	8. 4	9. 20	120	66	16.0	29.0	529	456	816	21.6	80.8	1965～ 1969
北見農試	冷床	8. 3	9. 25	159	61	15.8	26.0	509	540	826	21.9	80.1	1967～ 1969
十勝農試	冷床	8. 2	9. 22	150	65	16.6	23.0	437	376	812	22.1	82.3	〃
原原種農場	冷床	7.31	9. 17	145	64	16.7	24.0	543	382	819	20.0	83.7	〃
中央農試	冷床	8. 5	9. 25	155	66	16.5	24.0	499	405	818	23.4	84.7	〃
北海道農試	冷床	8. 7	9. 25	—	60	14.7	25.0	461	—	—	23.0	—	1968～ 1969

(22) イシカリ (道北1号)

来歴 「イシカリ」は、1960年(昭35)北海道立農業試験場上川支場で「北海182号」(「ユーカラ」)を母とし「空育4号」(「ささほなみ」)を父として人工交配を行い、F₁は同年冬期温室で養成し、F₂~F₄は水田で集団採種を行い、それ以来「空育4号」の良質化を目標に選抜固定をつづけ育成したものである。1966年(昭41)に「上系6679」の系統番号をつけ、1968年(昭43)に「道北1号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に、道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめた。1971年(昭46)に優良品種に決定し、農林省に新品種「イシカリ」(水稻農林217号)と命名、登録された。

特性概要 1.出穂期は「しおかり」より2~4日早く、早の晩、成熟期は「しおかり」とほぼ同じである。

2.草型は偏穂数型で、穂数は「しおかり」と「うりゅう」のほぼ中間、稈長は「しおかり」より10cm程度短く短稈である。穂長は「しおかり」より長く、「ささほなみ」程度の長穂である。

3.粒着は「しおかり」「うりゅう」よりやや粗で、芒性は無芒、稃先色は黄白である。

4.登熟は「うりゅう」よりは早く、「しおかり」にはやや劣るが、穂内の登熟進度にはむらが少ない。

5.穂揃いは、標肥栽培では良いが、多肥になり穂数が多くなるとやや乱れる場合がある。多肥栽培での穂揃いの乱れは、成熟期にまで影響し青米の混入を多くすることがある。

6.いもち病耐病性は、「ユーカラ」と同様、真性抵抗性遺伝子 pi-a, pi-k を持つと推定されるが、圃場抵抗性はかなり強く、強と判定され、葉、穂頸いもち共に強い。

7.耐倒伏性は「うりゅう」「しおかり」より数段強く、「ユーカラ」並の強さをもつ。

8.障害型耐冷性は、長期冷水検定、人工気象箱による検定のいずれにおいても、「うりゅう」「しおかり」と同程度のやや強である。

9.玄米は、粒長はやや長く、粒大は「しおかり」「うりゅう」のいずれよりも大きい。粒形は「ユーカラ」と同じで、粒色も「ユーカラ」の飴色に近く、腹白はごく少ない。品質は「うりゅう」にまさり「しおかり」並かそれ以上で「ユーカラ」程度の上の下である。搗精歩留は「しおかり」と同程度か、これよりやや高い。食味は「しおかり」並かこれにややまさる。

10.収量は高位収量地帯において高く、「しおかり」並かそれ以上の多収を示す。年次間の変動

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1ℓ重	1,000 粒重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
上川農試	直播	8. 8	10. 2	140	67	15.6	34.0	518	622	801	21.7	81.0	1968~
	冷床	8. 1	9. 23	155	62	17.7	21.0	543	450	816	22.2	83.1	1970
北見農試	冷床	8. 1	(9.21)	(153)	61	17.5	21.0	520	581	820	21.1	81.0	1966~
十勝農試	冷床	8. 3	9. 22	151	61	18.1	19.0	484	451	813	22.4	81.9	1970
原原種農場	冷床	7.30	9. 20	149	64	18.4	20.0	559	446	813	23.2	83.0	"
中央農試	冷床	8. 7	9. 27	157	66	18.2	20.0	508	435	820	21.5	84.7	"
北海道農試	冷床 (雪庇成)	8. 6	9. 26	—	61	17.6	21.0	499	—	—	23.0	—	"

注) 表中()は成熟期に達しない年あり。

は少ないが、栽培環境による変動がやや大きく、初期生育が不良な条件における収量低下が大きい。従って、多肥において本来の多収性を発揮する傾向がある。

栽培適地と奨励態度 上川、留萌支庁管内の良地帯における「しおかり」「ほうりゅう」「そらち」「ほくせつ」とその他の中生種にかえる。上川、留萌支庁管内のやや良地帯における「しおかり」の一部にかえる。空知、石狩、後志、桧山支庁管内のやや良地帯における「うりゅう」「しおかり」の全部又は一部とその他の早生晩～中生早品種にかえる。

(23) ゆうなみ (空育87号)

来歴 「ゆうなみ」は、1964年(昭39)北海道立中央農業試験場において(「ユーカラ」×「ささほなみ」)F₁を母として、「ささほなみ」を父として戻し交配を行い、同年冬期間温室でF₁養成、1965年(昭40)鹿児島県農業試験場に委託してF₂、F₃世代を経過、1966年(昭41)穂別系統、F₆以降系統栽培に移して選抜固定をはかった。1967年(昭42)「空系42033」の系統番号をつけて生産力検定試験、特性検定試験を開始し、1968年(昭43)「空育87号」の系統名をつけて関係機関に配布し地方適否を検討した。1969年(昭44)以降奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した結果、1971年(昭46)優良品種に決定し「ゆうなみ」と命名された。

特性概要 1.草状 稈長は「ひめほなみ」よりやや短い短稈、穂数は「ひめほなみ」より少ない穂数型に属する。稈の太さは中ないしやや細く、剛さは「ささほなみ」にちかくやや剛、穂長は「栄光」程度のやや長穂で、粒着はやや密である。芒はなく稈、稈先色は黄白である。苗は形状、生育ともに中程度で葉色はやや濃緑で、本田初期から中期にかけての生育は分けつ力が旺盛で穂数の確保は容易である。

2.玄米の性状 梗種で形状は中ないしやや長く、粒大は中、色沢は鈍銀白で光沢は良好で縦溝は浅い。普通では腹白少、心白極少であるが多肥栽培などで粒が大きくなる場合には腹白、乳白米を発現し易い傾向があり、総合的にみた品質は「ほうりゅう」なみの上の下である。食味は「ほうりゅう」「しおかり」にやや劣る。

3.熟期 出穂、成熟期ともに「しおかり」より1～2日おそく、「ほうりゅう」より2～3日早く、中生の早に属する。

4.障害抵抗性 いもち病に対するほ場抵抗性はやや強、障害型冷害に対しては「しおかり」に

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
中央農試	冷床 (赤土)	8. 6	9. 27	124	64	17. 2	22. 7	558	414	813	23. 5	84. 1	1967～ 1970
	冷床 (赤土)	8. 7	9. 28	126	66	16. 7	24. 3	530	411	819	22. 5	83. 7	1968～ 1970
北海道農試	冷床	8. 3	9. 29	159	61	16. 1	22. 0	518	496	—	23. 4	82. 4	—
上川農試	冷床	8. 1	9. 24	155	61	16. 2	23. 7	572	433	813	22. 7	83. 2	1968～ 1970
	直播	8. 9	10. 3	141	62	14. 6	35. 0	486	589	795	21. 9	80. 3	1969～ 1970
原原種農場	冷床	8. 1	9. 25	154	63	17. 2	24. 2	597	403	812	23. 4	81. 1	1968～ 1970

比しやや劣る中位であるが稔実歩合の低下に比べて減収率は小さい。又冷水田における出穂遅延度は他の中生種より小さい方である。

耐倒伏性はやや強に属する。

5. 収量性その他 初期分けつ力が旺盛で穂数の確保が容易なため、中生の中、晩の品種に比べても同程度の収量性がある。

栽培適地と奨励態度 「ほうりゅう」が安全に作られている空知以南で石狩、空知の良地帯ならびにこれに類似の地域、なお耐冷性が不十分なのでこれら地域においても山間高冷地および太平洋沿岸で障害型冷害を受け易い地帯での栽培は適さない。

障害型耐冷性が中位で、多肥した場合品質、登熟性が低下するので施肥量は注意すること。

(24) きたこがね (北育51号)

来歴 「きたこがね」は、北海道立農業試験場上川支場で、1961年(昭36)、「北海182号」を母とし「上育230号」を父として人工交配を行い、翌年の冬期、温室でF₂を養成、1963年(昭38)には冷水田で集団選抜を行い、翌年、北海道立北見農業試験場で、F₄集団の一部を譲り受け、良質、耐冷を目標に個体選抜を行い、以来選抜固定をはかったものである。1966年(昭41)に「北系4127」の系統番号をつけ、生産力検定、特性検定試験に供試した。1968年(昭43)「北育51号」の系統名をつけ道内関係機関に配布、翌年より関係現地試験にも供試して地方適否を検討し、1973年(昭48)、優良品種に決定し、「きたこがね」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「きよかぜ」よりやや短かく「なるかぜ」程度のやや短稈。穂長は、「しおかり」より僅か長く「はやゆき」と同程度の中位。粒着は中位。穂数は、「しおかり」と同程度で偏穂数型。芒は「しおかり」よりやや短い中芒、稈先色は黄白。

2. 玄米性状については形状は「なるかぜ」程度の中位で、粒大は「なるかぜ」よりやや大きく、やや大。粒色は「しおかり」と同程度で餛色を呈し、光沢は良好。品質は、「しおかり」並で、育成地では上の下。

3. 出穂期は、「はやゆき」より遅く「なるかぜ」程度で北見地方では中生の晩。成熟期は、「農林20号」よりやや遅く「なるかぜ」より2～3日早い中生の中である。登熟性は、「はやゆき」より遅いが「しおかり」「農林20号」並で良好。

4. 障害型耐冷性は、「はやゆき」より弱い「なるかぜ」よりやや強く、やや強。

5. いもち耐病性は、葉いもち、穂いもちともに、「きよかぜ」「ふくゆき」並の弱。

6. 耐倒伏性は、「しおかり」「なるかぜ」より強く、「うりゅう」並でやや強。

7. 収量性は、初期生育が良く穂数確保は容易であり、登熟良く千粒重が重いため、平年あるいは豊作年には「なるかぜ」「農林20号」程度の収量をあげ、冷害年にはこれらの品種より高収で、収量の年次間変動は少ない。

栽培適地と奨励態度 網走、十勝両支庁管内においては耐冷性と共に初期生育や登熟性の良さが要求される。この系統は、これら両地帯における中生良質品種として「はやゆき」「なるかぜ」「安斉系統」「かちほなみ」「農林20号」およびその他雑多な品種におきかえて栽培しうる。

栽培上の注意としては、1. いもち病抵抗性が弱であるので、常発地帯では十分注意し、各地帯の防除基準にのっとり、完全防除が必要である。2. 耐倒伏性は、「しおかり」より強いが、多肥栽培にするとおくれ穂が多発し登熟不良を招き易く、品質が低下するので多肥栽培はさけ

ること。3. 登熟が早く整一であるが、刈りおくれることによりさび米（茶米）を発生し、品質低下を招き易いので、適期刈りを励行すること。4. 障害型耐冷性は「なるかぜ」並か、やや強いが、「はやゆき」より弱く充分ではないので、深水灌漑による幼穂保護を励行すること。5. 感温性はこの程度の熟期のものとしては中位であるが、分けつ力が旺盛で高位節からも分けつしやすいので、育苗及び本田管理には十分注意する必要がある。6. 良質米の生産と安定した収量をを得るため、栽植本数はやや多目にすることが望ましい。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a 当り		玄 米		収 割 歩 合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 穂重 g	1,000 粒重 g		
北見農試	冷床	7. 31	—	—	59	16. 6	21. 0	519	494	833	22. 2	80. 3	1966～ 1972 *
十勝農試	冷床	8. 2	9. 16	145	59	17. 6	21. 5	476	447	820	22. 4	80. 9	1968～ 1972 *
上川農試	冷床	7. 30	9. 17	148	61	16. 8	23. 0	501	411	821	23. 2	82. 5	1968～ 1972 *
原原種農場	冷床	7. 29	9. 16	144	61	17. 3	22. 3	556	438	827	24. 1	82. 5	1968～ 1972 *
北海道農試	冷床	8. 6	9. 23	—	59	17. 1	27. 0	539	—	—	24. 1	80. 9	1972～

*は1971年を除く。

(25) さちほ（空育97号）

来歴 「さちほ」は、1964年（昭39）北海道立中央農業試験場において、良質、耐病、強稈品種の育成を目的に（「さきはなみ」×「空系1号」）F₁を母とし、「北海190号」を父として人工交配を行い、同年冬期間温室でF₁養成、1965年（昭40）温室でF₂、F₃集団養成、1966年（昭41）鹿児島県農業試験場に委託してF₄、F₅集団を養成、1967年（昭42）F₆で個体選抜、以降系統育種法により選抜固定をはかった。この間F₆集団とF₇系統は場内の穂いもち病常発水田で栽植選抜を加えた。

1969年（昭44）より「空系44049」の系統番号をつけ生産力検定予備試験、特性検定試験に供試、1971年（昭46）「空育97号」の系統名をつけて道内関係機関に配付し、更に1972年（昭47）より奨励品種決定現地調査に供試して地方適否を検討し、1974年（昭49）優良品種に決定し、「さちほ」と命名された。

特性概要 1. 草状 稈長は「ひめほなみ」「ユーカーラ」より若干短い短、太さは中、穂長は「ほうりゅう」なみの中位、穂数は「ほうりゅう」より少い偏穂数型、粒着はやや密ないし中、極稀に極短芒があり、稈先色は黄白である。

苗は葉身やや長狭、やや濃緑色で太さは中。初期生育はやや劣り、葉身はやや垂れる。止葉は小さく角度は中位を示す。後期の枯上りは「ひめほなみ」より少なく中位。

2. 玄米の性状 梗種で長形、粒大は「ユーカーラ」よりもやや大きめの大粒、色沢は淡目で透明度が「ユーカーラ」より優っている。腹白、心白ともに少なく「ユーカーラ」なみ、さび米も少ない良質種である。

3. 熟期 出穂期は「ユーカーラ」より1～2日早く、中生の晩に属するが、登熟は早く良整なので「ほうりゅう」なみの中生の中に属する。出穂変動性は「ユーカーラ」なみのやや大で「栄光」

よりは小さい。

4. 障害抵抗性 いもち病に対するほ場抵抗性はやや強～中位で「ユーカー」のような危険性はない。

耐冷性については障害型では「ユーカー」と同程度の中位、倒伏抵抗性はほぼ「ユーカー」に近いやや強に属する。

5. 収量その他 収量は疎植、普通肥栽培、初期生育不良地帯ではやや劣る場合がみられるが、多肥栽培、多肥密植栽培では多収を示す。これは、稈質、登熟性が優ることと、いもち病の罹病が少ないためと考えられる。又紙筒苗ばらまき移植栽培では安全確収が得られる。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、後志、胆振、日高、道南北部および上川南部の中生種地帯に適する。

初期生育が劣り、茎数の確保が困難なので、健苗の育成、株当り本数を多くし、多肥密植等による茎数の確保をはかるとともに、出穂期に比較して成熟期が早く良整なので刈取適期を失しない様注意が必要である。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 穂 本数	玄米重 kg	稈重 kg	1 束 重 g	1,000 粒 重 g		
中央農試	冷床 (密植炭)	8.10	9.27	162	64	16.6	22.0	502	452	824	23.3	82.2	1971～ 1973
	冷床 (疎植土)	8.9	9.26	161	63	15.8	23.0	495	477	818	22.9	82.8	"
北海道農試	冷床	8.11	9.28	155	66	19.0	23.0	493	542	—	23.2	78.7	"
原原種農場	冷床	8.6	9.22	151	65	16.0	20.0	522	479	820	22.8	83.1	"
上川農試	冷床	8.7	9.19	151	67	15.5	20.0	497	464	823	23.2	82.4	1972～ 1973
道南農試	冷床	8.5	9.17	150	71	16.4	23.0	486	445	—	22.2	82.2	1971～ 1973

(26) キタヒカリ (北海230号)

来歴 「キタヒカリ」は、1965年(昭40)北海道農業試験場において「しおかり」を母とし、「ユーカー」を父として人工交配を行い、1968年(昭43)F₃で個体選抜を行い以後系統育種法により選抜固定をはかった。1970年(昭45)から「札系7059」の系統番号をつけ生産力検定試験、および特性検定試験に、また1971年(昭46)には系統適応性検定試験に供試した。1972年(昭47)に「北海230号」の系統名をつけて関係機関に配付して適否を検討した結果、1975年(昭50)優良品種に決定し、農林省に新品種「キタヒカリ」(水稻農林236号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草状 稈長は「ほうりゅう」より短く、やや短、稈の太さは中、稈の剛さはやや剛、穂長は「ほうりゅう」と同程度、草型は偏穂数型、粒着密度は中、無芒で稈先色は黄白、脱粒性は難である。苗の葉色はやや濃く、苗代および初期生育は中である。

2. 玄米性状 梗種で玄米の形は中の中粒、色は淡飴色で光沢は良、腹白はわずかにあるが心白はほとんどない。品質は良好であり、食味も「ユーカー」と同程度で良好である。

3. 熟期 出穂は「ゆうなみ」より2日程度遅く、道中央部では中生に属する。成熟期は「ゆうなみ」と同程度で登熟性は良好である。

4. 障害抵抗性 いもち病抵抗性は「ほうりゅう」と同程度の中で障害型冷害に対しては中ないしやや強、遅延型冷害に対してはやや強に属し、耐倒伏性は「ゆうなみ」と同程度でやや強で生育後期の葉枯れはやや多いが登熟への影響は少ない。褐変稈の発生はやや多いが品質への影響は少ない。

5. 収量性その他 収量性は少肥栽培や瘠薄地では穂数確保が難かしく少収となる傾向があるが、多肥栽培（一般栽培程度）や機械移植による密植栽培では比較的多収が得られる。

栽培適地と奨励態度 留萌南部、上川中南部、空知、石狩、後志、胆振、渡島北部、桧山北部の山間冷涼地帯を除く慣行移植栽培および空知、石狩、後志、胆振、日高支庁管内の気象条件良地帯の機械化栽培に適する。

栽植密度（株数・植本数）を多くし穂数の確保につとめると共に、いもち病耐病性、耐倒伏性を考えた場合極端な多肥栽培はさけること、又耐冷性も十分でないので、冷害危険期には深水灌漑を行わなければならない。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 穂重	1,000 粒重		
北海道農試	冷床	8. 9	9. 28	156	69	17. 2	24. 8	530	600	—	22. 5	80. 8	1970～ 1974
	稚苗	8. 10	9. 23	139	69	15. 2	28. 3	546	582	—	23. 2	81. 1	1972～ 1974
中央農試	冷床 (芝原上)	8. 6	9. 24	157	66	16. 8	22. 4	526	425	834	22. 5	80. 4	1972～ 1974
	冷床 (冷床上)	8. 5	9. 23	155	69	16. 6	24. 5	567	459	824	21. 9	80. 4	〃
	稚苗 (冷床上)	8. 8	9. 25	151	65	15. 2	25. 2	574	515	822	22. 4	80. 2	1974～
原原種農試	冷床	8. 3	9. 20	148	68	17. 0	20. 0	607	—	—	22. 8	81. 5	1972～ 1974
	稚苗	7. 31	9. 15	136	64	15. 9	18. 8	480	410	—	24. 3	82. 8	1974～
上川農試	冷床	8. 3	9. 15	147	66	15. 8	20. 1	480	397	836	22. 1	79. 5	1972～ 1974
	稚苗	8. 7	9. 31	152	67	15. 0	21. 0	506	508	838	22. 6	76. 2	1974～

(27) はやこがね（北育64号）

来歴 「はやこがね」は、1964年（昭39）北海道立上川農業試験場において「北斗」を母とし、「上育272号」を父として人工交配を行い、1966年（昭41）F₂ 種子の一部を北海道立北見農業試験場で譲り受け、F₂～F₄ 世代に、留辺蘂町現地選抜圃や北見農試冷水田にて集団選抜を行い、1969年（昭44）F₅ で個体選抜を行い、以降系統育種法により選抜固定をはかったものである。

1971年（昭46）より「北系4651」の系統番号を付け生産力検定、特性検定試験に供試し、早生、耐冷、良質、耐病などの優点が認められたので、1973年（昭48）「北育64号」の系統名を付けて道内関係機関に配布、翌年より関係現地試験にも供試して地方適否を検討し、1977年（昭52）優良品種に決定し、「はやこがね」と命名された。

特性概要 1. 稈長は「きたこがね」「なるかぜ」並の短稈。穂長は「しおかり」よりやや短く、「かちほなみ」程度の短穂。穂数は「きたこがね」より多く「なるかぜ」程度で穂数型である。稈先には稀に短芒を有し、稈先色は黄白である。

2. 出穂期は、「きよかぜ」より遅く、「きたこがね」などよりわずかに早く、北見地方では中生の早。成熟期は、「きたこがね」と同程度やや遅く、登熟性は、「きたこがね」にやや劣り、中位。

3. 障害型耐冷性は、「かちほなみ」程度の強であり「はやゆき」には劣る。遅延型耐冷性（出穂）は「きたこがね」には劣るが「しおかり」より強い。

4. 葉いもち病抵抗性は、「なるかぜ」にややまさり中位。穂いもち病抵抗性は年次や場所によりふれがあるが「しおかり」よりやや劣りやや弱。

5. 耐倒伏性は、「きたこがね」に劣り「なるかぜ」程度の中位。

6. 玄米性状については、形状はやや円粒で、千粒重は「しおかり」「かちほなみ」よりやや重く中粒である。品質は良好であり、食味は「しおかり」と「きたこがね」の中間で、やや良～中である。

栽培適地と奨励態度 網走、十勝、上川（中部を除く）、留萌中北部、後志山間部、空知および石狩南部で早生種が作付けされている地帯において、成苗手植並びに田植機移植栽培に適する。これら地帯における「しおかり」「かちほなみ」「なるかぜ」および「きたこがね」の一部、その他雑多な品種におきかえることにより、「しおかり」の晩熟、「かちほなみ」の品質、耐倒伏性、「なるかぜ」の品質、および「きたこがね」の品質低下などの欠点が補えるものと考えられる。

栽培上の注意としては、1. 少肥条件では穂数確保が困難な場合もあり、品質向上、収量安定の面から栽植株数は十分確保することが望ましい。2. 耐倒伏性が中、普及見込み地帯は冷害を受け易い地域でもあり、極端な多肥をさけ、各地域の基準施肥量で栽培する。3. 障害型耐冷性は強であるが、出穂期の点から冷害危険期に低温にあう機会が多いため、適期には必ず深水灌漑を励行する。4. いもち病抵抗性は十分ではないので多発の恐れのある地帯では適切な防除が必要である。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 t 重 g	1,000 粒重 g		
北 見 農 試	成苗	7. 30	9. 14	146	59	13. 7	24. 5	410	566	812	19. 1	81. 1	1973～ 1976
	中苗	8. 1	9. 18	148	60	14. 0	24. 0	455	540	796	19. 4	80. 8	1974～ 1976
	直播	8. 14	10. 4	137	65	13. 3	29. 0	489	616	773	21. 3	81. 2	1974～ 1975
上 川 農 試	成苗	7. 26	9. 6	137	58	14. 8	25. 0	422	367	836	19. 9	81. 5	1973～ 1976
	稚苗	7. 30	9. 10	132	58	13. 3	23. 0	464	437	338	19. 9	81. 6	1974～ 1976
	直播	8. 2	9. 13	122	53	12. 2	43. 0	432	454	(824)	20. 9	81. 2	"
原 原 種 農 場	成苗	7. 27	9. 14	143	59	15. 3	21. 0	465	358	—	21. 2	82. 4	1973～ 1976
	稚苗	7. 31	9. 20	142	59	14. 9	22. 0	455	430	—	21. 6	82. 4	1974～ 1976
中 央 農 試	成苗	8. 4	9. 24	156	58	13. 8	28. 0	422	393	823	20. 3	82. 3	1975～ 1976
	中苗	8. 3	9. 25	157	58	14. 9	22. 0	413	389	821	20. 8	82. 3	"

(28) ともゆたか (空育103号)

来歴 「ともゆたか」は、1969年(昭44)北海道立中央農業試験場において、早熟、多収、良質を目標に「北海222号」を母とし「道北1号」を父として人工交配を行い、冬期間温室でF₁養成、1970年(昭45)鹿児島でF₂, F₃集団を世代促進し1971年(昭46)F₄を穂別系統で栽培選抜、以後系統育種法により選抜固定をはったものである。1972年(昭47)「空系47136」の系統番号をつけ生産力検定試験、特性検定試験に供試した結果有望と認められたので、1974年(昭49)「空育103号」の系統名をつけ、関係機関に配布、1975年(昭50)奨励品種決定現地調査に供試して地方適否を検討し、1977年(昭52)優良品種に決定し、「ともゆたか」と命名された。

- 特性概要 1.草状 草型は穂数型に属し、秆長は「ゆうなみ」よりもやや長い短秆、太さは中ないしやや細くやや剛い。穂長はやや長で粒着はやや密、稈先色は黄白で、極稀に極短芒を有する。苗の性状は「イシカリ」に類似するが、マツ強度は「イシカリ」よりやや強い。
- 2.玄米の性状 形状はやや長形でやや大粒、粒色はやや濃く、光沢は良好、腹白はわずかにあるが、心白は殆んどない。整粒品質は「イシカリ」と同程度で搗精歩留りは「ゆうなみ」程度、食味は「イシカリ」程度のやや良である。
- 3.熟期 出穂期は「ゆうなみ」より1～2日早く「イシカリ」なみ、成熟期は「イシカリ」より1～2日おそく、中生の早に属する。出穂期の年次変動、低温による出穂遅延度はやや大と考えられる。
- 4.障害抵抗性 いもち病ほ場抵抗性は「ゆうなみ」と同程度、障害型冷害に対しては「イシカリ」に比べればやや弱い「ゆうなみ」よりは強く、やや強くない中に属する。耐倒伏性は「ゆうなみ」と同程度のやや強に属する。稈の褐変現象は「イシカリ」「ゆうなみ」より少ない。
- 5.収量その他 収量は「ゆうなみ」「イシカリ」にやや優り、初期生育不良地帯でも茎数の確保

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a当り		玄 米		穂摺 歩合 %	試 験 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	10 ³ 粒重 g	玄米重 kg	稈重 kg	1粒重 g	1,000粒重 g		
中央農試	成苗 (泥炭土)	8. 1	9. 23	156	61	17. 2	457	537	(373)	836	23. 4	82. 7	1973～ 1975
	成苗 (淨植土)	8. 2	9. 25	159	64	17. 1	526	543	484	834	22. 5	82. 3	1974～ 1976
	中部農試 移 植 (泥炭土)	8. 6	9. 29	161	58	16. 6	515	510	476	820	23. 0	82. 3	1975～ 1976
	中部農試 移 植 (淨植土)	8. 10	1976年 達せず	—	60	15. 3	637	543	426	837	22. 9	82. 0	1974～ 1976
上川農試	成苗	8. 1	9. 14	146	59	15. 3	513	514	418	841	21. 8	82. 4	1974～ 1976
	稚苗	8. 3	9. 19	141	56	14. 0	577	513	517	841	21. 3	83. 3	1975～ 1976
原原種農場	成苗	7. 31	9. 19	149	61	16. 5	456	552	424	—	23. 0	83. 6	1974～ 1976
	稚苗	8. 8	10. 1	153	58	15. 9	632	473	486	—	22. 5	81. 1	1975～ 1976
道南農試	成苗	8. 3	9. 18	152	67	16. 7	445	494	420	822	22. 0	82. 5	1974～ 1976
北海道農試	稚苗	8. 6	9. 25	152	70	16. 6	536	530	466	829	22. 5	79. 9	1975～ 1976
	成苗	8. 5	9. 24	153	68	16. 7	493	522	547	547	23. 6	80. 8	1974～ 1976

が容易なため安定して高い。多肥または密植栽培で増収するが、耐肥性は「イシカリ」よりやや低い。

栽培適地と奨励態度 空知、石狩、後志、胆振、日高、桧山北部、渡島北部、上川中南部、留萌中南部の平地地に適し、これ等地帯の「ゆうなみ」に置き換える。「ゆうなみ」と同程度の施肥量で以上の収量が期待出来るので多肥栽培はさけること、割刈が多いので適収獲を励行し米質の悪化を防止する事が必要である。

〈糯 種〉

(29) はやもち (北育26号)

来歴「はやもち」は、北海道立農業試験場北見支場において、1952年(昭27)に「ユキモチ」を母とし「水稻農林20号」を父として人工交配を行い、以来選抜固定をはかってきたものである。1959年(昭34)に「北系3406」の系統番号をつけて、生産力検定予備試験を実施、1961年(昭36)に「北育26号」の系統名をつけ、道内の関係試験機関において、生産力検定並びに特性検定試験を行って適応性を検討し、翌年より奨励品種決定調査および現地調査を行い、地方適否を確かめた。1965年(昭40)優良品種に決定し、「はやもち」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「双豊糯」程度で中程。穂数は、「双豊糯」よりもやや少ないが、草型は偏穂数型。穂は「双豊糯」より短く、中程度、粒着はやや密である。芒性は無芒で、稃先色は「農林20号」よりもやや薄い暗褐色。初期生育は旺盛。

2. 玄米の性状については、糯種で形状は「双豊糯」よりも円く、やや円に属し、粒大は「双豊糯」より豊満でやや大きく、中に属する。色沢は「双豊糯」よりやや劣るが白で、品質は中の上。

3. 出穂期は、「双豊糯」より2～4日、登熟がよいので成熟期は5～7日程度早く、早生の早に属する(「農林20号」が早生の中)。

4. 耐冷性は、障害型に対しては「双豊糯」程度かやや強く、ないしやや弱に属する。

5. いもち病抵抗性は、「双豊糯」程度で中ないしやや弱に属する。

6. 倒伏に対しては、「双豊糯」と同程度で、中ないしやや強。

7. 収量性については、良年および良環境地帯では「双豊糯」と同程度かやや劣るが、不良年および不良環境地帯では「双豊糯」より多収で、登熟が良いので、青米や層米の発生が少なく、年次間の収量変動が小さい。

栽培適地と奨励態度 網走支庁管内および上川支庁北部、十勝支庁管内の「双豊糯」を栽培している地帯に適する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1穂 穂数	玄米重	稈重	1穂重	1,000 粒重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	冷床	8. 4	(9.19)	(148)	69	15.2	17.0	347	703	816	18.6	79.9	1961～ 1964
十勝農試	冷床	8. 1	9.21	150	61	15.0	19.6	322	452	824	19.5	82.1	1961～ 1963
北海道農試	冷床	7.29	9.14	—	—	—	—	394	—	833	20.3	82.7	1961～ 1962

() は1964年を除く。

栽培上の注意としては、いもち病抵抗性は「双豊糯」程度なので、防除は「双豊糯」に準じて行い、障害型耐冷性では「双豊糯」よりもいくらかは強いが、中ないしやや弱なので、多肥栽培および極端な冷水田での栽培はさけること。(1971年(昭46)廃止)

(30) かむいもち (上育266号)

来歴 「かむいもち」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場上川支場で「新栄」を母とし「上育161号」(「大国早生」×「福糯」)を父として人工交配を行い、その後交配種子を2年間貯蔵し、1956年(昭31)にF₁を養成し、それ以来選抜固定をつづけ育成したものである。1962年(昭37)に「上系1013」の系統番号をつけ、1963年(昭38)に「上育266号」の系統名をつけて生産力検定試験および特性検定試験を行うと同時に道内各地にも種子を配布して地方適否を確かめた。1965年(昭40)優良品種に決定し、「かむいもち」と命名された。

特性概要 1. 出穂期は「双豊糯」より遅く「ユキモチ」よりは早く、中生の早である。しかし、登熟の早さは「双豊糯」より早いので、成熟期は「双豊糯」と大差なく早生種である。
2. 草型は偏穂数型で、稈長は「ユキモチ」よりは短くやや短程、穂長は「双豊糯」より短い。
3. 粒着は中で、芒性はやや少ない短芒があり、籾および籾先色は黄色である。
4. 苗の生育および初期分けつは中程度で「双豊糯」よりやや良い。葉の枯上りはやや多い。
5. いもち病耐病性は、葉いもちに対しては「双豊糯」よりやや弱く、穂頸いもちに対しては「双豊糯」程度ないしはやや強く「しおかり」程度の中である。
6. 稈は太く稈質は「双豊糯」程度で「ユキモチ」に優り、耐倒伏性は「双豊糯」程度ないしはやや優り、やや強である。
7. 耐冷性は、障害型に対しては「双豊糯」および「ユキモチ」より強く、やや強ないし強である。遅延型に対しては「双豊糯」程度ないしやや弱く「ユキモチ」よりやや強く、中程度である。
8. 収量は、普通年においては「双豊糯」および「ユキモチ」とほぼ同程度であるが、耐冷性、耐倒伏性などから、場所および年次間の安定性は比較的高い。
9. 玄米は、形状中で「双豊糯」よりやや円形である。大きさは「双豊糯」より僅かに大きく中、光沢および縦溝の深さは「ユキモチ」と大差ない。梗粒の混入は「双豊糯」および「ユキモチ」よりも少なく、極めて少ない。品質は「双豊糯」および「ユキモチ」と同程度ないしやや優る。食味は「双豊糯」より優り「ユキモチ」並みと思われる。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1 穂 穂数	玄米重	稈重	1 粒 重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
上川農試	直播	8. 10	9. 30	139	69	14.2	36.0	423	524	828	18.8	78.2	1964
	冷床	8. 2	9. 18	148	74	15.5	25.0	470	509	835	19.9	78.4	1963~ 1964
原原種農場	冷床	8. 7	9. 29	157	74	15.2	23.0	486	519	798	21.6	81.8	"
中央農試	冷床	8. 7	10. 2	167	64	15.7	21.2	450	—	807	21.0	82.2	"
北海道農試	冷床	8. 8	9. 26	156	72	13.6	17.5	420	571	—	19.4	81.6	"

北海道立農業試験場資料 第 9 号 訂正表

頁・行	誤	正	頁・行	誤	正
目次・菜豆(9)	(中育D-7号)	(十育D-7号)	140・上-3,7,8,9	ファイヤボール	ファイアボール
27・表下-1	成苗, 中苗	成苗(沖植土)	"・下-2,8	"	"
		中苗(沖植土)	141・上-1,4,5	"	"
29・上-22	ないしやや弱...	中ないしやや弱...	"・下表右-5	13,273	9,330
31・上-14	～の晩生～	～の晩～	142・上表右-5	11,874	10,860
33・表左-2	苗代様式・冷床	(トル)	下表右-4	457.7	4,577
"・下-1	人工支配	人工交配	" "	673.9	6,739
34・表左-2	空 欄	栽培法	144・下-21	品種属に～	品種群に～
"	"	標準播	151・上-10	～の(そぞ透ゆり)	～の(えぞ透ゆり)
"	"	標準播	158・上-16	道地・～	道央・～
35・上-3	穂密度は～	着粒密度は～	159・上-8	原名から「マンモス」と命名した。	(トル)
"・"-8	雲紋病	雲形病	"・表上-1	草丈伸長率	草丈伸長量
"・"-14	12kg前後	12kg/10a 前後	164・下-1	チモシー農林合	チモシー農林合
"・表左-2	空 欄	栽培法	172・表左-4	空 欄	1971 (1951)
37・上-16	やや大粒	大粒	173・表左-1	"	穂数型
38・上-24	(欠)(カチミノリ)	(1966年(昭41)廃止)	174・表左-2	北育103号	空育103号
39・表上-1	冬損歩合 100%	0%	"	空育64号	北育64号
41・表下-2	冬損歩合 91%	9%	177・表左-1	空 欄	直立
49・上3	(欠)(交8号)	(1979年(昭54)廃止)	"	"	直立
58・下-1	(欠)(ホワイトワキシー)	(1975年(昭50)廃止)	180・表右2	"	「十勝長葉」×「大谷地2号」
"・表右-2	g	kg	"	"	「十勝長葉」×「大谷地2号」
61・上-1	～優良品質に～	～優良品種に～	185・表左1	"	帯微紅の白
"・表下-2	127	131	左2	"	淡緑
64・表下-2	117	123	左3	"	淡黄白
73・下表下-6	本	節	左4	"	硬
76・上-11	「斑小粒系-1」	「斑小粒系-1」	左5	"	や長球形
77・表左-6	個	本	左6	"	大
81・上-4	～に患られない	～に患まらない	左7	"	白地に臍部の周り
"・下-14	子種の～	子実の～			淡肉色地に赤褐色
83・表右-5	個分	個			の斑紋
86・下-1	まん性	つる性	左8	"	胆振地方を中心とした道央部
97・下-11	偏球形とあり	偏球形であり			
113・下-9	施光度	旋光度	192・表左-2	りんご農林1号	東北7号
115・上-5	「あまなみ」	「あやなみ」	207・表左-2	その他	その他
117・下-6	「あかむらさき」	「おかむらさき」		北土道輪第5号	北海道輪第5号
133・下-20	1974年(昭49)	1975年(昭50)	208・表左-6	日高種牧	(トル)
136・上-6	ファイヤボール	ファイアボール	"・"	カナダ	カナダ
"・表左-2	(欠)	cm	"右-2	雲形病	雲形病
"左-3	(欠)	cm	"右-1	全送	全道
137・上表上-1	(10a当り)	(a当り)	"右-1	オーチャードグラ	道東地域
"・下表上-1	(10a当り)	(a当り)	下-5	ス安定地帯	
138・上表上-1	(10a当り)	(a当り)	209・表右-3	合成品種法	合成品種法
"・"	腐敗果率	空洞果率	211・"左-2	空 欄	Milka Pajberg
"・下表上-1	(10a当り)	(a当り)	212・"右-3	"	デンマーク
139・上表上-1	(10a当り)	(a当り)	"右-2	"	デンマークから
"	腐敗果率	空洞果率			導入

栽培適地と奨励態度 「双豊糯」を栽培している地帯のうち、上川支庁管内の中北部、留萌支庁管内および空知支庁管内の北部に適している。なお、諸特性からみて「かむいもち」は普通肥栽培に適している。

(31) 工藤糯

来歴 「工藤糯」は、亀田郡大野町在住の工藤慶作氏が1954年（昭29）に「南糯」を母とし「多福糯」（府県産品種）を父として交配選抜を続けて、「工藤糯」という品種名のもとに附近農家に作付けされていたものである。1963年（昭38）から北海道立農業試験場渡島支場で原種を譲りうけ、系統育成と同時に生産力検定試験ならびに特性検定試験をおこなうとともに地方適否を知るため現地試験をおこない、1965年（昭40）優良品種に決定した。

特性概要 1. 稈長は中位で剛く、茎数は少く穂重型に属する。穂長は「南糯」よりやや短いが長の部に属し、粒着はやや密、無芒で稈ならびに稈先色は黄白である。

2. 玄米の性状 形状は中位で、粒大はやや小粒、色沢は良好である。

3. 熟期 出穂は「南糯」よりやや遅いが登熟日数が短いので成熟期はほとんど変わらず、中生の晩生である。

4. 障害抵抗性 いもち病には罹病するが「南糯」に比較すると断然強くやや強に属する。

耐病性は障害、遅延型ともにやや弱、耐倒伏性は普通肥栽培では「南糯」より断然強いが、多肥栽培では倒伏するためやや弱と判定される。

5. 収量性 極多収性で梗の「新栄」なみの収量を示す。

栽培適地と奨励態度 「南糯」の栽培可能な、渡島、松山南部、胆振沿岸地帯に限る。

殆んどの特性が「南糯」と同程度かそれ以上なのでこれにおきかえ栽培するが倒伏抵抗性が特に強くはないので多肥栽培はさけるべきである。

試験場名	苗代 様式	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		玄 米		収 歩 合 %	試 年 次
					稈長 cm	穂長 cm	1 株 穂数 本	玄米重 kg	稈重 kg	1 0 重 g	1,000 粒 重 g		
道南農試	冷床	8. 10	9. 28	159	79	17. 8	15. 1	447	502	818	20. 5	78. 7	1963～ 1964

(32) おんねもち（北育糯47号）

来歴 「おんねもち」は、北海道立農業試験場上川支場において、1961年（昭36）「北海182号」を母とし糯系統「上育230号」を父として人工交配を行い、翌年の冬期、温室にてF₂を養成、1963年（昭38）には冷水田で集団選抜を行い、翌年、北海道立北見農業試験場でF₄集団の一部を譲りうけ、糯、良質、耐冷を目標に個体選抜を行い、以来選抜固定をはかって来たものである。1966年（昭41）に「北系4129」の系統番号をつけ、生産力検定、特性検定試験に供試した。1967年（昭42）「北育糯47号」の系統名をつけ道内関係機関に配布、翌年より関係現地試験にも供試して地方適否を検討し、1970年（昭45）優良品種に決定し、「おんねもち」と命名された。

特性概要 1. 稈長は、「はやもち」「双豊糯」より短かく短稈に属する。穂数は、「はやもち」よ

り多く「双豊稲」と同程度で穂数型に属す。穂は「はやもち」と同程度であるが「双豊稲」より短かく中穂、粒着は中位である。芒性は、やや少の短で、稃先色は黄白である。草姿は直立型で良好である。

2. 出穂期は、「はやもち」より1日遅く「双豊稲」と同程度で北見地方では、中生の晩。成熟期は、「はやもち」よりも2～3日遅いが「双豊稲」よりは3～5日程早く、登熟は比較的良い方で、熟期では、中生の中に属する。

3. 耐冷性は、障害型に対しては、両稲品種よりも強く「しおかり」程度のやや強である。

4. いもち病耐病性は、葉いもちに対しては「はやもち」と同程度のやや弱、穂いもちに対しては両稲品種に比べて弱く、弱である。

5. 耐倒伏性は、「しおかり」程度のやや強である。

6. 玄米性状については、形状は「はやもち」よりは長粒で「双豊稲」並の中。粒大は「双豊稲」程度の中。両稲品種に比べ白度は高く、糯としての品質（粘り、こしの強さ、光沢など）も良く、総合的にみて、品質は両稲品種よりも優れており、中上の上である。

7. 収量性については、障害型冷害年では「はやもち」より多収、遅延型冷害年には「はやもち」と同程度で「双豊稲」よりは優れている。良好年では、両稲品種と同程度かやや多収を示す。また「双豊稲」に比べて、地域的にも年次的にも変動が少なく安定している。

栽培適地と奨励態度 網走支庁、十勝支庁、上川支庁北部および留萌支庁北部の各管内で、「はやもち」「双豊稲」が作付けされている地帯に適應する。

栽培上の注意としては、いもち病に対する抵抗性が弱いので、各地帯の防除基準に基づき、完全防除が必要であり、多肥栽培はさけること。植え込みなどによって穂揃性が悪くなる傾向がみられるので、健苗育成により、また栽植株数および1株苗立数は、各地帯の基準を確保するなどして、この傾向を補う必要がある。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		玄 米		穂揃 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1 粒 重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	冷床	8. 3	(9.24)	(155)	62	15.6	23.3	503	—	827	19.4	78.7	1967～ 1969
十勝農試	冷床	8. 2	9.22	151	63	16.8	22.9	440	424	813	20.3	80.9	〃
上川農試	冷床	8. 1	9.18	150	67	16.2	23.3	524	474	800	19.6	79.8	〃
原原種農場	冷床	7.31	9.17	146	62	15.8	22.1	537	403	820	20.9	81.3	1968～ 1969

注) 北見の1969年は成熟期に達せず除く。

(注) 各品種の熟期は出穂期と成熟期について、育成場を中心としたその地方ごとに、対象品種と比較した早晩性が記載されているが、この差は栽培地域や環境条件によって多少の変動がつきまとうため、厳密には全道一本で表示するよりも正確である。一方全道的に全品種の早晩性を把握する必要もあるので、現在の奨励品種について出穂の早晩を示すとおおむね次のようである。

極早生 きよかぜ

早生の早 はやこがね

早生の晩 きたこがね、なるかぜ、かちほなみ、イシカリ*、おんねもち。

中生の早 しおかり*、うりゅう、ともゆたか、ゆうなみ、かむいもち。

中生の中 ほうりゅう、そらち、キタヒカリ。

中生の晩 さちほ

晩生の早 ユーカラ

晩生の中 マツマエ

晩生の晩 巴まさり

・は上川農試の分類によるが、中央農試ではともに中生の早に属す。いずれにせよ両品種の差は0～2日である。

2. 陸 稻

(1) 北海早生1号（北海早生純1号）

来歴 「北海早生1号」は、1953年（昭28）北海道立農業試験場十勝支場で在来の「北海早生」から個体選抜を行い、以後系統選抜を続け1956年（昭31）に「3105」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、1958年（昭33）に「北海早生純1号」の系統名をつけ生産力検定試験および特性検定試験に供試するとともに、十勝管内で現地委託試験にも供試して地方的適否を確かめ、1961年（昭36）に優良品種に決定し、「北海早生1号」と命名された。

特性概要 1. 出穂期、成熟期ともに「北海早生」より2～3日早い。

2. 草型は「北海早生」に類似するが、稈長および穂長は若干短い。

3. いもち病抵抗性は「北海早生」と同程度である。

4. 冷水抵抗性は遅延型、障害型ともに「北海早生」に比し強い。

5. 収量は平年においては「北海早生」にやや優る程度であるが、冷害年にはかなり優り確収性が高い。

6. 玄米の形状および品質は「北海早生」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 在来の「北海早生」に比し早熟で耐冷性が強い点以外は、とくに相違はないので、十勝、網走両支庁管内および本道中南部の各地で「北海早生」に換えて奨励する。

試験場名	苗代 様式	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		玄 米		穂摺 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1株 穂数	玄米重	稈重	1 ℓ 重	1,000 粒 重		
		月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
十勝支場	冷床	8. 15	9. 27	139	64	18. 2	389	181	248	802	20. 3	78. 5	1957～ 1960
上川支場	冷床	8. 3	9. 12	124	76	18. 6	390	221	256	823	19. 9	82. 6	1959～ 1960
北見支場	冷床	8. 23	9. 26	138	56	18. 2	324	113	200	776	20. 4	80. 7	1960

3. 大 麦

(1) ほしまさり（訓系16号）

来歴 「ほしまさり」は、1962年（昭37）北海道立農業試験場北見支場において「春星」を母とし、「女系8号」を父として人工支配を行い、F₁は温室で養成し、F₂までは集団養成、F₄で個

体選抜を行い、F₆～F₇は派生系統で比較し、F₈からは系統の育成を行い固定をはかった。なおF₁は温室で、F₃、F₅、F₇は鹿児島県で秋播栽培し、世代の促進を図った。1966年(昭41)に「65 B-40」の系統番号で生産力検定や予備試験に供し、1967年(昭42)からは「訓系16号」の系統名で生産力検定試験、特性検定試験を行い、同時に現地試験にも供して地方適否を確かめ、1970年(昭45)産の原料で醸造適性を検討した。その結果、1972年(昭47)に優良品種に決定し「ほしまさり」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂 成熟期は「春星」より2～3日早く中生種に属する。
 2. 稈長は「春星」より5～10cm短い、やや長稈種である。
 3. 穂は二条矢羽根型で、成熟期における下垂度は中程度で「春星」より垂れ難い。粒着密度はやや密で、1穂粒数は「春星」よりやや多い。
 4. 穂数は「春星」並であるが、稈はやや細く、やや剛い。
 5. 耐倒伏性は「春星」より明らかに強いもののその強度は十分なものではなく、やや弱の部に属する。
 6. 子実は大粒で、整粒歩合が5～10%高く、千粒重もやや大きい。
 7. 収量性は明らかに高い。
 8. 粒の粗蛋白含量は「春星」に比べ0.5～1.0%低く、麦芽エキスの収量も高く、酵素力も優れ、醸造適性は良好である。

栽培適地と奨励態度 「ほしまさり」は、道内で二条大麦を栽培している全地域に適し、「春星」におきかえられる。

本品種は「春星」に比べると耐倒伏性は強いが、十分なものではなく多肥では倒伏の危険があり、また粗蛋白含量の増加もみられ、品質の低下を招くので、多窒素栽培は避けなければならない。

試験場名		出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1ℓ重	1,000 粒重	整粒 歩合	試 験 年 次
					稈長	穂長	1穂当 り穂数	子実重	稈重				
北見農試	標準播	7. 2	8. 4	98	100	6. 9	377	31. 4	453	636	45. 4	80. 2	1967～ 1971
	多条播	7. 1	8. 2	96	101	6. 4	559	38. 2	567	636	42. 4	74. 5	1967～ 1971
中央農試		7. 2	8. 2	—	96	6. 6	321	26. 9	—	—	48. 2	67. 5	1968～ 1971
原原種農場		7. 2	8. 1	92	92	7. 2	313	27. 0	244	650	46. 8	—	1969～ 1971

4. 裸 麦

(1) マリモハダカ (北海春裸13号)

来歴 「マリモハダカ」は、1954年(昭29)北海道立農業試験場北見支場(旧大麦育種指定試験地)において「サナダ麦」を母とし、「北統3号」を父として交配を行い、F₂では穂型、反稈性について集団選抜し、F₃で個体選抜、それ以降選抜固定を図った。1959年(昭34)に「34 N54」の系統番号で生産力検定予備試験に組入、さらに1960年(昭35)には「北海春裸13号」の系統名で生産力検定試験に組入するとともに、各種特性検定試験ならびに地域適応性検定試

験を行った。その結果、1966年（昭41）に優良品種に決定し「マリモハダカ」と命名された。

特性概要 1. 稈長は1m位で、高い方である。

2. 穂型は4角、穂密度は疎、芒は長く多い。稈色、芒色ともに黄色である。

3. 熟期はやや晩生で「北見裸」に比べて4～5日遅い。

4. 耐倒伏性は、「北見裸」「丸実16号」「根室裸」よりきわめて強い。

5. 脱粒は比較的容易で、粒色は飴色、粒型は中、品質は良好で、精麦歩留も「北見裸」「丸実16号」「根室裸」より高い。

6. 耐病性は、小錆病、うどんこ病にやや強く、雲紋病にはきわめて強い。

7. 収量性は栽培条件（多肥栽培、多条播栽培）を変えても「北見裸」より多収で、多条播栽培において最も多収性を示す。

栽培適地と奨励態度 網走支庁、上川支庁の両管内に適し、「北見裸」「丸実16号」におきかえられる。

この品種は晩播で減収するので、できるだけ早くまくこと。また多肥栽培、多条播栽培に適しているので、畦巾30cm以下とし播種量は12kg前後とする。

試験場名		出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10a当り		1t重 kg	1,000 粒重 g	試験年次
					稈長 cm	穂長 cm	1穂当り 粒数	子実重 kg	稈重 kg			
北見農試	標準播	7. 6	8. 4	98	100	8. 5	229	252	403	708	27. 8	1959～1965
	多肥	7. 5	8. 6	100	102	8. 6	313	264	420	720	27. 9	1961～1965
	多条播	7. 3	8. 4	98	100	6. 9	435	273	484	726	26. 9	〃
上川農試	標準播	7. 4	8. 1	—	101	8. 7	276	251	269	715	29. 8	1963～1965
	多条播	7. 4	7. 31	—	96	7. 0	378	291	323	734	28. 6	〃

5. 小 麦

〈春播小麦〉

(1) ハルヒカリ（北見春2号）

来歴 「ハルヒカリ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場北見支場において、「（「Mida」×「Pilot」）を母とし、「春播小麦農林75号」を父として人工交配を行い、以後系統育種法によって選抜固定をはかった。1956年（昭31）「3104」の系統番号で生産力検定予備試験を行い、1957年（昭32）「北育7号」の系統名で生産力検定試験に導入し関係試験機関に配付した。1961年（昭36）より小麦育種指定試験地がこれを引きつぎ「北見春2号」と改名して奨励品種決定現地調査に供試した。1965年（昭40）優良品種に決定し、春播小麦の硬質品種として品質良好なことから農林省に新品种「ハルヒカリ」（硬質春播小麦農林104号）と命名、登録された。

特性概要 1. 出穂期は「農林29号」「農林75号」にくらべて2～4日遅いが、成熟期の差は0～1日である。

2 幼苗期の草状は直立型で葉色は淡緑である。稈長には差異がなく、穂長、穂数は「農林29号」

程度である。穂型錐状で白稈、長多芒を有する。

3. 稈は太くはないが強じんて株は閉じ、なびくことはあっても、完全に倒伏することは少ない。稈の曲げおよび挫折に対しては比較的抵抗性で、ほぼ「キタミハルコムギ」程度の強稈性を示し、「農林29号」、「農林75号」より強い。

4. 赤さび病、黄さび病、黒さび病のいずれにも強く、感染型は抵抗性病斑を示し、従来のどの品種よりも強い。赤かび病の発生は「農林75号」程度で他の品種より少ない。うどんこ病には中程度の発生を示すが、年により黒稈病 (Black chaff) が発生する。穂発芽性は強いとはいえないが「農林75号」、「農林29号」に比べれば強い。

5. 子実収量は、一般的には「農林29号」、「農林75号」と大差はないが、多肥栽培で多収を示し、多条播に適する。

6. 子実は赤色・硬質・大粒で重く、千粒重とも重く、硝子率が高い。外見品質は「農林75号」、「農林35号」と同程度か、やや良好で「農林29号」、「キタミハルコムギ」よりも検査等級は上位となる。原粒蛋白は「農林75号」程度で「農林35号」より少ない。多条播やNの施用量の少ない場合にはかなり低くなるので注意を要する。原粒灰分は「農林35号」程度、「農林75号」よりやや多く、マニトバ小麦より相当に多い。

7. 灰分移行率高く、製粉歩留、ミリングスコアともに「農林35号」より良く、製粉性はすぐれている。

8. 粉の蛋白、湿麩量は「農林35号」より少なくマニトバ小麦程度かやや多い。沈降価は「農林35号」程度で高く、グルテンの質は良好と判断される。粉色は、他の品種より良好であるが、マニトバ小麦にくらべると劣る。小麦粉の物理性は「農林35号」、「農林75号」よりすぐれ、アミログラムの粘度も相対的に高い。

9. 製パン適性は、「農林35号」よりやや高く「農林75号」よりはるかによい。

栽培適地と奨励態度 硬質小麦としての性格上、綱走、上川両支庁管内に適するが、多肥、多条播に適して良質であるので、全道春播小麦品種のすべて (実質的には「農林29号」) におきかえる。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 ℓ 重	1,000 粒 重	試験年次
				稈長	穂長	1 m ² 当 り穂数	子実重	稈重			
北 見 農 試	7. 2	8. 12	106	106	9.1	306	202	353	760	34.6	1956~1964
十 勝 農 試	6.29	8. 7	102	114	8.6	330	212	295	740	34.7	1957~1961
上 川 農 試	7. 2	8. 3	95	113	9.0	331	238	346	776	37.8	1959~1964

*畦巾50cm。

(2) ハルミノリ (北見春17号)

来歴 「ハルミノリ」は、1955年 (昭30) 北海道立農業試験場北見支場において交配された「硬質小麦農林42号」×「北育1号」の組合せから集団育種法によって育成した。F₂ から F₃ まで集団育種法により集団養成、この間観察によって硬質粒について集団選抜を行った。1961年 (昭36) 同場内の小麦育種指定試験地がこの材料を引きつぎ、1962年 (昭37) F₆ で個体選抜、1963年 (昭

38) 純度調査, 1964年(昭39) F₇ 派生系統を「北系春145」の系統番号で生産力検定予備試験に編入し, これと併行して系統育成を行った。1966年「北見春17号」の系統名をつけて生産力検定試験, 特性検定試験に編入, 1967年(昭42)より奨励品種決定基本調査および現地調査を行った。1969年(昭44)優良品種に決定し, 同年多収な特性を表わす意味で「ハルミノリ」と命名し, 農林省に新品種(小麦農林111号)として登録された。

特性概要 1. 出穂期は「ハルヒカリ」より1～3日早い, 成熟期は同程度, 登熟日数がやや長い。

2. 幼苗期の草状は直立型, 葉色は「ハルヒカリ」より濃緑。稈長は同程度, 穂長は短い, 穂数は多い。

3. 稈径太く, 穂頸よりの第1, 2, 3節間が短い。このため, なびきにくく稈も強く, 耐倒伏性は従来の春播小麦の品種中最も強いが十分ではない。

4. 各種さび病に対しては, 「ハルヒカリ」よりやや弱い。うどんこ病には強く, 年により「ハルヒカリ」に多発する黒稈病(Black chaff)の発生はない。穂発芽性は「ハルヒカリ」程度。

5. 子実収量は, 普通栽培, 多条播, 多肥, 少肥のいずれを問わず多収。「ハルヒカリ」に対し15～20%の増収が期待でき, 年次および場所の安定性が高い。

6. 子実は, 赤粒, 硬質, やや大粒である。重, 千粒重ともに「ハルヒカリ」なみかやや重く, 硝子率は高い。蛋白含量は多く, 灰分は少ない。

7. 製粉性はほぼ「ハルヒカリ」程度で良好。硬質, 高蛋白のわりにひき易く, 皮ばなれもおおむね良好である。

8. 小麦粉の性状は, グルテン含量多く, 沈降価は低い。ファリノグラム特性は, 「農林75号」程度, 「ハルヒカリ」にくらべ, エキステンソグラムの特性は劣るが, アミログラムの粘度は相対に高い。

9. パン適性は, おおむね「ハルヒカリ」に近いが酸化剤による改良効果は低い。全体に「農林75号」程度と考えられる。

栽培適地と奨励態度 春播小麦は元来生育期間短く, 管理作業も簡単であるが, この品種は「ハルヒカリ」より耐倒伏性強く, 黒稈病(Black chaff), Yellow berryの出現が少なく, 硝子率も低下しにくいなど作り易い品種である。

網走, 上川両支庁管内およびこれに準ずる地方に適する。秋播小麦が前作物の制約を受けることと, 収穫期のコンバインの効率的利用(秋まき小麦→ビール麦→春播小麦の順に収穫)等を考慮して, 栽培適性のすぐれた本品種の作付をはかること。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1ℓ重	1,000 粒重	試験年次
				稈長	穂長	1㎡当 り穂数	子実重	稈重			
北見農試	7. 2	8. 12	105	116	8. 4	327	224	445	765	31. 5	1966～1968
上川農試	6. 27	7. 31	96	107	8. 6	318	269	329	758	37. 5	1967～1968

* 畦巾50cm。

＜秋播小麦＞

(3) カチミノリ（十系4号）

来歴 「カチミノリ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場北見支場で（「U-13」×「本系323」）×「本系275号」の組合わせで人工交配を行い、1953年（昭28）雑種第3代系統として北海道立農業試験場十勝支場へ分譲を受けたものについて、系統選抜および固定をはかったものである。1957年（昭32）に「3009」の系統番号で生産力検定予備試験を行い、1958年（昭33）以降は「十系4号」の系統名で生産力検定試験に継続供試するとともに、系統育成ならびに地方委託試験に供試した。1962年（昭37）十勝地方に限定して優良品種に決定し、同地方で多収を示すことから「カチミノリ」と命名された。

- 特性概要 1. 出穂期は「ホクエイ」と同じであるが成熟期は1～2日早い。
 2. 強稈直立で多げつ型である。穂は無芒、褐稃、幼苗の草状はやや匍匐型、葉身は比較的細く、濃緑である。
 3. 耐寒性は強く冬損および大粒菌核病に対しても「ホクエイ」なみの抵抗性を示す。
 4. 稈長は「ホクエイ」と同程度で、穂長は同程度かやや短い、稈は強じんではほとんど倒伏しない。
 5. 黄さび病には強く「ホクエイ」なみであるが赤さび病には「ホクエイ」よりやや弱い。
 6. 穂数は多く多収性で特に多肥密植栽培で増収性を示す。収量は十勝管内では「ホクエイ」に比べて10%内外多い。
 7. 子実は赤粒で粒形および品質は中程度、粒質は粉状質である。小麦粉は蛋白がやや少ないが白色を呈しうどん用にむく。

栽培適地と奨励態度 十勝支庁管内9ヵ町村の平均で「ホクエイ」より10%以上多収を示し、とくに管内の肥沃地帯の栽培に適することが明らかとなった。しかし、他の管内における試験では「ホクエイ」を上廻ることができなかったため、十勝地方に限定して奨励された。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1t 重	1,000 粒 重	試験年次
				稈長	穂長	1000粒当り 穂数	子実重	稈重			
十 勝 支 場	月日 6. 14	月日 7. 24	日 311	cm 98	cm 8.5	本 421	kg 335	kg 480	kg 698	g 37.6	1957～1960

*畦間50cm。

(4) ムカコムギ（北見11号）

来歴 「ムカコムギ」は、1957年（昭32）北海道立農業試験場北見支場において交配された（「Kanred」×「ナンブコムギ」）×「北成9号」の組合わせから、集団育種法により育成し、F₂からF₄まで集団養成、F₅で個体選抜、F₆で純度調査、以後系統育成を続けた。1963年（昭38）から「北系112」の系統番号で生産力検定予備試験、1964年（昭39）には系統適応性検定試験に編入、1965年（昭40）「北見11号」の系統名をつけて関係試験機関に配付、奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した。1968年（昭43）優良品種に決定し、北見国の名峰「武華岳」にちなみ「ムカコムギ」と命名し、農林省に新品種（小麦農林108号）として登録された。

特性概要 1.出穂期 成熟期とも「ホクエイ」程度かやや早い。

2.幼苗期の草状は中間型，葉身やや細く，葉色は濃緑，稈長は「ホクエイ」なみ，穂長はやや長目，穂重やや重く，一穂粒数が多い。穂数は少ない。穂型錐状，褐稃で短頂芒を有し，粒着はやや粗である。

3.株は閉じ直立型，稈は太くはないが比較的強じんて，耐倒伏性は「ホクエイ」なみ。

4.耐寒性はやや強いが耐雪性ないし各種雪ぐされ病に対しては「ホクエイ」程度。赤さび病はやや少ないが黄さび病，黒さび病，うどんこ病，赤かび病は「ホクエイ」なみ，黒目粒の発生は少ない。

5.収量は全道的に「ホクエイ」なみかやや多収，多条播に適し，多肥で増収する。

6.子実の千粒重はやや重い，ℓ重は「ホクエイ」なみ，硝子率高く「ホクエイ」より変異が小さい。赤粒であるが「ホクエイ」より黄色味が少なく，粒形はやや長い。皮ばなれ良く，製粉歩留が高い。

7.小麦粉の性状 蛋白含量および湿麩量は「ホクエイ」よりやや多く，粉色は「ホクエイ」程度，沈降価（SV）高く，麩質は「農林8号」に近く良好と判断される。ファリノグラムおよびエキステンソグラムの特性は強力的な性格を示し，パン適性は「ホクエイ」よりはるかに良く，「農林8号」に匹敵する。しかし，アメリカ産のD.H.W.(Dark Hard Winter)にくらべるとかなり見劣りがする。

8.アミログラムの粘度は若干高いが，変質および穂発芽性はおおむね「ホクエイ」程度と考えられる。

栽培適地と奨励態度 十勝，網走両支庁管内においては，標準栽培でも「ホクエイ」を上回る収量を示し，多条播による増収率も高いので，「ホクエイ」を本品種におき換える。また，上川・石狩・空知支庁管内については，収量的に見れば必ずしも適地帯とはいえないが，「ホクエイ」の品質改善を考えて本品種との交替をはかる。胆振支庁伊達地方の「改良伊達早生」は，低収で麩質も良好ではないが，きわめて早熟，短稈の特性をもち，野菜の前作として作られているので，本品種は極早生地帯の奨励品種とはなり得ない。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 ℓ 重	1,000 粒 重	冬 損 歩 合	試験年次
				稈長	穂長	1 m ² 出 り 穂 数	子実重	稈重				
北 見 農 試	6. 19	8. 6	323	107	9.6	481	411	542	765	38.3	100	1963～1966
十 勝 農 試	6. 15	7. 29	316	96	8.4	363	341	501	764	43.8	—	1964～1966
中 央 農 試	6. 5	7. 24	316	104	9.5	480	375	613	698	39.0	—	1966
原原種農場	6. 11	7. 25	312	91	9.3	218	219	285	751	40.6	27	1965～1966
北海道農試	6. 7	7. 20	308	100	9.9	362	350	446	770	42.5	—	1966

*畦巾50cm。

(5) イービス (IBIS)

来歴 「イービス」は1964年（昭39），ホクレンがオランダの種苗会社 VAN DER HAVE より種子を導入した。VAN DER HAVE の育成経過によれば，1951年（昭26），次の交配がドイツの

Schega で行われた。

「(Chinese 165 × Panzer III) × Heines IV」 × 「(Tentonen × Hindukush 516) × Heines VII」 × Mcrlin.

F₂ 以降オランダの Noord Oost Polder で選抜固定をはかり、1960年(昭35)「H652」の系統番号で公的試験に編入され、1962年(昭37)「IBIS」の品種名で登録されたものである。

北見農試では1964年(昭39)から生産力検定予備試験を行い、1967年(昭42)から生産力検定試験に編入、同時に特性検定試験、栽培法の試験を実施した。1965、1966年(昭40、41)に北海道立中央農業試験場で、1967、1968年(昭42、43)には同十勝農業試験場でもそれぞれ生産力検定試験を行い、現地調査も十勝、網走両支庁管内21ヵ所で行った。また、北見農業試験場とホクレンが共同で行った網走支庁管内の現地委託試験は1965、1966年(昭40、41)3ヵ所、1967、1968(昭42、43)は5ヵ所で実施した。この結果、晩熟性と耐倒伏性の有利性が認められて、1970年(昭45)優良品種に決定し、原名から「イービス」と命名された。

特性概要 1. 出穂期は「ホクエイ」、「ムカコムギ」より7日以上遅く、成熟期も5～9日遅い晩生種である。

2. 幼苗期の草状は匍匐型で、葉は広く、濃緑色である。稈長は「ホクエイ」、「ムカコムギ」より長い、穂長短く、穂数も少ない。穂型は棒状、白稈、無芒で粒着は密である。

3. 株は閉じ直立型で、稈は太く強剛で耐倒伏性は極強である。

4. 耐寒性、耐雪性とも「ホクエイ」より弱い。赤かび病に対する抵抗性は「ホクエイ」なみであるが回避する傾向もある。黒さび病、黄さび病、赤さび病は「ホクエイ」なみ、うどんこ病はやや少なく、黒目粒の発生はほとんどない。

5. 収量は、全般的には「ホクエイ」、「ムカコムギ」を下回る結果であるが、斜網地帯の一部では、多条播で「ホクエイ」より多収を示す。

6. 子実の千粒重は「ホクエイ」より重い、ℓ重はやや軽い。赤粒で硝子率は「ホクエイ」より低く、粒質は中間質から粉状質に近く、硬質結晶粒子は認められない。粒形は「短」に属す。原粒灰分および蛋白含量は「ホクエイ」よりやや高い。

7. 製粉性 「ホクエイ」、「ムカコムギ」より皮ばなれ良く、ミリングスコアおよび灰分移行率高く、製粉性はすぐれている。

8. 小麦粉の性状 蛋白含量および湿麩量は「ホクエイ」より多いが、沈降価(SV)およびファリノグラムのVVは低い。また、エキステンソグラムの特性は軟質的でややだれぎみの傾向を示す。アミログラムの粘度はやや高い。

栽培適地と奨励態度 栽培地域は、網走支庁管内の斜里郡および網走市の南網走と網走郡(美幌、津別を除く)、またはこれに準ずる冬枯れの少ない地帯とする。雨害の危険分散とコンバインおよび乾燥施設の効率的運用をはかるため、現在栽培されている中生種(「ホクエイ」、「ムカ

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1ℓ重	1,000 粒重	冬損 歩合	試験年次
				稈長	穂長	1m ² 当 り穂数	子実重	稈重				
	月日	月日	日	cm	cm	本	kg	kg	g	g	%	
北見農試	6. 29	8. 10	328	107	8. 8	381	369	654	734	37. 8	ビ	1964～1968
十勝農試	6. 25	7. 30	318	101	7. 3	296	301	615	685	37. 7	ビ～少	1967～1968
中央農試	6. 25	8. 7	326	95	9. 6	152	217	601	582	38. 9	やや多 ～甚	1965～1966

*畦巾50cm。

コムギ)」と計画的に配合することとし、根幹品種とはしない。

(6) ホロシリコムギ (北見23号)

来歴 1962年(昭37)、北海道立農業試験場北見支場小麦育種指定試験地において、「北系8」を母とし、「北海240号」を父として人工交配を行い、系統育種法によって選抜固定をはかった。1966年(昭41)、F₃で小規模の生産力調査を行い、F₆で「北系345」として生産力検定予備試験に編入、同時に系統適応性検定試験および特性検定試験に供試した。1969年(昭44)にF₆で「北見23号」の系統名をつけて生産力検定試験に編入、同時に奨励品種決定基本調査ならびに現地調査に供試した。

1974年(昭49)優良品種に決定し、日高山系の高峰「ホロシリ岳」にちなんで「ホロシリコムギ」と命名し、農林省に新品種(小麦農林114号)として登録された。

特性概要 1.出穂期は「ムカコムギ」より1～2日遅いが、茎葉の枯上がりがよく、成熟期は2～3日早い。

2.幼苗期の草状は直立型で、葉身広く、葉色は鮮緑色である。「ムカコムギ」にくらべて約10cm短秆で、一穂粒重は重いが穂数は少ない。穂型棒状、白籽、無芒、粒着は密である。

3.株は閉じ直立型、秆は太く強剛で、耐倒伏性は「ムカコムギ」、「ホクエイ」よりはるかに強い。

4.耐寒性はやや強で、各種雪ぐされ病も「ムカコムギ」、「ホクエイ」程度の発生を示す。赤さび病、黄さび病、黒さび病、うどんこ病、赤かび病の発生も「ムカコムギ」なみであるが、黒目粒は「ムカコムギ」より少ない。

5.子実収量は「ムカコムギ」および「ホクエイ」より多収で、多肥栽培での増収率が高い。多肥密植向きで散播に適する。しかし、少肥、瘠地、晩播での比較品種に対する増収率は低い。また総重、秆重ともに多収で、子実重歩合が高い。

6.子実は赤粒で、硝子率は「ムカコムギ」より低いが、硬質結晶粒子は「ホクエイ」より多く、粉質は中間質である。千粒重は重いが、ℓ重はやや軽く、光沢の劣る場合もあって、外見品質は「ムカコムギ」より劣り、「ホクエイ」なみである。

7.原粒の灰分はやや高いが、蛋白は「ムカコムギ」なみで、「ホクエイ」より高い。一般に製粉性は「ムカコムギ」より劣り、「ホクエイ」なみであるが、「ムカコムギ」の倒伏頻度の高い多肥栽培では「ムカコムギ」より向上する。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10a 当り		1ℓ重	1,000 粒重	冬損 歩合	試験年次
				桿長	穂長	1穂当り 粒数	子実重	秆重				
北見農試	6.15	7.26	315	95	8.5	442	50.1	79.9	750	38.8	5	1969～1972
十勝農試	6.14	7.22	310	93	7.6	367	31.1	52.6	741	40.1	1	1970～1972
中央農試	6.12	7.23	310	98	8.3	457	40.6	72.3	745	42.7	—	"
原原種農場	6.12	7.20	312	87	7.8	337	25.5	34.4	762	40.7	91	"
上川農試	6.15	7.22	309	82	8.6	285	26.1	51.2	755	43.4	—	"

*畦巾30cm。

8.小麦粉の性状 粉の灰分は、ほぼ「ムカコムギ」程度である。粉の蛋白はやや高く、グルテンも多いが、沈降価(SV)は低い。粉の吸水率は「ムカコムギ」、「ホクエイ」より高い。ファリノグラム特性は「ムカコムギ」と「ホクエイ」の中間であるが、エキステンソグラム特性は中力的な傾向を示す。アミログラムの最高粘度は顕著に高く、晩刈りによる粘度の低下も少ない。

栽培適地と奨励態度 「ホロシリコムギ」は道南の極早生地帯を除き、ほぼ全道一円に適する。とくに肥沃地の多肥、密播栽培に適するので、主要麦作地帯の道東部および上川管内の基幹品種として奨励する。

(7) タクネコムギ (北見30号)

来歴 「タクネコムギ」は、1965年(昭40)北海道立北見農業試験場において、「東北118号」を母とし「北系221」を父として人工交配を行い、以後同場で系統育種法によって育成した。1969年(昭44)、「北系494」の系統番号で生産力検定予備試験、特性検定試験に編入、1970年(昭45)「北見30号」の系統名をつけ、生産力検定試験に編入するとともに系統適応性検定試験、奨励品種決定調査に供試、全道各地の適否を検定した。1974年(昭49)本品種の早生、短稈、耐倒伏性などにより優良品種に決定、短稈を意味するアイヌ語をとって「タクネコムギ」と命名し、農林省に新品種(小麦農林115号)として登録された。

特性概要 1.「タクネコムギ」は春先の起生が早く、初期生育は旺盛で、出穂期は「ムカコムギ」より6日、成熟期で7～10日早い早生品種である。伊達市における成績では「改良伊達早生」より、出穂期、成熟期とも1日遅れる。

2.幼苗期の草状は中間型で、葉身は細く、葉色は濃緑色である。稈長は「ムカコムギ」より15cm短い、伊達市での「改良伊達早生」より5cm程度長い。穂長は「改良伊達早生」より長い、「ムカコムギ」より短い。穂数は多目であるが一穂粒数は少ない。穂型錐状、無芒稈、粒着は「ムカコムギ」よりやや密である。

3.成熟期の茎はやや開き、太くはないが、短稈であるため、耐倒伏性は「ムカコムギ」、「ホクエイ」より強い。

4.耐寒性はやや強で、「ムカコムギ」なみであるが、道南の極早生地帯の限定品種「改良伊達早生」より明らかに強い。赤さび病、黒さび病、うどんこ病および赤かび病の発生は、「ムカコムギ」なみであるが、早生のため初発生は早い。黒目粒は刈遅れした場合にやや多い傾向となるが「ホクエイ」より少ない。

5.収量は「改良伊達早生」より多収である。また胆振地方および道央では、標準栽培でも「ムカコムギ」なみの収量であるが、十勝、網走地方の収量は高くない。しかし、北見農業試験場における生産力検定試験の平均収量は10a当り400kgで対「ムカコムギ」比は96%である。また多肥、密植栽培することにより「ムカコムギ」の標準栽培なみの収量は期待できる。

6.子実は赤粒で、硝子率高く、「ムカコムギ」なみの大粒である。千粒重および1重は重く、粒は豊満で外観品質は良好である。

7.原粒および小麦粉の粗蛋白含量は「ムカコムギ」より高いが、灰分も多い。一般に製粉性は「ムカコムギ」よりやや劣るが、「改良伊達早生」よりは高い。粉は「ムカコムギ」より高蛋白でグルテンも多いが、沈降価(SV)は低い。ファリノグラム特性は、吸水率高く、V.Vも「ム

カコムギ」なみで「改良伊達早生」より高いがエキステンソグラム特性は“力”が弱く、粉質は中力的である。アミログラムの最高粘度は顕著に高く、遅刈りした場合の発芽粒割合も少ない。

栽培適地および奨励態度 「改良伊達早生」に代る早生品種として全道一円に栽培可能であるが、とくに収量性からみると、道央以南に適する。十勝、網走支庁管内の主要麦作地帯においては、熟期巾の拡大をはかるため、中生品種との配合作付が望まれる。

試験場名	出穂期 月日	成熟期 月日	生育 日数 日	成熟期における			10 a 当り		1 t 重 kg	1,000 粒 重 g	冬損 歩合 %	試験年次
				稈長 cm	穂長 cm	1 m ² 穂数 本	子実重 kg	稈重 kg				
北見農試	6. 8	7. 18	307	89	7. 5	513	44. 9	67. 5	792	38. 8	9	1970～1972
十勝農試	6. 5	7. 13	301	86	7. 0	447	24. 2	54. 3	756	36. 5	1	1971～1972
中央農試	6. 3	7. 14	300	99	7. 6	653	44. 8	75. 8	782	41. 2	—	”
原原種農場	6. 4	7. 15	306	83	7. 5	420	22. 9	41. 4	771	36. 2	11	”
上川農試	6. 8	7. 14	298	80	7. 5	329	27. 1	44. 6	776	41. 5	—	”

* 畦巾30cm。

6. えん麦

(1) オホーツク（北海1号）

来歴 「オホーツク」は、1956年（昭31）北海道農業試験場で「ホナミ」を母とし「前進」を父として人工交配を行い、以後、系統育種法により選抜固定をはかった。1961年（昭36）より育成系統生産力予備試験に編入し、成績良好であったため1962年（昭37）より生産力検定試験を行い、1964年（昭39）より「えん麦北海1号」の系統名をつけ、道内試験機関および現地で地域適応性を検討した。その結果、1966年（昭41）優良品種に決定し、農林省に新品種「オホーツク」（春播えん麦農林3号）と命名、登録された。

特性概要 1. 稈長は「前進」に比べてやや長く、穂長は同等、穂数はやや少ない。

2. 芒はやや長く、稈色は淡黄白色で、「前進」に比べ重はやや上回っているが、千粒重は軽く稈率は約3%程度低い。

3. 出穂期は育成地で「前進」より2日、成熟期は3日遅い。

4. 収量は、育成地では「前進」に比べて5%程度下回るが、天北、根釧、北見ではやや上回る。

5. 耐倒伏性はとくにすぐれ、明らかに「前進」「ホナミ」を上回る。

6. 飼料価値は「前進」と同等である。

7. 冠さび病抵抗性はとくに強くない。

栽培適地と奨励態度 「オホーツク」の耐倒伏性は、これまで最も強稈品種とみなされている「黒災1号」を上回る高水準のもので、道内各地の試験結果によると、とくに宗谷、留萌、根釧の各地方で高い適応性を示した。「オホーツク」は倒伏多発のこれら地方に最も好適するものと思われる。さらに、上記以外の倒伏頻発の地域、十勝沿岸、網走北部、上川北部、空知南部の各地方でも栽培の安定向上のため本品種の選択が奨められる。

なお、多収穫を望む場合多条播栽培を行った方がよい。また冠さび病多発地帯は避けた方がよい。

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 ℓ 重	1,000 粒 重	収率	試験年次
				稈長	穂長	1 m ² 当 り穂数	子実重	稈重				
北 農 試	7. 9	8. 14	104	102	24	198	316	340	470	41.7	29.5	1962～1965
天北農試 天垣支場	7. 18	8. 26	120	130	24	181	355	—	441	30.1	—	1964～1965
上川農試	7. 15	8. 16	101	121	23	206	455	—	452	33.6	—	"
根釧農試	8. 7	9. 10	114	114	21	194	216	—	427	33.3	—	"
十勝農試	7. 12	8. 17	115	115	23	174	276	—	456	35.6	—	"
北見農試	7. 20	8. 31	117	123	26	225	332	—	554	35.8	—	"
原原種農場	7. 9	8. 19	112	116	25	217	434	—	451	33.4	27.3	"

(2) モイワ（北海7号）

来歴 「モイワ」は、1964年（昭36）北海道農業試験場で（「S84」×「Milford」）を母とし、「前進」を父として人工交配を行い、以来、系統育種法により選抜固定をはかった。1966年（昭41）より生産力検定予備試験に編入し、1969年（昭44）より生産力検定試験を行い、1970年（昭45）より、「えん麦北海7号」の系統名をつけて道内各地で試験した結果、1973年（昭48）優良品種に決定し、農林省に新品種「モイワ」（えん麦農林4号）と命名、登録された。

- 特性概要 1. 稈長は「前進」並みで、穂長は3 cm 短く、主稈小穂数はやや少ないが穂数は多く、かなり多げつ性である。
2. 収色は淡黄白色、無芒で千粒重は「前進」よりやや軽いが、ℓ重は上回る。収率は「前進」より7%低く良質である。
3. 出穂期 成熟期は「前進」より2日早く、「オホーツク」に比べると8日早生である。
4. 収量は、「前進」に比較して北海道農業試験場で12%多収で、上川農業試験場が「前進」並であったほかは各試験機関で7～19%の多収を示している。
5. 栽培条件（多肥、少肥、遅まき、多条まき）を変えた場合も、「前進」に比べていずれも上回

試験場名	出穂期	成熟期	生育 日数	成熟期における			10 a 当り		1 ℓ 重	1,000 粒 重	収率	試験年次
				稈長	穂長	1 m ² 当 り穂数	子実重	稈重				
北 農 試	7. 9	8. 12	108	117	24	272	445	495	468	36.0	27.0	1969～1972
上川農試	7. 9	8. 7	94	109	23	231	392	(491)	461	31.9	—	1970～1972
十勝農試	7. 4	8. 8	102	114	21	199	288	(406)	485	35.0	—	"
北見農試	7. 6	8. 17	109	107	22	345	353	475	503	32.7	—	"
中央農試	7. 13	8. 15	106	104	23	197	341	462	462	35.7	—	"
原原種農場	7. 8	8. 10	103	107	25	241	376	(498)	484	31.8	—	"

稈重：上川、十勝農試は1970、1972年の2ヵ年；原原種農場は1970、71年の2ヵ年平均。

るが、とくに少肥条件での減収は「前進」より少ない。

6. 耐倒伏性は「オホーツク」に比べると、いくぶん劣るが、「前進」に比べて明らかにまさる。

7. 冠さび病に対する罹病程度は「前進」並みで、とくに強くない。

栽培適地と奨励態度 道内各地の試験結果、多くの場所で「前進」を上回る多収性を示し、しかも「前進」に比べて、熟期が早い、穂数が多く倒伏しにくい、浮率が低く外観品質も良好であるなどのすぐれた点が認められるので、全道で「前進」におきかえて栽培する。ただ冠さび病には強くないので、さび病の多発地方では避けた方がよい。

耐倒伏性は「前進」を上回ってはいるが、倒伏防止のため施肥量の増加は避けた方がよい。

7. とうもろこし

〈飼料用〉

(1) ジャイアンツ（本交3304）

来歴 「ジャイアンツ」は、1951年（昭26）に米国より導入した細胞質雄性不稔系統「WF9^{-T}」を利用した単交配と、1955年（昭30）に青森県立農業試験場より分譲を受けた青森県在来の「エローデント」との間の一代雑種である。

1956年（昭31）に（単交配×品種）の組合せが行われ、1957年（昭32）より生産力検定試験を開始し、1959年（昭34）以降、系統適応性検定試験および各場の原種決定試験に、1960年（昭35）以降は原種決定現地試験に供試した。1962年（昭37）優良品種に決定し、「ジャイアンツ」と命名された。

組合せ内容および構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

（「WF9^{-T}」×「W22」）MS×「青森在来エローデント」「WF9^{-T}」：ウイスコンシン農試においてTexas型細胞質雄性不稔個体と「Indiana WF9」の戻し交配により育成。

「W22」：ウイスコンシン農試において、「2nd Cycle Ill. B 10」×「W25」より育成。

特性概要 1. 熟期は「青森エローデント」より、約5日早く、「複交3号」より約5日おそい。

2. 総生草重は、府県産「エローデント」に比して5～10%低く、「複交3号」よりは50～80%多収である。

3. 子実重は、「府県産エローデント」に比して20～50%増収し、「複交3号」よりはやや劣る。年次による生産量の変動は少なく安定している。

4. 雌穂は円筒型で太く長い。粒列は12～22行、1列粒数は約40粒である。粒は黄色のデント種で、「エローデント」に比しやや小さい。

5. 草丈、着穂高ともに「エローデント」より低く、倒伏には強い。

6. 栄養収量の試算値によると、飼料単位、可消化蛋白質ともに「エローデント」に比して約20%増収し、年次間の変動も少ない。ただし、道東、道北地域では熟度の関係でむしろ「複交3号」「複交8号」などに劣る場合もある。

7. 細胞質雄性不稔系統、およびその回復因子を利用しているので採種の場合に除雄操作を必要としないため種子価格の低減をはかることができる。

8. 熟期の点から本道よりは府県の暖地で採種することが望ましい。

栽培適地および奨励態度 サイレージ用として、北海道中央部以南、および道東、道北地域の栽培環境のよい地帯における「府県産エローデント」の栽培地帯に奨励する。

試験場名	抽 出 期		収穫期	収穫期 における 熟度	生育 日数	桿 長	着穂高	10a 当 り			試験年次
	雄 穂	絹 糸						生穂重	子実重	飼料 単位	
道立農試 (種芸部)	8. 10	8. 16	10. 6	黄 終	146	241	113	3,915	428	753	1957～1961
渡島支場	8. 3	8. 10	9. 20	黄	125	244	126	4,653	424	760	1959～1961
上川支場	8. 3	8. 11	9. 30	乳 終	136	261	127	5,615	553	904	"
十勝支場	8. 13	8. 16	9. 23	糊	139	—	144	5,011	429	620	"
北見支場	8. 16	8. 23	—	乳	—	267	130	5,678	410	—	"
天北支場	8. 10	8. 20	9. 29	乳 終	137	229	101	5,349	404	682	"
原原種農場	8. 15	8. 18	10. 2	糊	136	201	90	4,050	349	601	"

(2) 交 6 号 (月交431号)

来歴 「交6号」は、北海道農業試験場(畜産部)において、米国の市販一代雑種の2nd Cycle によって育成されたデント自殖系統間単交配と、日本在来種より育成したフリント自殖系統間単交配を父とした複交配一代雑種である。1956年(昭31)より生産力検定試験に供試し、1960年(昭35)より北海道立農業試験場の各支場で適応性を検定した。1962年(昭37)に優良品種に決定し農林省に新品種「交6号」(とうもろこし農林複交9号)と命名、登録された。組合せ内容および自殖系統の来歴は次のとおりである。

(「D403」×「D405」)(「T102」×「T107」)

「D403」および「D405」：米国 Pride Hybrid Co. の市販品種「B32A」および「D63A」の2nd Cycle により育成。「T102」および「T107」：日本在来種「月品226—甲洲」より育成。

特性概要 1. 粒色は橙黄色、粒質はセミデントである。

2. 熟期は「複交3号」より2～3日早い中生種である。

試験場名	抽 出 期		成熟期	生 育 日 数	桿 長	着穂高	10a 当 り		1,000 粒 重	試験年次
	雄 穂	絹 糸					子実重	乾穂重		
北海道農試 (畜産部)	8. 8	8. 13	10. 15	152	243	106	617	—	313	1956～1961
十勝支場	8. 6	8. 17	9. 27	130	(342)	131	576	1,006	332	1960～1961
北見支場	8. 10	8. 25	9. 20	116	234	107	520	1,790	272	"
上川支場	7. 31	8. 9	9. 25	130	238	117	583	—	336	"
原原種農場	8. 8	8. 14	9. 28	136	198	84	509	—	285	"
渡島支場	7. 25	7. 31	9. 20	130	238	115	565	—	357	"
道立農試 (種芸部)	8. 3	8. 9	9. 21	130	239	105	575	—	340	"

注：() 内は草丈

3. 草勢は良好で、不良気象条件の下においても安定した生育を示す。
4. 子実収量は「複交3号」よりややまさり収穫時の生草収量も多い。
5. 雌穂は円筒型であり、粒列数は10～16列で平均13.3列である。
6. 耐倒伏性は強い。

栽培適地および奨励態度 道中央部以南における子実用、道東北部におけるサイレージ用に適する。

(3) 交504号 (Ohio W64)

来歴 「Ohio W64」はデント種の複交配一代雑種である。1953年(昭28)米国オハイオ州農業試験場よりその親系統とともに導入された。

1954年(昭29)および1955年(昭30)には親系統の耐冷性形質について個体選抜が行われた。1956年(昭31)より、その他の米国より導入された一代雑種とともに生産力を検定し、1958年(昭33)より一部の北海道立農業試験場支場に配付し、1959年(昭34)よりさらに拡大して各支場に配付して適応性を検討した。1962年(昭37)優良品種に決定し、農林省に新品種「交504号」(とうもろこし導入5号)と命名、登録された。

組合せ内容は次のとおりである。

(「Oh51A」×「Ind WF9」)(「Oh43」×「Oh45」)

特性概要 1. 子実は黄色のデント種である。

2. 熟期は「複交3号」より1週間前後おそく、また「複交1号」より2日前後おそい晩生種である。

3. 子実重量、生草重量、乾物重量は「複交3号」に比し多収である。

4. 耐倒伏性は強い。

栽培適地および奨励態度 「交504号」は「複交3号」に換えて道南部における子実用、道中央部においては条件のよい所での子実用、また道中央部および道東、道北部におけるサイレージ用として全道的に栽培可能である。

試験場名	抽出期		成熟期	生育 日数	株 長	着穂高	10a 当 り			試験年次
	雄 穂	雌 穂					子実重	生穂重	乾穂重	
北海道農試 (畜産部)	8. 8	8. 15	10. 18	147	220	79	556	2,980	—	1956～1961
十勝支場	8. 7	8. 12	—	—	(291)	90	—	3,894	1,089	1959～1961
北見支場	8. 9	8. 16	—	—	221	87	—	3,965	1,719	"
道立農試 (種芸部)	8. 2	8. 8	9. 22	131	211	76	587	—	—	1960～1961
渡島支場	7. 27	8. 4	9. 28	134	222	81	605	—	—	1959～1961

注：() 内は草丈

(4) 交 8 号 (長交347)

来歴 1961年(昭36)に長野県農業試験場桔梗ヶ原分場において「岩手エローデント」を母とし、合成系統「W531 (455×466)」を父として交配した品種合成系統間交雑である。

1963年(昭38)より北海道立農業試験場十勝支場および北海道立農業試験場北見支場の系統適応性検定試験に供試したが成績が良好であったので、1966年(昭41)より現地試験に供試した。1968年(昭42)優良品種に決定し農林省に新品種「交 8 号」(とうもろこし農林交11号)と命名、登録された。

構成する品種および合成系統の来歴は次のとおりである。

「岩手エローデント」：1962年(昭37)に岩手県より取寄せ長野県農業試験場桔梗ヶ原分場で維持していたものである。

「W531 (455×466)」：1954年(昭29)に単交配を行い、それ以後選抜固定をはかったものである。

特性概要 1. 粗糸抽出期は「複交 8 号」、「交 6 号」等の早生サイレージ用一代雑種と同程度であり、「交504号」よりは3日内外早い。十勝地方においては極端な冷害年を除き、収穫期までに糊熟期に達する。

2. 初期生育は「複交 8 号」、「交 6 号」、「交504号」より旺盛で「エローデント」並である。

3. 総生草収量は「複交 8 号」に比し約30%多く、「交 6 号」、および「交504号」より10~20%多い。

4. 生雌穂重は「複交 8 号」、「交 6 号」「交504号」に比し多く、乾子実重もこれらの品種より20~60%多い。

5. 栄養収量の試算値によると、飼料単位、可消化蛋白ともに「複交 8 号」、「交 6 号」、「交504号」に比し20~30%多い。

6. 雌穂は円筒型で太く長い。粒列は14~20行で1列粒数は約50粒、粒色は黄色である。

7. 稈長は「複交 8 号」および「交504号」よりやや高く、「交 6 号」並みである。また、着穂高はこれらの品種より15~45cm 高い。稈茎は「複交 8 号」、「交 6 号」より太い。

8. 倒伏に対しては「複交 8 号」並で強いが、「交 6 号」、「交504号」よりは幾分弱い。

9. すず紋病に対しては「複交 8 号」、「交 6 号」、「交504号」より強い。

栽培適地および奨励態度 十勝、網走地方の「複交 8 号」、「交 6 号」、「交504号」におきかえて栽培する。また、同地方の「ジャイアンツ」、「エローデント」と配合して栽培する。

試験場名	抽出期		収穫時の熟度	稈長	着穂高	稈 径	10a 当 り				試験年次
	雄穂穂	粗 糸					生総重	乾総重	飼 料	位	
十 勝 農 試	8. 3	8. 10	黄 中	288	145	1. 97	5, 678	1, 076	564		1963~1967
北 見 農 試	8. 17	8. 22	糊 中	244	119	—	5, 567	—	—		"
天 北 農 試 (天 垣 支 場)	8. 18	8. 24	糊 初	197	95	—	4, 484	—	—		1966
北 海 道 農 試 (作物第1部)	8. 12	8. 16	—	213	97	—	4, 377	1, 039	—		1965~1967
原 原 種 農 場	8. 7	8. 16	—	225	123	—	—	(617)	—		1966~1967
中 央 農 試	8. 17	8. 20	—	210	102	—	—	(363)	—		1966

注：() 内は子実重。

従来のサイレージ用品種と同様に欠株をださぬように留意して多肥条件で栽培することが必要である。栽植密度は4,500本/10a内外にとどめて子実の登熟をすすめ、頑健な生育をさせることが望ましい。

(5) ヘイゲンワセ (道交16号)

来歴 「ヘイゲンワセ」は北海道立十勝農業試験場において、1969年(昭44)に「N19×CM7」を母とし、「W41A×W79A」を父とした複交雑による(フリント種)×(デント種)の一代雑種である。

1970年(昭45)より「十交88」の系統番号で生産力検定試験に供試し、翌年以降は「道交16号」の系統名をつけて道内試験機関および現地試験に供試した。1973年(昭48)優良品種に決定し農林省に新品種「ヘイゲンワセ」(とうもろこし農林交16号)と命名、登録された。

構成する自殖系統とその来歴は次のとおりである。

「N19」:北海道農業試験場で在来種「坂下」より育成されたフリント種。

「CM7」:1964年(昭39)カナダ、モードン農試より分譲をうけたフリント種で「85×V3」の自殖により育成されたフリント種である。

「W41A」:1964年(昭39)ウイスコンシン大学より分譲をうけたデント種で「WN×WJ」の自殖により育成された。

「W79A」:「W41A」と同時にウイスコンシン大学より分譲をうけたものであり、「Minn.# 13 o.p」より育成されたものである。

特性概要 1.「交4号」よりも短稈で着穂高はやや高い。

2.分げつの発生は少なく、成熟期まで残るものはほとんどない。

3.全葉数は約14枚で「交4号」よりも1枚内外少ない。

4.熟期は「交4号」よりも約3日早く、子実収量は「交4号」なみである。

5.子実は黄色のセミデント種で、穂長、穂径、粒列数、および1列粒数はほぼ「交4号」並である。

6.根系の発達が良好で耐倒伏性は「交4号」に比し極く強く、機械化収穫に適している。

7.稈が短く、やや細いので生総重、乾総重ともに「交4号」より少ない。

8.すす紋病に対してはやや弱、ないし弱である。

9.採種栽培の点では両親を同時播種することができ、採種量も多い。

栽培適地および奨励態度 十勝、網走および上川北部の子実用品種「交4号」におきかえる。

試験場名	抽出期 月 日	成熟期 月 日	稈長 cm	着穂高 cm	稈 径 cm	穂長 cm	粒列数	10a 当 り		1,000 粒 重	試験年次
								生総重 kg	子実重 kg		
十 勝 農 試	8. 3	—	206	75	1.80	16.6	12.3	3,159	535	302	1970～1972
北 見 農 試	8. 5	—	197	82	1.99	21.0	—	—	493	238	1971～1972
上 川 農 試	7.29	9.18	218	85	—	20.3	—	—	642	331	〃
原原種農場	8. 2	9.22	162	68	1.70	18.4	—	—	664	359	〃
北海道農試	8. 4	9.26	163	66	—	17.9	—	—	681	318	〃

また、同地帯の山麓、沿海地帯の早生サイレージとしても利用できる。

短稈早熟で耐倒伏性が強いので、多肥密植栽培を行う。早生サイレージ用として利用する場合とはくに密植栽培が望ましく、6,000本/10a内外が適当である。

(6) ホクユウ（北交22号）

来歴 「ホクユウ」は北海道農業試験場において、1964年（昭39）に「N85×N21」を母とし、「T23×T24」を父とした複交雑によって育成されたフリント種一代雑種である。

1965年（昭40）より「月交207」の系統番号で生産力検定試験に供試し、1966年（昭41）以降「北交22号」の系統名をつけて道内試験機関において、主として子実用および一部サイレージ用として供試した。その後1970年（昭45）からは道内試験機関において、また1971年（昭46）から現地試験においてサイレージ用として供試した。また1967年（昭42）より岩手県農試において、すす紋病抵抗性の検定を行った。1973年（昭49）優良品種に決定し農林省に新品種「ホクユウ」（とうもろこし農林交16号）と命名、登録された。

構成する自殖系統およびその米歴は次のとおりである。

「N85」：岩内地方在来フリント品種「岩内在来A」より育成。

「N21」：十勝地方在来フリント品種「坂下」より育成。

「T23」および「T24」：イタリアより導入されたと推測されるフリント品種「Granoturo Marano」より育成。

特性概要 1. 稈長および着穂高は「交4号」と「交8号」の中位で、稈径はやや細い。

2. 分けつ数は多く、1株あたり有効雌穂数が多い。

3. 初期生育は旺盛で、登熟も良好である。

4. 熟度は「交4号」と「交8号」の中間である。

5. 生総収量に比べて乾物およびTDN収量が高い。とくに比較的寒冷地域、またはその他の地域においても冷害年次には、登熟の進度が良好で、栄養収量の安定性が高い。

6. 耐倒伏性はやや強く、また耐病性は中位である。

7. 「N85×N21」の単交配採種の場合は「N21」を晩播して出穂期の調節をはかる必要がある。また「T23」、「T24」および「T23×T24」は高濃度の除草剤の使用をさける。

試験場名	粗糸 抽出期	稈長 cm	着穂高 cm	収穫時 熟度	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
					生総重 kg	乾総重 kg	TDN kg		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 9	195	82	黄 後	4,032	1,112	772	69.5	1971～1973
十 勝 農 試	8. 10	241	103	黄	4,394	1,072	735	68.3	"
北 見 農 試	8. 14	236	104	黄	6,137	(1,323)	(910)	(68.9)	"
上 川 農 試	8. 4	233	97	黄	4,225	(1,208)	(843)	(69.8)	"
中 央 農 試	8. 12	197	89	完	4,093	(1,565)	(1,070)	(68.4)	1971～1972
原 原 種 農 場	8. 10	189	80	黄	3,843	(995)	(733)	(73.4)	1971～1973
根 釧 農 試	8. 24	209	76	乳 後	6,200	(1,358)	(939)	(69.1)	1972～1973

() 内は1972年度の数値

栽培適地と奨励態度 十勝山麓・沿海地帯、釧路地方で気象条件の比較的良好な地域ならびに網走地方の一部における中生サイレージ用品種として利用する。

「交4号」や「交8号」よりも耐倒伏性はまさるが一部の外国輸入品種ほど強くないので、あまり極端な密植はさけたほうがよい。おおよそ4,500～6,000本/10a程度の栽植密度が適当である。

(7) ワセホマレ (道交S1号)

来歴 「ワセホマレ」は北海道立十勝農業試験場において、1970年(昭45)に「N19×To15」を母とし「CM37×CMV3」を父として組合せた(フリント)×(デント)の複交配一代雑種である。

1971年(昭46)より生産力検定試験を開始し、1972年(昭47)に「十交107」の系統番号をつけ、1975年よりサイレージ用として「道交S1号」の系統名をつけて道内試験機関および現地試験に供試した。また、すす紋病抵抗性検定試験およびごま葉枯病抵抗性検定試験にも供試した。1978年(昭53)優良品種に決し、農林省に新品種「ワセホマレ」(とうもろこし農林交21号)と命名、登録された。

構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

「N19」：北海道農業試験場において在来種「坂下」より育成されたフリント種。

「To15」：北海道立十勝農業試験場において、「黄早生」×「坂下と山本種の混合花粉」の自殖により育成。

「CM37」および「CMV3」：1964年(昭39)カナダのモードン試験場より導入したデント種。

特性概要 1.低温発芽性がすぐれ、初期生育が良好である。

2.稈長は「ヘイゲンワセ」より高いが着穂高は低く、稈径は太い。

3.耐倒伏性は強く、とくに着穂節の下部で折損することはほとんどない。

4.雌穂柄が短く雌穂の下垂がほとんどない。

5.分けつの発生はほとんどない。

6.葉身は長大で、草勢が極めて旺盛である。

7.絹糸抽出期は「ヘイゲンワセ」より2日程度おそい。中央部では9月下旬前半、山麓・沿海

試験場名	抽出期		収穫時 熟度	稈長 cm	着穂高 cm	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
	雄穂 月日	絹糸 月日				生穂重 kg	乾穂重 kg	TDN kg		
十勝農試	7.30	8.4	黄後	194	55	2,334	828	619	75	1972～1977
北見農試		8.5	完	199	68	4,311	1,225	886	72	1973～1977
根釧農試		8.22	黄	194	72	4,248	970	679	70	1975～1977
天北農試		8.18	黄初	165	36	5,199	985	695	71	1977～
天北農試 天塩支場		8.9	黄	169	—	2,923	1,072	827	77	1976～1977
北海道農試		8.1	黄	166	55	(3,707)	(911)	(655)	(72)	1973～1977
上川農試		7.28	完	181	61	3,207	1,140	829	73	1975～1977
原原種農場		8.6	完	148	42	—	—	—	—	1973～1975

注：() 内は1976、1977の2ヶ年の平均値。

地帯では9月下旬後半に黄熟期に達し、初霜前に収穫適期に達する。

8. 子実収量は「ヘイゲンワセ」並であるが、茎葉収量が多いので、乾物収量、TDNは10%内外多収である。

9. 密植適応性は「ヘイゲンワセ」より低い。

10. 雌穂の形質はほぼ「ヘイゲンワセ」並みのフリントの強いセミデント種である。

11. すず紋病耐病性は中位、ごま葉枯病耐病性は強である。

12. サイレージの乾物回収率、飼料成分、消化率および化学的品質は「ヘイゲンワセ」並みであり、乾物中TDNは70%以上である。

栽培適地および奨励態度 「ヘイゲンワセ」におきかえ、道東、道北の内、根釧沿海および宗谷北東部を除く地帯。

極端な密植は無効雌穂着生個体が発生するので中央部や内陸部では、7,000本/10a内外、山麓沿海地帯では5,000本/10a内外が適当である。

(8) P3715

来歴 「P3715」は米国のPioneer社が育成した品種である。1970～1973年(昭45～49)にかけて北海道農業試験場(草地開発第2部)および北海道立十勝農業試験場において品種試験に供試した。1974年(昭49)に「P3620」とおきかえるべき品種として優良(準奨励)品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 絹糸抽出期は「交8号」に比し1日内外早いデント種である。

2. 稈長は「交8号」よりも幾分低い。

3. 生総収量は「交8号」に比し若干少ないがTDN収量では逆に若干多い。

4. すず紋病抵抗性は「交8号」並みでやや強い。

栽培適地および奨励態度 「P3620」におきかえる。道央ならびに十勝地方の内陸平野部。

試験場名	絹糸 抽出期	収穫期	収穫時 熟度	稈長	着穂 高	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
						生総重	乾穂重	TDN		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 15	10. 1	糊 中	209	99	4,883	1,262	955	75.6	1970～1973
十 勝 農 試	8. 16	9. 24	糊 初	253	114	5,625	(1,425)	(1,004)	(70.4)	1970～1973

注：() 内は1973年のみの数値。

(9) C535

来歴 「C535」はオランダのVan der Have社が育成した品種である。1973年(昭48)以降、北海道立根釧農業試験場、同十勝農業試験場、同北見農業試験場で品種試験に供試した。1976年(昭51)北海道の早生サイレージ用品種の種子不足対策のため優良(準奨励)品種に決定された。来歴および構成する自殖系統名については不明である。

特性概要 1. 初期生育は中位であり、分げつの発生は極く少ない。

2. 稈長は「ヘイゲンワセ」より幾分高い。
3. 絹糸抽出期は「ヘイゲンワセ」より3日程度おそい。
4. 耐倒伏性はやや強である。

栽培適地および奨励態度 十勝、網走の全域および根釧内陸部。

試験場名	絹糸抽出期	稈長	着穂高	収穫時熟度	10a 当り			乾物中 T D N	試験年次
					生総重	乾総重	T D N		
根 釧 農 試	8. 25	215	66	糊	4,418	964	678	70.3	1973～1975
北 見 農 試	8. 16	179	—	黄	3,710	1,130	810	71.7	1973
十 勝 農 試	8. 4	200	82	黄 後	3,440	1,118	839	75.0	1973～1975

(10) P3575

来歴 「P3575」は米国の Pioneer 社が育成した品種である。1974～1975（昭49～50）にかけて北海道農業試験場（草地開発第2部）および北海道立道南農業試験場で品種試験に供試した。1976年（昭51）優良（準奨励）品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 絹糸抽出期は「ジャイアンツ」とほぼ同一であって晩生種に属する。

2. 初期生育は劣るが、その後の生育は旺盛である。

3. 耐倒伏性については「ジャイアンツ」に比し強い。

4. 病害抵抗性については不明である。

5. 生総収量は「ジャイアンツ」に比しやや劣るが、雌穂の登熟性が良好なため全乾物収量、TDN 収量も「ジャイアンツ」にまさる。

栽培適地および奨励態度 道央、道南地方。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫期の熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 T D N	試験年次
						生総重	乾総重	T D N		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 18	10. 4	糊 終	228	106	6,561	1,669	1,198	71.7	1974～1975
道南農試	8. 13	9. 30	黄	235	109	6,168	1,735	1,239	71.5	"

(11) P3390

来歴 「P3390」は米国の Pioneer 社が育成した品種である。1973年（昭48）以降、北海道農業試験場（草地開発第2部）および北海道立道南農業試験場で品種試験に供試した。1976年（昭51）晩生品種の種子不足対策のため優良（準奨励）品種に決定された。

構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 絹糸抽出期は「ジャイアンツ」に比し1～2日遅い晩生のデント種である。

2. 初期生育は劣るが、その後の生育は旺盛である。

3. 耐倒伏性は「ジャイアンツ」に比し強い。
4. 生総収重、乾物収重、TDN 収量ともに「ジャイアンツ」に比しやや多い。
5. 耐病性については不明である。

栽培適地および奨励態度 道央および道南地方。

試験場名	組糸抽出期	収穫期	収穫時熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
						生総重	乾総重	TDN		
北海道農試 (草地開発第2部)	月日 8. 17	月日 10. 3	糊 末	cm 226	cm 116	kg 6,494	kg 1,640	kg 1,177	% 71.7	1973～1975
道南農試	8. 12	9. 24	黄 中	243	127	6,376	1,649	1,178	71.3	1974～1975

(12) JX188

来歴 「JX188」は米国の Jacques 社が育成した品種である。1974年（昭49）以降北海道農業試験場（草地開発第2部）、北海道立上川農業試験場および同道南農業試験場で品種試験に供試した。1976年（昭51）に優良（準奨励）品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

- 特性概要 1. 組糸抽出期は「ジャイアンツ」に比し2日程度早い晩生のデント種である。
2. 初期生育は劣るが、その後の生育は旺盛である。
 3. 耐倒伏性については「ジャイアンツ」に比し強い。
 4. 耐病性については不明である。
 5. 生総収量、乾物収量、TDN 収量は「ジャイアンツ」並か幾分劣る。

栽培適地および奨励態度 道央および道南地方。

試験場名	組糸抽出期	収穫期	収穫時の熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 TDN	試験年次
						生総重	乾総重	TDN		
北海道農試 (草地開発第2部)	月日 8. 17	月日 10. 3	糊 終	cm 252	cm 110	kg 6,458	kg 1,665	kg 1,157	% 69.3	1974～1975
上川農試	8. 14	9. 23	糊 終	264	136	7,210	1,760	1,230	70.0	1975
道南農試	8. 10	10. 1	黄 終	259	114	6,569	1,670	1,213	72.6	"

(13) JX162

来歴 「JX162」は米国の Jacques 社が育成した品種である。1974年（昭49）以降北海道農業試験場（草地開発第2部）、北海道立道南農業試験場および同上川農業試験場で品種試験に供試した。1976年（昭51）に晩生品種の種子不足対策のため優良（準奨励）品種に決定された。構成する自殖系統については不明である。

特性概要 1. 組糸抽出期は「交8号」より2日おそく、「ジャイアンツ」より2日早い晩生種である。

2. 稈長は「交8号」よりやや低く、着穂高も低い。
3. ごま葉枯病、すす紋病ともに「交8号」「ジャイアンツ」より強いほうである。
4. 倒伏・折損は若干認められるが、「交8号」「ジャイアンツ」より強い。
5. 乾物中に占める子実割合が高く、茎葉の緑度保持期間が長く、茎葉乾物収量も高い。TDN 収量で「交8号」より10%程度まざる。

栽培適地および奨励態度 種苗需給事情の緊急性にかんがみ、既往の「交8号」,「ジャイアンツ」を補填し,「W573」に代わる品種として道央、道南全域および上川の比較的条件のよい地帯を中心として奨励する。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫時の熟度	稈長	着穂高	10a 当り			乾物中 T D N	試験年次
						生稈重	乾稈重	T D N		
北海道農試 (草地開発第2部)	8. 16	10. 3	黄 初	226	96	6,218	1,620	1,135	70.1	1974~1976
道南農試	8. 9	10. 1	黄 後	244	115	6,394	1,806	1,298	71.9	1975~1976
上川農試	8. 7	9. 25	黄 後	215	91	5,945	1,533	1,078	70.3	"

〈生食用〉

(14) ゴールデン・ビューティ (Golden Beauty)

来歴 「ゴールデン・ビューティ」は米国マサチューセッツ大学の W.H.Lachman 教授が育成した品種である。北海道農業試験場において1958年(昭33)生食加工用品種の比較試験に供試した結果、極早生種として品質、収量ともに有望と認めたので、1960年(昭35)に同教授より、その両親自殖系統の分譲をうけ、組合せ交配を行った。組合せ内容は(「C13」×「Ma2547-1-1」)である。

1961年(昭36)より生産力検定試験を行い、1962年(昭37)には道内試験機関において地方適否を検定し、1963年(昭38)優良品種に決定し、原名から「ゴールデン・ビューティ」と命名された。

特性概要 1. 極早生種に属し、絹糸抽出期では「ゴールデンバンタム」に比し7日前後早く、「ゴールデン・クロス・バンタム」より2週間前後早い。

2. 草勢は「ゴールデンバンタム」より短程で分けつは少なく、耐倒伏性は強い。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫迄日数	稈長	着穂高	雌穂の形質			10a 当経済雌穂重	試験年次
						雌穂長	雌穂径	粒列数		
北海道農試 (畜産部)	7. 28	8. 19	95	134	28	18.5	4.5	12-14 12.5	993	1961~1962
十勝支場	7. 24	8. 20	97	(213)	34	16.5	4.4	—	697	1962
北見支場	8. 5	8. 26	103	145	43	17.9	4.6	—	824	"
天北支場	8. 9	9. 2	108	151	34	17.8	4.5	—	770	"
上川支場	7. 28	9. 10	—	—	—	—	—	—	720	"
道立農試 (種芸部)	7. 27	8. 18	97	133	26	15.3	4.1	—	595	"

注: () 内は草丈を示す。

3. 雌穂は円筒型で粒列は10～14行、粒着は良好で生食適期における経済雌穂重は多い。

4. 品質は極早生種としては極めて良好で、食味もよい。

栽培適地および奨励態度 「ゴールデン・ビューティ」は早期の生食用または缶詰加工用として有効積算気温900℃以上であれば全道的に栽培可能である。極早生の短稈種であるから栽植密度は慣行より密植にしてよく、10アール当り5,000～6,000本が適当である。

(15) ピリカスイート (十生7号)

来歴 「ピリカスイート」は北海道立十勝農業試験場において、1971年(昭46)に「Ma 21547」と「V574」との交配を行い、1972年(昭47)より生産力検定試験に供試した。しかし採種栽培の面よりみて逆交配組合せが好都合と考えられ、1973年(昭48)より「V574」×「Ma 21547」の形で生産力検定試験に供試するとともに、道内各試験機関に配付して地域適応性を検定した。

1975年(昭50)優良品種に決定し農林省に新品種「ピリカスイート」(とうもろこし農林交19号)と命名、登録された。

構成する自殖系統の来歴は次のとおりである。

「V574」：オンタリオ園芸試験場 Vineland 試験地で「(Me 100×V3) Open」の自殖により育成、1970年(昭45)に導入。

「Ma21547」：マサチューセッツ農試において育成、「ゴールデン・ビューティ」の親系統。

特性概要 1. 稈長および着穂高は「ゴールデン・ビューティ」よりやや高い。

2. 分げつ数は「ゴールデン・ビューティ」よりやや多い。

3. 初期生育はやや良好である。

4. 収穫期は「ゴールデン・ビューティ」より4日内外おそく、「ゴールデン・クロス・バンタム」よりは15日内外早い早生種である。

5. 有効雌穂数が多く、剥皮雌穂重は「ゴールデン・ビューティ」より10%内外多い。

6. 耐倒伏性は中位、すす紋病抵抗性は他のスイートコーン品種と同様に弱い。

7. 絹糸色は苞皮の内外ともに無色である。

8. 穂形は円筒状で平均一穂重は「ゴールデン・ビューティ」よりやや重い。粒列数は12～14行の個体が大半である。

9. 粒色は鮮黄色で、極良好であり、食味および芳香ともに良好で加工適性が高い。加工用としては粒型の点よりみてクリーム状缶詰に適す。

10. 種子親と花粉親の開花期がほぼ一致しているので同時播種による採種栽培が可能である。

試験場名	絹糸抽出期	収穫期	収穫迄日数	稈長	着穂高	10 a 当り		有効雌穂長	平均1穂重	試験年次
						雌穂数	雌穂重			
十勝農試	8. 5	8. 28	107	164	48	4,960	920	16.0	187	1972～1974
北海道農試	8. 2	8. 24	100	148	43	5,060	1,060	18.0	209	1973～1974
北見農試	8. 9	9. 1	109	159	51	4,280	978	16.9	229	"
中央農試	8. 2	8. 20	97	125	33	4,970	1,043	18.1	210	"
原原種農場	8. 1	8. 21	99	125	41	4,510	904	19.0	200	"

栽培適地と奨励態度 北海道全域のスイートコーン栽培地帯に適する。加工用として栽培する場合はクリーム状缶詰原料として、「ゴールデン・ビューティ」と配合、または「クィーン・アン」とおきかえて栽培する。

多肥栽培が望ましいが、栽植密度は4,500～5,000本/10a内外にとどめるべきである。

(16) 北缶3号 (HLC145)

来歴 「北缶3号」は、北海製缶株式会社缶詰研究所において1967年(昭42)に米国ウイスコンシン大学より24自殖系統の分譲をうけ、以後その能力の検定を行ったが、導入系統のうち「Me123」は雌穂の形態が優れて注目されたので、1970年(昭45)に既存自殖系統「Ma21547-1-1」との交雑を行い、以後「HLC-455」の系統名をつけて生産力検定を行うとともに、道内の試験機関で供試し地域適応性を検定した。北海道農業試験場において、すす紋病、ごま葉枯病耐病性の検定も行った。1976年(昭51)に優良品種に決定し、「北缶3号」と命名された。両親系統の来歴は次のとおりである。

「Me123」：ウイスコンシン大学より導入したが導入当時より雌穂の形態がよく注目されていた。

「Ma21547-1-1」：マサチューセッツ大学において、「Me2」の自殖により育成されたものである。

特性概要 1. 初期生育は「ピリカスイート」並みの中位で分けつ数は少ない。稈長、着穂高は「ゴールデン・ビューティ」、「ピリカスイート」と同程度である。

2. 有効雌穂数は「ゴールデン・ビューティ」並みであるが、「ピリカスイート」よりは若干少ない。

3. 収穫期は極早生種の「ゴールデン・ビューティ」より5日内外おそく、「ピリカスイート」より1日程度おそい早生種に属する。「ゴールデン・クロス・バンタム」よりは12日内外早い。

4. 剥皮雌穂重は「ゴールデン・ビューティ」より20%内外多く、「ピリカスイート」並であり、早生種としては多収である。

5. 耐倒伏性は中程度であって、「ピリカスイート」並である。

6. すす紋病抵抗性は他のスイートコーン品種と同様に弱い。

7. 早生種としては雌穂長が極めて長く、平均1穂重が重く、穂揃いは良好である。

試験場名	根系 抽出期	収穫期	稈長	着穂 高	株当り 有効穂数	有効 雌穂長	平均 1穂重	粒列 数	10a当り剥皮 穂重	試験年次
	月日	月日	cm	cm	本	cm	g	列	kg	
十勝農試	8. 8	8. 29	156	42	1.08	17.7	209	13.5	1,000	1973～1975
北海製缶 詰研究所	8. 4	—	133	41	1.25	18.2	213	12.8	1,169	1971～1975
北海道農試 (草地開発第2部)	7. 31	8. 22	145	40	1.10	18.9	211	12.7	1,070	1973～1975
北見農試	8. 10	8. 29	148	42	1.00	17.9	237	12.8	1,051	"
原原種農場	7. 31	8. 20	120	34	1.03	19.9	201	12.8	922	"
中央農試	8. 3	8. 23	125	31	1.10	18.4	215	12.6	1,060	"
上川農試	7. 26	8. 18	160	47	1.27	17.7	194	12.6	1,091	1975

8. 粒列数は平均12.8列で12列が大半を占める。
9. 雌穂は円筒形でやや先細り型であり、外観は良好である。
10. 粒色は鮮黄色で「ゴールデン・ビューティ」に比し良好で「ピリカスイート」並である。
11. 絹糸は苞皮の内外ともに無色である。
12. 食味、香味共に良好であり、その他の特性よりみて生食加工用、軸付冷凍用に適している。また缶詰加工として利用する場合は、ホール加工用として利用できる。

栽培適地および奨励態度 生食市場用および軸付冷凍用早生品種として、北海道全域のスイートコーン栽培地帯に適する。

なお本品種を生食市場用として利用する場合には、さらに熟期の早い「ゴールデン・ビューティ」と配合する。

早生品種の栽培法に準じ多肥栽培することが望ましい。また栽植密度はやや密にしても雌穂の形質は低下しないので、5,500本/10a内外が適当である。

(17) ホワイトワキシー

来歴 1956年(昭31)に北海道立農業試験場(種芸部)において、白色糯系統「S-339」を母とし、「マンモスホワイトデント」を父親として交配、1961年(昭36)まで(マンモスホワイトデント)を反復親として戻し交配を4回繰返し、この間、花粉のヨード反応により遺伝子型WXwX個体を選択した後、Wxwx種子を選択、1962年(昭37)に雌穂選抜を行った。1963年(昭38)以降3ヵ年生産力を検定し、1963～64年(昭38～39)の2ヵ年にわたりすす紋病抵抗性検定を行った。1965年(昭40)には現地試験を実施し地方適否を確かめ、1966年(昭和41)優良品種に決定し、「ホワイトワキシー」と命名された。

特性概要 1.反復親である「マンモスホワイトデント」と同程度の熟期であり、中生種の「複交8号」に比しやや晩い晩生種である。

2.子実収量については、「マンモスホワイトデント」よりやや多いが、「複交8号」の70%程度である。

3.「複交8号」よりやや長稈であるが、耐倒伏性は「複交8号」なみで中程度である。

4.すす紋病耐病性は「マンモスホワイトデント」と同じくやや強い。

5.ワキシー澱粉は粘着性、膨潤性、溶解性、透明性などがデント種の澱粉に比しすぐれており、加工食品原料、工業原料として利用度が大である。

栽培適地および奨励態度 道南地方および道央南部。とうもろこしの他の品種の栽培圃より少なくとも300m以上離して栽培し、粒のキセニア化を防ぐ。会社との契約栽培が必要である。

試験場名	絹糸抽出期	成熟期	稈長	着穂高	雌穂長	雌穂径	粒列数	1,000粒重	10a当り子実収量	試験年次
道立農試(種芸部)	月日 8. 18	月日 10. 3	cm 193	cm 96	cm 14.5	cm 3.9	列 13.3	g 241	g 284	1963～1966

8. 大 豆

(1) ナガハジロ（札幌3号）

来歴 「ナガハジロ」は、北海道農業試験場で高脂肪多収品種育成のため、1950年（昭25）に「十勝長葉」を母とし、「黄宝珠」を父として交配を行い、子実比重による選抜効果の検討に用いた材料の中から選抜固定をはかったもので、1961年（昭36）に優良品種に決定し、農林省に新品種「ナガハジロ」（大豆農林21号）と命名、登録された。

- 特性概要 1. 胚軸色は紫、小葉の形は長葉で花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
 2. 草型は「十勝長葉」に似た有限伸育型であるが、莖長は「十勝長葉」よりやや高い。
 3. 開花期は「大谷地2号」、「北見白」とほぼ同じ、成熟期は「北見白」より遅く、「十勝長葉」より7日前後早い晩生の早に属する。
 4. 着莢は密で、一莢内の胚珠数は比較的多く、胚珠の稔実は良好である。
 5. 粒色は黄白、脐色は黄で粒形が豊満であり、1,000粒重は「十勝長葉」より僅かに大きい。
 6. 脂肪含量は「大谷地2号」よりも1.5～2.0%高く、蛋白含量は同程度である。
 7. 収量は北海道中央部以南においては「十勝長葉」「丸小粒」に比べて一般に高く、安定している。

栽培適地と奨励態度 本道中央部以南（石狩、後志、日高、胆振、檜山、渡島）に適し、これらの地帯に栽培されている「丸小粒」に換えて奨励する。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主莖長 cm	主莖節数 節	分枝数 本	着莢数 個	全重 kg	子実重 kg		
北海道農試	7.22	10. 3	145	56.8	—	9.2	79.5	448	242	193	1957～1960
渡島支場	7.17	9.25	140	55.7	15.4	6.3	74.7	429	249	204	"
十勝支場	7.26	10.10	143	83.0	16.1	6.4	67.7	461	223	205	"
北見支場	8. 2	達せず	—	82.2	17.0	6.2	71.3	477	187	190	"
天北支場	7.30	(10.12)	(148)	57.0	—	6.5	62.2	380	169	192	"
原原種農場	7.17	10. 6	143	64.1	—	2.9	33.5	—	238	193	1959～1960

(2) シンセイ（十育92号）

来歴 「シンセイ」は1950年（昭25）、北海道立農業試験場十勝支場において、早熟、多収品種の育成を目標として、晩生、強莖、多収の「十勝長葉」を母とし、極早生の「上春別在来」^①を父として人工交配を行い、以来系統育種法により選抜固定を図ったものである。1956年（昭31）より生産力検定試験を行い、1958年（昭33）より系統適応性検定試験に供試した結果、早・中生種地帯にとくに適し、収量も多かったので、1961年（昭36）優良品種に決定し、農林省に新品種「シンセイ」（大豆農林22号）と命名、登録された。

注 北海道立農業試験場根室支場で1949年（昭24）に早生の耐冷性在来種を収集した際、古くから自給用に栽培されていた在来種として野付郡別海村字上春別から取り寄せられたもの

で、「霜不知」か「奥原大豆」から選抜されたと伝えられる。

- 特性概要** 1. 主茎長は「鈴成」より長く、「北見白」並み、分枝数は「鈴成」、「北見白」より多く、草姿は「霜不知1号」に類似しやや軟弱で開張する。
2. 胚軸色は紫、葉は円葉、花色は赤紫、毛茸は褐色、熟莢は褐色を呈する。着莢は「鈴成」に比しやや疎である。
3. 子実球形で、種皮色は黄白、臍は暗褐色、子実の大きさは1,000粒重250g内外で中粒種に属する。
4. 熟期は中生の早に属し、開花期は「鈴成」、「北見白」と等しいが、成熟期は「鈴成」より2～3日、「北見白」より5日程早い。
5. 耐倒伏性は「カリカチ」にまさり弾力性に富むので普通栽培条件で倒伏することはない。
6. 子実収量は全道的にみて「鈴成」より多く、「北見白」に遜色がない。
7. 子実の粗蛋白含量は「鈴成」、「北見白」よりやや低く、粗脂肪含量は「北見白」より高い。
8. マメシンクイガの被害は「鈴成」、「北見白」並みである。

栽培適地と奨励態度 「シンセイ」は、十勝管内山麓、網走管内北部、上川管内北部、など早・中生種地帯に適し、「鈴成」に比し品質面ですぐれているので、積極的に「鈴成」におきかえて栽培すべきである。

耕種法は「鈴成」、「北見白」に準じてよく、疎植に過ぎると多収は望めない。

〔1971（昭46）廃止〕、シンセイは1966年（昭41）廃止の決定をみたが、1968年（昭43）北海道農業試験会議で耐冷性強の特性から見て廃止を見おくる事としたが、1971年（昭46）北海道農作物奨励品種登録の際廃止された。

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における				10a当り		1,000 粒重 g	試験年次
				主茎長 cm	主茎節数 節	分枝数 本	着莢数 個	全重 kg	子実重 kg		
十勝支場	7.23	9.25	128	71.9	14.2	6.8	68.2	452	196	235	1957～1960
北海道農試	7.18	9.17	129	44.1	12.8	7.0	61.6	328	172	240	1958～1960
天北支場	7.27	10.3	135	54.1	—	5.4	53.6	429	199	247	"
北見支場	7.29	9.29	132	67.9	12.5	7.7	74.6	425	222	222	"
上川支場	7.26	9.28	124	86.6	—	7.7	—	592	265	274	1959～1960
原原種農場	7.18	9.19	127	53.0	—	3.5	33.0	—	263	226	1958～1960
根室支場	8.10	—	—	—	—	6.4	—	329	177	216	1959～1960

(3) コガネジロ（十育95号）

来歴 「コガネジロ」は、1952年（昭27）北海道立農業試験場十勝支場において、高脂肪、多収、白目品種の育成を目標として、中国産品種「紫花4号」を母とし、強茎、長葉、多収の「十勝長葉」を父として人工交配を行った。以後選抜固定を図り、1957年（昭32）より生産力検定予備試験を行い、1958年（昭33）から「十育95号」の系統名で生産力検定試験、系統適応性検定試験、栽培特性検定試験に供試した。翌年から原種決定試験に供試し、地方適否を検定した結果、消費者の需要動向が白目（臍色が黄～極淡褐）品種へ変りつつあることから、白目良質の

多収品種と認められ、1961年（昭36）に優良品質に決定し、農林省に新品種「コガネジロ」（大豆農林23号）と命名、登録された。

- 特性概要**
1. 主茎長は長茎の「十勝長葉」に比しさらに高く、半無限伸育型を示す。分枝数は「十勝長葉」と同等であるが、分枝長は極めて短かく、着莢は主茎に偏し、草型は直立である。
 2. 胚軸は太さ中位で紫色、初生葉の形は長楕円、小葉は「十勝長葉」と同じく長葉、葉色は濃緑である。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
 3. 子実は球形で「十勝長葉」並みの小粒種。種皮は濃い黄色を呈し強い光沢がある。胎色は種皮と同じ黄色である。
 4. 熟期は晩生の早に属する。開花始は7月中旬で早い、成熟期は「北見白」より遅く、「十勝長葉」よりも約10日早い。
 5. 耐倒伏性は強く、既存の優良品種にまさっている。
 6. 子実収量は、全道的にみて「北見白」並みで、道央地方から道南地方にかけて「十勝長葉」をはるかに上廻り、多収性を具備している。
 7. 子実の粗蛋白含量、粗脂肪含量は「十勝長葉」とほぼ等しく、道内品種中では粗蛋白含量の高い品種であり、豆腐としての品質はまさる。
 8. マメシクイガの被害は、「十勝長葉」と同程度で少ない。菌核病にはかかりやすい。

栽培適地と奨励態度 「コガネジロ」は、「北見白」の栽培されている中・晩生種地帯（十勝管内、上川管内南部を含む）に適する。これらの地帯で「北見白」とともに栽培すべきである。

主茎型の極強茎種なので、肥沃地や密植栽培（地力によりその密度は異なる）に適する。ただし、多肥による増収性はあまり高くない。分枝長が短かく、着莢が主茎に偏するので、「北見白」に比し僅かに密植すれば本来の多収性を発揮する。

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における				10a 当り		1,000 粒 重 g	試験年次
				主茎長 cm	主茎節数 節	分枝数 本	着莢数 個	全 重 kg	子実重 kg		
十 勝 支 場	7.18	10. 3	136	79.9	16.0	5.7	74.8	481	258	202	1958～1960
北海道農試	7.14	10. 1	146	52.2	17.5	6.8	82.6	435	239	180	"
天 北 支 場	7.26	10.14	146	50.8	—	4.4	57.9	380	184	195	"
北 見 支 場	7.25	未	—	71.1	15.1	6.6	77.8	396	201	185	"
渡 島 支 場	7.14	9.25	137	54.0	14.4	4.1	85.4	405	235	204	"
上 川 支 場	7.22	10. 4	127	82.4	—	5.5	—	636	301	231	1959～1960
原原種農場	7.16	9.29	137	55.8	—	3.0	70.8	—	263	186	1958～1960

(4) トカチシロ（十育96号）

来歴 「トカチシロ」は、1952年（昭27）北海道立農業試験場十勝支場において、高脂肪、多収、白目品種の育成を目標として、中国産品種「満倉金」を母とし、強茎、長葉、多収の「十勝長葉」を父として人工交配を行った。以来、F₃まで集団選抜を行い、F₄以降系統選抜で固定を図った。1957年（昭32）より生産力検定予備試験を行い、1958年（昭33）より「十育96号」の系統名で生産力検定試験、系統適応性検定試験、栽培特性検定試験に供試した。翌年から原種決定

試験に供試し、地方適否を検定した結果、消費者の需要動向が白目（臍色が黄～極淡褐色）品種へ変わりつつあることから、晩生の白目良質品種として認められ、1961年（昭36）優良品種に決定し、農林省に新品種「トカチシロ」（大豆農林24号）と命名、登録された。

- 特性概要 1.主茎長は「十勝長葉」より短く、「北見白」並み。分枝数は「十勝長葉」より多く「北見白」よりも若干多い。分枝は長く、裂けやすい。草型は開張し、逆三角形を示す。
- 2.葉形は円葉で、葉色は濃い。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
- 3.子実は球形で、大きさは「十勝長葉」より大きく「北見白」並みで小粒種に属する。種皮は黄白色、臍は種皮色と同色で典型的な白目品種の特性を具備している。肉眼判定による品質はよい。
- 4.熟期は晩生種に属する。開花期は「北見白」とほぼ等しいが、成熟期は「北見白」より遅く、「十勝長葉」よりやや早い。
- 5.耐倒伏性は「十勝長葉」並みで強い。
- 6.子実収量は、一般には「十勝長葉」並みで、「北見白」に比しやや劣る傾向があるが、道央地帯、道南地帯では両者に比し多収を示す。
- 7.子実の粗脂肪含量、粗蛋白含量は、ともに「十勝長葉」とほぼ等しく、豆腐としての品質もまざる。
- 8.マメシンクイガの被害は「北見白」より少ないが「十勝長葉」よりは多い。菌核病に対してはかかりやすい傾向を示す。

栽培適地と奨励態度 本品種は、「十勝長葉」が栽培されている中晩生種地帯、とくに十勝管内の内陸、道央地帯および道南の日本海側に適する。この地帯の「十勝長葉」にかえて栽培する。

肥沃地で一般に成績が良いが、菌核病にやや弱い傾向があるので、菌核病の多発地帯では疎植により被害の軽減をはかるなど、栽培法に留意すべきである。

早生種地帯では「十勝長葉」と同様、霜害の恐れがある。（1966年（昭41）廃止）

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における				10a当り		1,000粒重 g	試験年次
				主茎長 cm	主茎節数 節	分枝数 本	着莢数 個	全 重 kg	子実重 kg		
十 勝 支 場	7.23	10. 6	139	67.4	12.5	6.7	70.1	486	231	217	1958～1960
北海道農試	7.18	10. 3	145	35.9	11.6	8.1	79.8	482	246	203	"
天 北 支 場	7.29	(10.13)	(145)	48.6	—	4.6	57.2	438	182	196	"
北 見 支 場	7.31	(10.11)	(141)	65.6	13.4	7.3	79.4	492	190	189	"
渡 島 支 場	7.17	9.27	139	39.8	11.1	5.9	78.8	470	254	233	"
上 川 支 場	7.31	10. 6	131	80.1	—	6.1	—	754	285	261	1959～1960
原原種農場	7.18	10. 4	142	51.4	—	2.8	70.0	—	284	219	"

（ ）内未成熟の年あり

(5) テンボクシロメ（天系48号）

来歴 「テンボクシロメ」は、1950年（昭25）北海道農業試験場で「紫花1号」を母とし、「奥原1号」を父として交配を行い、F₁より北海道立農業試験場天北支場で選抜固定を図った

ものである。1961年（昭36）に優良品種に決定し、「テンボクシロメ」と命名された。

特性概要 1. 胚軸色は紫、小葉の形はやや小さく円葉である。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。

2. 草型は無限伸育型で、莖長は「テンボクワセ」「大谷地2号」などよりやや高く、土地条件や気象条件が良好な場合は変化しやすい。

3. 開花期は「テンボクワセ」と大差ないが、成熟期は「テンボクワセ」より8～9日遅く、「大谷地2号」より6～8日早い早生種である。

4. 着莢は極めて良好で3粒莢の割合が多く、不稔歩合は「テンボクワセ」より高いが、「大谷地2号」より低い。

5. 種皮色は黄、脐色も黄で粒は球形を呈し、1,000粒重は170～180gの小粒種である。粒揃いはやや良好であるが、変化すると不揃いになる。

6. 収量は普通年では「テンボクワセ」「大谷地2号」より多収を示し、「北見白」と同程度であるが、冷害年には「大谷地2号」よりはるかに多収で、「テンボクワセ」「北見白」よりもまさる。

栽培適地と奨励態度 「テンボクシロメ」は耐冷性の強い早生種で、道東、道北の無霜期間が短く、冷害をうけ易い地帯の白目品種として他の品種と適宜配合して栽培する。〔1966年（昭41）廃止〕

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における				10a当り		1,000粒重 g	試験年次
				主莖長 cm	主莖節数 節	分枝数 本	着莢数 個	全重 kg	子実重 kg		
天北支場	7.21	10. 3	135	65.4	—	6.6	69.1	401	179	176	1956～1960
北見支場	7.27	9.30	127	76.1	—	10.4	92.5	422	196	167	1959～1960
十勝支場	7.18	9.23	126	90.9	15.4	7.3	75.6	414	212	173	〃
根室支場	8. 1	達せず	—	57.7	—	7.2	62.7	418	228	166	1960
原原種農場	7.14	9.15	122	50.6	—	3.8	71.5	395	203	160	1959～1960
士別試験地	7.26	9.21	118	98.7	—	11.3	105.7	560	225	181	1960
北海道農試	—	9.14	—	53.0	—	9.0	79.0	354	196	160	1959～1960

(6) アサミドリ（大袖振一）

来歴 本品種は帯広市川西町南基松の農家、清水清氏が栽培していたものである。この種子は1957年（昭32）、北海道立農業試験場十勝支場が十勝管内より大豆の地方栽培品種1,200点を収集した際、「アサミドリ大豆」として取寄せられ、特性調査の結果優れていたもので、「大袖振一」の系統名を付し翌年から品種比較試験を行った。その結果、早熟、多収性が認められ、1962年（昭37）優良品種に決定し「アサミドリ」と命名された。

特性の概要 1. 主莖長は「吉岡大粒」、「早生緑」より長い。主莖節数は13節程度。分枝数は「吉岡大粒」程度。草型は開張する。

2. 葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は褐色、熟莢は褐色を呈する。

3. 子実は扁球形で、種皮色は黄地に淡緑色が腹部から鞍掛け状に覆い淡黄緑を呈するが、「吉岡大粒」より濃淡の差は著しくない。脐は黒色である。子実の大きさは、1,000粒重330g内外で「吉

岡大粒」より大きく、「早生緑」並みである。品質は「早生緑」並みで良好である。

4. 十勝における開花始は7月下旬で「吉岡大粒」と同程度であるが、成熟期は9月末で「吉岡大粒」より約7日早く、「早生緑」より1～2日遅い中生種である。
5. 生育は旺盛であるが、耐倒伏性は「吉岡大粒」、「早生緑」より劣り、やや倒伏しやすい。
6. マメシクイカの被害は「早生緑」並みで「吉岡大粒」より多い。
7. 収量性は高く、「吉岡大粒」より約25%、「早生緑」より15～20%程度多収である。
8. 子実の粗蛋白含量は「吉岡大粒」より3～4%低く「早生緑」並み、粗脂肪含量は「吉岡大粒」、「早生緑」より2～3%程度高い。

栽培適地と奨励態度 「アサミドリ」は十勝管内および冷涼地帯における子実用として、「吉岡大粒」および在来種の大袖振に比べ安全に栽培ができる。また、枝豆用としては全道各地の栽培に適する。

栽培法は普通大豆と同様であるが、生育が旺盛で主茎長が長く伸び、肥沃地では密植にすると過繁茂になり、倒伏する恐れがあるので生育領域をやや拡げて栽培するとよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実数		
十勝支場	7.22	9.30	133	79.2	13.2	4.8	44.3	510	262	335	1958～1961
北見支場	7.22	9.28	125	62.0	13.6	8.5	60.7	539	254	350	1961
上川支場	7.19	9.21	117	90.9	14.6	8.5	45.0	622	261	364	"
原産種農場	7.14	9.21	129	40.0	—	4.6	35.0	373	191	308	"

(7) ワセコガネ (十育97号)

来歴 「ワセコガネ」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場十勝支場において、高脂肪、多収、白目品種の育成を目標として、中国産品種「紫花4号」を母とし、強茎、長葉、多収の「十勝長葉」を父として人工交配を行い、1953年(昭28)にこのF₁を母とし「十勝長葉」を父として戻し交配を行った。以来F₂まで集団選抜を行い、F₄以降強茎、中熟、白目良質、多収に育種目標を変更し、系統選抜で固定を図った。1959年(昭和34)F₅より生産力検定予備試験を行い、1961年(昭36)より「十育97号」の系統名を付して、生産力検定試験および各種の栽培試験に供すると同時に、関係機関に配布して地方適否試験を行った。その結果、機械化栽培適応性の高いことが認められ、1964年(昭和39)優良品種に決定し、農林省に新品種「ワセコガネ」(大豆農林33号)と命名、登録された。

- 特性概要**
1. 主茎長は「十勝長葉」より長く「コガネシロ」程度であるが、半無限伸育型を示す。分枝数はやや少く、茎も細い。着莢は主茎に偏し、草型は直立する。
 2. 葉形は「コガネシロ」と同様の長葉で、大きさは中程度であるが、頂部にゆくほど小さくなる。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。
 3. 子実は球形で、小粒種に属し、「コガネシロ」よりやや小さく、「鈴成」よりやや大きい。種皮は黄色でやや光沢があり、臍色は種皮と同じく黄色である。外見的品質は良好である。
 4. 開花始は7月中旬で、成熟期は「鈴成」より2～3日遅れるが、「コガネシロ」より1週間程

度早い早熟種である。

5.耐倒伏性は「コガネジロ」並で強い。

6.圃場では裂莢がみられず、裂莢に対する抵抗性が強い。

7.子実収量は、「鈴成」と同程度で「コガネジロ」よりやや少ないが、年次間変動は小さく「鈴成」、「コガネジロ」より安定性が高い。密植もしくは条播栽培による増収効果が高い。

8.マメシンクイガの被害は、「コガネジロ」並で少ない。菌核病に対して白毛品種は褐毛品種より弱い、「ワセコガネ」は褐毛品種並の被害で「コガネジロ」より強い。

栽培適地と奨励態度 「ワセコガネ」は、十勝の山麓および沿海、網走のオホーツク沿海とそれに類似の早生地帯に適し、「鈴成」におきかえて栽培する。

普通栽培では「鈴成」と同程度の収量を示すが、密植条播にすると増収する傾向が大きいので、従来の品種より密播するよう注意すべきである。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒 重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
十勝支場	7.17	9.28	131	92	16.5	5.7	74.0	482	236	214	1961~1963
北見支場	7.25	10. 2	132	70	14.4	4.3	85.6	396	180	185	1959~1960
天北支場	7.19	10. 8	140	48	—	2.9	52.0	336	141	204	"
北海道農試	7.15	9.17	129	46	15.1	4.3	67.1	355	194	179	"

(8) オシマシロメ (札育12号)

来歴 「オシマシロメ」は北海道農業試験場において、高脂肪多収品種育成のため、1950年(昭25)に「十勝長葉」を母とし、「黄宝珠」を父として交配を行い、子実比重による選抜効果の検定に用いた材料の中から選抜固定をはかったものである。1964年(昭39)優良品種に決定し、農林省に新品種「オシマシロメ」(大豆農林34号)と命名、登録された。

- 特性概要 1.胚軸色は緑、小葉の形は円、花色および毛茸色は白で、熟莢は淡褐色である。
- 2.草型は「黄宝珠」に類似した無限伸育型である。茎長は「ナガハジロ」より高く、分枝数は「ナガハジロ」より少ないが、分枝長は一般に長く、莢着きは密である。
- 3.開花期は「ナガハジロ」に比べて3日程度早い、無限伸育型であるため成熟期は「ナガハジロ」より数日遅い極晩生種である。
- 4.耐倒伏性は「ナガハジロ」より弱い。
- 5.マメシンクイガの被害は「北見白」「大谷地2号」より少ない。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒 重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
北海道農試	7.19	10.10	147	79.7	18.7	5.3	69.2	684	321	277	1961~1963
渡島支場	7.26	10. 9	—	87.2	16.0	6.5	—	657	342	290	"
原原種農場	7.15	10.12	—	79.4	18.1	5.7	—	532	214	284	"

6. 粒大は「ナガハジロ」より大きい中粒種に属し、種皮色、脐色、はともに黄で、粒形は球である。
7. 収量は、道央部以南においては「ナガハジロ」「北見白」などに比べて多収でかつ安定している。
8. 子実の成分は「ナガハジロ」に比較して、脂肪含量はやや少ないが、蛋白含量は同程度かやや多い。

栽培適地と奨励態度 「オシマシロメ」は道央以南（石狩南部、後志、渡島、桧山）において、「ナガハジロ」と共に多収、良質種として栽培を奨励する。〔1975年（昭50）廃止〕

(9) ホウライ（十育109号）

来歴 「ホウライ」は、1955年（昭30）北海道立農業試験場十勝支場において、ゲイズシストセンチュウ抵抗性品種育成を目標として、東北産の極晩生で抵抗性品種「下田不知1号」を母とし、「十育71号」（「十勝長葉」×「赤花在来」）を父として人工交配を行い、以米線虫生息圃場および普通圃場に栽植し、抵抗性を検定するとともに選抜固定を図った。

1960年（昭35）、F₂代より生産力検定予備試験を行い、1962年（昭37）F₇代より「十育109号」の系統名で生産力検定試験に供試すると同時に、特性検定試験、系統適応性検定試験および奨励品種決定現地試験を実施した。さらに翌年より十勝管内の線虫発生地で現地試験もあわせて行ってきたもので、1965年（昭40）優良品種に決定し、農林省に新品種「ホウライ」（大豆農林37号）と命名、登録された。

特性概要 1. 主茎長は「北見白」より長く、「コガネジロ」よりもやや長い。主茎節数は15節程度、分枝は長く数も多い。草型は開張する。

2. 葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢色は淡褐色を呈する。

3. 子実はやや扁球形で、種皮色は黄色、脐色は黄～極淡褐色、子実の大きさは1,000粒重280g内外で中粒種に属し、外観的品質は良好。

4. 晩生種に属するが、開花および成熟期は「トカチシロ」よりもやや早い。

5. 耐倒伏性はやや弱く、繁茂する条件下では倒伏するが、線虫圃場や普通程度の肥沃地に栽培する場合は倒伏しないか、しても軽微である。

6. 子実収量は、線虫圃場に栽培した場合、一般の品種が著しい減収を示すのに対し、「ホウライ」の減収は極めて少ない。普通圃場に栽培した場合も非抵抗性の奨励品種に劣らない高い収量をあげる。

7. 子実の粗蛋白含量は、44%程度で高く、粗脂肪含量は低い。

非抵抗性品種は、線虫圃場で粗蛋白含量が減少し、粗脂肪含量が増加するが、本品種では変化が少ない。

8. ゲイズシストセンチュウに対しては、「ネマシラズ」、「下田不知1号」と同程度の抵抗性を示し、全生育期間中ほとんど被害症状がない。非抵抗性品種の根には、多くのシストが着生し、根粒は極めて少ない。本品種では、シストは極めて少なく、根粒は多い。

9. キタネコブセンチュウに対する抵抗性はない。マメシンクイガの被害は多い。菌核病にはかかりやすい。

栽培適地と奨励態度 「ホウライ」は、ゲイズシストセンチュウの被害が認められる中晩生種地帯を対象として、全道に適する。

普通圃場で栽培する場合は、「北見白」、「コガネシロ」の栽培に準じて行えばよい。ただし、耐倒伏性が弱いので注意する必要がある。〔1978年（昭53）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
十勝農試 線虫圃	7.25	10. 9	141	73.4	14.4	6.0	40.9	288	115	206	1963～1964
十勝農試 普通圃	7.20	10.12	147	90.7	15.2	8.2	67.6	552	241	244	1962～1964
北見農試	8. 4	10.14	141	83.1	14.6	9.2	63.2	459	165	212	"
天塩支場	7.27	未	—	57.1	14.3	5.6	34.6	289	103	202	"
上川農試	7.27	(10.13)	(143)	90.4	—	6.7	84.9	557	205	258	"
原原種農場	7.13	10. 3	142	68.1	14.9	8.8	79.6	395	173	267	"
北海道農試	7.22	10. 3	140	47.5	14.9	9.1	71.1	342	175	227	"
道南農試	7.18	9.28	142	67.7	14.2	7.9	88.1	486	251	259	"

() 内は未成熟を除く

(10) トヨスズ（十育118号）

来歴 「トヨスズ」は、1955年（昭30）、北海道立農業試験場十勝支場において、ゲイズシストセンチウ抵抗性品種育成を目標として、東北産の極晩生で抵抗性品種「下田不知1号」を母とし、樺太産極早生品種「ト支第7910号」（十勝支場種苗台帳番号）を父として人工交配を行い、以来線虫生息圃場および普通圃場に栽植し、抵抗性を検定するとともに選抜固定を図った。

1962年（昭37）、F₇より生産力検定予備試験を行い、1964年（昭39）F₉より「十育118号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、特性検定試験、系統適応性検定試験および奨励品種決定現地試験を実施した。さらに同年より十勝管内の線虫発生地で現地試験もあわせて行ってきたもので、1966年（昭41）優良品種に決定し、農林省に新品種「トヨスズ」（大豆農林43号）と命名、登録された。

特性概要 1.主茎長は50cm 内外で「ホウライ」より約30cm,「北見白」より約20cm も短い短茎種、主茎節数は10節程度、分枝数は比較的少ない。草型は直立である。

2.初期生育は旺盛、葉は円葉で濃緑色を呈するが開花後はとくに濃くなる。花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢は淡褐色を呈する。

3.子実はやや扁球形で、種皮色は黄白、臍色は黄～極淡褐色。子実の大きさは1,000粒重320g 内外で大粒種の小に属し、外観的品質は良好。

4.中生種に属する。開花始は「ホウライ」と変らないが、個体の開花は短期間に終り莢の肥大も早い。登熟期間はやや長く、成熟期は「ホウライ」より3日程度早い、「北見白」より2～3日程度遅い。

5.耐倒伏性は強く「北見白」並みである。

6.子実収量は、普通圃場では「北見白」、「ホウライ」に劣るが、線虫圃場では「北見白」より、また天候の不順な年には「ホウライ」より減収率が低く安定している。

7.子実成分は、「北見白」より粗蛋白含量が高く、粗脂肪含量は低い。非抵抗性品種は、線虫圃場で粗蛋白含量が減少し、粗脂肪含量が増加するが、「トヨスズ」では変化が少ない。

8. ダイズシストセンチュウに対しては、「ネマシラズ」、「ハウライ」と同程度の抵抗性を示し、全生育期間中ほとんど被害症状がない。
9. キタネコブセンチュウに対する抵抗性はない。マメシクイガの被害は多い。菌核病には「北見白」よりかかりやすい。

栽培適地と奨励態度 「トヨスズ」は、十勝管内、網走管内のダイズシストセンチュウの被害が認められる地域に適する。とくに中央部で大豆の草出来が旺盛で倒伏のみられる地帯および山麓地帯に適する。

「トヨスズ」は、子実が大きいため、発芽は遅れ、発芽率が低下し欠株が多くなる場合もあるので、薬剤で必ず種子粉衣をすること。

普通圃場での栽培は「北見白」に準じて行えばよい。ただし、初期生育は旺盛であるが栄養生長が開花揃頃までで停止するので、栽植密度はあまり広げないこと。

線虫発生地で栽培する場合は、肥料をやや多めに施すか、または栽植密度をやや狭くすることが望ましい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒 重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
十勝農試圃	7.26	10.8	140	51.2	10.0	4.4	41.9	335	170	282	1964～1965
十勝農試圃	7.23	10.9	144	54.1	9.7	4.1	54.3	507	240	320	1962～1965
北見農試	8.4	10.7	139	45.2	10.8	3.5	48.3	346	148	238	1964～1965
上川農試	7.27	10.13	143	56.0	10.5	4.2	64.3	549	237	279	"
原原種農場	7.20	10.8	148	38.4	9.8	2.5	50.9	294	111	296	"
北海道農試	7.25	10.5	139	34.9	10.5	2.6	49.3	293	150	237	"
道南農試	7.14	9.23	136	42.6	10.4	2.9	60.3	381	203	278	"

(II) キタムスメ (十育122号)

来歴 「キタムスメ」は、1958年(昭33)北海道立農業試験場十勝支場において、「十育87号」(カリカチ)を母とし、「北見白」を父として人工交配を行い、以来選抜固定を図ったものである。1963年(昭38)、F₂より生産力検定予備試験に供試した。

1964年(昭39)、F₂代より「十育122号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、道内関係機関で奨励品種決定基本調査を行い、同現地調査を翌年より実施した。1965年(昭40)から栽培特性検定試験に供試してきた。さらに、耐冷性現地選抜圃、ファイトロンで耐冷性を検定してきたもので、1968年(昭43)優良品種に決定し、農林省に新品種「キタムスメ」(だいつ農林49号)と命名、登録された。

特性概要 1. 主茎長は「北見白」よりやや長く「カリカチ」より短い。分枝数は「北見白」よりやや少ない。草型はやや開張する。

2. 初期生育は旺盛である。葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は褐色、熟莢色は褐色を呈する。

3. 子実は球形で、種皮色は黄白、臍は暗褐色である。子実の大きさは「北見白」、「カリカチ」および「大谷地2号」よりも大きく、中粒種に属する。品質は良好である。

4. 中生種に属し、開花期は「北見白」よりやや早く、成熟期は同じか1～2日程度早い。
5. 耐倒伏性は「北見白」よりやや弱い、「カリカチ」より強く、普通程度の肥沃地に栽培する場合は倒伏しないか、しても軽微である。
6. マメシクイガの被害は「北見白」よりやや多く、「カリカチ」並である。ダイズシストセンチュウに対しては一般品種同様に抵抗性はない。菌核病の被害は「北見白」、「カリカチ」並で一般に少ない。
7. 収量は「北見白」および「カリカチ」より多収であり、とくに、冷害年においても安定した収量を示す。
8. 子実の粗蛋白含量は「北見白」よりやや低く、「カリカチ」並である。粗脂肪含量は「北見白」および「カリカチ」よりやや高い。

栽培適地と奨励態度 「キタムスメ」は十勝、上川管内および網走管内中央部に適し、この地帯の「北見白」と「カリカチ」の大部分におきかえる。

発芽率がやや低下することがあるので播種するときに殺虫、殺菌剤の種子粉衣を励行すること、及びマメシクイガの被害が比較的大きいので防除を行うことが必要である。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
	月日	月日	日	cm	節	本	個	kg	kg	g	
十勝農試	7.27	10.9	144	79.0	12.4	5.0	64.2	529	260	28.9	1964～1967
北見農試	8.4	10.14	146	63.0	12.5	5.8	64.8	516	207	25.7	"
上川農試	7.30	(10.12)	(140)	88.6	11.6	5.0	72.2	680	282	28.9	"
原産種農場	7.21	10.2	136	54.2	10.2	4.9	63.5	449	211	29.3	"
中央農試	7.28	10.14	147	70.4	12.8	4.6	75.9	583	261	31.4	1966～1967
北海道農試	7.26	10.3	137	48.9	12.5	3.3	62.9	323	169	24.4	1964～1965
道南農試	7.16	9.22	135	56.5	11.7	4.8	67.2	439	224	26.9	1964～1965 1967

() 内は未成熟を除く

(12) ユウヅル (中育3号)

来歴 「ユウヅル」は北海道立中央農業試験場が、1966年(昭41)に道央、道南、東北(青森、岩手)の各地より収集した大豆在来種のうち、北海道食糧事務所苫小牧支所が見本品として所有していた新冠町産の「鶴の子」より純系分離法によって育成したもので、1971年(昭46)優良品種に決定し、農林省に新品種「ユウヅル」(だいず農林55号)と命名、登録された。

- 特性概要 1. 胚軸色は緑、小葉の形は円、花色は白、毛茸色も白で、熟莢は褐色を呈する。
2. 草型は有限伸育型で、「白鶴の子」に比べ茎長は低い、分枝数多く着莢数も多い。
 3. 開花期は「白鶴の子」に比べ数日早く、成熟期は「白鶴の子」より7日前後早く、「早生鶴の子」よりやや早い。
 4. 耐倒伏性は「白鶴の子」よりまさるが、「コガネジロ」や「キタムスメ」などより弱い。
 5. 子実は「白鶴の子」と同じやや扁球形で種皮色は黄白、脐色は濃黄である。粒大は「白鶴の子」なみの鶴の子銘柄に属する極大粒種で、種皮の亀裂は「白鶴の子」に比べやや少ない。
 6. 収量は「白鶴の子」より20%程度多収で、「早生鶴の子」にもまさるが、「オシマシロメ」よ

りやや劣る。

7. マメシクイガの被害は「白鶴の子」よりやや少なく、「早生鶴の子」よりやや多い。ダイズわい化病に対する抵抗性はないが、「白鶴の子」に比べると発病率は少ない。

栽培適地と奨励態度 「ユウヅル」は、石狩、空知の中南部、後志南西部、胆振、日高、渡島、桧山地方に適し、これらの地帯の「白鶴の子」「早生鶴の子」におきかえる。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
中央農試	8. 1	10. 15	148	67.4	14.5	4.9	52.7	577	252	413	1968～1970
道南農試	7.30	10. 7	147	76.0	14.0	3.0	37.8	632	277	423	1969～1970
原原種農場	7.31	10.13	150	68.9	14.2	3.7	35.6	528	207	419	"

(13) ヒメユタカ (十育161号)

来歴 「ヒメユタカ」は、1964年(昭39)北海道立十勝農業試験場において、良質多収品種の育成を目的として、白目、大粒の「十育129号」(「白鶴の子」×「カリカチ」)を母とし、耐冷性強、多収の「カリカチ」を父として人工交配を行い、以来選抜固定を図ったものである。1970年(昭45)F₂より生産力検定予備試験に供試した。

1971年(昭46)、F₂より「十育161号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、道内関係機関で奨励品種決定基本調査を行い、翌年より同現地調査を実施した。さらに1971年(昭46)からマメシクイガ耐虫性特性検定試験、1973年(昭48)から栽培特性検定試験、低温処理試験に供試してきたもので、1977年(昭52)優良品種に決定し、農林省に新品種「ヒメユタカ」(だいず農林61号)と命名、登録された。

特性概要 1. 主茎長は「トヨスズ」より約15cm 長く、「キタムスメ」程度。主茎節数は12節程度。分枝数は「トヨスズ」よりやや多い。草型はやや開張する。

2. 初期生育は旺盛である。葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢色は淡褐色を呈する。

3. 子実は球形で、種皮色は黄白、臍色は黄(年次により極淡褐色を呈することがある)、1,000粒重は350g 内外で大粒種の中に属し「トヨスズ」よりも大きい。外観的品質は豊満で良好。

4. 開花期は「トヨスズ」よりやや遅く、「キタムスメ」並である。成熟期は「キタムスメ」より2～3日遅く、「トヨスズ」より4～5日早い中生種。登熟、枯上がりは良好である。

5. 耐倒伏性は「トヨスズ」より弱く、「キタムスメ」程度。多肥または密植栽培では倒伏の恐れもある。

6. 裂莢性は従来の品種と同様裂莢しやすい。

7. 開花時期の低温に対しては「トヨスズ」より安定している。

8. ダイズシストセンチュウに対する抵抗性はない。

9. マメシクイガの被害は「キタムスメ」並で多い。菌核病の被害は「トヨスズ」より一般に少ない。

10. 収量性は「トヨスズ」より早熟のため安定性が高く多収であり、ほぼ「キタムスメ」並である。

11. 子実の粗蛋白、粗脂肪含量は、「トヨスズ」と「キタムスメ」の中間である。

栽培適地と奨励態度 「ヒメユタカ」は、十勝管内、網走管内、上川管内中南部およびこれらに類似の地帯に適する。十勝中央部は豆作率が高く、ダイズシストセンチュウの密度が高いため適さない。上記の地帯で白目良質品種を望むところでは、「北見白」、「キタムスメ」の1部におきかえる。センチュウの被害が認められない地帯では「トヨスズ」を全面的におきかえる。

ダイズシストセンチュウの被害の恐れのある圃場での栽培はさける。

子実が大きいため、発芽が遅れ、発芽率がやや低下するので、必ず種子粉衣をすること。マメシクイガの適期防除を行うこと。

肥沃地では倒伏の恐れがあるので、極端な密植はさけた方がよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全 重	子実重		
十 勝 農 試	7.25	10. 4	139	66.0	12.1	5.5	52.3	567	285	358	1970～1975
北 見 農 試	7.27	9.30	132	69.5	11.9	4.7	62.3	613	295	353	1972～1975
上 川 農 試	7.22	10. 1	134	70.3	12.0	6.3	77.1	651	312	358	1971～1975
原原種農場	7.20	9.23	129	50.9	10.5	4.6	53.4	526	292	341	"
中央農試	7.22	9.28	134	52.7	11.4	3.8	55.4	502	252	346	"

(14) キタコマチ (十育167号)

来歴 「キタコマチ」は、1965年(昭40)北海道立十勝農業試験場で白目、中粒、良質、多収品種の育成を目標として、白目、大粒の「十育129号」(「白鶴の子」×「カリカチ」)を母とし、白目、良質、強稈の「十育118号」(トヨスズ)を父として人工交配を行い、以来選抜固定を図ったものである。

1970年(昭45)F₂より生産力検定予備試験に供試した。1972年(昭47)より「十育167号」の系統名で生産力検定試験を行うと同時に、道内関係機関で奨励品種決定基本調査を行い、翌年より同現地調査を実施した。さらに1972年(昭47)よりマメシクイガ耐虫性特性検定試験、1973年(昭48)より栽培特性検定試験、低温処理試験に供試した。1978年(昭53)優良品種に決定し、農林水産省に新品種「キタコマチ」(だいで農林64号)と命名、登録された。

特性概要 1.主茎長は「ヒメユタカ」より短く、「トヨスズ」並かやや長い。主茎節数、分枝数とも「トヨスズ」並で、草型は「トヨスズ」によく似ている。

2.初期生育は旺盛であるが、葉色は「トヨスズ」よりやや淡い。葉形は円葉、花色は赤紫、毛茸は白色、熟莢色は淡褐色を呈する。

3.子実はやや扁球形で、種皮色は「トヨスズ」と同様黄白である。脐色は黄(年次により極淡褐色を呈することがある)、1,000粒重は300g内外で「トヨスズ」よりもやや小さい。

4.開花期は「トヨスズ」と同程度で「ヒメユタカ」より2～3日早い。成熟期は「トヨスズ」より10～14日程度早く、「ヒメユタカ」より7～8日早い。早生種の「イスズ」並の成熟期で枯上りも良好である。

5.耐倒伏性は「トヨスズ」並で強い。裂莢はしやすい。

6.耐冷性は「トヨスズ」並であるが、熟期が早いので安定性は高い。

7.ダイズシストセンチュウに対する抵抗性はない。

8.収量性は「トヨスズ」より7%前後劣るが、熟期が早いので安定している。しかし、年次により「トヨスズ」同様、臍部の着色、種皮の亀裂がみられる場合がある。

9.子実の粗蛋白含量は、「トヨスズ」と同程度でやや高く、粗脂肪含量はやや低い。

栽培適地と奨励態度 本品種は、上川管内および収穫、乾燥時の天候がこれに類似する地帯に適する。これらの地帯の「トヨスズ」、「北見白」、「キタムスメ」の1部におきかえ、さらに早生品種を必要とする地帯に普及する。

草型、子実の形は「トヨスズ」に類似しているが、ダイズシストセンチュウに対しては抵抗性はないので、被害の恐れのある圃場での栽培はさけること。

だいずわい化病、マメシンクイガの防除は従来品種同様に行うこと。

その他の肥培管理は、「トヨスズ」、「北見白」、「キタムスメ」など一般品種の栽培に準じて行えばよい。

試験場所	開花期	成熟期	生育日数	成熟期における				10a 当り		1,000粒重	試験年次
				主茎長	主茎節数	分枝数	着莢数	全重	子実重		
	月日	月日	日	cm	節	本	個	kg	kg	g	
十勝農試	7.22	9.28	133	48.2	11.1	4.7	51.6	479	255	299	1972～1977
北見農試	7.23	9.26	128	52.0	10.9	4.2	57.7	494	238	268	1972～1976
上川農試	7.17	9.20	123	54.0	10.4	5.5	67.0	579	297	308	1972～1977
原原種農場	7.17	9.19	125	40.0	9.7	3.9	46.7	437	252	304	1972～1976
中央農試	7.19	9.28	134	41.0	10.5	4.5	57.9	421	219	295	1973～1974

9. 小 豆

(1) 光小豆 (十育7号)

来歴 「光小豆」は、1955年(昭30)に北海道立農業試験場十勝支場において「茶殻早生」を母とし、「早生大粒1号」を父として交配し、以降選抜固定をはかって来たものである。1941年(昭36)より「十育7号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに、地方適否を確めた結果、1964年(昭39)優良品種に決定し、「光小豆」と命名された。

- 特性概要**
- 1.開花始、成熟期とも「宝小豆」なみか、1～2日おそい中生種である。
 - 2.草丈はやや高く、開花期前後、気象条件がよければ蔓化することもある。
 - 3.熟莢色は淡褐色で、莢は長く、太さ中位でやや湾曲する。
 - 4.子実は小粒でやや烏帽子型を示し、種皮色はやや淡赤色で光沢がある。
 - 5.子実収量は「宝小豆」より多収で、やや疎植(10a当り6,000株程度)で多収の傾向を示す。

栽培適地および奨励態度 全道一円に適するが、とくに冷涼な地帯はさける。

この品種は開花期前後の気象条件によっては蔓化の傾向を示すことがあるので地力の高い圃場においては密植栽培はさけるべきである。(1975年(昭50)廃止)

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十 勝 支 場	7.27	9.19	117	66	3.9	43	202	370	112	1961～1963
上 川 支 場	7.28	9.25	124	74	3.7	57	277	574	117	1962～1963
北 見 支 場	8. 2	10.10	137	39	3.6	20	160	374	157	"
原原種農場	7.27	9.19	117	52	3.1	57	278	426	113	"

(2) 晩大納言 (十育62号)

来歴 「晩大納言」は、1960年(昭35)に北海道立農業試験場十勝支場において、「能登小豆」に「早生大粒1号」を交配し、選抜固定をはかって育成したものである。母親の「能登小豆」は1959年(昭34)に大阪市内の雑穀問屋より入手した能登産の来歴不明の大粒品種である。1967年(昭42)より「十育62号」の系統名で生産力検定試験に供試し、また、地方適否を確めた結果、1970年(昭45)、優良品種に決定し、「晩大納言」と命名された。なお、「寿小豆」、「アカネダイナゴン」は同じ組合せから育成されたものである。

特性概要 1.開花始は「早生大粒1号」より3日前後おそく、成熟期は5日ほど遅い中生種である。

2.草丈はやや高く、主茎節数、分枝数、莢数ともに「早生大粒1号」をうわまわる大粒の品種である。

3.熟莢は灰白色で太くて短かく、わずかに湾曲する。

4.子実は「早生大粒1号」、「アカネダイナゴン」より大きく、烏帽子型で、種皮色は濃赤色で光沢がある。

5.子実収量は「早生大粒1号」に比べて10%程度多収で、耐倒伏性も同品種にまさる。

栽培適地と奨励態度 本道中央部以南の比較的気象条件の恵まれた地帯に適す。

この品種は耐倒伏性が「早生大粒1号」よりやや強いので、栽植株数、施肥量をやや多くすることにより、より多収が期待できる。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における				10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	主茎節数	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十 勝 農 試	7.30	9.26	126	45	13	3.4	37	269	452	202	1967～1969
道 南 農 試	7.27	9.21	132	93	—	3.0	48	302	607	161	1969
中 央 農 試	7.28	9.26	132	67	—	3.9	36	281	556	186	1968～1969
原原種農場	7.25	9.28	139	66	—	4.1	42	359	577	201	"
上 川 農 試	8. 2	(9.27)	—	76	—	4.6	38	242	—	210	1968～1969
北 見 農 試	8. 2	未	—	59	—	4.4	20	78	468	201	1968

() 内は未成熟を除く

(3) 寿小豆（中育1号）

来歴 「寿小豆」は、1960年（昭45）北海道立十勝農業試験場において「能登小豆」を母とし、「早生大粒1号」を父として交配をおこない、雑種第5代（昭40）から北海道立中央農業試験場において選抜固定をはかり育成したものである。1968年（昭43）より「中育1号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに地方適否を確かめた結果、1971年（昭46）優良品種に決定し、「寿小豆」と命名された。

特性概要 1.開花始は「宝小豆」よりやや早く、成熟期は道央では「宝小豆」より遅れるが、他の地域では「宝小豆」なみで中生種に属する。

2.草丈はやや高く、分枝数はやや少く、葉は円形であるが葉縁の左右にくびれがある。

3.熟英色は褐色で、莢はやや太くて長く、やや湾曲する。

4.子実の中粒で形状は円筒形、種皮色は赤色である。

5.子実収量は「宝小豆」に比べて多収で、分枝数が少いので密植による増収性が高い。

6.立枯病に比較的強い。

栽培適地および奨励態度 道央ならびに道東北に適する。しかし、不安定地帯での栽培はさける。

この品種は分枝が少いため、密植による増収性は高いが、多肥による増収性は低いので施肥量は標準施肥量とし、栽植株数は多くする。

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における			10 a 当り		1,000 粒 重 g	試験年次
				草 丈 cm	分枝数 本	着英数 個	子実重 kg	総 重 kg		
中央農試	7.24	9.18	124	54	2.6	30	270	527	137	1968～1970
十勝農試	7.26	9.23	123	53	3.1	35	278	435	158	"
上川農試	7.24	9.13	113	58	3.5	38	318	573	164	"
北見農試	7.26	(9.21)	—	48	2.0	28	200	443	178	"
原原種農場	7.22	9.14	123	52	2.4	34	293	527	153	"
道南農試	7.25	9.16	127	92	2.0	38	300	521	123	1969

() 内は未成熟を除く

(4) 栄小豆（十育70号）

来歴 「栄小豆」は、1960年（昭35）に北海道立農業試験場十勝支場において「3407」（「茶殻早生」×「早生大粒1号」のF₆）を母とし「早生大粒1号」を父として交配を行い、以降選抜固定を続け育成したものである。1969年（昭44）より「十育70号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに地方適否を確かめた結果、1973年（昭48）優良品種に決定し、「栄小豆」と命名された。

特性概要 1.開花始、成熟期は「宝小豆」なみか、1～2日程度おそい中生種である。

2.草丈はやや高く、分枝数、英数ともに「宝小豆」よりやや多い。

3.熟英色は褐色で莢は長く、太さは中位でやや湾曲する。

4. 子実は「宝小豆」よりやや大きめの小粒で、形状は円筒形、種皮色は赤色である。

5. 子実収量は「宝小豆」より多収で、とくに不良気象条件下での減収割合が小さい。

栽培適地と奨励態度 十勝地方（山麓沿海で早生種栽培地帯はさける）および上川中・南部に適する。

草丈が高く、分枝数も多いため耐倒伏性が「宝小豆」よりやや劣るので、過度の密植はさけた方がよい。しかし、施肥反応が比較的高いので、施肥量をやや多めにするると多収が期待できる。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.29	(9.19)	(117)	49	4.0	40	277	443	136	1969～1972
上川農試	7.25	9.17	119	64	4.8	48	329	644	131	1970～1972
北見農試	8. 2	—	—	52	3.5	27	168	482	122	"
中央農試	7.29	9.16	118	31	2.2	30	141	226	107	"
原原種農場	7.23	9.12	114	28	4.3	36	255	461	117	"

注 () は1971年をのぞいた平均値

(5) アカネダイナゴン（十育69号）

来歴 「アカネダイナゴン」は、1960年（昭35）に北海道立農業試験場十勝支場において「能登小豆」を母とし「早生大粒1号」を父として交配し、選抜固定をはかって育成したもので、1969年（昭44）から「十育69号」の系統名で生産力検定試験に供試され、また、地方適否を確かめた結果、1974年（昭49）優良品種に決定し、農林省に新品種「アカネダイナゴン」（あずき農林1号）と命名、登録された。

特性概要 1. 開花始、成熟期は「早生大粒1号」よりやや遅く、「晩大納言」より早い中生種である。

2. 草丈は中位で「晩大納言」に比べて短かく、主茎節数は「早生大粒1号」より多く「晩大納言」なみである。

3. 熟莢色は灰白色で太くて短かく、わずかに湾曲する。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
十勝農試	7.28	(9.21)	(120)	41	3.8	47	293	478	184	1969～1973
北見農試	7.28	9.22	124	67	4.4	47	347	630	197	1972～1973
上川農試	7.28	9.25	127	65	4.5	49	328	700	175	1970～1973
原原種農場	7.24	9.14	117	34	4.2	36	247	423	174	"
中央農試	7.28	9.22	124	23	2.1	27	158	257	169	1970～1972

注 () 1971年をのぞいた値

4. 子実は六粒で形状は烏帽子型を呈し、種皮色は濃赤で光沢がある。

5. 子実収量は「早生大粒1号」に比べて多収で、不良気象条件下における収量は「晩大納言」にまさる。

栽培適地と奨励態度 十勝地方の中央部および上川の中・南部ならびに道央、道南地帯に適する。

この品種は耐倒伏性がやや強いので、やや施肥量を増加することにより、より多収が期待できる。また、分枝数がやや多く、後期に開花したものの粒肥大が良好であるから、極端な密植栽培はさけた方がよい。

(6) ハヤテショウズ (十育85号)

来歴 「ハヤテショウズ」は、1965年(昭40)に北海道立十勝農業試験場において「宝小豆」に「班小粒系—1」を交配し、選抜固定をはかって育成したものである。1970年(昭45)より「5082」の系統番号で、また、1971年(昭46)からは「十育85号」の系統名で生産力検定試験に供試するとともに、地方適否を確めた結果、1976年(昭51)優良品種に決定し、農林省に新品種「ハヤテショウズ」(あずき農林2号)と命名、登録された。

特性の概要 1. 開花始は「茶殻早生」より3日程早く、成熟期は2～3日おそい早生種である。
2. 草丈はやや低く、「茶殻早生」と「宝小豆」の中間で、葉は円形であるが生育後期やや剣先様となる。

3. 熟莢は褐色で、太さはやや細くて長く、先端はやや湾曲する。

4. 子実は小粒で形状は短円筒形、種皮色はやや濃赤である。

5. 子実収量は「茶殻早生」に比べて10%以上多収である。

栽培適地と奨励態度 十勝、網走および上川地方に適し、「茶殻早生」にかえると共に「宝小豆」の栽培が不安定な地帯では、これにかえて栽培し得る。

栽培は「茶殻早生」に準じてよいが、生育後期から収穫期の気象条件(特に多雨、長雨)によっては品質を低下させるので、適期収穫、適正な収納作業が必要である。また、多肥および密植に対する反応が「茶殻早生」より大きいので、増肥、密植化をはかることにより、より多収が期待できる。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
	月日	月日	日	cm	本	個	kg	kg	g	
十 勝 農 試	7.25	9.13	112	38	2.5	48	281	408	114	1972～1975
上 川 農 試	7.22	9. 5	109	60	4.2	41	264	495	112	1973～1975
北 見 農 試	7.28	9.19	120	53	3.6	43	298	488	120	"
原原種農場	7.21	9. 5	109	30	2.0	33	184	300	106	"

10. 菜 豆

(1) 改良大手亡（大手亡—清水）

来歴 「改良大手亡」の来歴は判然としないが、上川郡清水町の上野与四郎氏が栽培していたもの（道南から導入したという）を1953年（昭28）北海道立農業試験場十勝支場が取寄せた。その後同支場で不良個体の除去を行い、1955年（昭30）より「大手亡（清水）」の仮名称を付し生産力検定試験、1956年（昭31）より各種の試験を実施し、1961年（昭36）優良品種に決定し、「改良大手亡」と命名された。

特性概要 1. 葉、花、莢、草姿、等の特性は「大手亡」と同じである。

2. 「大手亡」に比較し、開花始は約2日、成熟期は7日前後遅い晩生種である。

3. 子実の形状、粒色ともに「大手亡」とほとんど同じであるが、粒大は1000粒重で約10%ほど重い。

4. 子実収量は「大手亡」に比べおおよそ10%ほど多収を示す。

5. 各種病害に対する抵抗性は「大手亡」とかわりなく、倒伏、雨湿の害等についてもほとんど同程度である。しかし、晩生種であるため初霜の早い地帯や生育が遅延した場合は霜害を受ける危険性がある。

6. 子実の外観的品質は「大手亡」に比べてややまざる。

栽培適地と奨励態度 本品種の栽培適地は、「大手亡」に準じ、上川、空知一円および十勝、網走の山麓地帯を除く内陸部で、「大手亡」に換えて栽培できる品種である。晩生種なため栽培に当っては、従来の「大手亡」のように6月に入ってから播種では霜害の危険性がともなうので、できるだけ5月中旬に播種する必要がある、また生育のおくれる地帯あるいは初霜の早い地帯での栽培はとくに注意しなければならない。〔1975年（昭50）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十 勝 支 場	7.23	9.21	119	123	4.9	17.0	209	450	326	1958～1961
北 見 支 場	7.23	9.24	121	101	5.4	24.3	255	481	340	1959
上 川 支 場	7.25	9.19	106	114	6.0	29.5	324	587	304	1960
原原種農場	7.20	9.17	113	113	4.8	37.3	291	509	335	"

(2) 改良中長（中長鶉—上士幌）

来歴 「改良中長」は、1947年（昭22）頃河東郡音更町の農家国分氏が「中長鶉」より耐病性が強く多収とみられる数個体を選抜し、増殖したものである。その増殖種子が1953年（昭28）頃より上士幌町を中心に栽培され作付け面積が広がりつつあったが、1953年（昭28）上士幌町報恩の農家、下村菊治氏が本品種を種子更新用として入手し、さらに耐病性が強く、良質多収なものの選抜を繰返し増殖してきたものである。北海道立農業試験場十勝支場では1957（昭32）より「中長鶉（上士幌）」の仮名称で試験を開始し各種試験に供試した結果、1961年（昭36）優

良品種に決定し、「改良中長」と命名された。

- 特性概要 1.一般性状の葉、花、莢、草姿、等の特性は「中長鶉」と同じである。
 2.開花始は「中長鶉」とほとんど同じ、成熟期は1～2日早い中生の早に属する。
 3.子実の形状、粒色ともに「中長鶉」と同じであるが、粒大はやや大きい。
 4.子実収量は11%ほど「中長鶉」より多収を示す。
 5.半蔓性であるため倒伏しやすいが、雨湿による変色粒の発現は「中長鶉」より少なく、菜豆炭そ病の被害も「中長鶉」に比べて少ない。
 6.品質は良く「中長鶉」と同様、やや粉質で、食味は良好で、煮豆原料として好適である。

栽培適地と奨励態度 「改良中長」は特に冷涼な地帯を除く全道で栽培可能な品種であり、従来「中長鶉」に換えて栽培できる品種である。本品種は「中長鶉」と特性が類似しているの
 で、栽培に当たっての注意は「中長鶉」に準じて良い。(1975年(昭50)廃止)

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝支場	7.16	9.4	102	111	5.8	13.9	174	335	479	1958～1960
北見支場	7.18	9.13	111	82	6.0	15.2	233	404	509	1959
上川支場	7.17	9.2	97	100	6.5	16.0	283	447	499	1960
原原種農場	7.13	9.10	106	81	0.6	19.1	157	288	514	1960

(3) 新金時 (十育B-1号)

来歴 「新金時」は、北海道立農業試験場十勝支場において1955年(昭30)に「紅金時」を母とし、「大正金時」を父として人工交配を行い、F₁を温室で養成し、F₂代以降は場にて育成選抜固定を図って来たものである。1959年(昭34)に「3405」、1960年(昭35)には「3405-A」の系統番号(仮)を付けて予備試験を行い、1961年(昭36)より「十育B-1号」の系統名で生産力検定試験に供試した。さらに1962年(昭37)からは特性検定試験を行うと共に、育成系統比較現地試験を行って地方適否を確かめ、1964年(昭39)優良品種に決定し、「新金時」と命名された。

- 特性概要 1.草姿は矮性で草丈は「大正金時」よりやや高く、「紅金時」よりはやや低い、稚苗の莖色は極淡赤紫を呈し花色は淡紅色で硬莢である。
 2.開花始は「大正金時」よりわずかに遅く、成熟期は「大正金時」に比し3～5日おくれる程度の早生種である。
 3.子実の形状はやや長楕円であるが、大粒のため莢内で粒が接触し、子実の両端がやや角味を帯びる。粒大は「大正金時」より大きく1000粒重で8～10%程度重い、粒色は紅色である。
 4.子実収量は「大正金時」より多く、播種期が多少遅れても減収程度は「大正金時」より少ない。
 5.粒色が濃いため生育後期および収穫乾燥期における雨湿の害は「大正金時」より少なく、病害に対しては「大正金時」と同程度の反応を示す。
 6.子実の品質は「大正金時」よりやや良好、肉質はやや粉質で、種皮は「大正金時」よりわず

かに厚く、煮くずれは少ない。煮上り時の色も良く、煮豆、甘納豆の原料に適する。

栽培適地と奨励態度 早生種であるため、栽培適地は「大正金時」に準じ特に寒冷な地帯を除く全道に適し、栽培に当っては大粒の特性を保持する意味から、特に地力の低いほ場および菜豆菌核病の多発ほ場は避けるべきである。〔1975年（昭50）廃止〕

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝支場	7.10	9.2	101	50	5.2	13.4	188	353	652	1961～1963
北見支場	7.16	9.17	114	45	5.9	14.5	199	431	699	1962～1963
上川支場	7.12	9.3	102	47	3.0	17.5	273	526	716	〃
原原種農場	7.10	8.28	95	39	4.6	16.0	215	408	683	〃

(4) 昭和金時（十育B—11号）

来歴 「昭和金時」は北海道立農業試験場十勝支場において1955年（昭30）に「紅金時」を母とし「大正金時」を父として人工交配を行い、大粒良質多収品種の育成を目標に選抜固定をはかって来たものである。1960年（昭35）に「3513」の系統番号で生産力検定予備試験を行い、1961年（昭37）より「十育B—11号」の系統名を付して生産力検定試験に供試した。さらに、1964年（昭39）からは特性検定試験を行うとともに現地試験を行って地方適否を確かめ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「昭和金時」と命名された。

- 特性概要 1.草姿は矮性、草丈は「大正金時」「新金時」より高く、稚苗の茎色、花色などは「大正金時」「新金時」に類似する硬莢種である。
- 2.開花始は「大正金時」「新金時」より2～3日おそく、成熟期は「大正金時」に比し12～15日、「新金時」より10日前後おくれる中生種である。
- 3.子実の形状は長楕円で粒大は「大正金時」より大きく、1000粒重で「大正金時」に比し7～10%程重く、「新金時」よりやや重い。粒色は「大正金時」より濃くやや暗紅色を呈する。
- 4.子実収量は、道央の温暖な地帯では「大正金時」「新金時」と大差はないが、道東で気象条件に恵まれる地帯では「大正金時」より多収を示し、「新金時」よりも収量が多い。
- 5.各種病害に対しては「大正金時」とほぼ同程度の反応を示し、「新金時」と同様生育後期や収穫乾燥期における雨湿等による褪色粒の発生は少ない。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝農試	7.14	9.15	115	49	4.0	12.0	202	359	728	1962～1965
北見農試	7.18	9.23	124	34	3.4	12.1	219	409	793	1964～1965
上川農試	7.15	9.18	111	53	3.3	15.6	303	624	772	〃
中央農試	7.9	8.27	100	40	2.0	8.7	426	222	644	〃
原原種農場	7.13	9.14	112	41	3.2	14.6	345	208	712	〃

6. 子実の品質は「大正金時」に比しやや良好、種皮の厚さは「大正金時」よりややうすく、肉質はやや粘質であり、煮豆および甘納豆原料に適する。

栽培適地と奨励態度 栽培適地は十勝ならびに網走の中央部、上川など道東・道北の畑作地帯で「大正金時」の栽培地帯の中でもやや無霜期間の長い地帯に適する。栽培にあたっては「大正金時」に準じてよいが、大粒良質多収の特性を発揮させるために病害虫の発生が少なく、土地生産力の高いほ場を選ぶのが良い。又「大正金時」「新金時」に比し成熟期が10日以上も遅れるので秋播小麦の前作としての栽培には不適である。〔1978年（昭53）廃止〕

(5) 北原紅長（紅長2号）

来歴 「北原紅長」は中川郡幕別町の農家、北原政雄氏が1955年（昭30）に「大正金時」と「常富長鶉」を交互栽植して自然交雑を行わせて、「常富長鶉」より得た交雑種の中から1957年（昭32）以降選抜固定を図って来たものである。1960年（昭35）に2系統選抜し「紅長1号」、「紅長2号」の仮名称を付し、1961年（昭36）に2系統を北海道立農業試験場十勝支場に寄せられた。十勝支場では1961年（昭36）～1962年（昭37）に両系統を生産力検定予備試験に供試し、多収を示した「紅長2号」を1963年（昭38）以降生産力検定試験に供試するとともに固定度の調査を行い、さらに1964年（昭39）からは特性検定試験、現地試験に供試して地方適否を確かめ、1966年（昭41）優良品種に決定し、「北原紅長」と命名された。

特性概要 1. 草姿は矮性で、草丈は「大正金時」より高く、稚苗の茎色は淡赤紫、花色は淡紅色を呈する硬莢種である。

2. 開花始は「大正金時」「常富長鶉」とほぼ同じ、成熟期は「常富長鶉」と同じで「大正金時」より3～5日程度おくれる早生種である。

3. 形状は「常富長鶉」に類似する腎臓形を呈し、粒色は「大正金時」よりやや淡い赤紫、1000粒重は「大正金時」より軽く、「常富長鶉」と同じかやや重い。種皮の厚さは「大正金時」「常富長鶉」よりややうすく、種皮歩合は「常富長鶉」より低く「大正金時」とほとんど同じである。

4. 「大正金時」より多収を示し、「常富長鶉」に比較しても収量は多く、ことに土地生産力の低いところなど比較的不良条件下での栽培でも減収程度が少ない。

5. 菜豆炭そ病に対しては一般に「常富長鶉」より被害は少なく、他の病害に対しては「大正金時」「常富長鶉」と大差がない。しかし、成熟期から収穫期にかけての雨湿等による褪色粒の発生はやや多い。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十 勝 農 試	7.13	9. 8	108	45	3.9	12.6	212	384	633	1963～1965
北 見 農 試	7.16	9.13	114	33	3.5	12.2	221	385	669	1964～1965
上 川 農 試	7.15	9. 6	106	52	2.1	17.8	265	494	697	"
中 央 農 試	7. 7	8.27	100	39	1.7	9.0	231	541	601	1965
原原種農場	7.11	8.31	99	42	3.8	14.5	184	298	639	1964～1965

6. 外見上の品質は「大正金時」「常富長鶉」と大差なく、煮熟した場合の肉質は粘質で、煮くずれがやや多くなる。

栽培適地と奨励態度 「北原紅長」の諸特性より栽培適地は「大正金時」あるいは「常富長鶉」に準ずるが、気象条件や土地条件に恵られない地帯において「常富長鶉」「大正金時」に配合して栽培する。

栽培にあたっては「常富長鶉」に準じてよいが、成熟期から収穫期にかけての雨湿等による褪色粒の発生に注意する必要がある。〔1975年（昭50）廃止〕

(6) 大正大手亡（大正大手亡）

来歴 「大正大手亡」の出所は明らかでないが、古くから河西郡札内村で栽培されていたもので、1955年（昭30）に帯広市幸福町の農家桑原俊一氏が、腐敗粒の発生が少なく、多収の本品種に注目して中札内の農家から種子を入手した。その後、桑原氏は小粒種の淘汰を続けて種子の増殖をはかったため漸次附近農家に広まった。本品種が帯広市幸福町を中心に普及しつつある段階で、大正農協から北海道立十勝農業試験場が特性等の調査を依頼され、1966年（昭41）より「大正大手亡」の仮名称をつけ生産力検定試験、特性検定試験などを行うと同時に、関係各農試の協力を得て地域性の検定を行い、1969年（昭44）優良品種に決定し、「大正大手亡」と命名された。

特性概要 1. 草姿は半蔓性で、草丈は「大手亡」とほぼ同じ、莢の出る時期が「大手亡」よりおそく、複葉は「大手亡」よりやや大きく、花は白色である。分枝数、着莢数共に「大手亡」よりやや少なく、莢は比較的上位節に多く着く。

2. 開花始、成熟期共に「大手亡」とほぼ同じ中生種である。

3. 莢色は「大手亡」と同様、未熟莢は淡緑色で成熟前に暗紫色となり、熟莢は淡黄褐色を呈する。子種の形状は短楕円形であり、粒大は「大手亡」よりやや小さく、粒色は「大手亡」と同じく白色である。

4. 子実収量は道東畑作地帯で「大手亡」に比べ6～7%多収を示す。

5. 炭そ病、角斑病の被害は「大手亡」と差がなく、菌核病は「大手亡」「改良大手亡」よりやや少ない傾向を示す。倒伏は「大手亡」と大差ないが、着莢位置がやや高いため、倒伏時の腐敗粒の発生が少ない。

6. 外観的な品質は「大手亡」「改良大手亡」よりまさり、特に登熟期間中に雨湿の害の多い年に

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	粒 重		
	月日	月日	日	cm	本	個	kg	kg	g	
十 勝 農 試	7.23	9.15	115	114	2.1	15.4	180	332	312	1966～1968
北 見 農 試	7.25	(9.29)	(133)	123	4.2	22.1	239	543	313	"
上 川 農 試	7.21	9.14	112	98	2.7	26.4	286	578	305	"
中 央 農 試	7.16	9. 8	107	84	2.2	12.8	216	484	280	"
原原種農場	7.17	9. 8	113	117	3.3	30.8	295	559	281	"

注 () は1967、1968の2ヶ年平均

は「大手亡」などより良質のものが生産される。種皮の厚さは「大手亡」「改良大手亡」よりややうすく、種皮歩合もやや低い。

栽培適地と奨励態度 熟期、草姿などの主要特性は「大手亡」に類似するが、上川、空知などの道央では多収を示していない。しかし、十勝、網走で多収を示し、良質なものが生産されるので、道東畑作地帯において「大手亡」に換えて奨励する。栽培は「大手亡」に準じて良いが、過度の密植、多肥栽培など特殊な栽培は避けるべきである。〔1975年（昭50）廃止〕

(7) 十勝白金時（十育E-6号）

来歴 「十勝白金時」は、北海道立農業試験場十勝支場で1958年（昭33）「大正白金時」を母とし、「白丸鴉」を父として人工交配を行ない、以後選抜固定をはかってきた。

1962年（昭37）から「3711」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、さらに1967年（昭42）以降は「十育E-6号」の系統名を付して生産力検定試験、特性検定試験を行うと共に、地域適応性検定試験ならびに現地試験に供試して適応性を確かめ、1970年（昭45）優良品種に決定し、「十勝白金時」と命名された。

特性概要 1. 主茎節数が12～13節で草丈が1 m前後の半蔓性硬莢種で、上位節の複葉は小形になる。

2. 稚苗の莖色は緑で、花色は白、莢色は淡緑であり成熟すると黄白色となる。

3. 開花始は7月下旬、成熟期は9月中旬で、「大正白金時」より約10日遅い中生種である。

4. 子実はやや長楕円形で白色を呈し、大きさは「大正白金時」より大きく、1000粒重で10～15%重い。

5. 子実収量は「大正白金時」に比べ30～50%多収を示すが、過繁茂による倒伏や、菌核病の多発した場合には収量が低下する。

6. 子実の外観的品質は、「大正白金時」と大差がなく、種皮の厚さは0.086mmで「大正白金時」よりうすく、種皮歩合もやや低い。煮熟した場合の肉質はやや粉質で、粘度は「大正白金時」よりやや低く、食味が良く、煮豆、甘納豆原料および上質白あん原料に適する。

7. 低地温下で播種された場合には「大正白金時」より発芽率が低下する場合がある。炭そ病に強く、角斑病にもやや強い。

栽培適地と奨励態度 「十勝白金時」は十勝、網走、上川などの菜豆栽培地帯において「大正白金時」に替えて栽培可能な品種であるが「大正白金時」に比べ成熟期が約10日ほど遅い中生種であるため、特に無霜期間の短い地帯での栽培は避けるべきである。なお、低地温下で発芽が

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重 g	試験年次
				草 丈 cm	分枝数 本	着莢数 個	子実重 kg	総 重 kg		
十 勝 農 試	7.20	9.13	112	93	3.8	15.0	243	400	701	1967～1969
北 見 農 試	7.22	9.22	125	99	4.3	20.0	326	651	760	"
上 川 農 試	7.19	9. 7	107	88	3.4	21.7	188	381	635	"
中 央 農 試	7.16	9. 5	110	78	2.9	14.0	271	575	546	"
原原種農場	7.16	9. 5	100	75	3.6	19.8	264	440	640	"

やや劣ることから、播種にあたっては必ず種子消毒を行ない、地温上昇が遅れた場合は播種期を多少遅らせるなどの注意が必要である。(1978年(昭53)廃止)

(8) 銀手亡(十育A-22号)

来歴 「銀手亡」は1960年(昭35)に大粒良質多収品種の育成を目標として、北海道立農業試験場十勝支場において「大手亡(網走)」を母とし、「大手亡(清水)」(改良大手亡)を父として人工交配を行い、 F_1 は温室で養成し、 F_2 以降はほ場に栽植し集団選抜を行い、 F_5 で個体選抜し以後選抜固定をはかってきた。1967年(昭42)に「2015」の系統番号で生産力検定予備試験に供試し、1968年(昭43)からは「十育A-22号」の系統名を付して生産力検定試験を行った。また、1969年(昭44)からは特性検定試験を行うとともに、地域適応性検定試験ならびに現地試験に供試し地方適否を確かめ、1971年(昭46)優良品種に決定し、「銀手亡」と命名された。

特性概要 1.草丈は「大手亡」とほぼ同じ120cm程度の半蔓性硬莢種で、稚苗の茎色、花色、莢色などは「大手亡」に類似し、莢は扁平で莢幅は広い。

2.開花始、成熟期はともに「大手亡」に比べ1～2日早い中生種である。

3.子実の形状は「大手亡」よりやや長めで、「改良大手亡」と同じ楕円形を呈し、色は白色で、「大手亡」より大きく、1000粒重で10%程度重い。

4.着莢数は「大手亡」よりやや少ないが、莢内粒数が多く、粒大も大きいので、収量は10%前後多収を示す。

5.子実の外観的品質は「大手亡」より良好で種皮は「大手亡」よりうすく、種皮歩合も低い。また製あん歩留は「大手亡」に比べやや高い。

6.菜豆炭そ病、角斑病、菌核病などの被害は「大手亡」と大差なく、倒伏の状態も「大手亡」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 「銀手亡」の栽培適地は主として十勝、網走、上川などの畑作地帯で、成熟期からみて現在「大手亡」が栽培されている地帯であればどこでも栽培可能である。また道央地帯においては「銀手亡」の多収性は多少低下するが、粒大、品質が良好であるため「大手亡」に替えて栽培しても良い。栽培は「大手亡」に準じて良いが、過度の密植あるいは多肥栽培は避けるべきであり、晩播による減収程度は比較的少ないが、子実の十分な肥大をはかるため播種期はおくらせない方がよい。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝農試	7.21	9.17	116	123	3.5	17.0	223	404	387	1968～1970
北見農試	7.20	(9.10)	(113)	114	3.6	21.9	203	542	337	1969～1970
上川農試	7.24	9.22	121	106	3.6	26.6	285	682	364	"
中央農試	7.19	9. 8	110	85	1.6	19.0	187	550	311	"
原原種農場	7.17	9.10	108	104	3.0	19.2	192	390	318	"

注 () 未成熟の年を除く

(9) 福粒中長 (十育D-7号)

来歴 「福粒中長」は、北海道立農業試験場十勝支場において、1960年(昭35)中長鶉種の大粒多収品種の育成を目的として「大正金時」を母とし、「中長鶉(上士幌)」(改良中長)を父として人工交配を行った。F₂~F₄は粒色、粒大子実収量などを対象に集団選抜し、F₅で個体選抜を行い、F₆以降は系統ならびに個体選抜を重ね固定をはかってきた。1967年(昭42)に予備選抜、1968年(昭43)は「十育D-7号」の系統名を付して生産力検定に供試した。1969年(昭44)以降は特性検定試験を行うと共に、地域適応性検定試験ならびに現地比較試験に供試し地方適否を確かめ、1972年(昭47)優良品種に決定し、「福粒中長」と命名された。

特性概要 1.草丈は約1m、主茎節数13節前後の半蔓性硬莢種で、稚苗の茎色、花色、英色等は「改良中長」に類似する。

2.開花始は「改良中長」とほぼ同じであるが、成熟期は「改良中長」より2~3日遅い中生種である。

3.子実の形状はやや長楕円形で、粒色は「改良中長」に類似するが斑紋色はやや濃い。粒大は「改良中長」よりまさり、1000粒重で約30%重い。

4.子実収量は着英数が多いので「改良中長」より5~10%ほど多収を示す。しかし、密植晩播などの栽培条件下では着英数の減少により減収することがある。

5.各種病害に対する反応は「改良中長」と差はなく、倒伏の程度も「改良中長」と大差がない。

6.子実の外観的品質は「改良中長」よりまさり、種皮は「改良中長」よりやや厚いが種皮歩合は低い。煮熟した場合の肉質は粉質で、食味も良好で煮豆に適する。

栽培適地と奨励態度 道央(上川、空知)道東(十勝、網走)の畑作地帯に適し、「改良中長」に換えて奨励する。栽培は「改良中長」に準じて良いが、過繁茂あるいは晩播による軟弱な生育は着英数の減少を招くことがあるので避けるべきである。また、子実が大きいため脱穀時に子実の損傷をおこし易いので注意する必要がある。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a当り		1,000粒重	試験年次
				草丈	分枝数	着英数	子実重	総重		
十勝農試	7.17	9.16	115	93	3.4	14.9	230	434	723	1968~1971
北見農試	7.16	9.15	118	90	2.8	16.5	252	590	705	1969~1970
上川農試	7.15	9.4	104	73	3.5	16.4	232	484	669	1969~1971
中央農試	7.15	9.5	106	53	2.3	13.0	166	423	635	"
原原種農場	7.14	9.4	98	71	3.5	15.2	218	422	605	"

(10) 福白金時 (十育E-10号)

来歴 「福白金時」は、1964年(昭39)北海道立十勝農業試験場において、早生矮性、大粒良質多収な白金時類の育成を目的とし、「十育B-11号」を母とし、「5823-C-B-4」を父として人工交配を行った。母親の「十育B-11号」は「紅金時」×「大正金時」の組合せにより育成された金時類で中生、矮性の多収、大粒、良質品種として1966年(昭41)優良品種「昭和

金時」となった系統である。父親の「5823—C—B—4」は「虎豆」に炭そ病抵抗性を付与する目的で「虎豆」×「大正白金時」から育成選抜した系統である。この組合せから選抜固定した系統に1969年（昭44）に「4201」、1970年（昭45）「十育E—10号」の系統名をつけ試験を行い、生産力、栽培条件に対する反応、地域性などについて検討した結果、1973年（昭48）優良品種に決定し、「福白金時」と命名された。

特性概要 1.「福白金時」の主茎節数は6節程度で矮性、硬莢種であり、草丈は45cm前後で「大正白金時」よりわずかに高いが、分枝数、着莢数などはほとんど差がない。

2.稚苗の莖色、花色、莢色や子実の形状および粒色などの一般性状は「大正白金時」に類似する白金時種である。

3.開花始は1日、成熟期は2日程度「大正白金時」より遅い早生種である。

4.炭そ病に抵抗性を持ち、角斑病、菌核病などの被害および倒伏程度は「大正白金時」と差がない。

5.子実は「大正白金時」に比べると19%多収を示すが、半蔓性で生育量の多い「十勝白金時」に比べると、子実収量が10%以上劣ることがある。

6.子実の外観的品質は「大正白金時」に劣らないが臍部の周囲にある黄色の環と種皮の胎色網斑はわずかに濃く、煮熟すると不明になる。

7.種皮は0.0846mmで「大正白金時」よりやややすく、種皮歩合も低い。煮熟した時の肉質は「大正白金時」と同様粘質であり、食味は良好で、煮豆、甘納豆の原料および上質白あん原料に適する。

栽培適地と奨励態度 「福白金時」は、十勝、網走、上川などの菜豆栽培地帯で「大正白金時」に換えて栽培出来る品種である。また「十勝白金時」の熟期や、半蔓性の栽培に支障がある場合はこれに代り得るものである。栽培は「大正白金時」に準ずるが、子実が大粒であるために脱穀時に子実の損傷をおこさないように注意する必要がある。

試験場所	開花始 月日	成熟期 月日	生育日数 日	成熟期における			10a 当り		1,000粒重 g	試験年次
				草 丈 cm	分枝数 本	着莢数 個	子実重 kg	総 重 kg		
十 勝 農 試	7.13	9.5	103	47	4.8	14.8	223	419	774	1970～1972
北 見 農 試	7.20	(8.28)	(100)	50	4.5	15.8	257	620	821	1971～1972
上 川 農 試	7.8	8.27	99	42	4.6	12.5	149	394	703	"
中 央 農 試	7.15	8.28	97	34	4.9	13.0	170	381	749	"
原原種農場	7.13	8.31	93	36	3.5	12.4	175	365	706	"

注 () 内は1971年の成績を除く

(1) 姫手亡（十育A—29号）

来歴

「姫手亡」は、手亡類の早生、短程、良質多収を目標に1968年（昭43）北海道立十勝農業試験場で「十育A—19号」（「Sanilac Pea Bean」×「改良大手亡」）を母とし、「Improved White Navy」を父として人工交配を行い、以後固定選抜をはかってきたものである。1972年（昭47）に「十系A—6号」の系統名をつけ、生産力検定予備試験に供試した。1973年（昭48）「十育A—29

号」の系統名で、育成系統生産力検定試験、育成系統地域適応性検定試験を行うとともに、1974年（昭49）からは特性検定試験および育成系統比較現地試験を行い、生産力や栽培条件に対する反応、地域性について検討し、1976年（昭51）優良品種に決定し、「姫手亡」と命名された。

特性概要 1.主茎節数が9～10節程度の蒴性硬莢種である。草丈は60cm前後で「銀手亡」（130～150cm）に比べ著しく低く、稚苗の茎色は緑、花色は白で「銀手亡」と変わらない。熟莢は「銀手亡」より小さく、分枝数や莢数は「銀手亡」より多い、

2.開花始は「銀手亡」より1日遅く、成熟期は3日早い中生の早に属し、「銀手亡」に比べ子実重歩合が高い。

3.炭そ病や菌核病などの耐病性は他の品種と変わらず、耐倒伏性は「銀手亡」より強い。

4.低温条件下で莢数や莢内粒数の減少が比較的少なく、「銀手亡」に比べ子実重の減少割合が少ない。

5.子実収量は「銀手亡」に比べ、粒大はやや劣るが、莢数が多いため16%程度多収を示し、「銀手亡」は莢がなく倒伏に強いことから、多肥栽培でより増収傾向を示す。

6.子実の外観的品質は、「銀手亡」よりやや劣り、種皮の厚さは「銀手亡」よりうすく、種皮歩合が低い。煮熟したときの肉質は粉質で粘性は「銀手亡」より低い。

栽培適地と奨励態度 「姫手亡」の栽培適地は、十勝、網走、上川などの畑作地帯で、従来の「大手亡（芽室）」と全面的におきかえ得る品種であり、莢がなくピーンハーベスタの使用が容易なため、「銀手亡」ともかえ得る品種である。栽培は「銀手亡」に準じてよいが、倒伏に強いので施肥量をやや多くすることにより、多収が期待できる。晩播による減収割合は少ないが、適期に播種する方がよく、栽植密度は10アール当り8,300株（2本立）程度確保し、欠株を防止する。成熟後、刈り遅れると地面に接している莢が腐敗しやすくなるので早めに収穫するのがよい。各種病害に対しては従来の品種と同様に抵抗性がないので、適期に防除を行うよう注意する必要がある。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十 勝 農 試	7.23	9.15	113	58	6 .6	28.8	301	489	320	1973～1975
北 見 農 試	7.23	9.13	113	60	7 .1	28.2	312	564	349	1973～1974
上 川 農 試	7.16	8.31	104	51	5 .1	22.7	248	548	310	"
中 央 農 試	7.15	8.31	102	39	4 .2	21.8	235	527	289	"
原原種農場	7.13	8.27	99	34	3 .7	20.5	171	328	283	"

⑫・改良虎豆（中育T11号）

来歴 「改良虎豆」は、1969年（昭44）北海道立中央農業試験場が、胆振、後志、北見、石狩地方より収集した虎豆在来種のうち、胆振支庁洞爺村産のものから、分離固定をおこなって育成したものである。1974年（昭49）から「中育T11号」の系統名で地域適応性検定試験、現地試験に供試して地方適否を確かめ、1977年（昭52）優良品種に決定し、「改良虎豆」と命名された。

特性概要 1.一般性状 「虎豆」に類似し、草丈は約3m、主茎節数は30節程度のまん性の半硬

莢種で、幼茎の色は淡緑、葉は広く極淡緑で、しわがなく平滑である。

2.開花期および成熟期 開花期は7月中旬～下旬、成熟期は9月下旬～10月上旬で「虎豆」と同じく晩生種に属する。

3.子実 「虎豆」と同様に、形状は稍長めの球形である。色は白地に臍の周囲だけ淡肉色地に赤褐色の斑紋がある。粒大はほぼ「虎豆」と等しく大粒である。

4.収量性 「虎豆」にくらべて一莢内粒数はやや少ないが、着莢数が多く、15～20%多収である。

5.耐病性 「虎豆」同様に炭そ病、輪紋病にやや弱く、菌核病、黄化病、インゲンモザイク病には弱い、角斑病にはやや強い。

6.品質 外観品質、種皮の厚さ、種皮歩合とも「虎豆」と大差なく、煮熟した場合の煮崩れが少なく、肉質は粉質で食味は良好であり、主として煮豆の原料に適する。

栽培適地と奨励態度 胆振地方を中心とした道央部に適し、従来の品種「虎豆」におきかえて奨励する。

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
			草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
中央農試	月日 7.19	月日 (9.29)	cm 338	本 3.0	個 33.7	kg 225	kg (613)	g 732	1973～1976
北見農試	7.22*	(9.24) 達せず	300	—	37.1	247	498	718	1974～1975
虻田町	7.21*	9.27	295	—	38.2	179	403	751	1974～1976
壮瞥町	7.10*	9.27	281	—	44.8	257	—	745	1976

注 ・北見農試、虻田町、壮瞥町の開花期の項は開花始である。

成熟期の () 内は1973年の成績を除く

総重 () 内は1975、1976年の成績

＜花 豆＞

(13) 大白花 (中育M5号)

来歴 「大白花」は、1969年(昭44)北海道立中央農業試験場が、胆振、後志、北見地方より収集した白花豆在来種のうち、胆振支庁壮瞥町産のものから系統分離法(系統集団選抜法)により選抜、育成した。1974(昭49)から「中育M5号」の系統名で地域適応検定試験、現地試験に供試して地方適否を確かめ、1976年(昭51)優良品種に決定し、「大白花」と命名された。

特性概要 1.一般性状 草丈は約3m、主茎節数が30節程度のつる性の硬莢種で、幼茎の色は緑、花色は白で莢は大、莢色は褐色である。

2.開花期および成熟期 開花期は7月中旬、成熟期は9月下旬で、年によっては成熟期に達し

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10 a 当り		1,000粒重	試験年次
			草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重		
中央農試	月日 7.16	月日 (9.20) 達せず	cm 322	本 3.3	個 27.8	kg 273	kg 578	g 1,583	1973～1975
北見農試	7.19	達せず	309	—	26.1	319	827	1,753	1974～1975
虻田町	7.13*	9.25	290	—	40.1	324	657	1,667	"
壮瞥町	7.4*	9.20	360	—	44.3	289	—	1,680	1975

注 ・虻田町、壮瞥町の開花期の項は開花始である。

成熟期の () 内は1974年を除く

ないこともあるが、胆振地方では9月下旬に成熟期に達する。

3. 子実 形状はじん臓形で粒色は白である。粒大はきわめて大きく、1000粒重でほぼ1600gに近い。

4. 収量 多収であり、10a当り250kgから300kg前後の収量を示す。

5. 耐病性 在来種の白花豆同様、菌核病には弱い。炭そ病、輪紋病、角斑病、インゲンモザイク病などに対しては強い。

6. 品質 種皮の厚さは0.175mmで、普通菜豆より厚く、種皮歩合も8.8%でやや高いが、煮熟した場合の煮崩れが少なく、肉質は粉質で食味は良好である。煮豆、甘納豆の原料に適する。

栽培適地と奨励態度 胆振地方を中心とした道央部および北見周辺の畑作地帯に適し、在来の白花豆と全面的におき換えて奨励する。

11. えん豆

(1) 小緑（十育14号）

来歴 「小緑」は、1964年（昭39）北海道立十勝農業試験場で「アラスカ」を母とし「グリーンピース」を父として人工交配を行い、 $F_2 \sim F_3$ 世代は集団選抜、 F_4 以降で個体並びに系統選抜を行って固定をはかったものである。1962年（昭37）には、「5603—25」の系統番号で、また1963年（昭38）からは「十育14号」の系統名をつけて、生産力検定試験および特性検定試験を行うとともに、育成系統比較現地試験を行って地方適否を確かめ、1965年（昭40）優良品種に決定し、「小緑」と命名された。

特性概要 1. 草姿は矮性で、草丈は「改良青手無」に比較して40cm内外、「アラスカ」に比し50～60cm低い。

2. 托葉および小葉は「改良青手無」よりも小さくやや濃緑色を呈し、莢は小型で短かく「アラスカ」に類似するが、嫩莢色は「アラスカ」よりもやや濃い。熟莢は微黄色を呈する硬莢種である。

3. 子実の形状は球形で、粒大が「アラスカ」よりやや小粒の緑色種で、小皺がなく平滑である。

4. 開花始は「改良青手無」より僅かに遅いか同程度で、「アラスカ」に比し約2週間ほど遅く、成熟期は「改良青手無」と同程度か僅かに早く、「アラスカ」より10日前後遅い晩生種である。

5. 着莢はきわめて多く、多収である。各地で「改良青手無」に比し23～31%の多収を示している。

6. 草丈が低いと、倒伏の程度は少なく、倒伏する時期も遅いので、腐敗粒の発生は「改良青手無」より少ない。

7. 立枯性病害に対しては「アラスカ」より強い。

8. 品質は、褪色粒が少なく、粒揃いがきわめてよく、小粒種の「アラスカ」に比べて良好である。

9. 戻しグリーンピースとしての缶詰適性は、腹割れ、染色などの点で「アラスカ」「改良青手無（篩下）」に遜色ない。

栽培適地と奨励態度 道内の青えん豆の栽培地域の全域で、缶詰原料としての「アラスカ」に

代えて栽培する。栽培法は「改良青手無」に準ずればよいが、矮性種なのでとくに生産力の低い圃場ではやや密植にして多収が期待できる。また開花より成熟までの期間が「改良青手無」より短いので、適期収穫に留意する。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
十勝農試	月日 6.24	月日 8.4	日 100	cm 73.0	本 3.4	個 38.3	kg 246	kg 511	g 186	1962～1964
北見農試	7.2	8.11	88	67.3	—	33.7	225	453	136	1963～1964
上川農試	6.26	8.2	92	83.3	—	43.3	304	668	219	"
原原種農場	6.26	—	—	84.1	—	53.1	330	680	179	1964

(2) 大緑 (北育37号)

来歴 「大緑」は、1963年(昭38)北海道立農業試験場十勝支場で、大粒、良質、多収を目的として、「十育11号」を母とし、「6202」(「アンダーマン」×「5601-125」)のF₁を父として人工交配を行った。交配後、F₂以降は北海道立北見農業試験場に移してF₄まで集団選抜、F₅で個体選抜を行い、F₆以降、系統の選抜固定をはかってきたものである。1970年(昭45)に「北系6号」、1971年(昭46)からは「北育37号」の系統名を付して生産力検定試験を行うとともに、地域適応性検定試験ならびに現地試験に供試して、地方適否を確かめ、1975年(昭50)に優良品種に決定し、「大緑」と命名された。

特性概要 1.「改良青手無」に比し、主茎節数がやや少なく、草丈もやや低い半蔓性の硬莢種である。葉や莢は「改良青手無」よりやや大きい。

2.一莢内粒数は「改良青手無」より約40%多く、子実の形状は「改良青手無」に類似し、粒色は「改良青手無」より緑色がやや濃い。

3.1000粒重は「改良青手無」より15～20%重い大粒種である。

4.開花始、成熟期は「改良青手無」と同じか1～2日遅れる程度の晩生種である。

5.子実収量は「改良青手無」より15～20%多収である。しかし粒大が十分確保されない条件下では、「改育青手無」並みかそれより劣る場合もある。

6.倒伏は「改良青手無」並みで、腐敗粒の発生はやや多い。しかし子実の褪色粒の発現が少なく、外観品質は「改良青手無」とほぼ同じである。

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	試験年次
				草 丈	分枝数	着莢数	子実重	総 重		
北見農試	月日 6.30	月日 8.11	日 105	cm 99	本 2.2	個 25.0	kg 231	kg 587	g 367	1971～1974
中央農試	7.2	8.10	99	72	2.3	20.7	177	423	368	1971～1973
原原種農場	6.26	8.3	96	75	1.7	21.9	198	404	392	1971～1974
上川農試	7.1	8.3	89	67	1.8	24.6	197	450	373	"
十勝農試	6.26	8.5	103	96	1.7	20.8	180	507	360	"

7. 細菌性の病害に対して「改良青手無」より被害が多い（品種決定後に判明）。
 8. 加工適性（煮豆、甘納豆、煎豆、あん）は「改良青手無」とほとんど差がない。

栽培適地と奨励態度 主として網走および上川、十勝の青えん豆栽培地帯に適する。

粒大が十分確保されない条件では多収性が発揮されないため、土地生産力の低い地帯、あるいは夏期に干ばつなどの起きやすい地域での栽培を避ける。なお過度の密植や、多肥あるいは遅播き栽培は倒伏を多発し、腐敗粒を多くするので避ける。

(3) 北海赤花（北育B—2号）

来歴 「北海赤花」は、1964年（昭39）北海道立十勝農業試験場で、短稈、赤えん豆良質・多収を目標として、「十育16号」（「アラスカ」×「グリーンピース」）を母に、在来種の赤えん豆（中札内）を父として人工交配し、F₁以降北海道立北見農業試験場で集団育種法により育成した。F₂～F₄世代は集団養成し、F₅世代で個体選抜を行い、F₆世代以降、系統の選抜固定をはかってきた。1973年（昭48）に「8103」の系統番号で生産力検定予備試験、1974年（昭49）からは「北育B—2号」の系統名を付して生産力検定試験、また1975年（昭50）からは各農試において地域適応性検定試験、および現地試験を行い、赤えん豆の主産地における地方適否を確かめた。1978年（昭53）優良品種に決定し、「北海赤花」と命名された。

- 特性概要 1. 草丈は80cm前後の矮性種で「在来種（南富良野）」よりもやや低い。茎は細く、節間が短かく、下位節よりの分枝が多い。
 2. 子葉は淡黄色、葉は淡緑色でやや小さく、若茎色および葉身基部、花梗の一部は紫赤色を帯びる。
 3. 1莢内粒数は、「在来種（南富良野）」より多く、子実は帯緑褐色地に赤褐色の斑紋がある赤えん豆で、扁球（不整形）で大きな皺があるが「在来種（南富良野）」よりやや少ない。
 4. 1000粒重は280g前後の中粒種で「在来種（南富良野）」よりわずかに軽い。
 5. 開花始は7月上旬で、「在来種（南富良野）」並みである。熟期は晩生種に属するが、「在来種（南富良野）」より2日程度早い。
 6. 収量は、「在来種（南富良野）」に比し、育成地で8%，他の試験機関では21～38%多収である。
 7. 草丈が低いことから倒伏する時期がやや遅れ、腐敗粒の発生は少ないが、成熟枯凋後の茎が「在来種」よりやや軟かい。
 8. 外観品質は「在来種（南富良野）」並みであるが、皺がやや少なく、種皮はやや薄く吸水が早

試験場所	開花始	成熟期	生育日数	成熟期における			10a 当り		1,000粒重	層豆歩合	試験年次
				草丈	分枝数	着莢数	子実重	総重			
	月日	月日	日	cm	本	個	kg	kg	g	%	
北見農試	7. 6	8.14	101	88	6.1	37	251	533	279	8.8	1974～1977
上川農試	6.30	8. 1	80	60	6.7	34	280	549	257	4.2	1975～1977
十勝農試	6.29	8. 3	102	98	4.8	36	259	580	236	2.8	"
中央農試	6.25	8. 5	90	101	7.0	26	134	438	276	11.2	1975
原原種農場	6.23	8. 1	99	74	6.5	31	229	500	283	6.0	"

い。

栽培適地と奨励態度 全道の畑作地帯に適し、赤えん豆「在来種」と全面的におきかえて栽培する。栽培法は「在来種」に準じてよいが、成熟枯凋後の茎が「在来種」よりやや軟かい特性から、適期収穫を励行すべきである。

12. 馬鈴しょ

(1) エニワ (北海22号)

来歴 「エニワ」は、1952年(昭27)北海道農業試験場(作物部普通作物第四研究室)において、「島系267号」を母、「島系232号」を父として、人工交配を行い、1953年(昭28)実生を養成し、同地で選抜を重ねてきた。1958年(昭33)「北海22号」の系統名をつけ、関係道府県へ配付して生産力及び地方適否を試験した。1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「エニワ」(ばれいしょ農林12号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草丈は「紅丸」程度で、よく繁茂する。

2. 茎は太くなく、茎数は少ないが、分枝や側枝の発生はやや多い。茎には着色がみられず、茎翼は直であり、葉色はやや濃い。

3. いもの形状は偏円形で、いもの皮色は淡かっ色で、全面ラゼット状を呈する。

4. いもは中、大粒が多く、粒ぞろいがよい。目は浅く、目の数は中ぐらい、肉色は白い。蒸しいもは粉質で、食味はよい。ただし、中心空洞ができやすく、かっ色心腐も多いので、食用には適さない。

5. 花は白色で、その数は中ぐらい。開花期間は長いほうである。

6. 熟期は「農林1号」程度である。

7. 収量は「農林1号」と大差ない。肥沃地においてよい成績を示す。

8. でん粉歩留りは「農林1号」より1～2%高く、でん粉原料用に適している。

9. 疫病には強く、R₁遺伝子を保有している。

10. 比較的冷涼な気候に適し、高温乾燥には弱い。

11. 休眠は長い。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、排水のよい肥沃地に好適する。二次生長の発生が多いところにも適合する。

試験場名	茎葉枯凋期	茎長	10a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	でん粉重			
北海道農試 (島松研究室)	月. 日 9.12	cm 78	kg 2,911	kg 506	g 102	% 18.4	1957～ 1960
同 (紋別研究室)	9.16	64	2,488	478	(86)	20.1	1958～ 1960
上川支場 (士別試験地)	9.26	87	3,677	705	(103)	20.2	"
北見支場	9.22	91	3,489	658	(113)	19.7	"
十勝支場	9.13	72	3,439	676	96	18.8	"

「紅丸」や「農林1号」程度の栽植密度や施肥量とするのが望ましい。休眠が長いので、浴光催芽や早期培土を行うとよい。塊茎肥大がおそいので、早掘りには適していない。ふく枝が比較的長いので、培土はやや早めに行い、しかも十分かけるようにする。

(2) ユキジロ (北海30号)

来歴 「ユキジロ」は、1953年(昭28)北海道農業試験場(作物部普通作物第四研究室)において、「ケネベック」を母、「農林2号」を父として人工交配を行い、1954年(昭29)実生を養成し、同地で選抜を重ねた。1958年(昭33)には「島系436号」、1959年(昭34)には「北海30号」の系統名をつけて関係道府県へ配付し、生産力および地方における適否を試験した。1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「ユキジロ」(ばれいしょ農林13号)として命名、登録された。

- 特性概要 1.草丈は「農林1号」よりやや高く、良く繁茂する。
- 2.茎は太く、茎数は少ないが、分枝や側枝はやや多い。茎には淡赤色の着色があり、茎翼は波状であり、葉色は緑である。
- 3.いもの形状は卵形又は偏卵形で、皮色は黄白色である。
- 4.いもは大粒が多く、粒ぞろいはよい。目の数は少なく、目は浅い。肉色は白で、蒸いもはやや粉質で、肉色に変色することが少なく、食味はよい。いもの冠部に亀裂が発生することがあるが、かっ色心腐はほとんど発生しない。これらのことから、生食用、ならびにマッシュポテトやポテトチップなどの加工食品用に好適している。
- 5.花は淡紫色で花べんの先が白く、大きさは小さく、数はきわめて少ない。つぼみのうちに落下するものが多い。
- 6.熟期は「農林1号」とほぼ同じ中晩生種である。
- 7.収量は、比較的安定し、「農林1号」にやや優ることが多い。
- 8.でん粉歩留は「農林1号」よりわずかに低く、でん粉粒子も小さいので、でん粉原料用には適さない。
- 9.疫病には強いほうであり、R₁遺伝子を保有している。軟腐病には強く、青枯病には弱い。
- 10.休眠は長い。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、排水のよい肥沃なところに好適する。排水不良地や

試験場名	茎葉枯凋期	茎 長 cm	10 a 当り		上 い も 平均1個重 g	でん粉重 %	試験年次
			上いも重 kg	でん粉重 kg			
北海道農試 (島松研究室)	月. 日 9. 13	80	3,146	488	132	16.5	1957 ~ 1960
同 (紋別研究室)	9. 11	66	2,666	453	(117)	18.0	1958 ~ 1960
渡 島 支 場	9. 11	119	3,170	371	102	12.7	1960
上 川 支 場 (士別試験地)	9. 25	82	3,977	677	132	18.1	1959 ~ 1960
宗 谷 支 場	9. 23	58	2,901	482	99	17.6	1958 ~ 1960
北 見 支 場	9. 20	88	4,028	648	125	17.1	"
十 勝 支 場	9. 15	64	2,822	449	109	16.9	"

低湿地には適さない。都市近郊などの食用いも生産地帯における栽培に適している。

窒素質肥料の過用をさけ、栽植密度は「農林1号」程度とする。萌芽がおそいので、浴光催芽や早期培土を行うのがよい。培土は、なるべく早めに行い、ふく枝が長いので、土は十分かけるようにする。

いもの肥大は早いほうなので、早掘りもある程度可能である。腐敗いもは、予め貯蔵前に除去する。

(3) ホッカイアカ (北海41号)

来歴 「ホッカイアカ」は、1956年(昭31)北海道農業試験場(作物部作物第4研究室)において、「2070-ab(31)」を母とし、「島系290号」を父として人工交配を行い、1957年(昭32)に実生を養成したものである。1961年(昭36)「島系455号」、1962年(昭37)に「北海41号」の系統名を付け、地方における適否を検討した。1965年(昭40)優良品種に決定し、農林省に新品種「ホッカイアカ」(ばれいしょ農林15号)として命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「農林1号」よりやや長く、茎数はやや少ない。草姿は開張型であり、分枝が発生しやすい。

2. 萌芽直後の茎葉は黒紫色を呈する。

3. 茎はかっ色ないし紫色を呈し、細い。小葉は小さく、その着生は疎である。葉色は濃緑である。

4. 花は淡赤紫色であるが、開花はまれである。

5. いもは長紡すい形、目は多くて浅い。皮色は赤かっ色で、肉色は淡黄色である。

6. いも着は密で、いも数は多い。粒大は中粒が多く、粒ぞろいはよくない。

7. 枯凋期は「農林1号」よりおそい極晩生種であるが、いもの肥大は比較的早い。茎が直立して分枝が少ない場合は、枯凋が早く、収量が上らない傾向がある。

8. でん粉価は18%以上で、「農林1号」より2~3%高い。でん粉原料用に向いているが食味もよい。

9. 疫病抵抗性遺伝子 R_2, R_4 を持ち、レース2・4または1・2・4などが発生しないかぎり罹病しない。

試験場名	茎葉枯凋期	疫病罹病度	10a 当り		でん粉価	試験年次
			上 いも 重	でん粉重		
	月. 日		kg	kg	%	
北海道農試	•	2.0	3,242	540	17.7	1962~
道立農試						1964
(岩宇試験地)	9.10	3.5	4,018	713	17.6	1962~
十勝支場	9.13	1.4	3,193	598	18.7	1963
根室支場	10. 4	強	2,632	505	20.4	1962~
北見支場	9.20	1.0	3,338	617	19.4	1964
宗谷支場	10. 2	2.7	4,066	575	19.4	"
天北支場	9.19	0.1	3,061	550	18.4	"
上川支場	*	1.7	4,160	829	20.9	"
(士別試験地)						

注 • 年により霜によって枯凋した年があることを示す。

Yウイルスに罹病するとストリークがみられる。青枯病には強くないが、軟腐病にはやや強い。
栽培適地と奨励態度 地域適応性が大と考えられるので、主要でん粉原料地帯にはどこでも奨励できる。しかし、9月に曇天降雨が多く、塊茎の疫病発生が多い地帯では避けたほうがよい。

「紅丸」、「農林1号」などの一部とおき換えられるが、一応晩生品種として取扱ひ、作付割合は工場操業の点から考え、計画的に決定したほうがよい。地力の高い所で、密植し、やや多肥とするのがよい。

いもの着生は密で掘取りは容易であるが、形が長いので注意がいる。疫病には抵抗性であるが、本品種を侵かすレースの発生があった場合は、従来の品種と同様疫病の防除に努めなければならない。

(4) シレットコ (根育3号)

来歴 「シレットコ」は、1958年(昭33)北海道農業試験場(作物部作物第四研究室)において、「北海24号」を母とし、「島系291号」を父として人工交配を行い、1959年(昭34)北海道立農業試験場根室支場でその交配種子の分譲をうけて実生を養成し、以後選抜を加えてきたものである。1964年(昭39)「根系9号」、1966年(昭41)「根育3号」の系統名を付け、関係試験機関および現地で生産力および地域適応性を検討した。1967年(昭42)優良品種に決定し、農林省に新品種「シレットコ」(ばれいしょ農林16号)として命名、登録された。

特性概要 1. 茎は太く、やや高く、緑色を呈し、一部に赤紫色が分布している。草姿は直である。

2. 小葉はやや大きく、その色はややうすい緑色を呈している。

3. 分枝はやや少なく、複葉数もあまり多くはない。

4. 花色は白、開花数は多いが花粉は少なく、自然結果はあまりみられない。

5. いもの形は卵形または偏卵形で、中、大粒が多く、粒ぞろいがよい。皮色は淡黄白、目の深さはやや浅く、外見はやや良好である。肉色は白、中心空洞はほとんどみられない。

6. 枯凋期は「農林1号」よりおそく、「ホッカイアカ」程度の晩生種である。

7. いも着はやや疎で、着生位置がやや深い、収穫作業の支障にはならない。

8. 収量はきわめて多く、多肥栽培や、やや密植において増収が期待される。食味は比較的良好である。肉質は粉質である。

試験場名	茎葉枯凋期 月 日	生育日数 日	茎長 cm	疫病罹病度	10 a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価 %	試験年次
					上いも重 kg	でん粉重 kg			
根釧農試	(10. 9)	143	69	0.3	2,922	493	120	18.1	1963 ~ 1966
上川農試	10. 3		81	3.3	3,951	678	115	18.2	1964 ~ 1966
十勝農試	9.20		84	1.3	3,310	561	119	17.5	"
北見農試	9.29		112	1.0	4,576	703	122	16.4	"
天北農試	10. 5		63	1.1	3,690	600	117	17.0	"
天塩支場	9.27		78	2.4	3,424	542	103	16.4	"
北海道農試	9.23		86	0.3	2,910	455	132	16.6	1965 ~ 1966

9. でん粉価は「農林1号」よりやや高い。でん粉重は「農林1号」、「エニワ」より多く、「ホッカイアカ」程度である。でん粉の粒子は「農林1号」よりやや大きく、「ホッカイアカ」程度である。

10. 疫病抵抗性遺伝子 R_1 , R_2 を保有し、疫病に対し著しく強いが、これを侵すレースが発生した場合は、従来の品種に準じた防除が必要である。塊茎腐敗は少ない。

Xウイルス病や脊枯病には弱いほうであるが、軟腐病には中ないしやや強い。

11. 休眠は中ないしやや短い。

栽培適地と奨励態度 地域適応性はかなり広いものと考えられるが、とくに道東、道北（根釧、斜網、天北）および後志地帯に好適する。

(5) ビホロ（北海45号）

来歴 「ビホロ」は、1959年（昭34）北海道農業試験場（作物部作物第四研究室）において、「北海29号」を母とし、「Hochprozentige」を父として人工交配を行い、実生養成後選抜育成したものである。1965年（昭40）「島系475号」、翌年「北海45号」の系統名を付け、地方における適否を検討した。1969年（昭44）優良品種に決定し、農林省に新品種「ビホロ」（ばれいしょ農林17号）と命名、登録された。

特性概要 1. 草姿はやや開き、茎長は「農林1号」より長く、茎数は4本前後であるが、分枝が多く、茎は太くて強壮である。

2. 茎色は緑で、一部に赤紫色の着色がある。葉色はやや濃い。

3. 小葉の幅はややせまく、着生は普通である。

4. 花色は淡青で、花数は多く、花粉も多い。

5. いもは球に近い卵形で、その着生はやや疎で、位置はやや深い。形は整一であるが、粒ぞろいはよくない。皮色は淡かっ色で、ラゼットがあり、目の深さは中で、外見はだいたいよい。

6. 極晩生種で、通常10月上旬の霜により枯凋する。

7. 疫病抵抗性主働遺伝子はないが、茎葉の疫病にはきわめて強く、無防除栽培でもかなりの収量をあげることができる。

8. 開花期前後に上位葉が内側に巻くが、これはウイルス罹病によるものではない。

9. でん粉価がごく高く、26%ぐらいである。

10. いも重は多くはなく、また多肥栽培での増収効果も大きいとはいえない。しかし、年次変異は少ない。

11. でん粉重は高く、「農林1号」の33%増を示す。

12. でん粉粒子は、従来の品種に比べて格段と大きい。

13. Yウイルスに罹病するとストリークが発生し、軟腐病にはやや強く、脊枯病には弱いようである。塊茎にはかっ色心腐その他の変色がやすい。

栽培適地と奨励態度 天北、上川北部、網走、十勝などのでん粉原料地帯に適する。

既往の「ホッカイアカ」や「シレットコ」などよりでん粉重が上回り、疫病に対する広義のほ場抵抗性をもつため、より安定した収量が得られることなどから、これら2品種の大部分と徐々に交替していくべきものと考えられる。

極晩生で、いもの肥大もおそいため、生育期間の短い地方では能力を十分発揮できない恐れ

がある。

収穫や運搬の際の打撲によって、塊茎内部の変色や傷が目立ちやすく、地域によっては腐敗が多い。このため、種いもの貯蔵や取扱いには特に注意しなければならない。

試験場名	茎葉枯凋期	生育日数	茎 長	10 a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
				上いも重	でん粉重			
	月、日	日	cm	kg	kg	g	%	
北海道農試	・	—	93	2,744	696	106	26.3	1966 ~ 1968
天北農試	・	—	65	2,606	686	92	25.5	1967 ~ 1968
北見農試	・	—	131	3,709	812	112	22.9	1966 ~ 1968
上川農試	・	—	86	3,165	813	101	26.7	1967 ~ 1968
中央農試	9.25		82	2,975	698	76	24.6	"
十勝農試	10. 4	121	93	2,720	689	83	26.0	1966 ~ 1968
根釧農試	10. 4	117	72	2,094	532	70	26.4	1967 ~ 1968

注 ・：霜による枯凋のあることを示す。

(6) タルマエ（北海47号）

来歴 「タルマエ」は、1960年（昭35）北海道農業試験場（作物部作物第四研究室）において、「オオジロ」を母とし、「Hochprozentige」を父として人工交配を行い、実生の養成と選抜を加えてきたものである。1966年（昭41）「島系479号」、1967年（昭42）「北海47号」の系統名を付け、地方における適否などを検討した。1969年（昭44）優良品種に決定し、農林省に新品種「タルマエ」（ばれいしょ農林18号）と命名、登録された。

特性概要 1.草姿は中程度で、「農林1号」よりやや開いている。

2.茎長や茎数は「農林1号」並で、茎には着色がなく緑である。

3.葉色は緑（中）。小葉はやや大きく、着生は密であるが平滑で、やや光沢が感じられる。

4.花色は淡紫で、その数は多い。

5.いもは扁平な長卵形で、その着生は密である。一個重がやや小さい場合がある。皮色は淡かっ色で、目の数は中、その深さも中であるが、退化葉跡の切込みが鋭い傾向がある。いもの外見はやや劣る。

6.熟期は、「農林1号」より早い中晩生種である。

7.いもの肥大は「農林1号」と同様か、または早い。でん粉価が高いので、でん粉重では常に20～30%上廻っている。

最終的な収量は「農林1号」並で、でん粉価は21%前後である。

8.多肥栽培で増収するが、密植効果は少ない。

9.でん粉粒子は「農林1号」より大きい。

10.疫病抵抗性主働遺伝子を持っていない。ウイルス病には特に弱くはないが、えそ状のモザイクが散発的に発生することがある。軟腐病には弱い。

栽培適地と奨励態度 全道一円のでん粉原料地帯に適応する。現在のでん粉原料用品種は中晩ないし晩生品種で占められているが、でん粉工場の操業上もっと早熟性のものが要望されてい

ることもあり、当初は2割、将来は5割以上を本品種に交替してもよいと考える。

でん粉蓄積はつねに「農林1号」を上回るので、早掘りしてもよい。

初期生育はおう盛で、茎葉も繁茂の傾向にあるので、栽植密度はやや疎とするのが望ましい。疫病に対しては「紅丸」同様の防除をする必要がある。

試験場名	茎葉枯凋期	生育日数	茎 長	10 a 当り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
				上いも重	でん粉重			
北海道農試	月. 日 9.12	日 107	cm 74	kg 3,187	kg 625	g 90	% 20.5	1966 ~ 1968
天北農試	9.18	109	42	2,777	521	89	19.6	"
北見農試	9.11	97	104	4,084	715	93	18.4	"
上川農試	9.23	113	65	3,825	838	94	22.9	1967 ~ 1968
中央農試	9.13	105	74	3,988	737	88	19.8	"
十勝農試	9.13	101	74	3,152	579	75	19.0	1966 ~ 1968
根釧農試	9.24	98	53	2,491	512	65	21.6	1967 ~ 1968

(7) ワセシロ (根育11号)

来歴 「ワセシロ」は、北海道立農業試験場根室支場において、1962年(昭37)「根系7号」(「咸南白」×「島系277号」)を母とし、「北海39号」(「オオジロ」×「96-56」)を父として交配し、真正種子を得、翌年実生を養成したものである。1967年(昭42)「根育11号」の系統名をつけ、地方における適否を検討した。1974年(昭49)優良品種に決定し、農林省に新品種「ワセシロ」(農林20号)と命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「男爵いも」より高いが、低い方に属し、草姿はやや開いている。茎には淡紫色の着色があり、茎葉はやや波状を呈する。

2. 小葉は大きく、その色はややうすい緑色を呈している。

3. 茎は太く、茎数及び分枝は少ない。

4. 花色は紫で、日が経つと淡くなる。

5. いもの形は偏卵形ないし偏球形どあり、皮色は淡黄白で、「男爵いも」より白く、目の深さは中で「農林1号」程度である。いも肌は滑である。外見はよい。中心空洞はほとんどみられない。

6. 茎葉の枯凋は、「男爵いも」に比べ疫病に強いいため数日おそいが、早生種に属し、いもの肥大からみるとむしろ早い。

7. いも着は中で、ふく枝の離れはよい。

8. いもの肥大が早く、早生としてはごく多収である。粒ぞろいはよく、大粒が多い。

9. でん粉価は「男爵いも」より約1%高く、15%前後である。

10. 肉質はやや粉質で、煮上がり早く、煮くずれは中である。比較的早期から調理特性(ポテトチップなど)の向上をみ、食味がよく、「男爵いも」同様各種の用途に使用可能である。

11. 早掘りでは密植により増収するが、施肥量や栽植密度の影響はうけ難いほうである。

12. 疫病抵抗性因子 R₁をもっているため、疫病的初発生は「男爵いも」より数日おくれるが、疫

病防除、収穫、貯蔵などについては、同品種に準じた管理を行えばよい。

軟腐病、塊茎腐敗、ウイルス病の発生などは一般品種並であり、ウイルス病の中では主として葉巻病が発生し、Yモザイク病が少ない。

乾腐病、ネグサレセンチュウには弱く、夏疫病、菌核病には中ないしやや弱い。

13. 休眠はやや長い。

栽培適地と奨励態度 食用として北海道全域に適応する。

「男爵いも」に比較し、肥大が早く、早く出荷できる。大いもが多いが、中心空洞がなく、水煮後の黒変が少なく、加工歩留も高いため、生食用、ポテトチップなどの油加工用などに好適している。

栽培管理は「男爵いも」に準じて行い、市場の好みに合わせて粒大を調節する場合は、栽植密度を加減して行うようにする。

試験場名	茎葉枯凋期	茎 長	10a 当 り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	中いも以上重			
根 釧 農 試	月. 日 9. 10	cm 62	kg 2,985	kg 2,648	g 105	% 15.4	1967 ~ 1973
中 央 農 試	9. 5	59	3,592	3,180	108	14.5	1969 ~ 1973
上 川 農 試	9.14	63	3,746	3,468	129	16.6	1970 ~ 1973
北 見 農 試	9. 9	91	4,135	4,255*	153	15.2	1969 ~ 1973
十 勝 農 試	9. 3	64	3,207	3,004	114	16.7	"
北海道農試	8.28	59	2,806	2,719	140	16.3	"

・ 1970～1973年の平均。

(8) トヨシロ (北海48号)

来歴 「トヨシロ」は、1960年(昭35)北海道農業試験場(作物部作物第四研究室)において、「北海19号」を母とし、「エニワ」を父として交配したものである。1967年(昭42)に「島系481号」、翌年「北海48号」の系統名をつけ、道内における地域適応性を検討したのち、1976年(昭51)優良品種に決定し、農林省に新品種「トヨシロ」(ばれいしょ農林21号)と命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「農林1号」より短い、草姿はやや開いている。

2. 茎数は中ぐらい、分枝は少なく、茎色は緑で、小葉は緑色(中)であり、やや疎に着いている。

3. 花色は白で、花粉の稔性は低い。

4. いもの形状は偏球形ないし偏卵形で、皮色は淡黄かつ色で、弱いラゼットがある。

目は浅く、その数中は、肉色は白い。いもは大きく、粒ぞろいはよい。いも着は中である。

5. 肉質はやや粉質で、煮くずれは中ぐらい、貯蔵後においても調理後黒変は少ない。

6. 還元糖含量は低く、低温貯蔵によって増加する程度も低い。食味は水煮、フライともよい。

7. 休眠はごく長い。

8. 茎葉黄変期は「男爵いも」より約10日おそい中生種である。

9. 疫病抵抗性遺伝子 R₁ を保有し、初発生は「農林1号」よりおくれ、感染後の発病経過ではこれより早い。

10. いも収量は「農林1号」と同程度である。施肥反応性は「農林1号」程度であり、環境条件による収量の変動はやや大きい。

中心空洞が特大いものにみられることがあるが、かっ色心腐の発生はみられない。

11. 葉巻病の発生は一般品種並であり、Yウイルスに感染するとストリークを生ずる。

塊茎の疫病による腐敗は「男爵いも」より少ない。

栽培適地と奨励態度 用途は加工食品原料用とし、北海道全域に適応する。

早生種の「ワセシロ」、「男爵いも」に比べると早期肥大性が劣るので、ごく早期の原料としては不适当であるが、「農林1号」の加工食品原料の大部とかわるものである。

栽培管理は「農林1号」に準ずる。やせ地、少肥、乾燥地などでは収量はあがらないことが多いが、肥沃地、多肥では多収となる反面、ごく大粒に奇形や中心空洞を生ずることもあるので、窒素の施用を減じたり、栽植密度を高めるなどの注意が必要である。

疫病の初発生は遅れるが、発病後は十分の防除が望ましい。

浴光催芽は、処理期間を長めて芽に傷をつけることのないようにする。

試験場名	茎葉枯凋期*	茎 長	10a 当 り		上 い も 平均1個重	でん粉価	試験年次
			上いも重	中いも以上重**			
北海道農試	月、日 9. 5	cm 54	kg 3,052	kg 2,776	g 105	% 17.3	1966 ~ 1975
中央農試	9. 4•	55	4,209	3,849	110	15.2	1968 ~ 1975
根釧農試	9.20	61	3,177	2,891	93	16.3	1967 ~ 1975
十勝農試	9.10•	59	3,492	2,907	86	16.9	"
北見農試	9.13	84	4,907	4,822	123	15.7	"
上川農試	9.12	54	3,605	2,989	101	17.6	"
天北農試	9.12	49	3,371	3,484	97	16.0	1968 ~ 1975

• 霜による枯凋の年を除いた平均。

•• 中いも以上重は、北海道農試以外では測定しなかった年がある。

(9) ツニカ (Tunika)

来歴 「ツニカ」は、1967年(昭42)ドイツ民主共和国の Gross-Lüsewitz 植物育種研究所において、「Lü56・186/21N」を母とし、「Lü51・183/2」を父として交配後育成したものである。1971年(昭46)北海道農業試験場(作物第一部畑作物第二研究室)に導入し、1974年(昭49)から北海道立中央農業試験場ほかにおいて、ジャガイモシストセンチュウに対する抵抗性、生産力などを検定した後、1978年(昭53)優良品種に決定し、農林省に新品種「ツニカ」(ばれいしょ導入3号)と命名、登録された。

特性概要 1. 茎長は「農林1号」より長く、草姿はやや開いている。茎は中ないしやや細く、緑色である。

2. 小葉の大きさは中ないしやや小であり、葉色は淡緑である。生育中期以降巻葉をみる。

3. 花色は白く、花数、花粉量ともに多く、自然結果も極めて多い。
4. いもは球形に近く、皮色は黄かっ色で、ラゼットがある。肉色は黄で、目の数は中、目の深さはやや深いが尻は浅い。
5. 一個重はやや小さいが、粒ぞろいはよい。塊茎の着生はやや密、ふく枝の長さは中で、その離れはやや悪い。
6. 茎葉枯凋期は晩生種に属する。
7. 収量はやや劣るが、でん粉価が19~20%と高い。でん粉重は「紅丸」より低い。でん粉粒子は大きく、糊化した時の最高粘度が高い。
8. 近縁野生種 *Solanum andigenum* に由来するジャガイモシストセンチュウ寄生型 A に対する抵抗性遺伝子 H₁ をもっている。

本品種も幼虫の侵入がみられ、3~4 齢まで発育するが、シストにまで達するものが極めて少ないので、本品種栽培後の土壤中の線虫密度は植付前の20~30%に低下する。線虫密度の高いほ場では、本品種も寄生によって減収するが、「紅丸」に比べてでん粉重が多い。

9. 疫病の初発生、発病経過は「農林1号」に類似している。

Yウイルスの当代感染により、やや小さいストリーク病斑を葉脈に生ずる。

10. 休眠は長く、「エニワ」程度である。

栽培適地と奨励態度 本品種の適応地域は道央のジャガイモシストセンチュウ発生地帯とする。

施肥量及び栽植密度は「紅丸」に準ずる。多肥密植すると倒伏しやすく、いもが小粒化し、減収の恐れがあるので注意する。

線虫のいるほ場で生産されたものは、でん粉原料以外には使用しない。

線虫密度の高いほ場では、本品種でも減収するので、輪作、殺線虫剤施用などの防除手段を講じる。

抵抗性品種を連続して栽培すると、抵抗性を破る線虫系統の出現をうながす恐れがあるので、線虫密度の低くなったほ場では、輪作体系の中で抵抗性品種と感受性品種を適宜交替させて栽培する。

試験場名	茎葉枯凋期	茎長 cm	10a 当り		上 い も 平均1個重 g	でん粉価 %	試験年次
			上いも重 kg	でん粉重 kg			
北海道農試	・	69	3,391	640	95	19.9	1975 ~ 1977
中央農試	・	—	4,456	714	97	17.3	"
{ 無線虫ほ場 線虫ほ場	・ ・	— —	2,856	472	85	17.5	"

注 ・ 枯凋期に達しない年の多いことを示す。中央農試は真狩村における試験である。

II 特 用 作 物

1. てん菜

(1) つきさっぷ (E-6)

来歴 「つきさっぷ」は1955年(昭30)北海道農業試験場で「導入2号」の集団を母体として、早熟、多収、耐病性品種の育成に着手し、1960年(昭35)に合成した。

1961年(昭36)日本てん菜振興会てん菜研究所に移管し、「E-6」の系統名で3カ年にわたり北海道立農業試験場各支場とともに育成系統生産力検定試験を行い、1964年(昭39)優良品種に決定し、農林省に新品種「つきさっぷ」(てん菜農林合3号)と命名、登録された。

特性概要 1.形態的には「導入2号」に比べ、根形がやや胴張円錐形で、露肩がやや多いほかはおよそ以ている。

2.初期生育が良好である。

3.根重は極めて多いが、根中糖分はやや低い。

4.熟期は晩生で、褐斑病に強い。

栽培適地と奨励態度 北海道の南部、中央部およびその他の褐斑病多発地域に適応する。

なお、栽培法は「導入2号」に準ずる。(1975年(昭50)廃止)

試験場名	10a 当 り		根中糖分	純 糖 率	試験年次	栽 培 法
	根 重	可製糖量				
て ん 研	4.25	520	14.01	87.7	1961~1963	直播
渡 島 支 場	4.85	770	17.60	90.5	1962~1963	"
上 川 支 場	4.21	—	—	—	"	"
十 勝 支 場	3.79	572	16.61	90.8	1961~1963	"
北 見 支 場	3.28	471	16.10	85.9	"	"
根 室 支 場	2.71	319	15.45	81.0	1963	" 褐斑病無防除
宗 谷 支 場	2.57	390	17.55	85.9	1962~1963	" "
天 北 支 場	3.05	448	16.75	86.6	"	" "

注) 可製糖量は、根重×根中糖分×純糖率

(2) ポリラーベ(Polyrave)

来歴 「ポリラーベ」はオランダのファンデルハーベ種子会社が育成した倍数体品種である。

1957年(昭32)より北海道農業試験場で、また1959年(昭34)以降は北海道立農業試験場の各支場で試験された結果、1962年(昭37)1月の北海道農業試験会議では地域を限定して栽培を認め、1963年(昭38)には約7,000haの栽培があった。また1963年(昭38)には全道31カ所の

品種現地試験でも地域性を検定し、1964年（昭39）1月北海道農業試験会議において、「てん菜の優良品種決定に関する案」により認定品種¹⁾となり、同年3月適応地帯を限定して優良品種²⁾に認定し原名から「ポリラーベ」と命名した。

注) 1), 2)についてはカーベエルタ、エージェーポリ-1、カーベポリの3品種が同じ取扱いである。

特性概要 1. 2倍体, 3倍体, 4倍体の混合集団で、いわゆる倍数体品種である。

2. 草丈がやや低く、葉姿は開平型である。

3. 抽苔耐性は強いが、褐斑病抵抗性は極めて弱い。

4. 根型は胴張り短円錐形で分岐根が少ない。

5. 早熟性で根部肥大が早い。

6. 葉根収量は「導入2号」に比べ極めて多いが、根中糖分は中位である。

栽培適地と奨励態度 「ポリラーベ」は褐斑病に弱いが発生が少ない場合には根重、可製糖量ともに「導入2号」より勝るから、網走、十勝の褐斑病発生が少ない地帯、およびこれに準ずる地帯に適する。

なお栽培法は「導入2号」に準ずるが、褐斑病防除の徹底を期すること。

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
		根重 t	可製糖量 kg				
北海道農試 てん研	無防除	3.76	483	14.33	88.67	1959～1963	直播
	防除	3.95	536	15.14	89.04	"	"
渡島支場	無防除	4.48	673	16.56	90.80	1959	"
	防除	4.88	834	18.58	91.98	"	"
上川支場	防除	4.17	—	—	—	1959, 1963	"
十勝支場	無防除	3.80	505	14.57	90.44	1959～1962	"
	防除	3.86	560	15.80	90.95	1959～1963	"
北見支場	無防除	2.81	391	16.12	87.35	1959～1961	"
	防除	30.3	460	16.95	89.90	1959～1963	"
根室支場	無防除	2.76	418	16.62	89.93	"	"
	防除	3.45	521	16.19	93.33	1959	"
宗谷支場	無防除	2.43	396	17.82	90.59	1959, 1961, 1963	"
	防除	3.49	—	—	—	1959	"
天北支場	無防除	3.17	461	15.31	91.88	1959, 1961	"
	防除	4.52	696	16.91	91.11	1954	"

(3) カーベエルタ(Kaweerta)

来歴 「カーベエルタ」は、西ドイツのクラインワンツレーベン種子会社が育成した2倍体品種である。北海道では大正末期より昭和初期まで「クラインワンツレーベン」の品種名で一般栽培されたが、「本育48号」、「本育192号」の育成によってその姿を消した。

その後、北海道農業試験場では「KL-E」の品種名で、1953年（昭28）より再び試験され、ま

た北海道立農業試験場各支場においても、1955年（昭30）頃から品種地帯別適応性検定試験で、断続的ではあるが試験された。なおこの間1959年（昭34）に品種名が「KW-E」と改名され、1963年（昭38）には現地試験でも検定され、根釧および道北地方で1,700haの一般栽培があったが、1964年（昭39）適応地帯を限定した優良品種に認定された。

さらに1965年（昭40）「KWS-E」と改名され、1972年（昭47）3月原名が「Kaweerta」と改訂されたことにともない、「カーベエルタ」と命名した。

以上のように「カーベエルタ」は、何度も改名された古い品種であるが、常に改良が加えられ特性が更新されている。

特性概要 1. 2倍体品種である。

2. 草丈はやや低く、葉姿は開平型である。

3. 抽苔耐性は強く、褐斑病抵抗性も極めて強い。

4. 根形は短円錐形で分岐根が少ない。

5. 早熟性で根部肥大が早い。

6. 菜根収量は「導入2号」に比べ極めて多く、根中糖分は中位である。

栽培適地と奨励態度 「カーベエルタ」は褐斑病には弱い、発生が少ない場合には根重、糖分、可製糖量ともに「導入2号」に勝ることから、根釧、宗谷、留萌地区および十勝、網走の褐斑病発生の少ない地帯に適する。

なお一般栽培法は「導入2号」に準ずるが、褐斑病に弱いので栽培に当っては防除の徹底を期すること。

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
		根重	可製糖量				
北海道農試 てん研	無防除	3.01	397	14.34	88.66	1959~1963	直播
	防除	3.53	499	15.72	88.89	1959~1960 1962~1963	"
	防除	4.10	—	—	—	1959, 1963	"
上川支場	無防除	3.66	490	14.96	89.77	1959~1960	"
	防除	3.75	576	16.56	89.60	1959~1963	"
十勝支場	無防除	2.37	369	17.40	89.20	1959~1960	"
	防除	2.88	461	17.83	90.05	1959~1960 1963	"
北見支場	無防除	2.94	471	17.60	89.51	1959~1960 1962~1963	"
	防除	3.28	522	17.15	92.85	1959	"
根室支場	無防除	2.86	466	17.94	89.85	1959 1962~1963	"
	防除	3.58	583	17.55	92.70	1959	"
宗谷支場	無防除	3.59	541	17.15	86.94	1959, 1963	"
	防除	4.05	708	18.78	92.99	1959	"
道北支場	無防除						
	防除						

(4) エージェーポリー1(AJ poly-1)

来歴 「エージェーポリー1」はポーランドのアレクサンダーヤナシ種子会社が育成した倍数

体品種である。1960年(昭35)より北海道立農業試験場北見支場でまた1961年(昭36)より、日本でん菜振興会てん菜研究所および北海道立十勝農業試験場で試験され、1963年(昭38)1月北海道農業試験会調において地域を限定して栽培が認められた。1963年(昭38)には約1,500haが栽培され、また各支場の品種適応性検定試験および現地試験で確めた結果、1964年(昭39)「ポリラーベ」と同じとり扱いにより、適応地帯を限定した優良品種に認められ、原名から「エージェポリー1」と命名した。

特性概要 1. 2倍体、3倍体、4倍体が混合している倍数体である。

2. 草丈はやや高く、葉姿はやや開平型。

3. 抽苔耐性が強く、褐斑病抵抗性は「導入2号」より弱く「ポリラーベ」より強い。

4. 根は肩張り短円錐形で分岐根が少ない。

5. やや早熟性。

6. 菜根収量は適地においては「導入2号」より多いが、地域により差が大きい。

7. 根中糖分は「導入2号」より高い。

栽培適地と奨励態度 「エージェポリー1」は褐斑病にはやや弱い、収量は適地において「導入2号」にまさるから、網走管内の紋別、遠軽地区およびこれに準ずる地区に適する。

なお一般栽培法は「導入2号」に準ずるが、褐斑病防除を徹底する。また他の品種より種子が大きく発芽が悪いから、播種量を10a当たり2.5kgとする。(1978年(昭53)廃止)

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
		根重	可製糖量				
てん研	無防除	2.48	338	15.29	89.49	1961~1963	直播
	防除	2.77	398	15.96	89.01	1962~1963	"
上川支場	防除	3.31	—	—	—	1963	"
十勝支場	"	2.81	456	17.59	91.99	1961, 1963	"
北見支場	無防除	2.41	363	16.61	86.79	1960~1961	"
	防除	2.81	456	17.96	90.21	1960~1963	"
根室支場	無防除	2.52	416	18.34	88.25	1962~1963	"
宗谷支場	"	2.18	340	18.49	84.61	1963	"
天北支場	"	2.92	415	17.27	82.26	"	"

(5) カーベポリ(Kawepoly)

来歴 「カーベポリ」は西ドイツのクラインワンツレーベン種子会社が育成した倍数体品種である。

1956年(昭31)より北海道農業試験場で「KL—polybeta」の品種名で試験され、また1959年(昭34)より北海道立農業試験場北見支場、十勝支場でも断続的に試験された。この間「KW—polybeta」と改名されたが1964年(昭39)優良品種に認定された。

その後1965年(昭40)「KWS—polybeta」と改名され、さらに、1972年(昭47)原名が「Kawepoly」と改訂されたことにともない、原名から「カーベポリ」と命名した。

特性概要 1. 2倍体，3倍体，4倍体の混合集団で倍数体品種である。

2. 草丈が低く，葉姿は開平型である。

3. 耐抽苔性は強いが，褐斑病抵抗性が弱い。

4. 根形は短円錐形で分岐根が少ない。

5. 早熟性である。

6. 「導入2号」より菜根収量が多く，根中糖分も高い。

栽培適地と奨励態度 「ガーベポリ」は褐斑病には弱い，発生が少ない場合には根重，糖分，可製糖量ともに「導入2号」にまさるから，根釧地区，十勝，網走の褐斑病発生の少ない地帯およびこれに準ずる地帯に適する。

なお一般栽培法は「導入2号」に準ずるが，褐斑病防除の徹底を期すること。

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
		根重	可製糖量				
てん研	無防除	3.37	401	13.91	85.33	1962～1963	直播
	防除	3.32	440	15.16	87.44	"	"
十勝支場	無防除	4.02	630	17.10	91.72	1962	"
	防除	3.68	590	17.44	91.62	1961～1963	"
北見支場	無防除	2.07	344	18.14	91.78	1959	"
	防除	2.85	477	18.36	90.81	1959, 1963	"
根室支場	無防除	2.31	329	17.02	83.62	1963	"

(6) 台糖1号 (台糖1号)

(7) 台糖2号 (台糖2号)

(8) 台糖3号 (台糖3号)

来歴 「台糖1号」，「台糖2号」，「台糖3号」は台糖株式会社道南製糖所が，北海道大学，北海道農業試験場，てん菜研究所の指導のもとに，1960年（昭35）から「導入2号」の集団を母体として母系系統の選抜を始め，1962年（昭37）にそれぞれ15～20系統を選抜し合成したものである。1963～1964年（昭38～39）に北海道立道南農業試験場とてん菜研究所で生産力検定試験を行った。

その結果，「導入2号」に比べ褐斑病抵抗性が極めて強く，かつ高収性で根中糖分もやや高いことから，道南地域を対象に1965年（昭40）優良品種に決定し，系統名と同じ「台糖1号」，「台糖2号」，「台糖3号」と命名された。

特性概要

「台糖1号」

1. 葉姿，葉色，根形などは「導入2号」とほとんど同じであるが，草丈はやや高い。

2. 熟期は「導入2号」並である。

3. 頭葉重，根重が多く，特に頭葉重が多い。

4. 根中糖分が高い。

5. 褐斑病抵抗性は「導入2号」に比べ著しく強い。

「台糖 2 号」

1. 特性は「台糖 1 号」とほとんど同じである。
2. 褐斑病抵抗は「導入 2 号」より強いが、「台糖 1 号」より幾分弱い。

「台糖 3 号」

1. 特性は「台糖 1 号」、「台糖 2 号」とほとんど同じであるが、熟期は「台糖 1 号」、「台糖 2 号」に比べ幾分早い。
2. 褐斑病抵抗性は「導入 2 号」に比べるとはるかに強いが、「台糖 1 号」、「台糖 2 号」よりやや弱い。

栽培適地と奨励態度 「台糖 1 号」：根重、可製糖量、頸葉重ともに「導入 2 号」よりまさり褐斑病抵抗性はすこぶる強いので、道南地域の褐斑病多発の低台地帯に適応する。

「台糖 2 号」・「台糖 1 号」と同じ傾向であるから、道南地域の一般低台地帯の適品種である。

「台糖 3 号」・「台糖 1 号」、「台糖 2 号」と同じ傾向であるが、両品種に比べると、わずかではあるが褐斑病抵抗性が劣るので、道南地域の高台地帯に適応する。(1975 年 (昭50) 廃止)

品 種 名	試 験 場 名	10 a 当 り		根中糖分	純 糖 率	試 験 年 次	栽 培 法
		根 重	可製糖量				
台糖 1 号	て ん 研	2.72	340	14.50	86.3	1963~1964	直 播
	道 南 農 試	3.51	526	16.50	90.3	"	"
台糖 2 号	て ん 研	2.92	364	14.47	86.3	1963~1964	直 播
	道 南 農 試	3.39	513	16.75	89.6	"	"
台糖 3 号	道 南 農 試	2.99	458	16.70	91.9	1964	直 播

(9) てんけん 1 号 (T 1002)

来歴 「てんけん 1 号」は 1960 年 (昭35) よりてん菜研究所で、製糖会社およびホクレンと共同して、「導入 2 号」、「A j-4」、および「U S 401」から 3 代選抜した系統と、1961 年 (昭36) より北海道立十勝、北見、根釧農業試験場との共同の下に「導入 2 号」から温室を利用して 3 代選抜した系統とを 1964 年 (昭39) に合成したものである。1965 年 (昭40) 以降、「T 1002」の系統名で全道各地で系統適応性検定試験、奨励品種決定基本調査および、奨励品種決定現地調査ならびに現地比較試験を行った。この間、毎年構成系統の組合せ能力検定試験を行い、一部系統の組換えを行った。

以上の経過をたどり、1968 年 (昭43) 優良品種として決定し、1969 年 (昭44) 農林省に新品种「てんけん 1 号」(てん菜農林台 6 号) と命名、登録された。

特性概要 1. 一般外部形態は「つきさっふ」に類似しているが、地上部の生育は旺盛で、頸葉重多い。

2. 根形は「つきさっふ」と同じ長円錐型である。

3. 初期生育は良好で、根重が極めて多い。

4. 根中糖分は「つきさっふ」より高い。

5. 褐斑病抵抗性が強い。

6. 熟期は晩生種に属する。

栽培適地と奨励態度 本品種は「つきさっふ」とおきかえ、特に北海道の道南、道央およびその他の褐斑病多発地域に適する。

なお栽培法は「つきさっふ」に準ずる。〔1978年（昭53）廃止〕

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 t	可製糖量 kg				
てん研	4.39	564	14.74	86.6	1965～1967	直播
中央農試	4.63	605	15.16	85.6	"	"
上川農試	4.02	585	17.12	85.4	"	"
十勝農試	3.89	552	16.26	87.0	"	"
北見農試	3.73	539	16.84	85.8	"	"
根釧農試	3.25	407	15.84	80.0	"	1965～1966 直播 1967 移植
天北農試	3.30	445	15.88	84.9	"	直播
天北農試 (天塩支場)	3.90	586	17.02	88.3	1967	"
道南農試	5.48	851	17.88	86.9	"	"
滝川畜試	3.90	586	17.02	88.3	"	"

(10) キタマサリ（支7号）

来歴 「キタマサリ」はてん菜研究所支所（熊本県）で、1963年（昭38）より「カーベエルタ」（昭和47年KWS—Eを改名）から選抜した系統、1961年（昭36）より「Hilleshög R」から選抜した系統、および鹿児島県農業試験場と共同して、1963年（昭38）より「Hilleshög R」から選抜した系統を1967年（昭42）に合成したものである。「支7号」の系統名で1968年（昭43）には主として道東、道北地方の試験場を中心に、1969年（昭44）以降は全道の系統適応性検定試験を行い、また育成系統現地検定試験を行って地域適応性を確かめ、1971年（昭46）優良品種に決定し、農林省に新品種「キタマサリ」（てん菜農林合7号）と命名、登録された。

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 t	可製糖量 kg				
てん研	5.35	730	15.74	86.7	1968～1970	直播
道南農試	4.71	584	14.57	85.1	1969～1970	"
中央農試	3.98	499	14.09	86.3	"	"
上川農試	3.66	534	16.52	87.9	"	"
十勝農試	4.70	718	17.06	89.3	1968～1970	"
北見農試	4.21	571	15.83	85.4	"	"
根釧農試	4.27	569	16.57	80.6	"	移植
天北農試	3.61	520	16.53	87.0	"	直播

特性概要 1.「キタマサリ」は2倍体の多胚品種である。

2.草丈は低く、頸葉重は他の品種に比べて少ない。

3.当年抽苔はなく、早生型である。

4.褐斑病には弱い。

5.糖分はやや低く「ポリラーベ」並みであるが根重が多く、特に根釧、天北および、十勝、北見の一部で良い成績を示した。

栽培適地と奨励態度 根釧、天北地方ならびにこれに準ずる地帯に適する。

なお褐斑病に対する抵抗性が弱いので、栽培に当たっては防除の徹底を期すること。

(II) ソロラーベ(Solorave)

来歴 「ソロラーベ」はオランダのファンデルハーベ種子会社が育成した、3倍体の単胚品種である。

1967年(昭42)にホクレンが輸入し、てん菜研究所および北海道立十勝、北見農業試験場の3カ所で系統適応性検定試験に供試し、1968~1970年(昭43~45)には全道各試験場の系統適応性検定試験に供試した。また1970年(昭45)には道南、道央を除く地域の18カ所の育成系統現地検定試験で検定し、北海道における最初の単胚実用品種として、1971年(昭46)優良品種に決定し、原名から「ソロラーベ」と命名した。

特性概要 1.3倍体の単胚品種である。

2.草丈は中間で、葉姿は開平型である。

3.当年抽苔は少なく、熟期は早生である。

4.根形は円錐で、露肩が多く、分岐根は少ない。

5.褐斑病抵抗性は弱い。

6.根重、根中糖分は「ポリラーベ」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 道東、道北などの褐斑病の発生の少ない地帯および、これに準ずる地帯に適し、省力を目的とした機械化栽培に好適である。

なお褐斑病に弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。

試験場名	10 a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
	根重	可製糖量				
てん研	4.72	646	15.80	86.2	1967~1970	直播
道南農試	4.31	542	14.67	85.7	1969~1970	"
中央農試	4.61	606	15.09	86.2	1968~1970	"
上川農試	4.04	590	16.56	87.6	"	"
十勝農試	4.32	669	17.24	89.4	1967~1970	"
北見農試	3.56	487	16.05	85.2	"	"
根釧農試	3.76	512	16.70	81.6	1968~1970	移植
天北農試	3.23	463	16.53	86.7	"	直播

(12) カーベメガモノ(Kawemegamono)

来歴 「カーベメガモノ」は西ドイツのクラインワンツレーベン種子会社が育成した倍数体の単胚品種である。

1966年(昭41)「KWS—Monobeta」の品種名で輸入され、1968年(昭43)まで道内各試験場の系統適応性検定試験で検定した結果、糖分型ではあるが根重は低かった。

その後日本甜菜製糖株式会社とクラインワンツレーベン会社との共同で、多数の系統を検定した結果、多収型の「KWS—Monobata」に組換えられ、1969年(昭44)から3カ年間、再び系統適応性検定試験を行った。この間数回品種名の変更があったが、1970年(昭45)に「kawemegamono」と改正された。なお1970～1971年(昭45～46)には全道各地の育成系統現地検定試験でも検定し、1972年(昭47)優良品種に決定し、原名から「カーベメガモノ」と命名した。

特性概要 1. 倍数体の単胚品種である。

2. 草丈はやや低く、葉姿は開平型である。

3. 根形は短円錐で、露肩は中程度、分岐根は少ない。

4. 当年抽苔はほとんどなく、熟期は早生である。

5. 褐斑病に対する抵抗性は弱く、「カーベポリ」と同程度であり、葉腐病については「カーベポリ」、「ポリラーベ」、「ソロラーベ」と同程度である。

6. 根重はやや多収性で、「ソロラーベ」と同程度であるが、地域によっては多少劣るところもある。

7. 根中糖分は「ソロラーベ」よりやや高いが、「カーベポリ」よりはやや低い。

栽培適地と奨励態度 根釧地方を除く道東および道北地方などの褐斑病発生が少ない地帯、ならびにこれに準ずる地帯に適し、移植および直播の省力栽培に適する。

なお本品種は褐斑病に対する抵抗性が弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。またこの品種は「カーベポリ」に比べて、糖分がやや低いから、ちっ素肥料の多用、株立本数の減少および褐斑病多発などによる糖分低下を防止すべきである。

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 kg	可製糖量 kg				
てん研	4.59	672	16.08	86.6	1969～1971	直播
道南農試	4.37	571	15.17	85.6	1969～1970	"
中央農試	3.91	508	14.93	87.1	"	"
上川農試	3.74	541	16.89	85.8	1969～1971	"
十勝農試	4.09	641	17.50	90.3	"	"
北見農試	3.58	519	16.79	86.4	"	"
根釧農試	3.40	452	16.90	78.8	"	移植
天北農試	2.82	405	16.55	87.4	"	直播

(13) モノヒル(Monohill)

来歴 「モノヒル」はスウェーデンのヒレスヘーグ種子会社が育成した3倍体の単胚品種である。1970年(昭45)に北海道糖業株式会社が輸入し、同社とてん菜研究所で輸入品種特性検定

試験を行ったところ、単胚品種の中では特に良い成績を示した。そこで、1971年（昭46）にはてん菜研究所および北海道立十勝、北見農業試験場の系統適応性検定試験に供試し、翌1972年（昭47）には道内各試験場で系統適応性検定試験を、また同時に27カ所の育成系統現地検定試験にも供された。

なおこの間てん菜研究所においては、褐斑病抵抗性特性検定試験ならびに生育特性調査を行い1973年（昭48）優良品種に決定し、原名から「モノヒル」と命名した。

特性概要 1.3倍体の単胚品種である。

2. 草丈はやや低く、葉姿は開平型である。
3. 根形は円錐形で露肩は中程度で、分岐根は少ない。
4. 当年抽苔は殆どなく、熟期は早生である。
5. 褐斑病抵抗性は弱い。
6. 根重は多収型で、「ソロラーベ」や「カーベメガモノ」より多い。
7. 根中糖分はやや低く、「ソロラーベ」や「カーベメガモノ」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 主として道東などの褐斑病の発生の少ない地帯、およびこれに準ずる地帯に適し、移植および直播の省力栽培に適する。

なお本品種は、褐斑病に対する抵抗性が弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。

試験場名	10 a 当り		根中糖分	試験年次	栽培法
	根重	糖量			
てん研	5.01	788	15.76	1970~1972	直播
中央農試	6.35	1,039	16.36	1972	移植
上川農試	4.05	684	16.84	"	直播
十勝農試	4.41	759	17.23	1971~1972	"
北見農試	4.66	759	16.43	"	"
根釧農試	4.37	693	15.85	1972	移植
天北農試	3.49	519	14.86	"	直播

注) 糖量=根重×根中糖分

(14) モノホープ (T 1013)

来歴 「モノホープ」は、てん菜研究所で「TK76mmCMS」を種子親とし、1963年（昭38）より欧州系倍数体品種から選抜した、4倍体多胚系統「T 4 n—38」を花粉親として交配した3倍体単胚の一代雑種である。種子親は1961年（昭36）より「導入2号」の細胞質雄性不稔系統と2倍体単胚系統(Tmm—1)から育成した2倍体単胚細胞質雄性不稔系統と、1965年（昭40）より育成した(Tmm—14)に由来する2倍体単胚O型系統との交配により育成したものである。

以上のように育成した一代雑種「T1013」を、1970年（昭45）てん菜研究所十勝現地選抜班（芽室町）で、系統適応性検定予備試験に供試し、翌1971年（昭46）から全道の試験場において系統適応性検定試験、また1972年（昭47）には全道27カ所の育成系統現地検定試験で地域性を確かめた。国産第1号の単胚品種として、1973年（昭48）優良品種に決定し、農林省に新品

種「モノホープ」(てん菜農林交8号)として命名、登録された。

特性概要 1.3倍体の単胚品種である。

2.草丈は中間で葉姿は開平型で草勢が旺盛である。

3.根部は円錐形で、露肩および分岐根が少ない。

4.当年抽苔はほとんどない。

5.初期生育が良く、糖分の蓄積はやや早い、後期の根部肥大の速度がやや鈍く、熟期は中生型である。

6.褐斑病に対する抵抗性は強く、欧州系の単胚優良品種に比べてすこぶる強い。

7.根重は多収性で、「ソロラーベ」並かそれよりやや高く、「カーベポリ」並である。

8.糖分はやや高糖性で、「ソロラーベ」および「カーベメガモノ」より高く「カーベポリ」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 全道一円に適応する。特に褐斑病抵抗性および高糖性などを考慮して、道央および道南において適応性がきわめて大きい。

なお本品種は単胚であるから、移植ならびに直播における省力栽培に適する。育苗、プランタ播種および一般栽培法は「ソロラーベ」、または「カーベメガモノ」に準じてよい。

採種に当っては、発芽不良種子の混入する割合がやや多い傾向があるので、精選のとき発芽不良種子を除去するよう特段の留意が必要である。

試 験 場 名	10 a 当 り		根 中 糖 分	試 験 年 次	栽 培 法
	根 重	糖 量			
て ん 研	4.81	767	15.85	1971~1972	直 播
現 地 選 抜 班 (芽 室)	4.02	682	16.94	1970~1972	"
中 央 農 試	6.33	1,093	17.27	1972	移 植
上 川 農 試	4.60	800	17.41	1971~1972	直 播
十 勝 農 試	4.26	719	16.87	1972	"
北 見 農 試	4.22	713	17.04	1971~1972	"
根 釧 農 試	3.76	645	17.23	"	移 植
天 北 農 試	4.26	719	16.87	1972	直 播

2. 薄 荷

(1) おおば (27-104)

来歴 岡山県立農業試験場倉敷はっか分場において、1953年(昭28)に「M.spicata」×「M.arvensis」の選抜系統「24-24」を母とし、「三美」を父として交配したものである。1958年(昭33)に北海道農業試験場(作物部薄荷除虫菊研究室)が譲りうけて「27-104」の系統名で1959年(昭34)から生産力を検定し、地域適応性の結果も良好であったので、1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「おおば」(薄荷農林4号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草丈は「まんよう」よりも高く生育はきわめて旺盛で葉も大きい。倒伏性は茎が太く硬いので草丈の高い割合には強い。

2. 着蕾期～開花始は9月中～下旬で「まんよう」と大差なく、耐病性（さび病）や耐冬性（地下茎多）は「まんよう」よりも強い。

3. 生草重や取卸油重は「まんよう」に比べてはるかに多いが、取卸油の採脳率は低い。

4. 脱脳油の香味性は「まんよう」よりも良好と考えられている。

栽培適地と奨励態度 「まんよう」に準じて網走管内に適する。

1. 植付量が少なく「まんよう」ほどではないがやはり減収し、倒伏もし易くなるから秋植えの種根は150～200kg/10 aは必要である。

2. 「おおば」は「まんよう」に比べ肥料の吸収力が強いので「まんよう」の標準肥程度以上の施肥が肝要である。少肥栽培すると地力の低下が大きいものと推定される。輪作栽培の一層の強化や地力維持に努めることが特に肝要である。

3. 「おおば」は「まんよう」より耐病性がやや強いが、さび病の抵抗性が次第に弱まり、多発するおそれがあるから、さび病に対する薬剤防除とともに畑の衛生保持を励行すべきである。

試験場名	開花始	刈取期における			10 a 当り			採脳率	試験年次
		草 丈 cm	分枝数 本	葉 数 枚	生草重 kg	取卸油重 kg	収油率 %		
北海道農試 (遠軽研究室)	9月中旬	116	46	524	4,563	8.74	0.192	48	1959～1960
北 見 支 場	9月下旬	127	35	576	5,775	8.79	0.152	47	1960

(2) ほうよう（北交8号）

来歴 1959年（昭34）に北海道農業試験場（作物部はっか除虫菊研究室）において、「*Mentha spicata* var. *Crispa*」を母とし、高脳分の和種はっか系統「31—81」を父として人工交配したものである。1960年（昭35）から実生を養成し選抜を重ね、1962年（昭37）より「北交8号」の系統名で生産力や特性検定とともに地域の適応性も検定し、多収性が認められたので、1965年（昭40）優良品種に決定し農林省に新品種「ほうよう」（薄荷農林5号）と命名登録された。

特性概要 1. 葉は紡錘形でねじれ、葉巾は広い。葉面積は大きく、しかもチリメン状をなしており葉縁は鋸歯状に鋭く切れ込んでいる。葉色は鮮緑で葉柄は極めて短い。草型は直立型で茎はやや太く硬い。茎色は赤紫色で毛茸はなく地下茎は太い。花序は輪散花序に近いが、花の着生部の葉は小さく花色はやや淡い。

2. 着蕾始は8月末前後で中生種に属する。耐倒伏性は極めて強く、耐冬性は「おおば」と同程度で強く、種根量も多く、さび病の被害は少ない。葉の含油率が高いので対生草収油率が極めて高く、取卸油重は「おおば」に比べ極めて多収であるが、採脳率は54%前後でやや低い。脱脳油の香味は良好である。

栽培適地と奨励態度 北海道の和種はっか栽培地帯一円に適する。特に耐倒伏性が強く、高収率で刈取期間も長く、機械化栽培に好適である。

多肥栽培しても倒伏のおそれは少ないが、疎植すると減収率がやや高い。早刈や遅刈による減収が比較的少なく、刈取期間が長いが刈取り適期は着蕾期前後の9月上旬である。本品種は

「まんよう」型のさび病菌系におかされ、生育後期になるとさび病の発生が多くなる傾向があるので、さび病の防除はこれまでどおり行ない、さび病の被害などの多い際には既存品種と同様に、多少早目に刈取る必要がある。〔1978年（昭53）廃止〕

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草丈	分枝数	葉数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	8月29日	113	38	323	4,160	1,360	11.96	0.29	54	1962～1964
北見農試	9月4日	116	31	239	3,150	1,044	8.32	0.26	52	1963～1964

・着蕾期を示す。

(3) あやなみ（北交12号）

来歴 1961年（昭36）に北海道農業試験場（作物第2部特用作物第2研究室）において、和種はっか系の極高脳分系統「さんびS₁～1」を母とし、スベアミント系の野性種「*Mentha spicata* var. *crispa*」（別名オレンジハッカ）を父として人工交配したものである。1962年（昭37）より実生を養成して「36-323」の系統番号で選抜をかさね、1965年（昭40）より「北交12号」の系統名で生産力や特性を検定し、1968年（昭43）優良品種に決定し、農林省に新品種「あやなみ」（薄荷農林7号）と命名、登録された。

特性概要 1. 葉形は長紡錓形で頂部の葉がややねじれ、葉面積は中程度で葉数が極めて多く、葉茎比も高く、数はやや深く葉色は濃緑で葉柄は短く、葉脈は淡赤紫色を呈する。草姿は扇状型で分枝は開張し、茎はやや太くて硬く、茎色は赤紫色で毛茸は少なく地下茎は太い。花序は偽輪繖花序で花色は濃い。染色体数は $2n=72$ である。

2. 着蕾始は8月末前後、開花始は9月中旬前後で「ほうよう」と同じく中生種に属し、やや短程で耐倒伏性が極めて強い。また、種根量も極めて多い。さび病の被害は現状では認められず、ピンセンチュウの被害も既存品種よりも少ない。

含油型の品種で収油率が著しく高く、「ほうよう」に比較して生草重はやや多い程度であるが、収油量は20～25%の増加が見込まれる。採脳率は51%前後の中脳分品種であるが、脳油の香味はよく脱脳油の物理化学性や香味性は「あかまる」に近く、 α -イソメントンが少ないので、「ほうよう」の脱脳油のように、施光度や比重が薬局法にふれる恐れはない。

栽培適地と奨励態度 適地は北海道の和種はっか栽培地帯一円で、現在作付されている「ほうよう」を全面的に置きかえてよい。さび病・倒伏・線虫などの障害に強い安定多収型の品種で、和種はっかとしては連作適応性が高く、はっかの集団栽培に適し、耐倒伏・極高収油率で刈取期間も長く機械化栽培にも適する。

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草丈	分枝数	葉数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	月、日 8.30	95	35	421	2,870	960	12.03	0.42	51	1965～1967
北見農試	9.1	86	27	350	2,688	—	8.23	0.31	47	1966～1967

注) 北見農試の着蕾始の項は着蕾期である。

草姿が扇状型なので疎植しても減収率が低い、種根量が多い割合には頂芽が少ないので、種根は多めに植付ける必要がある。現在圃場でのさび病の被害はみられないが、接種試験を行うと A, B, C, D のレース群には抵抗性で、E レース群の一部の菌には罹病するので、さび病の防除は従来どおり行なうことが大切である。

(4) わせなみ (北系 J 15 号)

来歴 1967 年 (昭 42) に北海道農業試験場 (作物第 2 部特用作物第 2 研究室) において「さんび」の自殖第 2 代の極高脳分系統「J 36—334」を母とし、スベアミント系の野生種「*Mentha spicata* var. *crispa*」を父として人工交配したものである。1968 年 (昭 43) より実生を養成して「J 42—99」の系統番号で選抜をかさね、1970 年 (昭 45) より「北系 J 15 号」の系統名で生産力や特性の検討と現地における大型現地試験 (10 a 単位) で安定多収性が確認された。1973 年 (昭 48) 優良品種に決定し、農林省に新品種「わせなみ」 (薄荷農林 9 号) と命名、登録された。

- 特性概要 1. 葉型はやや小さくて細長く皮針形、いわゆる柳葉型で、葉色は淡緑で葉数は極めて多い。
2. 草姿は扇状型で、分枝はやや開張して「ほうよう」と「あやなみ」の中間で、茎はやや太く硬い青茎で、草丈は「あやなみ」より低く、短程で耐倒伏性は強い方である。
3. さび病、ピンセンチュウにも抵抗性は強く「あやなみ」と同程度以上である。
4. 着蕾始めが 8 月上旬～8 月中旬、開花始が 8 月中旬～9 月上旬で早生種に属する。
5. 極高収油率、多収型で取卸油収量は「あやなみ」に比べ 2～3 kg/10 a 多い。
6. 採脳率は 47% 前後で中脳分品種である。

栽培適地と奨励態度 適地は北海道の和種はっか栽培地帯一円であるが、現在機械化向品種「ほうよう」が約 30% 作付されていてさび病の罹病性も高くなってきており、和種はっか収量向上の阻害要因となっているので「ほうよう」と全面的に置きかえる。また主要品種の「あやなみ」についても 50% 程度置きかえたい。

連作栽培する場合には「あやなみ」と同様に連作栽培技術の基本を励行することが肝要である。

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草 丈	分枝数	葉 数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	月. 日 8. 9	cm 79	本 37	枚 989	kg 3,150	kg 990	kg 15.65	% 0.50	% 47	1970～1972
北見農試	8.20	102	22	286	4,610	—	14.50	0.32	46	1971～1972

(5) さやかぜ (北系 J 16 号)

来歴 1968 年 (昭 43) に北海道農業試験場 (作物第 2 部特用作物第 2 研究室) において「あやなみ」の染色体倍化系統「あやなみ 4 倍体」を母とし、和種系の高脳分、高収油率系統「北系 J 10 号」を父として人工交配したものである。1969 年 (昭 44) より実生を養成して「J 43—380」

の系統番号で選抜をかさね、1971年（昭46）より「北系J16号」の系統名で生産力および特性の検定を行った。1975年（昭50）優良品種に決定し、農林省に新品種「さやかぜ」（薄荷農林10告）と命名、登録された。

特性概要 1.着蕾始は8月下旬で中生種の晩に属す。

2.草丈は「あやなみ」と「わせなみ」の中間程度で、さび病の抵抗性は強、耐倒伏性と耐線虫性（ピンセンチュウ）は中程度で、種根量も多い。

3.生草重は「あやなみ」や「わせなみ」よりも多く、取油量も「わせなみ」と同様高いため、取卸油の収量は「あやなみ」に比較して20%前後、「わせなみ」に比較しても5%前後の増収が見込まれる。

4.採脳率は55%前後で、「あやなみ」や「わせなみ」に比べ6～8%高く、はっか脳の商品的評価テストにおいても一般的に良好である。

栽培適地と奨励態度 中生種の晩に属し、多収高脳分で刈取期間も長いことから全道の和種はっか栽培地帯一円で「あやなみ」に置きかえうる。

収穫期間の延長による収穫機や蒸留施設の効率的利用などの面から早生多収の「わせなみ」を基幹品種とし、この品種を組合せることが肝要であり、はっかの主作地帯では「あやなみ」に置きかえて30～40%作付されることが望ましい。耐倒伏性が中程度なので、多肥栽培は避けたほうがよい。

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草丈	分枝数	葉数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	8.23	91	33	597	4,020	1,090	18.00	0.45	55	1971～1974
北見農試	8.26	108	28	347	4,410	—	13.00	0.30	54	1972～1974

3. 除虫菊

(1) わっさむ (26 S—6—1)

来歴 北海道農業試験場（作物部特用作物第2研究室）で、1950年（昭25）にケニヤより輸入した種子を翌年から育苗し、1958年（昭28）に個体選抜を行った栄養繁殖系統である。1958年（昭33）に、北海道立農業試験場上川支場（畑作課、士別市）圃場に定植し、以後生産力検定試験を実施してきたものである。1962年（昭37）優良品種に決定し「わっさむ」と命名した。

特性概要 1.春期及び収穫後の萌芽勢は「北海1号」に比べ旺盛で、終始葉色も濃い。

2.開花期は大体「北海1号」と同期であるが経過年数が増すと幾分早くなる傾向がある。

3.茎数はやや多い程度であるが、分枝数が多いので着花数は著しく多い。

4.草丈は「北海1号」に比べ10cm内外高いが倒伏は比較的少ない。

5.定植後2年目から3年目の乾花収量は、「北海1号」に比べて安定して多収である。

6.ピレトリン含有量は「北海1号」より幾分高い。

7.病害並びに冬損率は経過年数は浅いが「北海1号」と大体同程度とみられる。

栽培適地と奨励態度 従来本道の除虫菊の栽培は傾斜地の掠奪栽培によって、その有利性を保持してきたのであるが、このような栽培では、土壤浸蝕がはげしく、定植後4年くらいを経過すると、収量は急減し、宿根性雑草が繁茂してきて労力を多く要するようになる。栽培上留意を要する点を挙げるとつぎのとおりである。

1. 定植にあたっては基肥として10a当り堆肥1～1.5t 硫安11kg、過石26kg、豆粕（高価ではあるが、除虫菊に対しては特効的に作用する）11kgを基準として施用のこと。
2. 吸肥性が高いので、収穫直後に10a当り硫安11kg、過石26kg、豆粕11kgを追肥すること。
3. 収穫に際して低刈りし過ぎると欠株の原因になるから花梗を刈るようにすること。
4. 収穫年数は3～4年程度を限界として輪作を行い、収量と地力の減退を防ぐこと。

試験場名	開花期	収穫期	収穫期における				10a当り		ピレトリン含有率	試験年次
			草丈 cm	茎数 本	分枝数 本	着花数 個	乾花重 kg	茎重 kg		
上川農試	7. 3	7. 9	76.1	64.5	46.0	120.7	152.0	171.7	1.47	1960～61年 株令2～3年平均
北海道農試	7. 1	7.14	77.4	68.2	26.1	94.3	(23.4) ^K	(56.5) ^K	1.50	1959年 3年株

北海道農試（ ）内は株当り収量(g)で示す。

4. ラベンダー

(1) ようてい（早咲1—3）

来歴 「ようてい」は、1937年（昭12）曾田香料株式会社がフランスから種子を導入して系統選抜したものである。1960年（昭35）から北海道立農業試験場において適応性を検定し、1964年（昭39）優良品種に決定し、「ようてい」と命名した。

- 特性概要**
1. 早生種で、在来種に比べ開花は整一である。
 2. 花茎はやや長く、花茎姿勢はやや直立である。
 3. 葉色は緑で、花色はやや淡紫である。
 4. 花茎収量は中程度であるが、収油率が極めて高く、油質は良好である。

栽培適地と奨励態度 現在栽培されている各地に適する。挿木苗の活着が劣るので増殖に際して十分注意を要する。また計画より余裕をつけて挿木をする必要がある。

試験場名	開花始	収穫期	収穫期における			10a当り		収油率	試験年次
			草丈 cm	花茎長 cm	1m当り花茎数 本	花茎重 kg	油重 kg		
北海道立農試	7. 5	7.18	61.4	30.6	1,170	645	4,518	0.69	1960～1963

(2) おかむらさき (遅咲1—4)

来歴 「おかむらさき」は、1937年(昭12)曾田香料株式会社がフランスから種子を導入して系統選抜したものである。1960年(昭35)から北海道立農業試験場において適応性を検定し、1964年(昭39)優良品種に決定し、「おかむらさき」と命名した。

特性概要 1. 中生種で、在来種に比べ開花は整一である。

2. 花茎は極長で花茎姿勢は半平伏先端曲である。

3. 葉色は濃緑で光沢がある。花色はやや濃紫である。

4. 花茎収量はやや多く、収油率は中程度で、油の品質が良好である。

栽培適地と奨励態度 現在栽培されている各地に適し、在来種に置換えて奨励する。本ば定植に際し、苗木の根に肥料が直接付着すると枯れやすいので注意すること。

試験場名	開花始	収穫期	収穫期における			10a 当り		収油率	試験年次
			草丈	花茎長	1㎡当り花茎数	花茎重	油重		
	月. 日	月. 日	cm	cm	本	kg	kg	%	
北海道立農試	7. 8	7. 20	71.6	39.1	1.131	702	3,751	0.56	1960~1963

(3) はなもいわ (中咲2—2)

来歴 「はなもいわ」は、1937年(昭12)曾田香料株式会社がフランスから種子を導入して系統選抜してきたものを、1959年(昭34)以来北海道立農業試験場において適応性を検定した。1967年(昭42)優良品種に決定し、「はなもいわ」と命名した。

特性概要 1. 「ようてい」より5日遅く、「おかむらさき」より1日早い中生種である。

2. 花茎は中間で花茎姿勢はやや直立である。

3. 葉色は淡緑で白色の短毛があり、花色は極淡紫である。

4. 花茎収量は定植後1~2年は「あかむらさき」に劣るが、3~4年目以降は「おかむらさき」より増収する。収油率は「ようてい」「おかむらさき」より劣る。

栽培適地と奨励態度 現在栽培されている各地に適する。定植後の生育が緩慢であるから育苗に注意して良苗の育成に努めること。

試験場名	開花始	収穫期	収穫期における			10a 当り		収油率	試験年次
			草丈	花茎長	1㎡当り花茎数	花茎重	油重		
	月. 日	月. 日	cm	cm	本	kg	kg	%	
中央農試	7. 10	7. 22	44.4	21.6	485	468	3,843	0.61	1965~1966

5. 亜 麻

(1) ヒブラ(Fibra)

来歴 1945年(昭27)～1961年(昭36)にかけてオランダで交配、育成されたもので、1961年(昭36)にオランダの優良品種に登録された。1962年(昭37)オランダとの種子交換により導入され、以後1964年(昭39)までの3カ年、生産力および特性検定を行って、1965年(昭40)優良品種に決定し、農林省に新品種「ヒブラ」(あま導入2号)と命名、登録された。

特性概要 この品種に対して、オランダにおける特性の評価は、白花で生育は緩慢で晩熟、茎長は長く強靱であり多収、繊維歩留は非常に高く、品質は良好で種子収量は低い、さび病およびビシウムに抵抗性があるが早魃には弱いとされている。北海道における特性は次のとおりである。

- 1.「ヒブラ」の生育は緩慢で、「ウィーラ」より生育初期から中期にかけての草丈は低いが、開花期前後から伸長が旺盛となり、収穫期の草丈は「ウィーラ」より高い。
- 2.開花始は「ウィーラ」より約3日遅く、収穫期は1～2日おそい。
- 3.茎収量は「ウィーラ」と同程度かやや多収であるが、子実収量はやや少ない。施肥量に対する反応は「ウィーラ」より鈍い。
- 4.繊維歩留は「ウィーラ」よりやや良い。
- 5.耐倒伏性は「ウィーラ」と同程度かやや強い。ただし十勝においては挫折現象がみられる。
- 6.さび病抵抗性は「ウィーラ」より強いが、立枯病に対しては、菌系かその他の環境条件により異なる。
- 7.花色は白色、葯は青色で「ウィーラ」と同じである。千粒重は「ウィーラ」より僅かに軽い。
- 8.収穫期近くに急激に黄熟し、色上がりが良く茎品質は良い。

栽培適地と奨励態度 「ウィーラ」に代って全道一円に適する。

- 1.立枯病の抵抗性は場所に差はあるが「あおやぎ」のように強くないので、輪作年次に注意を要する。
- 2.施肥に対する反応は、「ウィーラ」より鈍いが大差はなく、施肥量は「ウィーラ」に準じてよい。
- 3.初期生育が緩慢で、かつ熟期がやや晚いので、つとめて早期播種すること。

試験場名	開花始	収穫期	生育日数	収穫期における			10 a 当り		1,000粒重	繊維歩留	試験年次
				草丈	茎長	茎の太さ	子実重	乾茎重			
北海道農試	月. 日 6. 27	月. 日 7. 30	日 95	cm 80.4	cm 69.1	mm 1.43	kg 109	kg 489	g 4.8	% 21.1	1962～1964
十勝農試	6. 30	7. 28	94	94.9	84.6	1.63	48	532	4.8	18.0	"
北見農試	7. 5	8. 2	94	89.7	79.3	1.88	51	594	3.8	20.5	"

(2) レイナ (Reina)

来歴 1955年(昭30)～1962年(昭37)オランダのCentraal Bureauにより交配育成され1962年(昭37)オランダの優良品種に登録された。北海道には1962年(昭37)に導入され、以後1965年(昭40)までの4年間、北海道農業試験場、北海道立十勝農業試験場および北海道立北見農業試験場で生産力および特性検定を行った。1966年(昭41)優良品種に決定し農林省に新品種「レイナ」(あま導入3号)と命名、登録された。

特性概要 オランダにおける本品種の特性は白花で「ウィーラ」に以るが、早熟である。茎は長く強靱多収であり、繊維歩留が高く品質は良い。種子収量が多く、さび病に強いがピシウムに弱い。早熟には強いとされている。北海道における特性は次のとおりである。

1. 初期生育は「ウィーラ」と同程度かやや早い収穫期の草丈は「ウィーラ」より劣る。
2. 開花始および熟期は「ウィーラ」とほぼ等しい。
3. 茎収量は「ウィーラ」より僅かに少なく、子実収量はやや多い。
4. 繊維歩留は「ウィーラ」より約1%高いが繊維収量は「ウィーラ」と大差なく、繊維の品質は「ウィーラ」並で「ヒブラ」よりは劣る。
5. 耐倒伏性は「ウィーラ」と同程度かやや強い。
6. 立枯病に対しては弱いが、さび病抵抗性は「ウィーラ」より明らかに強い。
7. 花色は白、葯は青色を呈し、子葉の大きさは「ウィーラ」と大差はない。
8. 子実千粒重は「ウィーラ」よりやや重い。

栽培適地と奨励態度 「ウィーラ」と同じく全道一円に栽培が可能であるが、「ウィーラ」に比べて生育が全般的に早く、倒伏抵抗性がやや強く、またさび病抵抗性が強いことから、播種期または生育の遅延する山麓および沿岸地帯やさび病の多発地帯に適する。

一般栽培上は「ウィーラ」に準じてよいが、立枯病に対しては「ウィーラ」と同様に弱いのて、7年以内の短期輪作はさけるべきである。

試験場名	開花始	収穫期	生育日数	収穫期における			10 a 当り		1,000粒重	繊維歩留	試験年次
				草丈	茎長	葉の太さ	子実重	乾茎重			
北海道農試	6.24	7.29	94	72.5	62.4	1.39	116	446	5.1	17.8	1962～1964
十勝農試	6.28	7.26	91	86.6	75.3	1.61	63	498	4.5*	17.5	1962～1965
北見農試	7.3	8.2	94	85.3	72.5	1.85	55	522	3.8	20.0	1962～1964

* 1,000粒重、十勝は1962年1ヶ年のみ

6. なたね

(1) タイセツナタネ (北系87号)

来歴 「タイセツナタネ」は、1952年(昭27)北海道農業試験場で「ハンブルグ1号」より選出育成を図ってきたものである。1957年(昭32)以降3カ年にわたり、道内試験機関において生

産力検定試験を行い、同時に現地試験により地方適否を検討した。1961年（昭36）優良品種に決定し、農林省に新品種「タイセツナタネ」（農林33号）と命名、登録された。

特性概要 1.草型はⅣ型（主茎の発達が旺盛で第1次分枝は稀に主茎の基部に発生し、秋播性程度が高い）である。

2.葉色は濃緑色を呈し、生育は旺盛である。

3.「ハンブルグ1号」より長稈で、稈の太さは中位である。

4.分枝の発達は著しく良好で、莢は長く、一莢結実数が多い。子実は黒色の大粒で品質は良好である。

5.成熟期は「ハンブルグ1号」より4日程早い。

6.冬枯れおよび菌核病に対する抵抗性が強く、「ハンブルグ1号」に比べ常に安定した多収を示す。

7.含油率は「ハンブルグ1号」よりいく分高い。

栽培適地と奨励態度 冬枯れ抵抗性、菌核病抵抗性が強いので、北海道の空知以北の冬枯れ多発地帯および道南の菌核病多発地帯に好適する。少肥にも向き適応性は広いが、安全多収を期するため冬枯れ防止対策は従来通り実施することが望ましい。

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10a当り 子実重	1ℓ重	1,000 粒 重	含油率	冬損歩合	試験年次
			草丈	穂長	1穂莢数						
北海道農試	月、日 5.22	月、日 7.21	cm 156	cm 33	個 13	kg 228	g 661	g 5.7	% 49.21	% 17.8	1956～1959
空知支場	5.30	7.24	142	33	17	234	663	5.8	—	29.3	1957～1959
原原種農場	5.23	7.24	139	—	—	218	662	5.9	—	—	1957～1959
岩内宇 園芸試験地	5.24	7.20	162	—	—	367	649	5.7	—	—	1958～1959

(2) イワオナタネ(MR1号)

来歴 「イワオナタネ」は、1954年（昭29）厚田郡厚田村望来で栽培されていた「岩内」の集団より個体選抜し、系統を育成したものである。1955年（昭30）より北海道農業試験場において、特性調査を行い、さらに1957年（昭32）以降3カ年にわたり道内試験機関において生産力検定試験を行い、同時に現地試験により地方適否を検討し、1961年（昭36）優良品種に決定し、「イワオナタネ」と命名した。

特性概要 1.草型はⅣ型（主茎の発達が旺盛で第1次分枝は稀に主茎の基部に発生し、秋播性程度が高い）である。

2.越冬前の葉色は濃緑色を呈し、葉縁に多くの細かい欠刻を有する。

3.生育は極めて旺盛である。長稈で分枝の発達が良く、枝稈は太く、とくに強剛で倒伏し難い。

4.莢は極めて長く、一莢結実数が多い。子実は「ハンブルグ1号」より小さく中粒であるが黒色整粒で良質である。

5.秋播程度は極めて高く、抽苔も遅く、成熟期は「ハンブルグ1号」より4～5日、「岩内」より2～3日おくれる極晩生種である。

6.耐寒性で、菌核病に対する抵抗性が強く、多収で含油率も高い。

栽培適地と奨励態度 枝稇がとくに強剛なので、倒伏しやすい地帯および多肥栽培に適する。また菌核病抵抗性が強いので道南地方の同病多発地帯に適する。耐冬性は「岩内」程度であるから冬枯れ防止対策には従来通り注意を要する。

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10a当り 子実重	1ℓ重	1,000 粒 重	含油率	冬損歩合	試験年次
			草丈	穂長	1穂莢数						
	月. 日	月. 日	cm	cm	個	kg	g	g	%	%	
北海道農試	5.26	7.29	160	36	14	224	652	4.8	49.27	21.8	1957～1959
空知支場	6. 3	7.29	140	35	19	242	656	4.8	—	33.8	1957～1959
原原種農場	5.25	7.27	140	—	—	239	653	5.0	—	—	1957～1959
岩 宇 園芸試験地	5.28	7.25	172	—	—	345	646	5.2	—	—	1958～1959

III 果 樹

1. ナ シ

(1) 北星（北農1号）

来歴 「北星」は、北海道農業試験場において、1939年（昭14）「身不知」を母とし、「二十世紀」を父として、人工交配した実生から選抜された1系統である。「14-10」の旧系統名で生産力検定を行っていたが、1958年（昭33）に「北農1号」に改称した。1966年（昭41）に優良品種に決定し、農林省に新品種「北星」（ナシ農林5号）と命名、登録された。

特性概要 1. 中生種で札幌地方では9月下旬に成熟期となり、食用適期は10月20日ころまでである。

2. 果実は紡錘形で果皮は緑黄色を呈し、平均果重は250g内外で肉質はやや粗であるが、果心が小さく、やや甘味に乏しいが品質は良い。

3. 樹勢は中等で開張性、耐寒性は「長十郎」程度と見込まれる。

栽培適地と奨励態度 「北星」は中生種であるが、耐寒性はやや弱く「長十郎」程度と見込まれることから、その適応範囲は比較的狭く、「長十郎」の栽培されている地域とする。

試験場名	1 樹当り収穫果数(個)							1 樹当り収穫果重量(kg)							糖度*
北海道農試	年次							年次							
	5	6	7	8	9	10	11	5	6	7	8	9	10	11	%
	3	28	57	94	104	136	141	0.8	7.9	14.5	22.6	28.0	34.2	34.5	11.6

* 糖度は屈折糖度計示度

(2) 北都（北農2号）

来歴 「北都」は、北海道農業試験場において、1939年（昭14）「二十世紀」を母とし、「身不知」を父として、人工交配した実生から選抜された1系統である。「24-9」の旧系統名で生産力検定を行っていたが、1958年（昭33）に「北農2号」に改称し、1966年（昭41）に優良品種に決定し、「北都」と命名した。

特性概要 1. 中生種で札幌地方では9月下旬に成熟期となり、10月末まで食味良好である。

2. 果実は不整な短紡錘形で果皮は白緑黄色を呈し、平均果重は230g内外で肉質はち密、多汁であり、果心が小さく、且つ甘味が強く香気があり品質は最上である。

3. 樹勢強く開張性で栽培容易であるが、盛果期に達する樹令がやや遅く、収量も中程度である。耐寒性は「身不知」に近い強さがあると見込まれる。

栽培適地と奨励態度 「北都」の耐寒性は「身不知」に近く、中生種であり、品質も最上であることから、その適応範囲は比較的広く、「身不知」の栽培されている地域とする。

試験場名	1 樹当り収穫果数(個)							1 樹当り収穫果重量(kg)							糖度*	
	年次	5	6	7	8	9	10	11	年次	5	6	7	8	9	10	11
北海道農試	2	15	41	99	102	143	162	0.5	3.7	9.5	24.0	25.2	32.1	33.6	13.1	

・糖度は屈折糖度計示度

2. ブドウ

(1) バッファロー (Buffalo)

来歴 「バッファロー」は、アメリカニューヨーク農業試験場において、「ハーバート」×「ワトキンス」の交配(1921年)により育成され、1949年に登録された品種である。本道へは1962年(昭37)に導入した。その後北海道立中央農業試験場で試験を行い、1966年(昭41)優良品種に決定した。

- 特性概要 1. 樹勢は比較的旺盛で、新梢はよく伸び、節間長も長くなる。副梢の発生は多く、放任すれば旺盛に伸びる。樹冠の拡性は比較的大である。
2. 葉の大きさは中位で、薄い。裏面の綿毛は白く少ない。葉縁の切れ込みは浅く、葉柄裂刻は狭く、閉じていることが多い。
3. 新梢は緑色で毛茸少なく、滑らかである。
4. 巻きひげは断続性である。
5. 花穂は1新梢に2～3房つく。花は自家結実性で、雄蕊直立である。
6. 秋期の枝の登熟はやや遅く、耐寒性はやや劣る。
7. 果実の熟期は9月下旬～10月上旬である。
8. 果房は円錐形で、果房重は200～250g程度である。粒着はかなり疎着である。脱粒は少ない。
9. 果皮色は紫黒色で、果粉は多い。果粒形は円で、果粒の大きさは中位である。
10. 果汁の糖度、酸度は共に高いため食味は濃厚である。また狐臭とは異なる独特の香りを有する。
11. ジベレリン処理により種なしとなり、熟期は9月上・中旬となる。また果粒形は長円形になる。

栽培適地と奨励態度 栽培適地 道央南部以南

栽培上の注意

1. 耐寒性がやや劣るので、強剪定、結実過多にならないようにする。
2. 栽培土壌としては、排水が良く、保水力をもった土壌に適する。
3. 成らせずぎや早採りは酸味が強くなるので慎む。
4. 病害虫については、他品種と特に異なる点はないので、薬剤散布は防除基準に従う。

試験場名	樹 齢	開 花 期	収 穫 期	収 量	平均房重	糖 度	酸 度
中央農試	4	月日 7.10	月日 10.5	kg/樹 10	g 200	% 19.3	g/100ml 1.40

・1965年調査

3. リンゴわい性台木

(1) EMⅨ(M9)

来歴 「M9」は、ヨーロッパにおいて古くから使われていた台木を英国のイースト・モーリング試験場で分類し、1930年(昭5)命名発表したEM系台木の1系統である。わが国への導入は、北海道大学が昭和の初期にイースト・モーリング試験場から入れたのが最初といわれる。青森県りんご試験場がドイツより1958年(昭33)、北海道立中央農業試験場がカナダより1963年(昭38)それぞれ再導入した。道内における適応性を検討した結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1.枝は、真直で、生育期には、はっきりした銀色の光沢があり、赤黄色である。葉は、大きく、長円形で丸みがかった扇形の鋸歯があり、表面が光っており、直立性である。

2.耐寒性は、「マルバ」「ミツバ」よりやや弱い。

3.各穂品種とも接木後の親和性は良好である。

4.接木後穂品種の発育程度は、「マルバ」「ミツバ」よりかなり小さく、樹令が進む程差は大きくなりわい性となる。

5.結実開始は「マルバ」「ミツバ」よりかなり早く、1樹当りの収量は少ないが、栽植密度の増加により10a当収量は多くなる。10a当樹数は「マルバ」「ミツバ」台の3～4倍程度である。

6.着果した果実の品質は非常に良好であり、「マルバ」「ミツバ」台の果実より熟度はかなり進む。

栽培適地と奨励態度 現在のりんご産地全道一円に適応する。栽培上の注意としては、根がもろく倒伏しやすいので樹体に永久的な支柱を用いること。

試験場所	穂 品 種	台	10a 当樹数	幹 周	1 樹当り収量	10a 当収量	果実糖度
中 央 農 試	ス タ ー キ ン グ	M 9	111	23.8	21.5	2,386	14.9
		マルバ	31	36.8	41.3	1,280	12.9
	旭	M 9	111	19.0	32.0	3,552	12.7
		ミツバ	31	36.1	34.2	1,060	11.6
	レ ッ ド ゴ ー ル ド	M 9	111	22.5	55.2	6,127	14.6
		ミツバ	31	39.7	50.3	1,559	13.0

注 幹周：8年生(1971年)

収量：樹齢8年生までの合計(1967～71年)

糖度：屈折糖度計示度(1970～71年平均)

(2) EMⅦ(7)

来歴 「M7」はヨーロッパにおいて古くから使われていた台木を英国のイースト・モーリング試験場で分類し、1930年(昭5)命名発表したEM系台木の1系統である。わが国への導入は、北海道大学が昭和初期にイースト・モーリング試験場から入れたのが最初といわれる。青森県りんご試験場が1959年(昭34)英国より、1963年(昭38)北海道立農業試験場がカナダよりそれぞれ再導入した。道内における適応性を検討した結果、すぐれた特性をもつことが認められ

たので、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.枝は細くしなやかで節間は長く、赤紫色で皮目は明瞭である。葉はうすく円形で低い位置のものは浅裂がある。葉柄は直立型である。

2.耐寒性は強い方で「マルバ」「ミツバ」と同じ程度である。

3.各穂品種とも接木後の親和性は良好である。

4.接木後、穂品種の発育程度は、「マルバ」「ミツバ」より小さく、樹令が進む程差は大きくなり半わい性となる。

5.結実開始は、「マルバ」「ミツバ」より早く1樹当りの収量は少ないが、栽植密度の増加により10a当収量は多くなる。10a当樹数は、「マルバ」「ミツバ」の2倍程度である。

6.着果した果実の品質は良好であり、「マルバ」「ミツバ」台の果実より熟度はやや進む。

栽培適地と奨励態度 現在のりんご産地全道一円に適応する。

栽培上の注意として、支柱を用いること、幼木時代は特に剪定を弱くして誘引を主体とし早期結実をはかること。

試験場所	穂品種	台	10a当樹数	幹周	1樹当り収量	10a当収量	果実糖度
中央農試	スターキング	M 7	63	34.6	21.3	1,342	13.2
		マルバ	31	36.8	41.3	1,280	12.9
	旭	M 7	63	30.7	42.7	2,690	11.6
		ミツバ	31	36.1	34.2	1,060	11.6
	レッドゴールド	M 7	63	35.7	49.0	3,087	13.9
		ミツバ	31	39.7	50.3	1,559	13.0
	紅玉	M 7	63	30.2	55.7	3,509	14.1
		ミツバ	31	37.4	76.6	2,374	13.4

注 幹周：8年生（1971年）

収量：樹齢8年生までの合計（1968～71年）

糖度：屈折糖度計示度（1970～71年の平均）

(3) MM111

来歴 英国のジョン・インネス試験場とイースト・モーリング試験場の共同研究によって、M系と主に「ノーザンスパイ」種を交配し、綿虫抵抗性台木として育成され1953年（昭28）MM系として発表されたものの1つである。「MM111」は「ノーザンスパイ」×「M793」である。わが国への導入は、1959年（昭34）青森県りんご試験場が英国より、1963年（昭38）北海道立農業試験場がカナダより、1966年（昭41）農林省園芸試験場盛岡支場が英国よりそれぞれ導入した。道内における適応性を検討した結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.枝は太く生育旺盛、芽は不整形で灰色、葉は、鋸歯はあらく、先端は赤い。葉柄の基部はでこぼこしている。

2.耐寒性は強く、強健である。

3.各穂品種とも接木後の親和性は良い。

4.接木後穂品種の発育程度は、「マルバ」「ミツバ」とほぼ同じ程度である。

5.結実開始は「マルバ」「ミツバ」よりやや早い。「旭」「レッドゴールド」のように高接病ウィルス保毒率が高く「マルバ」台の使用が一般的でない品種では、「ミツバ」台に比し、かなり多収である。

6.着果した果実の品質は良好であり、「マルバ」「ミツバ」台果実と熟期は同じ程度である。

栽培適地と奨励態度 現在のりんご産地全道一円、特に多雪、寒地に適応する。栽植樹数は「マルバ」「ミツバ」台と同じ程度、根群の発達が良好であり、永久支柱は必要ない。

試験場名	穂品名	台	10a当樹数	幹周	1樹当り収量	10a当収量	果実糖度
中央農試	スターキング	MM 111	31	41.2	38.8	1,202	12.6
		マルバ	31	36.8	41.3	1,280	12.5
	旭	MM 111	31	37.7	54.7	1,696	11.3
		ミツバ	31	36.1	34.2	1,060	11.6
	レッドゴールド	MM 111	31	39.9	68.8	2,133	13.1
		ミツバ	31	39.7	50.3	1,559	13.0

注注 幹周：8年生（1971年）

収量：樹齢8年生までの合計（1968～71年）

糖度：屈折糖度計示度（1970～71年平均）

4. ハイブッシュブルーベリー

(1) ジューン (June)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ホワイツボグで（「ブルックス」×「ラッセル」）を母とし、「ルーベル」を父として1919年（大8）交配され、1930年（昭5）アメリカで発表された。

1963年（昭38）、北海道立農業試験場（種芸部）がカナダより導入し、本道における適否を検討した結果、1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.早生種で、長沼で4月下旬から5月上旬に発芽し、5月中旬から5月下旬に開花し始める。

果実は7月中旬から下旬にかけて着色し始めるが、同じ早生種の「ウェイマウス」に比べて開花期から着色期までに要する期間が長い。熟した果実より採取するが、8月上旬頃最も収量が多く、その後徐々に少なくなる。

2.花芽の着生多く多収である。

3.果実の大きさは1.4g程度で中位である。1果重は採取時期の早いもの程大きく、時期を追って低下してゆくが、この低下度合が本品種は大きい傾向にある。果形はやや扁平で、果皮色は熟すると濃藍となる。

4.樹体は大きく、樹勢は中位で、樹姿はやや開張性である。

5.凍害には強い方である。

6.キャンカー様の病害にある程度罹病するが許容できる範囲である。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花始	着色始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖 度
	年	月日	月日	月日	cm	cm	kg	g	%
中央農試	13	4.28	5.25	7.25	160	155	1,809	1.4	11.5

- 注 1. 樹齢は1972年時点において示す。
 2. 発芽期は1970～1972年の3年間の平均を示す。
 3. 着色始、収量、1果重、糖度は1969～1972年の3年間の平均を示す。
 4. 開花始は1966～1972年の7年間の平均を示す。
 5. 樹高、樹巾（列間、樹間平均）は1972年調査。

(2) ウエイマウス (Weymouth)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ウエイマウスで「ジューン」を母とし、「キャボット」を父として1928年（昭3）交配され、1936年（昭11）アメリカで発表された。

1956年（昭31）北海道農業試験場が福島県園芸試験場より、1963年（昭38）北海道立農業試験場（種芸部）がカナダよりそれぞれ導入し、本道における適否を検討した結果、1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 早生種で、札幌で4月下旬から5月上旬に発芽し、5月下旬から6月上旬に開花し始める。

果実は7月中旬から7月下旬にかけて着色し始め、熟した果実より収穫してゆくが、8月上旬頃が収穫盛期となる。

2. 収量は多収である。

3. 果実の大きさは採取時期の早いもの程大きい傾向にあるが、平均して1.7g程度で、「ハーバート」程ではないが大きい方である。果形はやや扁円で、果皮色は熟すると濃藍となる。

4. 新梢が細く樹体は小さい。樹勢は弱く、樹姿は開張性である。

5. 凍害による枝の先枯れは、「ハーバート」よりも少なく耐凍性は高い。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花始	着 色 始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖度	調査年次
	年	月日	月日	月	cm	cm	kg	g	%	
北海道農試	14	4.25	5.27	7月中～下旬	134	188	2,045	1.7	12.5	1970～1973
中央農試	13	4.28	5.25	7.22	100	115	587	1.5	11.0	

- 注 ・ 樹齢は1972年時点において示す。
 ・ 樹高、樹巾（東西南北平均）は1971～1973年の3年間の平均を示す。
 ... 1. 樹齢は1972年時点において示す。
 2. 発芽期は1970～1972年の3年間の平均を示す。
 3. 着色始、収量、1果重、糖度は1969～1972年の3年間の平均を示す。
 4. 開花始は、1966～1972年の7年間の平均を示す。
 5. 樹高、樹巾（列間、樹間平均）は1972年調査。

(3) ハーバート (Herbert)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ウェイマウスで「スタンリー」を母とし（「ジャージー」×「パイオニア」）を父として1932年（昭13）交配され、1952年（昭27）アメリカで発表された。

1956年（昭31）北海道農業試験場が福島県園芸試験場より導入し、北海道における適否を検討した結果1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 中生種で、札幌で4月下旬から5月中旬に発芽し、6月上旬から中旬にかけて開花し始める。

果実は8月上旬から中旬にかけて着色し始め熟した果実より収穫するが、その期間が約1か月続く。

2. 収量は樹あたり1 kg程度で多い方である。

3. 果実の大きさはブルーベリーとしては大きく、大きいものでは一果重4 gを超える。果形は円で、果皮色は熟すると濃藍となる。

4. 樹体は大きい方で、樹勢は中位である。樹姿は「ウェイマウス」程ではないが開張性である。

5. 耐凍性は高い方であるが、「ウェイマウス」よりは、凍害による枝の先枯れが多いようである。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花期	着 色 始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖度	調査年次
	年	月日	月日	月	cm	cm	kg	g	%	
北海道農試	20	5. 8	6. 5	8月上～中旬	165	170	1,160	2.0	11.8	1970～ 1973

・ 樹齢は1973年時点において示す。

・ 樹高、樹巾（東西、南北平均）は1971～1973年の3年間の平均を示す。

(4) ランコカス(Rancocas)

来歴 本品種は、アメリカのニュージャージー州ホワイツボグで「ジューン」と同じく（「ブルックス」×「ラッセル」）を母とし、「ルーベル」を父として1915年（大4）交配され、1926年（昭1）アメリカで発表された。

1963年（昭38）北海道立農業試験場（種芸部）がカナダより導入し、本道における適否を検討した結果、1974年（昭49）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 中生種で、長沼で4月下旬から5月上旬に発芽し、5月下旬から6月上旬に開花し始める。

果実は7月下旬から8月上旬にかけて着色し始め、熟した果実より採取するが、8月上旬頃最も収量が多く、その後徐々に少なくなる。

2. 「ジューン」程ではないが花芽の着生多く多収である。

3. 果実の大きさは1.3 g程度で中位で、採取時期の早いもの程大きい傾向にある。果形はやや扁円で、果皮色は熟すると濃藍となる。果実の糖度は12～13%程度で高い方である。

4. 樹体は大きく、樹勢は中位で、樹姿はやや開張性である。

5. 耐凍性は「ジューン」と同程度で強い方である。

6. キャンカー様の病害にある程度罹病するが、許容できる範囲である。

栽培適地と奨励態度 道央以南の地域に新しい果樹として導入。

試験場名	樹 齢	発芽期	開花始	着色始	樹 高	樹 巾	収量/樹	1果重	糖 度
	年	月日	月日	月日	m	cm	kg	g	%
中央農試	13	4.29	5.28	7.29	145	143	849	1.3	12.6

- 注 1. 樹齢は1972年時点において示す。
 2. 発芽期は1970～1972年の3年間の平均を示す。
 3. 着色始、収量、1果重、糖度は1969～1972年の3年間の平均を示す。
 4. 開花始は1966～1972年の7年間の平均を示す。
 5. 樹高、樹巾(列間、樹間平均)は1972年調査。

5. グースベリー

(1) ピックスウェル (Pixwell)

来歴 米国、ノースダコタ州農業試験場で「リベス ミズリエンシス」×「オレゴン チャンピオン」から育成され、1932年(昭7)発表された。北海道農業試験場が1961年(昭36)東北農業試験場(園芸部)から本種の配付を受け、試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1976年(昭51)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 樹勢強く、新梢は太く数も多い。やや開張性で樹高は約1.6mになる。

2. 熟期は7月下旬である。

3. 収量はひじょうに多く、1株当たり10kgに達する。

4. 果実は円形をしており、大きさは中位で平均果重は約2.4gである。成熟すると紫紅色となる。

5. 糖度は「ホートン」よりはやや低いが、その他の品種の中では高い方である。

6. ウドンコ病にはひじょうに強いが、斑点病には弱い方である。

7. 耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので北海道の全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹 勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.6	強	やや開張	5.17	7.30	10.4	2.4	円	紫紅	13.2	1965～1975

- 注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値
 2. 糖度は屈折糖度計の示度

(2) グレンダール (Glennedale)

来歴 米国、ニュージャージー州において、グロスラリア ミズリエンシスに栽培種を2代交配、3代目に「キープセーク」を交配したものからW.V.フリート氏が1905年(明38)に選抜した。その後U.S.D.A.により適応性試験が行われ、1932年(昭7)発表された。

北海道農業試験場が1961年(昭36)東北農業試験場(園芸部)から本種の配付を受け、試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1976年(昭51)優良(準奨励)品

種に決定した。

- 特性概要 1.樹勢強く、新梢太く数も多い。やや開張性で、樹高は1.7m程度になる。
 2.熟期は7月下旬である。
 3.収量は「ピックスウェル」に次いで多く、1株当たり約8.5kgである。
 4.果実は円形をしており、大きさは中位で平均1果重は3g程度である。成熟すると紫紅色となる。
 5.糖度はやや高い方である。
 6.ウドンコ病にはひじょうに強く、斑点病にも強い。
 7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので、北海道の全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.7	強	やや開張	5.14	7.30	8.5	3.3	円	紫紅	12.5	1965～1975

- 注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値
 2. 糖度は屈折糖度計の示度

(3) ホートン (Houghton)

来歴 米国、マサチューセッツ州でA.ホートン氏が米国種と欧州種との雑種から選抜したもので、1852年発表された。わが国へは明治初年に開拓使により導入された。その後道内で「在来種」として栽培されていたものを、北海道農業試験場が収集し、試作の結果、同種が「ホートン」種であることを同定した。またすぐれた特性をもつことが認められたため、1976年（昭51）優良（準奨励）品種に決定した。

- 特性概要 1.樹勢はやや強く、新梢は細いが数は多い。樹姿はやや開張性で、樹高は低く1.2m程度である。
 2.熟期は7月下旬である。
 3.収量は多く、1株当たり約8kgである。
 4.果実は円形をしており、大きさはやや小さめで平均果重は2g程度である。成熟すると暗赤色となる。
 5.糖度は高い。
 6.ウドンコ病には強い方であるが、斑点病には弱い。
 7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので、北海道全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	1.2	やや強	やや開張	5.16	7.30	8.0	2.0	円	暗赤	14.3	1965～1975

- 注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値
 2. 糖度は屈折糖度計の示度

(4) オレゴン チャンピオン (Oregon Champion)

来歴 1860年頃米国オレゴン州でP.ブレティマン氏が「クラウン ホブ」×「ホートン」の交配から作出し、1909年(明42)発表された。北海道農業試験場が1961年(昭36)東北農業試験場(園芸部)から本種を入手し、その後試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められたので、1976年(昭51)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1.樹勢はやや強く、新梢は細いが数は多い。樹姿はやや開張性で、樹高は低く1.2m程度である。

2.熟期は7月下旬である。

3.収量は中位で、一株当たり5kgあまりである。

4.果実は円形をしており、大きさは中位で平均果重は2.5g程度である。成熟すると緑黄色となる。

5.糖度は高い。

6.ウドンコ病には強い方であるが、斑点病には弱い。

7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強いので、北海道全域で栽培できよう。土壌に対する適応性は広いが、排水の良い粘質がかった土壌が適する。

試験場所	樹 高	樹勢	樹 姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果 形	果色	糖度	試験期間
北海道農試	1.2 ^m	やや強	やや開張	5.21 ^{月日}	7.27 ^{月日}	5.7 ^{kg}	2.5 ^g	円	緑黄	13.5 [%]	1965～1975

注 1. 数値はいずれも1972～1975の4年間の平均値

2. 糖度は屈折糖度計の示度

6. キイチゴ

(1) フレミング ジャイアント (Flaming Giant)

来歴 米国キャベリア地方の野生赤色種と、ミネトンカの野生赤色種との交配種1906年発表。北海道農業試験場が1958年(昭33)に農業技術研究所(園芸部)から入手し、試作の結果1974年(昭49)に優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1.樹勢は中程度で上向開張性である。樹高は1.3m前後となる。

2.熟期は「ラーザム」よりやや早く、7月下旬から8月上旬である。

3.収量は多く、1株当たり1.2kg程度である。

4.果実の大きさは中位で、平均果重は約2gであるが、大きいものは4g前後になる。

5.果色は鮮紅色で、果形は短楕円形である。

9.糖度は「ラーザム」よりやや低いが、品質は悪くない。

7.耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強く、また夏期に冷涼な気候を好むため、北海道全域で栽培できよう。土壌の適応性も広いが、特に有機質に富んだ砂壤土が適する。

試験場所	樹高 m	樹勢	樹姿	満開期 月日	成熟期 月日	1株収量 kg	1果重 g	果形	果色	糖度 %	試験期間
北海道農試	1.3	中	上向 開張	6.30	8.2	1.2	1.9	短だ円	鮮紅	7.7	1969～ 1973

- 注 1. 数値のいずれも1970～1973の4年間の平均値
2. 糖度は屈折糖度計の示度

(2) セプテンバー (September)

来歴 米国で「マーシー」と「レーニア」の交配から得られた。1947年(昭22)発表。北海道農業試験場が1961年(昭36)に東北農業試験場(園芸部)から配付を受け、その後試作を続けた結果、すぐれた特性をもつことが認められ、1974年(昭49)に優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 二期成り性であり、1回目の成熟期は「フレミング ジャイアント」よりやや早く、7月下旬～8月上旬、2回目の成熟期は10月上旬～10月下旬である。

2. 樹勢は中程度で、上向開張性である。樹高は1.5m前後となる。

3. 収量は、二期成り性であることもあって、ひじょうに多く、2回の合計で1株当たり2kgに達する。

4. 果実の大きさは中位で、平均果重は約2gである。

5. 果色は鮮紅色で、果形は短楕円形である。

6. 糖度は一季目の果実では「ラーザム」よりやや低いが、二季目の果実では高い。品質は良い。

7. 耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強く、また夏期に冷涼な気候を好むため、北海道全域で栽培できよう。土壌の適応性も広いが、特に有機質に富んだ砂壤土が適する。

試験場所	樹高 m	樹勢	樹姿	満開期 月日	成熟期 月日	1株収量 kg	1果重 g	果形	果色	糖度 %	試験期間
北海道農試	1.5	中	上向 開張	6.25 9.7	7.30 10.16	1.5 0.5	2.1 2.1	短だ円	鮮紅	8.4 11.3	1969～ 1973

- 数 1. 数値はいずれも1970～1973の4年間の平均値。
2. 本品種は二期成り性のため、上段に一季目、下段に二季目の数値を示した。
3. 糖度は屈折糖度計の示度。

(3) カスパード (Cuthbert)

来歴 1865年頃米国ニューヨーク州で偶発実生から発見された。北海道農業試験場で古くから試作されていたが、その結果すぐれた特性をもつことが認められ、1974年(昭49)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 樹勢が強く、樹高も高く2.3m程度になる。上向開張性。

2. 熟期は7月下旬～8月下旬で、「ラーザム」とほぼ同時期である。

3. 収量は中位で、1株当たり約0.8kgである。

4. 果実の大きさは、平均1.6gと大きい方ではない。

5. 果色は濃赤色で果形は楕円形である。

6. 糖度は「ラーザム」より高く品質は良い。

7. 耐寒性は強い。

栽培適地と奨励態度 耐寒性が強く、また夏期に冷涼な気候を好むため、北海道全域で栽培できよう。土壌の適応性も広いが、特に有機質に富んだ砂壤土が適する。

試験場所	樹高	樹勢	樹姿	満開期	成熟期	1株収量	1果重	果形	果色	糖度	試験期間
	m			月日	月日	kg	g			%	
北海道農試	2.3	強	上向開張	7.6	8.10	0.8	1.6	だ円	濃赤	11.1	1969～1973

注 1. 数値はいずれも1970～1973の4年間の平均値

2. 糖度は屈折糖度計の示度

7. ウ メ

(1) 大野豊後（大野優良豊後梅）

来歴 通常、豊後梅と称されるものは、梅と杏の雑交によるもので、南は九州から北は北海道に至るまで、広く実梅として栽培されている。太平梅、増井梅、太白梅、実成豊後、柏木豊後、等いずれも豊後梅系に属する品種であるが、大分県の豊後産が著名であったところから、この名称がついたものである。夫々の地方により系統が異なり、その特性の差が北海道の風土に対する適否を左右することが判明したので、1965年（昭40）北海道立道南農業試験場で道南一円に分布する実梅を調査すると共に、府県産の豊後梅も導入し、夫々の系統の穂木により造苗し、育成比較の結果、1974年（昭49）豊後梅系の優良系統と認め優良（準奨励）品種に決定し、「大野豊後」と命名した。

特性概要 1. 樹勢は他の（豊後系）に比べて弱い。

2. 枝梢は他の（豊後系）に比べて細く、短かく、発生数も少ないが、陽面の赤色化と、皮目の少数等は同程度である。

3. 樹形は他の（豊後系）に比べて著しく開張性である。

4. 葉は他の（豊後系）に比べてやや小さく、毛茸が少ないが、葉柄の赤色化は同程度である。

5. 花は他の（豊後系）に比べて、花卉が小さく、花卉数も他の（豊後系）の5～6枚から12～15枚に比べて、丁度5枚と少なく、雄蕊数も他の（豊後系）の30～35本から40～60本に比べて、18～25本と少なく、花托の毛茸は他の（豊後系）に比べて多く、花托に光沢がない。花卉の淡紅色、萼の紅色等は同程度である。

6. 結果性は他の（豊後系）に比べて、結果期に入るのが早く、熟期も稍々早く、花粉は完全で豊富であり、自家結実歩合も高く、実用上他品種の混植を必要としない。開花期は他の（豊後系）と大差ない5月上旬である。

7. 果実は他の（豊後系）の一果重、31.0～57.0gに対して、30.9gと小果で、果形も他の（豊後系）の長円形や不規則形の多いのに対して、球形で玉揃いが良く、他の（豊後系）の縫合線が深く、果頂部の花柱痕が稍々凸出するのに対して縫合線は浅く、果頂部は平らで花柱痕が稍々凹入する。果皮、果肉其他の（豊後系）の厚いのに対して薄く、核も小さ目である。

栽培適地と奨励態度 栽培適地は渡島、桧山、胆振、日高、後志、留萌、石狩の7支庁管内に亘ると考える。

奨励態度は、従来各地方に存在する（豊後系）の梅で、結実関係で不良なものに置き替えていくことが望ましいが、樹形が開張性のため枝梢の切返しを強くし、主枝角度を立てる等、整枝剪定面に注意を払い、枝幹の下垂、垂弱を防ぐのと、果実の成熟期が、他の（豊後系）に比べて、比較的短期間に集中するので、収穫と出荷に注意が必要である。

試験場所	果 数 (個)				果 重 (g)			
	1972	1973	1974	合計	1972	1973	1974	合計
道南農試	36	120	145	301	1,332	3,240	4,183	8,755

Ⅳ 野 菜

1. トマト

(1) ウルバーナ (Urbana)

来歴 米国イリノイ農試で育成されたもので、その経過は詳かでないが、1950年頃ルイジアーナピンク、ブリッチャード及びイリノイ育成系統などが交配親として使われたものと考えられている。1957年小林泰氏（北海製缶株式会社缶詰研究所主任）により導入され、試作の結果有望と思われたので1962年以来各農試で試験を行い、1965年（昭40）優良品種に決定し原名から「ウルバーナ」と命名した。

特性概要 1. 熟期は早生の晩に属し、稚苗期の草勢は旺盛で芯止り性であるがその程度は弱い。

2. 果形は扁円球、大きさは中(平均100g 前後)、ひだの発生は稀で花痕は小さい。へたばなれは中位、硬さは軟かい方である。

果色は濃紅色でジュースの色調も良い。

3. 裂果や日焦の発生は多い方に属する。

4. 耐病性、疫病に対しては中位である。

栽培適地と奨励態度 道中央部以南および上川、留萌管内や富良野盆地に準ずる気象条件の地帯。

本種は芯止り性が強くないので肥沃条件下では茎葉が繁茂し、結実低下、疫病の発生をうながすので、施肥特に窒素の過用はつつしむこと、無支柱栽培の場合は排水の良いほ場をえらび畦巾120cm、株間45cmを基準とし、播種期は3月末～4月上旬とすること。

試験場名	草 状		開 花 始	収 穫 始	収 穫 終	収量(10株)		1個平均重	搾汁率(%)	
	高 さ	拡がり				早 期	全 期		対原重量	対調整量
中央農試	47.9	57.9	6.11	8.15	9.21	11.00	27.87	86.2	85.7	93.3

試験場名	ジ ュ ー ス 成 分						
	全 固 形 物	可溶性固形物	還元糖	総 酸	アミノ態 N	pH	BX
中央農試	5.71	5.02	3.13	0.51	55.9	4.3	6.4

注 搾汁率、ジュース成分は1965年（昭40）9月3日調査
 その他は1963年～1965年3ヶ年平均

〔1979年（昭54）廃止〕

(2) ファイアボール (Fire ball)

来歴 米国 Harris Seed Co. が1952年(昭27)育成した早生、早期多収型の無支柱栽培向け加工用品種である。1962年(昭37)北海道立農業試験場がカナダから導入し1963年(昭38)以降試作し、1965年(昭40)農業試験会議に提出したが、加工特性の味の点で難があるとされ保留となった。1966年(昭41)再検討の結果、問題となった異臭は決定的なものでないので1966年(昭41)優良品種に決定し原名から「ファイアボール」と命名した。

特性概要 1. 熟期は早生に属し、草勢は、初めは旺盛で7月中～下旬までに草体の大きさはほぼ決定し芯止り性が強く概ね3花房で生長点が止る。

2. 葉はやや黄緑色を呈し、小さくやや盃状に湾曲する。後半、着果成熟期に達してから、側枝の発生、伸長がなく、草勢衰え果実が裸出する。

3. 果実は100g前後着色の良いユニフォームグリーンで、朱赤色扁球形、多少浅いひだを生ずる。着花状態は芯止り性のため、株の周辺に近く集まり収穫作業はしやすい。

4. 耐病性、多湿の時は生理的腐敗果を生じ易く、軟腐病におかされやすいが、疫病に対しては薬剤防除で回避出来る。

5. 耐肥性あり、多肥への反応がにぶく、施肥上の失敗は少く作りやすい。

栽培適地と奨励態度 収穫、加工期間の増幅をはかるためウルバーナと配合作付する。

芯止り性が強いので畦巾100～120cm—株間30～40cmの密植とし、肥料もやや多肥とする。

試験場所	草 状		開 花 始	収 穫 始	収 穫 終	収量(10株)		1 個 平均重	搾汁率(%)	
	高 さ	拡がり				早 期	全 期		対 重	対調整 重
中央農試	39.8	73.0	月日 6.5	月日 8.13	月日 9.21	kg 15.26	kg 26.10	g 95.6	87.3	91.9

試験場名	ジ ュ ー ス 成 分						
	全 形	固 物	可溶性 固形物	還元糖	総 酸	アミノ 酸 N	pH
中央農試	5.60	4.97	2.66	0.45	55.9	4.4	BX 6.1

注 搾汁率、ジュース成分は1965年(昭40年)9月3日調査

その他は1963年～1965年3ヶ年平均

[1979年(昭54)廃止]

(3) あかぎ

来歴 東京シード(株)において、極早生で耐病性が強く、栽培容易な品種を目標に、「市原早生」の中から2系統を選んだ。さらに早生で低温伸長性が強く、悪天候にも鈍感で、花数が多く、着果のよい品種という点から、東北地方で栽培されている「スペシャル・アーリー」から2系統を選んだ。そしてダブルクロス方式によって1959年(昭34)に「あかぎ」を育成した。北海道農業試験場で1969年(昭44)～1971年(昭46)の間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 草勢は旺盛で、根張りよく、厳寒の候に育苗しても低温伸長性強く、外気の変動にも耐える。

2. 一般的に極早生種はイチョウ病、スジグサレ病がしやすいが、本種は根張りがよいので、こ

れら根からくる病気にも強く、また巻き葉になる性質があるので、密植しても光線をよく透し、通風もよいので、ハカビ病の発生も少ない。

3. 熟期は「宝冠1号」などとはほぼ同様、極早生トップクラスに属し、「福寿2号」「ひかり」より4～5日は早い。

4. 果実の発育、肥大、着色が早く、収穫が始まれば連続的に収穫でき、くず果がひじょうに少なく、したがって初期収量がきわめて多い。

5. 果の大きさは平均200g以上、早生種としては大型のほうで、第1段から4～5個着果し引き続き4～5段まで大玉を着生する。

6. 果形はやや腰高の豊円でよく整い、花痕部、へた部とも小さく、ひだが少なく、ホルモン処理による変形も少ない。

7. 果色は光沢のある桃紅色で、へた部の近くまでよく色づき、果肉がしまって厚く、種の部分が少ないことも本種の特長で、料理用に薄く切っても果肉のくずれることが少ない。

8. 土壌適応性はかなり広く、一般早生種に比べ、着花力が旺盛で、果実の肥大が早く、生殖生長型の品種であるから、多肥栽培を必要とする。

栽培適地および奨励態度 1. 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。2. 道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によって適応可能である。

試験場所	開花始			収穫始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	空洞果率	試験年次
	第1花房	第2花房	第3花房	第1花房	第2花房	第3花房	早期	全期				
	月日	月日	月日	月日	月日	月日	kg	kg				
北海道農試	4. 19	4. 28	5. 9	6. 20	7. 2	7. 11	391	717	65. 0	3. 2	28. 5	1969～1970

[1979年(昭54)廃止]

(4) 宝冠1号

来歴 「宝冠1号」は武蔵野種苗(株)において、促成、早熟栽培むき品種育成を目標にスペシャル・アーリー群に属する1系統と、アーリー・ピンク群に属する1系統からえた一代雑種である。1956年(昭31)命名、1957年(昭32)より発表された。北海道農業試験場で1969年(昭44)～1971年(昭46)の間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. ハウス促成用極早生種で巻葉になる性質を有する。着果力旺盛で果実肥大が早い。

2. 果形はやや腰高でヒダがなく濃いピンクで独特の光沢がある。1果平均重は142gでやや小に属し、上物率はやや高い。

3. 収量性はやや不安定である。

栽培適地および奨励態度 1. 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2. 道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開花始			収穫始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	空洞果率	試験年次
	第1花房	第2花房	第3花房	第1花房	第2花房	第3花房	早期	全期				
	月日	月日	月日	月日	月日	月日	kg	kg				
北海道農試	4. 19	4. 29	5. 10	6. 21	7. 2	7. 13	399	670	50. 4	3. 6	28. 1	1969～1970

(5) 新豊紀

来歴 「新豊紀」はマヤト種苗㈱において、早出し、とくにトンネル栽培用品種の育成を目標に選抜された早生品種間の一代雑種である。1957年（昭32）から発売された。北海道農業試験場で1969年（昭44）～1971年（昭46）の間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.ハウス促成用、極早生で初期生育は旺盛。

2.果色は桃色でへたの周辺はやや緑が残る。果実はやや腰の低い扁円形で玉揃は良い、果実の大きさは143gでやや小に属する。

3.収量はやや安定しているが、時に肥大不良花房の発生することがある。

栽培適地および奨励態度 1.道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2.道東においても、ハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	腐敗果率	試験年次
	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	早 期 kg	全 期 kg				
北海道農試	4. 19	4. 29	5. 9	6. 22	7. 3	7. 13	337	699	59. 5	2. 9	28. 5	1969～ 1970

〔1979年（昭54）廃止〕

(6) 豊 緑

来歴 「豊緑」は坂田種苗㈱において早生大玉の萎ちょう病抵抗性品種の育成を目的に、米国より導入した「ピアソン、FR」から市場性を中心に抵抗性親系統を選抜、さらにF₁の組合せ能力検定を行えられた「大玉ジュンピンク」の1系統との一代雑種である。1967年（昭42）発表されたものを、北海道農業試験場で1969年（昭44）～1971年（昭46）間ハウス促成栽培用適品種選定試験に供試し、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1.ハウス促成用早生種で草勢は強い。

2.果色は濃く、平均1果重は145gで中位、扁円形で上物率はやや高い。

3.収量性は安定している。

栽培適地および奨励態度 1.道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2.道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	空洞果率	試験年次
	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	第1花房 月日	第2花房 月日	第3花房 月日	早 期 kg	全 期 kg				
北海道農試	4. 20	4. 30	5. 11	6. 24	7. 4	7. 16	326	744	60. 9	6. 1	44. 9	1969～ 1970

〔1979年（昭54）廃止〕

(7) スーパーキング

来歴 ヤマト種苗㈱で、萎ちょう病抵抗性品種を目的に育成された。

北海道農業試験場で1969年（昭44）～1971年（昭46）の間ハウス促成栽培用適品種選定試験

に供試し1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 草勢は中からやや強に属し、葉は大きい。

2. 第1～第2花房の着花は良好で果の揃いもよく肥大性は良好である。第3花房でも着花がよい。1果重は180g前後で中である。

3. 熟期は早～中に属し、上物率が高く収量は安定している。

4. 萎ちょう病には抜群の抵抗性を持ち夏疫病、ウイルス、青枯病にも比較的強い。

栽培適地および奨励態度 1. 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

2. 道東においてもハウス内環境をコントロールすれば作型によっては適応可能である。

試験場所	開 花 始			収 穫 始			収量(10a当り)		上物率	裂果率	腐敗果率	試験年次
	第1 花房 月日	第2 花房 月日	第3 花房 月日	第1 花房 月日	第2 花房 月日	第3 花房 月日	早 期 kg	全 期 kg				
北海道農試	4. 20	4. 29	5. 10	6. 22	7. 3	7. 8	342	736	61. 3	3. 4	41. 2	1969～ 1970

〔1979年（昭54）廃止〕

(8) 早生だるま

来歴 本品種は松永種苗㈱で育成されたものであるが、来歴については未発表である。道内には1972年（昭47）から試作された結果、1977年（昭52）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 苗の生育は「ウルバーナ」なみの強い草勢を示し、定植後も同様である。芯止り性は強く、有効分枝が多いため早期の着果が良好である。枯葉期もおそくリーフカバーも良好である。初収穫は「ウルバーナ」より10日程度早く「ファイヤボール」なみである。

2. 特に耐病性は持たないが、病害には強い方である。

3. 着果は早期から安定しており、早生のため前期から全期間を通じて多収である。特に低温年でも未熟果は少なく有効果割合が高い。さらに圃場での腐敗果数は「ファイヤボール」より少ない。

4. 1果重は80g前後でやや小果であるが、赤色球形で外観は良好である。裂果も少なく果肉の色調はすぐれ、加工適正は良好である。果実は堅く運搬中のロスも少ない。

5. 総じてやや小果だが、早熟多収品種である。

栽培適地と奨励態度 道央以南のトマト栽培地帯に適応する。苗時代から草勢が強いので密植にならぬように注意するとともに、定植後は特に耐病性はもっていないので栽培後半の防除に十分注意し、収穫労力節減のため収穫は7～10日毎でよい。

試験場所	収穫始 月日	前期収量 kg/a	全期収量 kg/a	前/全期 %	1果重 g	腐敗果率 %	裂果 発生程度 %	糖 度 %	試験年次
中 央 農 試	8. 3	141	947	14. 9	69	11. 5	9. 2	4. 5	1972～ 1976
北海製缶研究所	8. 15	123	598	20. 6	62	20. 3	6. 6	—	1975

(9) 交1号(交1号)

来歴 北海道農業試験場(作物第2部)で、1963年(昭38)から1968年(昭43)の間に19品種、15組合せの一代雑種について検討した結果、「ウルバーナ」×「ファイヤボール」の一代雑種を選抜し、「交1号」の系統名で道内各地で生産力検定試験を行い、1977年(昭52)優良(準奨励)品種に決定し「交1号」と命名した。

特性概要 1. 苗の生育は「ウルバーナ」なみの強い草勢を示し、定植後も生育は良好である。は種から開花までの日数は「ウルバーナ」より4～5日早く、ほぼ「ファイヤボール」なみである。芯止り性は強いほうで、早期の着花がよい。開張度は「ウルバーナ」と「ファイヤボール」のほぼ中間型を示すが、リーフカバーは良いほうである。初収穫は「ファイヤボール」なみか、1日ほど遅れるが、「ウルバーナ」より7～8日は早い。

2. 特に耐病性はもたない。

3. 着花が早期から安定しているので前期収量が高く、枯葉期が遅いため後期の収量も落ちず多収である。早生種のため低温年でも未熟果が少ないが、やや圃場での腐敗が多い。

4. 1果重は100g前後で中果種である。果実外観は良好で、堅さ、肉色、糖度と果実形質は「ウルバーナ」なみである。裂果は初期では少ないが後期になると「ウルバーナ」よりやや多めとなる。

栽培適地と奨励態度 道央以南のトマト栽培地帯に適応する。特に耐病性を持っていないので、育苗後半から病害の防除に注意する。

試験場所	収穫始 月日	前期収量 kg/a	全期収量 kg/a	前/全期 %	1果重 g	腐敗果率 %	裂果 発生程度 %	糖度 %	試験年次
北海道農試		147	547	30.0	94	21.5	—	—	1964～ 1969
中央農試	(8.10)	173	820	21.1	107	18.1	25.0	4.5	1968～ 1976
北海製苗研究所	8.15	102	301	33.9	115	44.0	32.1	—	1974～ 1978

注 ()は1976年1ヶ年の成績

(10) れいぎよく

来歴 1964年(昭34)から1968年(昭43)の間に、長野県農業試験場桔梗ヶ原分場で交配したF₁の中から選抜されたものである。この系統は中部高冷地における栽培を主体に、既存の「H1370」のもつ繁茂性を少なくし、かつ早期多収であり、極早生種の「ファイヤボール」などのもつ環境感受性をなくし、さらに既存品種にくらべ収量、果実の品質などともに劣らないことを目標に選抜されている。母品種は1963年(昭38)農家圃場で発見された品種不明の1優良株からの選抜系であり、父品種は「くりこま」、系統名は「桔交416」である。道内では1969年(昭44)より系統適応性検定試験を行い1970年(昭45)に「れいぎよく」と命名された。1977年(昭52)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要1. 苗の生育は「ウルバーナ」「ファイヤボール」なみの草勢を示すが、定植後は中間型の草勢を示す。着花は安定しており、年による差が少ない。芯止り性は強いが、リーフカバー

は良好である。初収穫は「ウルバーナ」より5～7日は早く早生種であるが、「ファイヤボール」よりやや遅い。

2. 葉に発生する病害に対しては特に耐病性を持たないが、萎ちょう病に対しては抵抗性を持っている。

3. 初期収量は「ファイヤボール」よりやや劣っているが、全期収量では「ウルバーナ」「ファイヤボール」より多収である。圃場での腐敗は「ファイヤボール」なみである。

4. 果実は赤色球型で1果重は120g前後である。外観は良好で裂果の発生が少ない。堅さはいく分軟らかいが果肉の色調がすぐれ、糖度が高いため加工適性は良好である。

栽培適地と奨励態度 道央以南のトマト栽培地帯に適応する。苗の草勢が比較的強いので密植にならぬようにし、定植時の植傷みがないよう努め、マルチ栽培とする。定植後の草勢は強いが、成熟始期頃からやや弱くなりがちなので、草勢の低下を防止する。

試験場所	収穫始	前期収量	全期収量	前/全期	1果重	腐敗果率	裂果発生程度	糖度	試験年次
	月日	kg/a	kg/a	%	g	%	%	%	
中央農試	(8.10)	156	848	18.4	117	20.7	12.7	4.6	1969～1976
北海製缶研究所	(8.15)	148	670	22.1	128	14.1	29.6	—	1973～1976

注 () 1975年1ヶ年成績

2. キュウリ

(1) 長日青節成

来歴 「長日青節成」はヤマト種苗㈱で育成された品種で、1969年(昭44)～1971年(昭46)まで北海道農業試験場で促成用栽培品種比較試験を行い有望性が認められ、1972年(昭47)優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 草勢は強く、黒イボ系に属し、果長は中位、果色は緑色である。

栽培適地および奨励態度 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

試験場所	開花始	収穫始	7月16日		7月31日	総収量 (10a当り)	屑果収量 (10a当り)	病害	品質	試験年次
			草丈	葉数	匍枝数					
	月日	月日	cm	枚	本	kg	kg			
北海道農試	5.20	6.5	188.5	21.7	6.8	13.273	1.023	少	中	1969～1971

[1979年(昭54)廃止]

(2) 久留米落合H型

来歴 「久留米落合H型」は久留米原種育成会で「久留米落合」を母とし、「日向改良系」を父

として組合せた一代雑種である。1969年（昭44）～1971年（昭46）まで北海道農業試験場で促成栽培品種比較試験を行い有望性が認められ、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性の概要 草勢は強く、黒イボ系に属し、果長は長く濃緑色、側枝の発生は少ない。

栽培適地と奨励態度 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

試験場所	開花始 月日	収穫始 月日	7月16日		7月31日	総収量 (10a当り) kg	屑果収量 (10a当り) kg	病害	品質	試験年次
			草丈 cm	葉数 枚	側枝数 本					
北海道農試	5. 22	6. 1	188. 7	21. 7	5. 8	11, 874	189	少	上	1969～ 1971

〔1979年（昭54）廃止〕

(3) 夏埼落3号

来歴 「夏埼落3号」は埼玉県園芸試験場で育成された品種で耐寒性の強い春キュウリ（「房成り性日向系」×「埼落」）×「埼落」の固定種を父として、12月播種で選抜を重ねた白イボ夏キュウリを数回戻し交配し、このなかから葉型、草姿ともに黒イボ系に類似した白イボ系を選出した品種である。1965年（昭40）命名され1969年（昭44）～1971年（昭46）まで北海道農業試験場で促成栽培品種比較試験を行い有望性が認められ、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定した。

特性概要 1. 葉は中位、茎太く、節間はややつまる。

2. トゲの小さい白イボで、鮮濃緑色で他品種と異なりてりがある。

栽培適地と奨励態度 道央、道南地方のハウス促成栽培とする。

試験場所	開花始 月日	収穫始 月日	8月24日		7月31日	総収量 (10a当り) kg	屑果収量 (10a当り) kg	病害	試験年次
			草丈 cm	葉数 枚	側枝数 本				
北海道農試	9. 2	9. 11	130. 0	10. 5	—	457. 7	171	—	1970年、抑制栽培
	5. 6	5. 18	—	—	—	673. 9	—	—	1970、促成(加温試験) 栽培

3. イチゴ

(1) 盛岡16号

来歴 「盛岡16号」は、園芸試験場盛岡支場において、冷涼地の多年省力栽培に通する品種を育成するために、1960年（昭35）に米国種13品種と、我が国の11品種系統の間で交配を行い、多年栽培適応性、果実形質、耐病性などを主な選抜基準として選抜を続け、その中の「2—8」（Fairfax×Ettersburgの交配実生より選抜した系統）×「千代田」の交配実生より選抜した。1969年（昭44）より、北海道農業試験場・北海道立中央農業試験場（指定試験事業）において、

適応性の検定を行った。1973年（昭48）優良品種に決定した。

特性概要 1.草姿は立性で草勢、分株数、ランナー発生は「幸玉」と同程度か、やや多い。葉は杯状でやや淡緑色である。結果習性は、1花房あたり4～7果で少果数型である。

2.熟期は「ダナー」よりやや遅れ、「幸玉」と同程度か幾分早い中生である。少果数型のため、収穫の終期は「幸玉」より早い。

3.1年目の収量は中位であるが、2年目の収量は多い。1番果は30g以上の大果となるが果型はくずれない。平均果重は、「幸玉」「ダナー」「宝交早生」に比べ大きく、収穫末期にも大果を着け、屑果が非常に少ない。

4.果型は円錐～やや長い円錐型の大果で、果色鮮紅色で外観が美しい。果肉着色は淡いが空洞が少ない。糖度高く、食味は甘酸適和して、極めて美味である。また、果実が堅く、日持ち・輸送性が、「ダナー」と同程度以上に良好である。加工性も良い。

5.果実の腐敗は極めて少ないが、茎葉の病害には強い方ではない。

栽培適地と奨励態度 本道における露地生食用中生種として優良な品種であり、またトンネル、およびハウス栽培にも有望である。なお、特にその果実特性から輸送地帯での栽培に、より適していると考えられる。

栽培にあたってはウィルスやセンチュウの被害のない健全苗を導入する。少果数型であることから収穫1年目株の花数を確保するため、育苗を充分に行い、大苗を養成する。収穫2年目株の収量が多く安定することから、栽培管理に十分注意して、2～3年株の利用も考える。茎葉病害および、乾燥に弱い傾向が認められるので注意する。

試験場所	草丈 cm	葉数 枚	10株当収量		1果平均重 g	糖度	試験年次
			個数	重量 g			
北海道農試	—	—	171	1,250	7.3	—	1970
中央農試	27.9	11.7	66	807	12.2	10.4	1972

(2) ホレラ (Gorell)

来歴 「ホレラ」はオランダワゲニンゲン園芸試験場で「ジャスバ」(「Juaurda」×「Sparkle」)を母とし「MdUs3763」を父として育成された品種である。1965年（昭40）北海道農業試験場で同場から分譲を受け、1966年（昭41）から栽培、品種比較を行った結果、1972年（昭47）優良（準奨励）品種に決定し、原名から「ホレラ」と命名した。

特性概要 1.草姿は立性で、草勢は強ランナーの発生は中位で、葉面大きく、葉柄は短くややコンパクトタイプに属する。

2.熟期は「幸玉」なみの中生である。

3.収量は1年目、2年目ともに多収を示す。

4.果型は楕円形の大果で、果色やや鮮紅色で果面が美しく、堅くて日持ちが良く、収穫後期になっても、小果になり難い。食味は甘酸適和して、極めて美味である。加工適性も良い。

栽培適地と奨励態度 本道における露地生食用中生種として適す。

栽培にあたってはウィルス病、センチュウの被害のない健全苗を導入する。ランナーの出は

中位なので採苗用の圃場で母本の養成が必要である。多収品種なので有機質肥料の使用は必ず行うこと。

試 験 場 所	収 量 (12株当り)					
	1 年 株 (1969年)			2 年 株 (1970年)		
	重 量	個 数	1 果平均重	重 量	個 数	1 果平均重
北 海 道 農 試	2.640 kg	315 個	8.4 g	2.291 kg	333 個	6.9 g

[1979年(昭54)廃止]

4. タマネギ

(1) オータムプライド

来歴 アメリカ合衆国アイダホ州 Crookham.Co. で1961年(昭36)育成した雄性不稔利用一代雑種である。親系統の由来については発表されていないが、両親系統とも「Downing Yellow Globe」「Brigham Yellow Globe」あるいは「Iowa Yellow Globe」などの品種属に属するものと思われる。「Experimental Hybrid No. 4」の仮名により5年間検討された後、1966年(昭41)「オータムプライド」と命名されて発売された。道内では北海道農業試験場で1962年(昭37)より導入試作を行った。1972年(昭47)で優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 種子は小粒だが重く「札幌黄」と大差はない。容積重は非常に重い。発芽は遅く、苗の生育も若干遅れる。夏期は遅くまで生育するので、葉数は多く、首部は太く、球型は地球型で「札幌黄」よりいく分甲高である。

2. 耐病性は葉のボトリチス性葉枯病には強い。その他の病害にはやや弱いと思われる。

3. 倒伏期は「札幌黄」より一週間程度遅れるが、揃いはよい。

4. 総収量は「札幌黄」より多いが、規格内収量はやや低い。

5. 規格外の発生は「札幌黄」と同等で、玉揃いは非常に良い。

6. 栽植密度に対する反応は「札幌黄」とほぼ同等である。

7. 貯蔵後の品質は「札幌黄」よりもすぐれている。

8. 貯蔵中の重量減は非常に少ない。また貯蔵中の腐敗や萌芽によるロスも少ない。萌芽期は「札幌黄」より1ヵ月程遅いようである。

栽培適地と奨励態度 石狩、空知地方の移植栽培に適する。その他の地方、あるいは直播栽培でも可能であるが、異常天候の年には危険である。未調整のバラ貯蔵、機械による取扱い、後期出荷の場合に特徴を発揮する。定植開始期を3～5日遅らせ、窒素肥料を減量して生育遅延をさける。病害防除は「札幌黄」よりも遅くまで続けること。

試 験 場 所	倒 伏 期	抽 苔 率	規 格 内 球 重	規格内比	球形指数	病 害 率	貯 蔵 中		試験年次
							腐敗率	発 芽	
北 海 道 農 試	月日 9. 3	% 1. 04	kg/a 568	% 83. 4	104. 0	% 4. 5	% 1. 07	% 12. 49	1963～ 1970

(2) 北見黄（札幌黄「上常呂系」）

来歴 1973年（昭48）より北海道立北見農業試験場で、道内各地で栽培されている「札幌黄」の系統を収集して比較試験を行い、網走管内に適する良質多収、高貯蔵性系統として「上常呂系」を選抜した。「上常呂系」は北見市上常呂玉葱振興会が、1965年（昭40）滝川市小谷一夫氏の自家採種による「小谷系」を移入し、その後同系統あるいは他系統を再移入することなく、集団選抜により系統維持に努めてきたものである。1976年（昭51）優良（準奨励）品種に決定し、「北見黄」と命名した。

- 特性概要 1.倒伏期は「黒川系」より3日程度早い、北見地方の在来系統とは差がない。
 2.規格内球重は「黒川系」より約10%の多収を示す。
 3.規格内比は高く、球色は良好で皮むけし難い。
 4.球形指数大きく、「札幌黄」の理想的球形に最も近い地球型である。
 5.圃場腐敗が少なく、軟腐病罹病率も比較的低い。
 6.貯蔵性に優れているが、長期貯蔵の場合、発根、萌芽率が高くなる傾向がある。
 7.不時抽苔は少ない。

栽培適地と奨励態度 適地は網走管内のタマネギ栽培地帯とする地域限定品種である。栽培に当っては現行の栽培基準に従う。現在網走管内で栽培されている系統の中には、「北見黄」と遜色のないものもあるが、収量性、品質、貯蔵性等で本系統より劣るものが多い。従って管外からの系統を含め、現在網走管内で栽培されている大部分の系統におきかえて栽培を奨励し、品質、規格の統一を図る。

試験場所	倒伏期	抽苔率	規格内球重	規格内比	球形指数	腐敗率	貯蔵中		試験年次
							腐敗率	発根萌芽	
北見農試	8.13	1.8	463	87.3	91.4	11.6	6.8	15.9	1973~1975

5. 食用ユリ

(1) 北海白百合（空系1号）

来歴 「北海白百合」は北海道立農業試験場空知支場で1959年（昭34）AO No.5（岩見沢市の阿波加氏が「大葉百合」×「角田百合」で育成したもの）を母とし、「角田百合」（芦別産）を父とした人工交配により約400粒の種子を生産し、同年秋播種、1960年（昭35）約300球を生産した。1961年（昭36）肥大率良好な12個体を選抜りん片増殖を行った。1962年（昭37）から生産力検定試験を行い、1965年（昭40）優良品種に決定し、「北海白百合」と命名した。

- 特性の概要 1.発芽は「在来種」に比べ1週間内外おそく着蕾、開花も10~14日おそい。
 2.草状はやや短く、葉はやや細く長く密に着生している。
 3.球根は扁球形純白で、分球が少なくりん片幅広く厚く栗状で数は少なく、肥大著しくしまりは良好である。

4. 木子の着生量はやや多い。

栽培適地と奨励態度 道内一円の百合栽培地帯に適する。

栽培にあたってはウイルス病の感染防止につとめることと、木子の生育末期の萌芽し易い点、あるいは湿地で栽培した場合はりん片に亀裂を生じ易く、それから尻ぐされ状を呈しやすいので注意が必要である。〔1979年（昭54）廃止〕

試 験 場 所	萌芽期	着蕾期	摘蕾期 草 丈	葉 数	10a 当 り				1 球重量	試験年次
					球 数	重 量	木子着数	木子重		
	月日	月日	cm	枚	個	kg	個	g	g	
空 知 支 場	5. 19	7. 21	90. 4	123	8, 333	1, 210	694	333	151. 2	1964

V 花 卉

1. 花ゆり

(1) ホノオ（交配1号）

来歴 「ホノオ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場（種芸部）で「あかひらと」を母、「おくきんぶんせん」を父として交配、1952年（昭27）播種、1953年（昭28）開花、1957年（昭32）選抜りん片繁殖、1960年（昭35）優良品種に決定し、「ホノオ」と命名した。

特性概要 1.開花期は7月下旬、花期間は15～20日間、蕾は紡鐘形で僅かに彎曲、全面に白毛有り、花色は朱紅色、僅かに芳香あり、花の大きさ10cm位、斜め下向に咲き、花卉は強く反転、花卉の斑点は多い。花梗は長いものは8cm位で総状花序で20輪以上の花を着ける。葉は披針形で濃緑色で光沢はなく着生はやや斜め上向、葉数は90～100枚位、茎はかたく多角形で紫褐色、高さ100cm位、種球の小さい場合は地下茎が匍匐する傾向がある。珠芽は着生しないが木子は4～5個着生する。球根は純白色で球～扁球型、りん片は擬宝珠～広卵形、りん片の抱合、球のしまり良好。用途として国内、国外向け花壇用、切花用として利用出来る。

ウイルス、ボトリチスには強くないので防除が必要である。

栽培適地と奨励態度 道内の軽い土壌（砂質土、火山灰土）での栽培が望まれる。〔1972年（昭47）廃止〕

(2) ハゴロモ（交配2号）

来歴 「ハゴロモ」は、1951年（昭26）北海道立農業試験場（種芸部）で「あかひらと」を母、「おくきんぶんせん」を父として交配し、1952年（昭27）播種、1953年（昭28）開花、1957年（昭32）選抜りん片繁殖。1960年（昭35）優良品種に決定し、「ハゴロモ」と命名した。

特性概要 1.開花期は7月下旬～8月上旬、花期間は15～20日間、蕾は紡鐘型で白毛が密生。花色は朱紅色で芳香が僅かにある。花の大きさは11cm位、斜め下向咲、花卉の反転はかるい。斑点は紫黒色で花卉の基部に集中している。花序は総状花序、花梗は10cm位で白毛がある。花数は30輪位、葉は披針形で緑色、やや光沢があり、水平に着ける。葉の裏側に白毛がある。葉数は110～130枚位、茎はかたく多角形の緑色、但し頂端と基部は紫褐色を帯び、頂端部に白毛がある。高さは100～120cm位、小球の場合は地下茎が匍匐する傾向が強い。珠芽はつかないが木子は4～5個着生する。ウイルスには強いがボトリチスには侵されるので防除は必要である。草勢が強いので栽培は容易である。

栽培適地と奨励態度 道内の軽い土壌（砂質土、火山灰土）で栽培が望まれる。〔1979（昭54）廃止〕

(3) 岩内透 1 号 (99号)

来歴 「岩内透 1 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査し、1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 1 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月上旬「えぞすかしゆり」としては早生である。草丈60cm位、花色は紅色で花弁はやや反転し、花弁の斑点はやや多い。花梗は短く、花は上向に数輪付ける。茎葉の毛は少いほうで、葉の形状は細く数が多いほうで水平に付ける。ボトリチスに対しては(えぞすかしゆり)では強いほうである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1972年(昭47)廃止〕

(4) 岩内透 2 号 (30号)

来歴 「岩内透 2 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験場)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査した。1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 2 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月上中旬、「えぞすかしゆり」としては中生である。草丈80cm位、花色は紅色で花弁は反転しないコップ状に咲く、花弁の斑点はやや多く、花梗は比較的長い。茎葉の毛は少なく、葉の形状は細く、数多く水平に付ける。ボトリチスに対しては「えぞすかしゆり」の中ではやや強いほうである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1972年(昭47)廃止〕

(5) 岩内透 3 号 (146号)

来歴 「岩内透 3 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査した。1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 3 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月上中旬で「えぞすかしゆり」としては中生である。草丈70cm位、花色は鮮紅色で花弁は反転せずコップ状に咲く、花弁の斑点は比較的少く、花梗はやや長い、葉はやや広く短く上向に付いている。ボトリチスに対しては「えぞすかしゆり」の中ではやや強いほうである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1979年(昭54)廃止〕

(6) 岩内透 4 号 (10号)

来歴 「岩内透 4 号」は、1952年(昭27)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験場)で、岩内地方海岸砂丘地に自生する「えぞすかしゆり」を採集し、約15,000球より選抜した系統で、1957年(昭32)～1960年(昭35)にりん片増殖を行い特性を調査した。1964年(昭39)優良品種に決定し、「岩内透 4 号」と命名した。

特性概要 1.開花期は岩内地方で6月中旬「えぞすかしゆり」としては中生である。草丈60cm位、花色は橙紅色で花卉は反転せずコップ状に咲く、花卉の斑点はやや少い。花梗はやや長く葉はやや広く上向で数は少ない。葉色は淡緑である。ボトリチスに対しては弱いようである。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥がれ易い欠点があるので道内各地の軽い土壌(砂土、火山灰土)で球根栽培するのに適する。〔1972年(昭47)廃止〕

(7) 大井 (岩宇 3 号)

来歴 「大井」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「上重代」を父として交配、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜し、「504」の系統名でりん片増殖、1961年(昭36)より「岩宇 3 号」として特性を検討した。1966年(昭41)優良品種に決定し、「大井」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中旬、花色は橙色で花卉の斑点は中位、花径は15cm内外で稍々大輪で上向に咲く、花卉は僅かに波状を呈す。草丈50cm位、葉数50～70枚位、茎は剛く、基部で淡紫赤色である。木子の着生は極めて少ない。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること。ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(8) 神恵 (岩宇 5 号)

来歴 「神恵」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「黄透」を父として交配。1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜し、「661-1」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1961年(昭36)より岩宇 5 号として特性を検討して来た。1966年(昭41)優良品種に決定し、「神恵」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中旬、花色は朱色で花卉の斑点は中位、花径は16～17cm位で大輪、上向に咲く、花卉は稍々波状を呈す、草丈40cm内外で、葉数50～70枚位、茎は剛く、基部は淡紫赤色である。木子の着生は少い。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること、ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(9) 雷電 (岩宇8号)

来歴 「雷電」は、1954年(昭29)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「金武扇」を父として交配、1955年(昭30)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜「1019」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1961年(昭36)より「岩宇8号」として特性を検討して来た。1966年(昭41)優良品種に決定し、「雷電」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中下旬、花色は朱色で花卉の斑点は少々多い、花径は15cm内外で少々大輪、花梗は長く上向に咲く、蕾の毛が多い。草丈60cm内外で、葉数は60枚位、葉の巾が広い。木子の着生は普通である。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること。ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(10) 積丹 (岩宇9号)

来歴 「積丹」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「黄透」を父として交配、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜「1009」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1961年(昭36)より「岩宇9号」として特性を検討して来た。1966年(昭41)優良品種に決定し、「積丹」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中旬、花色は橙色で花卉の斑点は少ない。花径は16cm内外で大輪、上向きに咲き、草丈は50cm位で葉数50枚位、葉は斜上に着生する。木子の着生は少々少ない。

栽培適地と奨励態度 球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂土及び火山灰土のような軽い土壌で栽培すること。ウイルス、ボトリチス等の病害には強くないので薬剤防除、被害株の抜き取りは必ず行うこと。〔1972年(昭47)廃止〕

(11) えぞあか (岩宇7号)

来歴 「えぞあか」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「千草」を父として交配、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜「783—2」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1965年(昭40)「岩宇7号」として特性と促成栽培の適否を検討した。1967年(昭42)優良品種に決定し、「えぞあか」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中下旬、花型はすかしゆり型で上向、花色は赤橙色で花卉の斑点は少く、少々反転、花梗の長さは中位、花の大きさは中輪、蕾の毛は中位あり、草丈50cm位、葉数中位、葉色は緑で水平に葉を付ける。葉の巾はやや広く長さは中位。ボトリチスには花がやや弱いようである。

栽培適地と奨励態度 在来の「えぞ透ゆり」が片親であり、球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂質土及び火山灰土のような軽い土での栽培が望まれる。〔1979年(昭54)廃止〕

(12) えぞこがね (岩宇16号)

来歴 「えぞこがね」は、1953年(昭28)北海道立農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「えぞ透ゆり選抜系統」を母、「透百合(不明)」を父として交配、種子は、1954年(昭29)播種、1957年(昭32)開花、1958年(昭33)に選抜、「522」の系統名でりん片増殖、特性調査を行い、1965年(昭40)「岩宇16号」として特性と促成栽培の適否を検討した。1967年(昭42)優良品種に決定し、「えぞこがね」と命名した。

特性概要 1.開花期は6月中下旬、花型はすかしゆり型で上向、花色は黄橙色で弁先ややぼかし、花卉の斑点は中位、反転しない。花の大きさは少々中輪、花梗の長さは短い。蕾の毛は中位にあり、草丈50cm位、葉は緑でやや垂下、葉巾は中で長さは短い。

栽培適地と奨励態度 在来の(そぞ透ゆり)が片親であり、球根のりん片が剥れ易い欠点があるので砂質土及び火山灰土のような軽い土での栽培が望まれる。〔1979年(昭54)廃止〕

(13) 岩内黄金 (4503)

来歴 「岩内黄金」は、1966年(昭41)北海道立中央農業試験場(岩宇園芸試験地)で、「3711(えぞ透選抜系統×新樺)」を母、「F系(金剛城×エンチャントメント)」を父として交配、1967年(昭42)温室播種、温室内で実生育成、1968年(昭43)圃場移植、1969年(昭44)開花、1970年(昭45)選抜、「4503」の系統名で育成、1971年(昭46)より中央農試にて特性、促成適否について検討した。1975年(昭50)優良品種に決定し、「岩内黄金」と命名した。

特性概要 1.開花が6月下～7月上旬、花色が濃黄色で花卉の斑点は少くすかし形で横向に咲く、草丈30cm位、葉はやや細目で水平に付き照葉である。茎は緑色で直立、珠芽は着かない。球根は白色で扁球形でやや小球、りん片の抱き合せは密である。木子の着生は少ない。促成栽培で8月上旬掘上げ、年内に開花出来る。ボトリチスにはやや強い。蕾の基部に淡褐色の色が付く、蕾の向は横向、色は黄色で早目に着色する。

栽培適地と奨励態度 道内で比較的軽い土壌(砂質土及び火山灰土)での球根栽培に適する。

VI 飼 料 作 物

1. アカクローバ

(1) サッポロ (月系37—1)

来歴 北海道農業試験場で育成された品種である。同畜産部で保存されていた「北海道在来種」およびアメリカ、カナダ、スウェーデン、イギリスから導入された35品種を母材料にして、多収性、永続性、茎割病、さび病抵抗性について、3サイクルの反復集団選抜によって育成された。1963年から「月系37—1」の系統名で系統適応性検定試験に供試され本系統の優良性が認められた。1966年(昭41)優良品種に決定され、農林省に「サッポロ」(アカクローバ農林1号)として命名、登録された。1968年(昭43)には OECD に登録されている。

特性概要 1. 早生種に属し、開花期は札幌附近では6月27～28日前後である。

2. 葉は大きく、葉斑は鮮明である。毛茸は「マンモスクローバ」ほど多くないが、中程度に有する。

3. 2番草の生育は良好で、在来種に比較しても再生力は大きいと認められる。

4. 3年目の2番草の生育も良好であるから、永続性は大きいと認められる。

5. 病害抵抗性は大粒菌核病には抵抗性を有し、茎割病やさび病にも比較的抵抗性を有する。しかし、小粒菌核病にはやや罹病性である。

6. 生産力は「在来種」なみであるが、保存中の「在来種」は長年月にわたり淘汰が加えられているから一般種子に比しはるかにすぐれていると考えられる。収量は道央、道南では好結果が得られる。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、採草用奨励品種として普及する。

試験場所	開花始 月日	草 丈 (1番草) cm	風 乾 草 量 kg/10a				試験年次
			1年次	2年次	3年次	合 計	
北海道農試	6.20	82	220	770	650	1,630	1963～1965
天北農試	6.28	65	370	810	580	1,760	〃
天北農試天塩支場	6.25	81	590	970	600	2,160	〃
根釧農試	7.3	74	190	610	380	1,180	〃
北見農試	6.24	84	260	880	900	2,040	〃
十勝農試	6.22	75	370	880	690	1,940*	〃
日高種畜牧場	6.20	93	170	710	810	1,690	〃

(2) ハミドリ

来歴 雪印種苗株式会社で育成された品種である。1948年(昭23)にアカクローバ採種地帯で

ある上川、空知、十勝の16町村から病害の認められない個体から採種し、その後代を母材にして集団選抜を3回繰返して育成されたものである。1962～1964年（昭37～39）に北海道農業試験場および北海道立天北農業試験場で品種試験に供試され、すぐれた成績を示した。1966年（昭41）に優良品種に決定し、「ハミドリ」と命名した。

特性概要 1.開花期は札幌附近では6月30日前後、天北地方では7月5日前後で、早生の晩に属する。

2.冬枯れに強く、永続性も大きい。

3.茎割病にはやや抵抗性を示すが、さび病抵抗性は「在来種」なみである。

4.生産力は道央では必ずしも多収性を発揮しないが、道北地方の寒冷地では良好な成績を示す。

5.伸長型の品種である。

栽培適地と奨励態度 特に道北地域の採草用奨励品種として普及する。

試験場所	開花期	草 丈 (1 番草)	風 乾 草 量 kg/10a				試験年次
			1 年 次	2 年 次	3 年 次	合 計	
北海道農試 I	6. 29	90	270	840	650	1,110	1962～1964
北海道農試 II	6. 23	91	350	990	690	1,340	"
天北農試 I	7. 4	57	235	627	468	1,330	"
天北農試 II	7. 1	55	196	576	345	1,117	"

註：I. 道内採種

II. アメリカ、カリフォルニア採種。

(3) レッドヘッド (Red Head)

来歴 オランダの van der Have 社で育成された4倍体品種である。オランダの地方在来種をコルヒチンで処理して4倍体をつくり、多収、耐病性、永続性を目標に、5回の集団選抜を行った後、多交配法によって育成され、OECDに登録されている。1968年～1970年（昭43～45）にわたり、道内試験機関で品種比較試験を行い、一部の場所ですぐれた成績を示した。1972年（昭47）に優良品種に決定し原名から「レッドヘッド」と命名した。

特性概要 1.早生種に属するが、開花期は場所により「サッポロ」や「ハミドリ」より1～5日おそい。

試験場所	開花期	草 丈 (1 番草)	風 乾 草 量 kg/10a				試験年次
			1 年 次	2 年 次	3 年 次	合 計	
中央農試	7. 3	78	810	1,510	1,160	3,480	1968～1970
北海道農試	7. 4	74	350	810	290	1,450	"
天北農試	7. 5	53	140	360	370	860	"
北見農試	6.28	78	570	870	890	2,340	"
新得畜試	7. 3	87	480	1,040	690	2,200	"
根釧農試	7. 3	85	260	970	670	1,890	"

2. 葉は大きく、葉斑はやや不鮮明である。
3. 茎は太く、草丈も高く、草姿全体が巨大である。
4. 草勢が強く、混播条件で競争力がすぐれている。
5. 耐病性は「サッポロ」と同じか、やや強い方である。しかし、土地を選ぶ性質が強く、不適地帯では冬枯れによる立毛の減少が認められる。
6. 草取量は道央および根釧地方で多収性を発揮し、その他の地方では「サッポロ」と同じか、低収であった。

栽培適地と奨励態度 道央、根釧地域における採草用奨励品種として普及する。

2. シロクローバ

(1) ロディギアノ (Ladino Gigante Lodigiano)

来歴 イタリアの在来種「イタリアー」から育成されたラジノ型の代表的品種で OECD に登録されている。1970～1973年（昭45～48）にわたり、道内農畜産試験場において品種比較試験に供試され、1975年（昭50）に優良（準奨励）品種に決定し、原名から「ロディギアノ」と命名した。

- 特性概要 1. 典型的な巨大型で、葉は大きく、葉柄は長く、ほふく茎も太い。
2. 刈取り利用に適し、収量も多い。
3. 青酸含量が少ないため放牧利用にも好適。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し、採草、放牧用準奨励品種として普及する。

試験場所	開花期	草丈 伸長量 (2年次)	風乾草量 kg/10a				試験年次
			1年次	2年次	3年次	4年次	
中央農試	月日	cm	220 (生草)	668	986	752	1970～1973
天北農試	—	101	580 (生草)	709	919	728	"
天北農試天垣支場	—	131	449	920	791	1,092	"
滝川畜試	—	100	173	899	520	—	1971～1973
北見農試	6.25	176	—	977	807	602	1970～1973
根釧農試	—	129	104	640	640	730	"

(2) リーガル (Regal)

来歴 アメリカのアラバマ州で永続性、多収性を目的として育成された合成品種である。1970年（昭45）以降、道内各農畜試において品種比較試験に供試され、1975年（昭50）に優良（準奨励）品種に決定し、原名から「リーガル」と命名した。

特性概要 1. 小葉のV字型斑紋は判然としていて一重のものと、二重のものとがある。葉は大

きく花冠数は少ない。

- 2.耐寒性，耐旱性にすぐれている。
- 3.耐病性，永続性にすぐれている。
- 4.多収で特に夏の生産性が高い。

栽培適地と奨励態度 北海道一円に適し，採草，放牧用準奨励品種として普及する。

試験場所	開花期 月日	草 丈 伸 長 量 (2年次) cm	風 乾 草 量 kg/10a				試験年次
			1年次	2年次	3年次	4年次	
中 央 農 試	—	147	270 (生草)	712	1,087	858	1970～1973
天 北 農 試	—	90	860 (生草)	674	972	707	〃
天北農試天垣支場	—	123	533	880	731	996	〃
滝 川 畜 試	—	100	170	854	580	—	1971～1973
北 見 農 試	6.23	160	—	1,055	875	617	1970～1973
根 釧 農 試	—	117	137	610	550	630	〃

3. アルファルファ

(1) ウィリアムズバーグ (Williamsburg)

来歴 アメリカ，バージニア農試において「Kansas Common」より集団選抜法により育成された品種である。OECDの登録品種である。1962年（昭37）に北海道中部以南地域における優良品種に指定されたが，1971年（昭46）に優良（準奨励）品種に改められた。

特性概要 1.紫花種に属し，直立型である。

2.葉枯病にやや弱いが，輪紋病や葉腐病に対しては抵抗性を示す。

3.3年目以降の収量低減が少なく，2，3番草の再生がおう盛である。

栽培適地と奨励態度 北海道中部以南地域に適応し，採草用準奨励品種として普及する。

廃止理由 品種性能が低下し，他品種よりすぐれた点がみられなくなり，種子の流通量もなく，新品種で置き換えられることから，1978年（昭53）に準奨励品種の指定が廃止された。

試験場所	開花期 月日	草 丈 (1番草) cm	風 乾 草 量 kg/10a						試験年次
			1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	
北 海 道 農 試	7.4	103	407	789	774	767	602	602	1956～1961

(2) ライゾーマ (Rhizoma)

来歴 カナダのプリティシュ・コロンビア大学において黄花種の「Don」と「Grimm」の種間交雑を行い，冬枯れ，干ばつ抵抗性を目的に選抜された。OECD登録品種である。1962年（昭

37) に根釧、天北地域の寒冷地の優良品種に指定された。

特性概要 1. 雑色種に属する。

2. 根は放射状に伸長し、地上部は直立ないしほふく型である。

3. 花色は黄色または黄色味がかった紫色が多い。

4. 葉枯病、輪紋病、葉腐病等の多くの病害に対して抵抗性を示す。

5. 3年目以降の収量低減が少ない。

栽培適地と奨励態度 根釧、天北地域のごとき寒冷地に適応し、採草用優良品種として普及する。

廃止理由 1971年(昭46)に栽培面積が少ないために、優良品種の指定が廃止された。

試験場所	開花始 月日	草 丈 (1 番草) cm	風 乾 草 量 kg/10a					試 験 年 次	
			1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	5 年次		計
天 北 支 場	6. 29	84	502	1,066	1,257	807	818	4,450	1957～1961

(3) サラナック (Saranac)

来歴 アメリカ、ニューヨーク州立大学とコーネル大学が育成した萎ちょう病抵抗性のフラマンデ系品種である。「デュピュイ」、「アルファ」、「フラマンデ」の3品種の中から選抜した個体を3世代にわたり戻し交配して得られたものである。OECDに登録されていないが、1966年(昭41)以降、北海道農業試験場および北海道立中央、天北農業試験場において品種比較試験に供試され、1971年(昭46)に優良品種に決定し、原名から「サラナック」と命名した。

特性概要 1. 花の色は「デュピュイ」とほぼ同じである。

2. 草型は「デュピュイ」とほぼ同じで直立型である。

3. 開花期は「デュピュイ」と同じか、やや遅い。

4. 草丈は比較的高い。

5. 葉枯病、そばかす病には「デュピュイ」より罹病性が低く、また冬枯れも少ない。

6. 収量は「デュピュイ」よりやや多く、特に2年目収量がすぐれ、更に各年の1番草が多かった。

栽培適地と奨励態度 道北及び道央のアルファルファ栽培可能地帯における奨励品種として普及する。

試験場所	開花始 月日	草 丈 (1 番草) cm	風 乾 草 量 kg/10a				試 験 年 次
			1 年次	2 年次	3 年次	合 計	
北 海 道 農 試	6. 29	106	833	1,578	1,825	4,236	1967～1969
天 北 農 試	7. 9	81	263	751	813	1,827	"

試験場所	草 丈 (1 番草) cm	風 乾 草 量 kg/10a						試 験 年 次
		2 年次	3 年次	4 年次	5 年次	6 年次	7 年次	
中 央 農 試	88	1,494	1,492	2,023	1,457	1,136	1,550	1966～1972

(4) ヨーロッパ (Europe)

来歴 フランスで育成された品種であるが、育種過程は明らかでない。フラマンデ型に属し、遺伝的変異は「デュピュイ」より狭い。フランスにおける評価は、極早性、耐倒伏性にすぐれ、耐寒性強く、きわめて多収であるとされている。1968年(昭43)以降、北海道農業試験場および農林省十勝種畜牧場において品種比較試験に供試され、1975年(昭50)に優良(準奨励)品種に決定し、原名から「ヨーロッパ」と命名した。

特性の概要 1.開花始は「デュピュイ」よりやや早く、早生群に属する。

2.花の色は紫色である。

3.草丈は高い群に属する。

4.そばかす病、葉枯病に対する抵抗性は「デュピュイ」と同程度であるが、輪紋病には弱い。

5.倒伏には極めて強い。

6.乾物収量が多く、特に2年目が多い。

栽培適地と奨励態度 根釧地域を除く北海道一円に採草用の準奨励品種として普及する。

試験場所	開花始 月日	草 丈 (1 番草) cm	風 乾 草 量 kg/10a				試験年次
			1 年 次	2 年 次	3 年 次	合 計	
北 海 道 農 試	7. 3	105	682	1,356	1,201	3,239	1968～1970
十 勝 種 畜 牧 場	6. 20	—	860	528	1,101	2,489	1970～1972

(5) ソア (Thor)

来歴 アメリカ、ノースラップ社によって育成された細菌性萎ちょう病抵抗性のフラマンデ系品種である。「Saranac」、「Cardinal」および「Cardinal」と「Glacier」の交雑からの30栄養系からなる合成品種で、OECDの登録品種である。1974年～1977年(昭49～52)にわたり、道内6場所において適応性検定試験を行い、すぐれた成績を示した。1978年(昭53)に優良(準奨励)品種に決定し、原名から「ソア」と命名した。

特性概要 1.1 番草の開花期は「デュピュイ」にくらべて1～5日遅れる傾向がみられる。

2.そばかす病、輪紋病、いぼ斑点病の病徴は「デュピュイ」にくらべて同等か、やや少ない。

3.冬枯程度は「デュピュイ」にくらべて同等か、やや少ない。

試験場所	開花期 月日	草 丈 年間 伸長量 cm	風 乾 草 量 kg/10a					試験年次
			1 年 次	2 年 次	3 年 次	4 年 次	合 計	
中 央 農 試	6. 26	323	218	1,531	1,894	1,723	5,365	1974～1977
根 釧 農 試	7. 12	190	226	687	793	460	2,167	"
北 見 農 試	7. 8	243	150	849	1,018	1,154	3,170	"
天 北 農 試	—	213	408	1,022	1,028	—	2,458	1975～1977
新 得 畜 試	—	225	—	887	939	862	2,688	1974～1977
滝 川 畜 試	6. 24	252	—	825	1,038	955	2,819	"

4. 春季草勢は「デュピュイ」とくらべてほぼ同等か、ややすぐれるが、秋季草勢はやや劣る。
5. 倒伏程度は「デュピュイ」とほぼ同等か、やや倒伏し易い。
6. 草収量は「デュピュイ」より多収である。

栽培適地と奨励態度 北海道一円（ただし、土壌条件がアルファルファの栽培に適していること）に適応する採草用の準奨励品種として普及する。

4. ペレニアルライグラス

(1) リベール (Reveille)

来歴 オランダ育成の4倍体品種でOECDに登録されている。1973～1977（昭48～52）にわたり、北海道立中央、天北農業試験場および滝川、新得畜産試験場において品種比較試験に供試された。1978年（昭53）に優良（準奨励）品種に決定し、原名から「リベール」と命名した。

特性概要 1. 熟期は中生の晩である。「ピートラ」よりも2週間程早く、「マンモス」より約1週間早い。

2. 草型は中間型を示す。草丈は高く、葉幅は広く、茎は太く、葉色はやや濃緑色を呈する。

3. 冠さび病、斑点病、網斑病には比較的抵抗性がある。

4. 早春から晩秋にかけて多収性を示す。とくに春の生育が良い。

栽培適地と奨励態度 道地、道北、道南のうち、冬枯れの少ない地帯に適応し、放牧用準奨励品種として普及する。

試験場所	出穂期 月日	草丈 伸長率 cm	風乾草量 kg/10a					試験年次
			2年次	3年次	4年次	5年次	合計	
天北農試	7.2	144	805	691	698	574	2,768	1973～1977
中央農試	6.6	139	879	606	476	691	2,652	"
滝川畜試	—	222	781	792	550	470	2,593	"
新得畜試	—	—	357	228	259	—	844	"

(2) ピートラ (Petra)

来歴 オランダ育成の4倍体品種で、OECD登録品種である。1973～1977年（昭48～52）にわたり、北海道立中央、天北農業試験場、滝川、新得畜産試験場において品種比較試験に供試された。1978年（昭53）に優良（準奨励）品種に決定し、原名から「ピートラ」と命名した。

特性概要 1. 極晩生品種である。

2. 草型は中間型であるが、ややほふく型にかたよっている。

3. 冠さび病に強く、網斑病、斑点病にも強い。

4. 比較的平準的に多収性を示し、越冬性も良い。

栽培適地と奨励態度 道北、道央、道南の冬枯れの少ない地域に適応し、放牧用準奨励品種として普及する。

試験場所	出穂期 月日	草 丈 伸長量 cm	風 乾 草 量 kg/10 a					試験年次
			2 年 次	3 年 次	4 年 次	5 年 次	合 計	
天 北 農 試	6.20	140	718	662	674	554	2,608	1973～1977
中 央 農 試	6.22	139	798	662	458	711	2,629	"
滝 川 畜 試	—	210	757	750	457	508	2,472	"
新 得 畜 試	—	—	363	240	272	—	875	"

(3) マンモス

来歴 雪印種苗株式会社が、ヨーロッパから導入した4倍体品種、系統(「Petra」,「Reveille」,「Taptoe」,「Tetraploid—48 V」,「Tetraploid—48 L」)を母材として集団選抜法によって育成した4倍体品種である。1970～1973年(昭45～48)にわたり、北海道立中央、天北農業試験場、同天塩支場、滝川畜産試験場において品種比較試験に供試した。1978年(昭53)優良(準奨励)品種に決定し、原名から「マンモス」と命名した。

特性概要 1.晩生種に属し、出穂期は「リベール」と「ビートラ」の間である。

2.草型は中間型で、葉幅は広く、葉色は濃緑色を呈する。

3.冠さび病には強いが、雪腐病には弱い。

4.収量は比較的安定した生産をあげる。

栽培適地と奨励態度 道北、道央、道南の冬枯れの少ない地域に適応し、放牧用準奨励品種として普及する。

試験場所	草 丈 伸 長 (2～3年次平均) cm	風 乾 草 量 kg/10 a				試験年次
		2 年 次	3 年 次	4 年 次	2～4年次平均	
中 央 農 試	178	664	870	669	734	1970～1973
天 北 農 試	157	671	721	703	698	"
天北天塩支場	171	1,217	533	857	869	"
滝 川 畜 試	203	818	561	590	656	"

5. オーチャードグラス

(1) キタミドリ (月寒在来)

来歴 北海道農業試験場(畜産部)がいわゆる「北海道在来種」のうち、「市販在来」、「篠路産在来」、「北札幌産在来」、「当別産在来」、「西当別産在来」、「琴似産在来」の種子を収集し、育種母材とした。1963年(昭38)、優良個体の相互授粉による集団種子を得、地方系統名を「月

寒在来」とした。1965以来、生産力検定試験に供試し、すぐれた成績を示した。1968年（昭44）優良品種に決定し、農林省に新品種「キタミドリ」（オーチャードグラス農林2号）と命名、登録された。1970年（昭45）に OECDに登録された。

特性概要 1. 早生群に属する。

2. 草型は中間型で、草丈、穂長は中位である。多葉とはいえないが、再生が良く、年間を通じ高い草勢を維持する。

3. すじ葉枯病には強いが、雲形病にやや弱い。

4. 採草型の刈取りにおいてよい成績を示すが、再生力が旺盛なため、多回刈りにより高い生産力を発揮する。

5. 耐寒性が強い。

6. 採種性は中位である。

栽培適地と奨励態度 北海道全域に適し、採草または放牧兼用の奨励品種として普及する。

試験場所	出穂期	草 丈 cm		風 乾 草 量 kg/10 a								試 験 年 次
		2 回刈	4 回刈	2 回 刈				4 回 刈				
		1 番草	2 番草	2 年次	3 年次	4 年次	合 計	2 年次	3 年次	4 年次	合 計	
北海道農試	月日 6.1	99	41	938	867	763	2,568	758	458	405	1,621	1965～ 1968

(2) フロンティア

来歴 雪印種苗株式会社で合成品種法で育成された品種である。1952年（昭27）以降、「ヘイキング」の基礎集団の中から、中～晩生、大葉、再生、多収、耐病性を目標に個体選抜を行い、多交配後代検定試験の結果から、上位5系統を選び、3系統ずつ組合わせた中から合成1号を得た。1964年（昭39）以降、合成2代種子による生産力検定試験を行い、1969年～1971年（昭44～46）に道内8試験場における地域適応性検定試験に供試した。1972年（昭47）に優良品種に決定し、OECDに登録された。

特性概要 1. 中生系に属し、出穂は「キタミドリ」に比し、約6日、「フロード」より3日遅

試験場所	出穂期	草 丈 (1 番草) cm			風 乾 草 量 kg/10 a				試験年次
		1 年次	2 年次	3 年次	1 年次	2 年次	3 年次	計	
北海道農試	月日 6.14	112	110	79	443	1,175	910	2,528	1969～1971
天北農試	6.11	106	100	83	374	968	726	2,068	"
天北天垣支場	6. 9	47	81	75	210	983	1,104	2,297	"
北見農試	6.16	97	87	64	599	813	719	2,131	"
根釧農試	6.14	78	65	54	445	805	542	1,792	"
滝川畜試	6. 7	110	93	92	426	884	773	2,083	"
新得畜試	6.11	83	107	78	358	993	791	2,142	"
中央農試	6. 9	91	86	65	370	1,181	1,022	2,573	"

い。

2. 葉長、葉幅が大で葉色はやや濃く、茎も太く、直立型で草丈が高い。
3. 春の草勢および刈取後の再生は「クタミドリ」と同様にすぐれ、秋の草勢では「クタミドリ」にややまさる場合もある。
4. すじ葉枯病については「クタミドリ」とほぼ同様、雲形病に対してはやや弱い成績も得られている。
5. 草収量は「クタミドリ」よりややすぐれ、8月以降の収量が高い。

栽培適地と奨励態度 道央を中心として北海道全域で採草、放牧兼用の奨励品種として普及する。

(3) オカミドリ（北海2号）

来歴 北海道農業試験場（草地開発第2部）において育成された合成品種である。1965年（昭40）に「月寒在来」、道東地方の生態型、外国導入品種からなる選抜基礎集団を作り、草勢、再生力、耐病性等によって選抜し、出穂期によってEE（極早生）、E（早生）、ME（中生の早）、ML（中生の晩）の4集団に分けた。各集団ごとに多交配後代検定を行い、ML群で多収を示した上位8栄養系を選定し、それらの組合せによる合成品種を「北海2号」と命名した。「北海2号」の合成1代種子は1972年（昭47）以降、系統適応性検定試験、特性検定試験に供試され、育成地では個体植特性調査、生産力検定、採種量検定、耐冬性検定、合成1・2代種子の比較が行われ、これらの試験の総合評価によって優良系統として選定された。1976年（昭51）優良品種に決定し、農林省に新品種「オカミドリ」（オーチャードグラス合3号）と命名、登録された。

- 特性概要 1. 出穂期頃の草型は「クタミドリ」とほぼ同様で直立型に近い。
2. 草丈は「クタミドリ」よりやや高い。葉長、葉幅ともに大きく、そのために出穂期の葉部割合が比較的高い。
 3. 穂長、穂数、茎数は「クタミドリ」と大差ない。
 4. 出穂始（札幌）は6月4～5日で「クタミドリ」より6～9日、「フロンティア」より2～3日おそい晩生品種である。

試験場所	出穂期 月日	風 乾 草 量 kg/10a				2～3年次 刈取回数	試験年次
		1年次	2年次	3年次	計		
北海道農試A	6.5	288	898	800	1,986	3	1973～1975
〃 B	—	257	636	624	1,517	5	〃
天北農試	—	355	712	806	1,873	6	〃
根釧農試	—	178	531	402	1,111	5～6	〃
北見農試A	6.8	891	991	429	2,311	3	〃
〃 B	—	410	864	414	1,688	3～5	〃
新得畜試	—	344	625	571	1,540	5～6	〃
中央農試	—	194	761	590	1,545	6～7	〃

注 A 少回刈、B 多回刈

5. 耐病性は、干ばつ時に発生するうどんこ病にはかなり強く、雲形病にもやや強、すじ葉枯病と黒さび病には中程度で「キタミドリ」よりややまさる耐病性を示す。
6. 耐冬性が強く、道東部の冬枯激甚年には被害を受けるが、従来の普及品種のいずれよりもすぐれていると見られる。
7. 草収量は「キタミドリ」なみで、晩生品種としては高収である。
8. 採種量も「キタミドリ」なみで多い。

栽培適地と奨励態度 北海道全域に適応し、とくに道東地方で安全性が高い。採草または採草放牧兼用の晩生品種として普及する。

(4) ケイ (Kay)

来歴 カナダ農務省育成の OECD登録品種である。1973～1977年(昭48～52)にわたり、道内6場所において品種比較試験に供試された。1978年(昭53)に優良(準奨励)品種に決定し、原名から「ケイ」と命名した。

特性の概要 1. 出穂始(札幌)は「キタミドリ」より9～10日遅い晩生種である。

2. 出穂期の稈長は「キタミドリ」より高く、直立型を示す。
3. 穂数は「キタミドリ」なみに多い。
4. 葉長、葉幅、茎の太さともに大きく、葉色はやややすい。
5. 雲形病、すじ葉枯病抵抗性について「キタミドリ」との差は明らかでないが、雪腐大粒菌核病および雪腐小粒菌核病に対しては明らかに強い抵抗性を示す。
6. 茎葉収量は春から初夏までは高いが、夏以降の生育は急速に衰える。

栽培適地と奨励態度 道東地域限定の放牧用準奨励品種として普及する。

試験場所	出穂期	草勢(1.良～5.不良)		風乾草量 kg/10a						刈取回数	試験年次
		春季	秋季	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	計		
北海道農試	月日 6.1	—	—	412	544	597	—	—	1,554	4	1975～1977
中央農試	6.2	1.9	2.7	331	926	715	673	—	2,645	6～7	1974～1977
天北農試				249	568	639	614	601	2,671	5～6	1973～1977
滝川農試1)					3,701	3,414	3,177	3,195	13,487	めん羊放牧 5～7	"
新得畜試2)					323	296	319	321	1,259	肉用育成牛 放牧 6	"
根釧農試		1.8	4.0	155	480	401	429	426	1,891	4～5	"

注 1) 草量計より換算した生草重kg/10a

2) 草量計指数

6. チモシー

(1) クライマックス (Climax)

来歴 カナダ、オタワ中央試験場において各地から収集した母材を用いて、合成品種法によっ

て育成された。1958年（昭33）頃より、北海道各地で品種比較試験に供試された結果、多収性であることが認められた。1963年（昭38）優良品種に決定し、原名から「クライマックス」と命名した。

特性概要 1. 採草型中生種である。

2. 葉長や葉幅が大で多葉性である。

3. 多肥に対する適応性は中位であり、刈取後の再生も比較的良好である。

4. 黒さび病に対する抵抗性は採草型品種中では最も強い。

栽培適地と奨励態度 北海道全域の採草利用地帯に向くが、特に道東、道北地域の奨励品種として普及する。〔1979年（昭54）廃止〕

試験場所	出穂期	草 丈 (1 番草)	葉重率	風 乾 草 量 kg/10a						試 験 年 次
				1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	5 年次	計	
根 釧 農 試 A	月日 7. 2	cm 104	% 20	41	616	518	582	730	2,487	1958～ 1962
" B	3	110	19	26	502	467	523	630	2,148	"
北海道農試 A	6.20	120	19	129	996	694	691	878	3,388	"
B	6.20	125	19	153	979	674	708	767	3,281	"

A, カナダ産；B, アメリカ産

(2) センボク（北系4305）

来歴 北海道立北見農業試験場において、北海道在来種および道東地方の生態型集団14、約3,000個体を供試して、多収性、多葉性を主たる育種目標として集団選抜法によって育成された。1966～1968年（昭41～43）に「北系4305」の系統名で系統適応性検定試験に供試し、各地で多収を示した。1969年（昭44）優良品種に決定され、農林省に新品種「センボク」（チモシー農林1号）と命名、登録された。1972年 OECD に登録された。

特性概要 1. 採草型早生種である。

2. 草型は直立で、草丈は中程度である。

3. 茎はやや太く強靱で耐倒伏性である。

4. 多葉性で乾物消化率が高い。

試 験 場 所	2 年 次		3 年次	風 乾 草 量 kg/10 a				試験年次
	出穂期	草 丈 (1 番草)	葉部率 (1 番草)	1 年次	2 年次	3 年次	計	
北 見 農 試	月日 6.15	cm 108	% 39	290	1,100	800	2,200	1966～ 1968
根 釧 農 試	6.22	115	44	210	1,150	620	1,980	"
天 北 農 試	6.25	103	—	440	1,280	650	2,200	"
天北農試天塩支場	6.22	101	24	900	1,470	1,290	3,660	"
北 海 道 農 試	6.21	120	24	170	1,220	730	2,120	"

5. 再生力がすぐれている。
6. 斑点病やすじ葉枯病に対してやや抵抗性を示す。
7. 多収で広域適応性が高い。
8. 採種性は良好である。

栽培適地と奨励態度 北海道全域における採草利用を主体とする奨励品種として普及する。

(3) 北王（雪印改良1号）

来歴 雪印種苗株式会社(札幌研究農場)において、早生、多収性を目標として育成された。育種材料は戦前、北海道農業試験場(畜産部)がソ連ウクライナ地方から導入した系統で、その後、野幌機農高等学校小川義雄氏が保存していたものである。1943～1944年(昭18～19)に成群選抜し、4群として群別に集団採種、1945～1947年(昭20～22)に集団選抜を行い、以後4系統について収量比較試験ほかを実施し、1950年(昭25)にⅡ型を「雪印改良1号」と命名し採種体系を整備した。1966～1968年(昭41～43)に系統適応性検定試験に供試し、この間「北王」と改名、1969年(昭44)優良品種に決定した。その後 OECDに登録された。

- 特性概要
1. 採草型早生種である。
 2. 草型は直立、草丈は中程度である。
 3. 斑点病、すじ葉枯病に対してやや抵抗性を有す。
 4. 生草収量、風乾収量とも多収である。
 5. 採種性は良好である。

栽培適地と奨励態度 北海道全域における採草利用を主体とする奨励品種として普及する。

試験場所	2年次	3年次		風乾草量 kg/10a				試験年次
	出穂期 月.日	草丈 (1番草) cm	葉部率 (1番草) %	1年次	2年次	3年次	合計	
北海道農試	6.20	110	25	150	1,120	590	1,860	1966～1968
根釧農試	6.22 (始)	89	35	110	1,080	600	1,790	"
北見農試	6.15	93	40	320	980	720	2,020	"
天北農試	6.25	75	23	370	1,200	640	2,210	"
天北農試天塩支場	6.21	104	—	620	1,400	1,150	3,170	"

(4) ノサップ（北見2号）

来歴 北海道立北見農業試験場において、1965年(昭40)に11ヶ国から収集した66品種、8,800個体の基礎集団について出穂性、耐病性、多葉性にすぐれた624個体を選抜し、これらの栄養系評価試験から25栄養系(導入品種を母材とする14栄養系と在来種を母材とする11栄養系)を選抜した。これらの多交配後代検定試験の結果から、最も多収であった4栄養系によって「北見2号」を合成した。1974～1976年(昭49～51)に系統適応性検定試験に供試し、各地で多収を示した。1977年(昭52)、優良品種に決定し、農林省に新品種「ノサップ」(チモン—農林合

2号)と命名、登録された。

特性概要 1. 出穂期は比較品種の「センボク」より1日前後早い。

2. 茎はやや太く、葉身がやや長く、多葉性に富む。

3. 再生が良好で、「センボク」に対する2番草の収量比は115%, 3番草では117%を示した。

4. 飼料成分は「センボク」と同等か、やや良好である。

5. 採種性がすぐれている。

6. 耐病性について、斑点病、黒さび病に対しては「センボク」よりやや強い。

栽培適地と奨励態度 北海道全域、早生の採草利用を主体とする奨励品種として普及する。

試験場所	出穂始 月、日	草丈(1番草)cm			風乾草量 kg/10a				2~3年次 刈取回数	試験年次
		1年次	2年次	3年次	1年次	2年次	3年次	計		
北見農試A	6.19	68	78	86	609	679	819	2,107	3	1974~1976
" B	6.19	73	98	93	760	1,038	1,285	3,083	3	"
天北農試	6.17	58	78	62	435	829	811	2,077	3	"
根釧農試	6.25	61	101	110	295	1,013	899	2,207	3	"
新得畜試	6.21	66	109	97	288	1,215	954	2,457	3	"
北海道農試	6.13	87	101	86	516	1,153	835	2,504	3	"

A) N10kg施用区

B) N20kg施用区

(5) ホクシュウ (北見7号)

来歴 北海道立北見農業試験場において、「北系4201」の基礎集団, 2,500個体について、黒さび病、斑点病、晩秋草勢、越冬性について淘汰し、株張り、再生力、茎数について選抜し、1973年(昭48)に480個体の間で任意交配による集団種子を得た。これに「北見7号」の系統番号をつけ、1974~1976年(昭49~51)に系統適応性検定試験ならびに特性検定試験に供試し、すぐ

試験場所	出穂期 (3年次) 月、日	茎数		風乾草量 kg/10a				2~3年次 刈取回数	試験年次
		(3年次) 1番草	(3年次) 4番草	1年次	2年次	3年次	計		
北見農試A	7.11	319	708	633	897	648	2,179	5	1974~1976
" B	—	—	—	625	1,270	850	2,745	3	"
天北農試	—	377	451	411	769	482	1,622	4~5	"
根釧農試	—	—	—	203	639	486	1,328	4~5	"
新得畜試A	7.13	—	—	203	794	578	1,576	5	"
" B	—	—	—	225	987	1,098	2,309	3	"
北海道農試A	6.29	—	—	367	622	580	1,569	4	"
" B	—	—	—	351	1,062	857	2,270	3	"

A: 多刈; B: 少刈

茎数、北見、本数/0.3m²; 天北、本数/40cm畦長間

れた成績を示した。1977年(昭52)優良品種に決定し、農林省に新品種「ホクシュウ」(チモシー農林3号)と命名、登録された。

- 特性概要 1.草型はほふく型であるが、出穂期における草丈は「センボク」を上回る。
 2.出穂期は「センボク」に比較し、12～26日遅い晩生種である。
 3.放牧利用の場合、出穂は極く少ない。
 4.黒さび病には強く、斑点病、すじ葉枯病にもやや強い。
 5.再生が良好なため、混播区における密度は「センボク」、「ノースランド」よりも高い。
 6.放牧利用の場合、「ノースランド」に比較し10%以上の増収が期待できる。春の収量が低く、秋が高い生育型を示す。
 7.採草利用の場合、「センボク」より多収である。
 8.採種性は「ノースランド」と同程度で「センボク」より低い。

栽培適地と奨励態度 北海道全域に適し、放牧利用および採草利用の奨励品種として普及する。

(6) ノースランド (ハイデミー) (Heidemij)

来歴 この品種はオランダの van der Have 社が育成した「Heidemij」である。「ハイデミー」はオランダ各地から収集された栄養系を母材として、放牧適性を育種目標として選抜育成された品種である。1965年(昭40)にホクレン農業協同組合連合会が導入した。1965～1967年(昭40～42)に北海道農業試験場、北海道立天北農業試験場において比較試験が行われ、続いて1968～1970年(昭43～45)に北海道立北見、根釧農業試験場、同新得畜産試験場において適応性が検定された。これらの結果にもとづいて、1971年(昭46)に放牧型品種として優良(準奨励)品種に決定した。OECD登録名は(Heidemij)であるが、ホクレンは「ノースランド」として市販している。

- 特性概要 1.放牧専用型の品種で、採草利用には向かない。
 2.草型は典型的なほふく型である。

試験場所	年次	出穂期	草 丈 cm		茎 数		風乾草量 kg/10 a	同 左 3 年間合計	試験年次
			1 番草	最終番草	1 番草	最終番草			
北 見 農 試	1	月、日 7.14	24	18	1 m 当り —	—	308	1,321	1968～1970
	2	6.28	22	15	509	523	555		
	3	6.16	22	15	445	360	458		
根 釧 農 試	1	8. 8	27	19	30cm 当り 98	—	111	951	1968～1970
	2	7.25	18	20	178	92	432		
	3	7.14	20	25	125	127	408		
新 得 畜 試	1	—	61	30	1 m 当り 217	141	273	1,625	1968～1970
	2	7.21	37	23	525	258	769		
	3	7.11	28	19	590	346	583		

3. 出穂期は極晩生に属し、採草型品種に比較して2～3週間遅く、出穂茎は少ないが、分げつ数は多い。
4. 主要病害に対する抵抗性は強くない。
5. 収量は採草型品種に比較すると低い。
6. 乾物消化率が高く、可消化乾物収量は採草型品種と大差はないとみられる。
7. 季節的生産性は採草型に比較して良好である。

栽培適地と奨励態度 北海道全域に向くが、放牧利用を主体とする準奨励品種として普及する。

7. トールフェスク

(1) ホクリョウ（北海1号）

来歴 北海道農業試験場(草地開発第2部)で育成された合成品種である。場内に自生する優良株の探索を行い、出穂期、耐病性、葉の形質、各時期の草勢にもとづいて晩生性を中心に27栄養系を選抜した。これらを構成母系として育成した合成品種である。1968年(昭43)から「北海1号」の系統名で系統適応性検定試験に供試し、1972年(昭47)優良品種に決定し、農林省に新品種「ホクリョウ」(トールフェスク農林合1号)と命名、登録された。1973年(昭48)にOECDに登録された。

- 特性概要 1. 出穂期は「ケンタッキー31」にくらべて、約1週間も遅い晩生品種である。
2. 草丈は高く、上部まで葉をつける多葉性品種で、葉も大型である。
 3. 耐病性にすぐれ、網斑病に対してすぐれた抵抗性を示す。
 4. 雪腐病に強く、冬枯れは少ないが夏枯れに弱く、夏枯れの激発地帯での永続性は劣る。
 5. 晩生でありながら、早春の草勢がすぐれ、春早く放牧することが可能である。
 6. 出穂期の刈取りでは「ケンタッキー31」にくらべて多収である。

栽培適地と奨励態度 全道一円に放牧用の耐寒性晩生品種として奨励する。

試験場所	出穂期 月. 日	草 丈 (1 番草) cm	風 乾 草 量 kg/10 a				試験年次
			1 年 次	2 年 次	3 年 次	合 計	
北海道農試(3 回刈)	6. 19	136	660	1,189	1,003	2,852	1969～1971
" (5 回刈)	—	37	660	805	486	1,951	"
天北農試	6. 21	—	485	1,153	841	2,479	"
北見農試	6. 18	—	595	943	659	2,197	"
根釧農試	6. 21	72	496	897	758	2,151	"
新得畜試	6. 19	—	404	1,172	845	2,421	"

(2) ヤマナミ (北海2号)

来歴 北海道農業試験場(草地開発第2号)で育成された合成品種である。アメリカおよびカナダから導入した6品種の基礎集団に対して早生、再生力、耐病性について選抜を進め、最終的に27株の多交配による育種家種子を得た。「北海2号」の系統名をつけて、1968年(昭43)から系統適応性検定試験に供試し、1972年(昭47)優良品種に決定し、農林省に新品種「ヤマナミ」(トールフェスク農林合2号)と命名、登録された。1973年にOECDに登録された。

- 特性概要**
1. 出穂期は「ケンタッキー31」よりも2～5日早い極早生品種である。
 2. 草丈は「ケンタッキー31」とほぼ同様で、葉が細く、多葉性とはいえない。葉色が濃い。
 3. 葉の病害に対しては「ケンタッキー31」よりやや強いが、雪腐病には弱い。
 4. 夏枯れには極めて強い抵抗性を示す。
 5. 収量の季節的分布が良好で、放牧地にとくに適する。
 6. 収量は「ケンタッキー31」より多収で、全国的な広域適応性を示す。
 7. 麦角病の発生はみられず、採種性がすぐれ、「ケンタッキー31」より種子収量が高い。

栽培適地と奨励態度 全国的に適応するが、とくに北海道では南部および西部地域に適する。夏枯れにきわめて強い早生の放牧用品種として奨励する。

試験場所	出穂期	草 丈 (1 番草)	風 乾 草 量 kg/10 a				試験年次
			1 年 次	2 年 次	3 年 次	合 計	
北海道農試(3 回刈)	月. 日 6. 11	cm 102	592	1,076	857	2,525	1969～1971
〃 (5 回刈)	—	38	592	801	522	1,915	〃
天北農試	6. 13	—	461	1,006	718	2,185	〃
北見農試	6. 11	—	563	780	574	1,917	〃
根釧農試	6. 14	72	462	766	668	1,896	〃
新得畜試	6. 11	—	444	1,031	839	2,314	〃

8. メドーフェスク

(1) タミスト (Tammisto)

来歴 フィンランドのHankkija 植物育種研究所の育成品種でOECDに登録されている。道内の試験機関で放牧や多回刈りによる放牧用検定試験や採草用検定試験に供試され、すぐれた成績を示した。1978年(昭53)に優良(準奨励)品種に決定し、原名から「タミスト」と命名した。

- 特性概要**
1. 出穂始は「レトー」より3日程度おそい。
 2. 越冬状態、春の草勢は「レトー」より良好である。
 3. 耐病性(網斑病、葉腐病)は「レトー」とほぼ同程度である。
 4. 放牧利用では「レトー」より草量が多い。

5.採草利用では「レトー」より収量がやや劣る傾向がある。

栽培適地と奨励態度 北海道全域で放牧利用を主とした準奨励品種として普及する。

〈採草利用〉

試験場所	出穂始 (2年次)	草丈 (3年間平均)	風乾草量 kg/10a				試験年次
			1年次	2年次	3年次	合計	
新得畜試	6.11	51	340	697	752	1,789	1975~1977
天北農試	—	39	434	569	687	1,690	"
北見農試	6.8	61	482	729	753	1,964	"
根釧農試	6.13	57	207	949	927	2,083	"
中央農試	—	56	434	1,153	781	2,368	"
北海道農試	—	45	492	589	389	1,470	"

〈放牧利用〉

試験場所	草丈 (3年次平均)	草量 (年間合計)						試験年次
		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	備考	
新得農試	35	—	332	259	313	—	草量計指度 6~5回放牧(牛)	1973~1977
滝川農試	38	—	749	689	482	345	草量計指度 6~4回放牧(羊)	"
天北農試	23	—	711	632	593	571	風乾草量kg/10a 6回刈取	"
根釧農試	25	238	524	365	444	403	風乾草量kg/10a 4~5回刈取	"
中央農試	33	151	526	616	447	542	風乾草量kg/10a 5~6回刈取	"

(2) トレーダー (Trader)

来歴 カナダのOttawa 研究所で育成された15系統による合成品種で、OECDに登録されている。道内の試験機関で放牧や多回刈りによる放牧用検定試験や採草用検定試験に供試され、すぐれた成績を示した。1978年(昭53)に優良(準奨励)品種に決定し原名から「トレーダー」と命名した。

特性概要 1.出穂始は「レトー」より3日程度おそい。

2.越冬状態、春の草勢は「レトー」とほぼ同程度である。

〈採草利用〉

試験場所	出穂始 (2年次)	草丈 (3年間平均)	風乾草量 kg/10a				試験年次
			1年次	2年次	3年次	合計	
新得畜試	6.11	54	338	742	791	1,871	1975~1977
天北農試	—	44	440	641	726	1,807	"
北見農試	6.8	69	493	943	817	2,253	"
根釧農試	6.12	62	185	1,108	1,049	2,342	"
中央農試	—	59	380	1,171	857	2,408	"
北海道農試	—	48	412	661	473	1,546	"

＜放牧利用＞

試験場所	草 丈 (3年次平均)	草 量					備 考	試験年次
		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次		
新 得 畜 試	42 ^{cm}	—	352	280	311	—	草量計指度 5～6回放牧(牛)	1973～1977
滝 川 畜 試	41	—	655	663	504	320	草量計指度 4～6回放牧(羊)	"
天 北 農 試	25	—	726	699	627	398	風乾草量kg/10a 5～6回刈取	"
根 釧 農 試	27	221	535	367	408	323	風乾草量kg/10a 4～5回刈取	"

3. 耐病性も「レトー」と同程度である。

4. 再生が良好なので放牧利用および採草利用で「レトー」より収量が多い。

栽培適地と奨励態度 北海道全域で採草用および放牧用の準奨励品種として普及する。

(3) ファースト (雪印合成1号)

来歴 雪印種苗株式会社が育成した合成品種である。ヨーロッパおよびカナダから導入した7品種の基礎集団から5品種、30個体を選抜した。多交配後代検定試験の結果から上位10栄養系を選び、合成1代種子を得た。更に合成2代を採種して、道内試験機関で品種系統比較試験に供試され、すぐれた成績を示した。1978年(昭53)に優良(準奨励)品種に決定した。

特性概要 1. 出穂始は「レトー」とほぼ同時期である。

2. 越冬状態、春の草勢は「レトー」よりやや良好である。

3. 再生および秋の草勢も「レトー」よりやや良好である。

4. 耐病性は「レトー」とほぼ同程度である。

5. 採草利用では「レトー」よりやや収量が多い。

栽培適地と奨励態度 北海道全域に採草用の準奨励品種として普及する。

試験場所	出穂始 (2年次) 月 日	草 丈 (3年平均) cm	風 乾 草 量 kg/10a				試験年次
			1年次	2年次	3年次	合 計	
新 得 畜 試	6. 9	55	421	735	800	1,956	1975～1977
天 北 農 試	6.17	44	443	677	732	1,852	"
北 見 農 試	6. 3	63	517	757	763	2,037	"
根 釧 農 試	6. 8	62	247	1,119	925	2,291	"
中 央 農 試	—	60	512	1,289	856	2,658	"
北 海 道 農 試	—	45	516	619	466	1,601	"

9. ケンタッキーブルーグラス

(1) トロイ (Troy)

来歴 アメリカ・モンタナ農業試験場で育成され、1955年(昭30)に普及した。OECD登録品

種である。1973年(昭48)以降道立各農業畜産試験場で品種比較試験に供試され、すぐれた成績を示した。1978年(昭53)に優良(準奨励)品種に決定し、原名から「トロイ」と命名した。

特性概要 1.春の出穂期が早い早生種である。

2.草生の確立がやや遅れる傾向がある。

3.春季の草勢がすぐれ、その後は平準的となり、秋季における草勢の低下が他の品種より少ない。

4.さび病抵抗性はややまさるが、「ケンブルー」とほぼ同程度である。

5.めん羊の採食性は不良であり、飼料価値もやや劣る傾向がある。

栽培適地と奨励態度 北海道全域(泥炭地を除く)、放牧利用の準奨励品種として普及する。

試験場所	出穂期	草 丈 年間伸長量	風乾草量(kg/10a, 中央, 根釧, 天北)					備 考	試験年次
			1年次	2年次	3年次	4年次	5年次		
根 釧 農 試	月, 日 5.29	cm 116	82	492	468	555	498		1973~1977
中 央 農 試	—	162	—	550	652	805	—		1974~1977
天 北 農 試	6.12	94	—	611	764	677	567		1973~1977
新 得 畜 試	—	165	—	285	227	232	232	草量計目盛	"
滝 川 畜 試	—	146	—	298	560	420	441	草量計目盛	"

10. ルタバガ

(1) グリーントップ (Green top)

来歴 昭和種苗会によりデンマークから輸入されたものを1952年(昭27)から1954年にわたり入手し、その後、北海道立農業試験場根室支場において採種・保存を続けているものである。1961~1962年に根室支場において品種比較試験に供試され、1971年(昭46)優良(準奨励)品種に決定し、原名から「グリーントップ」と命名した。

特性概要 地上部の姿勢はやや開いており、葉色は淡緑を呈す。頸部の長さはやや短く、頸色・地上部根色ともに黄緑色である。また、地下部根色と肉色はクリーム色を呈し、根形はやや円錐形に近い球形を示す。葉根収量及び乾物率はともに中程度であるが、根部にき裂を生じやすく、従って、白腐病罹病性はやや高い。しかし、根瘤病に対して極めて強い抵抗性を示す。

栽培適地と奨励態度 ルタバガには多収性の「マセスチック1号」と白腐病に強い「ネムロルタバガ」とがあるが、いずれも根瘤病に対する罹病性は極めて高い。これに対して、「グリーントップ」は軟腐病にやや弱い。根瘤病に対して極めて強い抵抗性を示すので、軟腐病発生の比較的少ない沿岸地帯などで根瘤病常発地帯に奨励する。

試験場所	収 穫 期			根 瘤 病		収 量 (kg/10a)			試験年次
	草 丈	葉 数	根 周	罹病率	被害度	全 重	茎葉重	菜根重	
根 室 市	cm 76.8	枚 16.7	cm 35.9	% 0.0	0.00	7,813	4,184	3,629	1962
根 室 支 場	63.4	14.7	32.2	0.0	0.00	4,528	2,028	2,500	"

注 被害度は腐敗の程度により0~4の指数を与え、次式により算出した。

被害度 = $\sum (\text{各被害株数} \times \text{指数}) / (\text{調査株数})$

北海道登録品種一覧

I 普通作物

- 注 1. 農林省登録品種には、・印をつけた。
2. 系統番号の欄には、系統名、種苗台帳番号、原名をあてた。
3. 登録年の()は、優良品種決定年である。

1 水 稻

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
農 林 20 号*	北海 86 号	水稻 北海道うるち第1号	1971 (1941)	1974	上川支場	「農林1号」× 「胆振早稲」	早生、多収
栄 光	上育B18号	水稻 北海道うるち第2号	1971 (1942)	1974	上川支場	「鶴亀」× 「早生富田」	多収、良質、良味
巴 ま さ り	渡育 120号	水稻 北海道うるち第3号	1971 (1951)		渡島支場	「東北14号」× 「北海87号」	晩生、分けつ多く、多収、 食味良
南 栄	渡育 129号	水稻 北海道うるち第4号	1971 (1951)	1972	渡島支場	「巴錦」×「農林 20号」	晩生、長稈、食味良、冷水抵 抗性強
ユ ー カ ラ*	北海 182号	水稻 北海道うるち第5号	1971 (1962)		北海道農試	「関東53号」× 「栄光」	初期生育旺盛、強稈、良質多 収、多肥栽培で増収、いもち 病N菌に強
し お か り	上育 234号	水稻 北海道うるち第6号	1971 (1963)		上川支場	(「目黒榮橘」× 「共和」)F ₁ × 「共和」	早生、登熟良、いもち耐病性 中、耐倒伏性中、障害型耐冷 性やや弱
ほ う り ゅ う	空育 24号	水稻 北海道うるち第7号	1971 (1964)		空知支場	「新榮」× 「照錦」	中生、中肥で多収、食味・品 質良好
う り ゅ う	空育 22号	水稻 北海道うるち第8号	1971 (1965)		中央農試	「石狩白毛」× 「晩」	短稈、耐冷性・耐病性強、良 質、中生の早、初期生育不良
き よ か ぜ	上育 254号	水稻 北海道うるち第9号	1971 (1965)		上川農試	「新榮」×「水稻 農林15号」	極早生、良質、いもち耐病性 弱、耐倒伏性やや弱、障害型 耐冷性やや強
ひ め ほ な み	空育 39号	水稻 北海道うるち第10号	1971 (1966)		中央農試	「空系26号」× 「ヤチミノリ」	中生の晩、穂数型、いもち耐 病性やや強、良質、多収、初 期生育旺盛
ほ く せ つ	上育 265号	水稻 北海道うるち第11号	1971 (1966)	1972	上川農試	「新榮」×「上育 161号」(大同早生 ×福橘)	中生、登熟良、いもち耐病性 中、耐倒伏性やや強、障害型 耐冷性極強
そ ら ち	空育 51号	水稻 北海道うるち第12号	1971 (1967)		中央農試	「空育12号」× 「みまさり」	中生の中、安定多収
は や ゆ き	北育 33号	水稻 北海道うるち第13号	1971 (1968)	1975	北見農試	「新榮」×「水稻 農林19号」	耐冷性極強、いもち耐病性弱
か ち ほ な み	十育 12号	水稻 北海道うるち第14号	1971 (1968)		十勝農試	(「豊光」×「大雪」) ×「上育161号」	中生、安定多収、倒伏し難い
な る か ぜ	上育 314号	水稻 北海道うるち第15号	1971 (1970)	1979	上川農試	「北海182号」× 「ささほなみ」	早生、良質、いもち耐病性中、 耐倒伏性中、障害型耐冷性や や強
マ ツ マ エ*	北海 222号	水稻 北海道うるち第16号	1971 (1970)		北海道農試	「ふ系51号」×「 北海183号」	晩生、偏穂数型、強稈、いも ち耐病性強、良質多収、食味 やや良好
ゆ う な み	空育 87号	水稻 北海道うるち第17号	1971		中央農試	「ユウカラ×ささ ほなみ」F ₁ ×「さ さほなみ」	中生の早、短稈穂数型、いも ち耐病性やや強、障害型耐冷 性中、耐倒伏性やや強
イ シ カ リ*	道北 1号	水稻 北海道うるち第18号	1971		上川農試	「北海182号」× 「空育4号」	多収、良質、草姿良、いもち 耐病性強、耐倒伏性強、耐冷 性やや強
ユ キ モ チ*	北海 125号	水稻 北海道もち 第19号			上川支場	「大同早生」× 「福橘」	中生、中稈、穂数型、稀短芒、 良質、多収
か む い も ち	上育 266号	水稻 北海道もち 第20号	1971 (1965)		上川農試	「新榮」×「上育 161号」	糯、早生、良質、いもち耐病 性中、耐倒伏性やや強、障害 型耐冷性やや強

草 型	茎		穂						玄 米			品 質	食味	鳥情歩合	栽 培 適 地
	長短	強弱	長短	粒着密度	稈色	稈先色	芒の有無	芒の長短	形状	大小	色 沢				
中間型	長	や強	中	密	淡黄白	赤褐	無	—	中	中	銚良	上の中	上	—	道北、道東北地方、これに準ずる山間地の中生種、道央の早生種
穂数型	や短	や強	中	や密	黄白	黄白	有	短少	中	中	銚白	上の中	上の中	—	道中央部
穂数型	や長	中	中	や密	黄白	赤	無	—	中	中	淡銚良	中の中	上	—	道南の温暖地帯、特に日本海沿岸
穂重型	や長	強	中	や密	黄白	赤褐	無	—	中	中	濃銚良	中の中	上	—	道南温暖地帯
穂数型	短	強	中	や疎	黄白	黄白	無	—	や長	や大	淡銚	極 良	良	—	道央部、これに準ずる肥沃地
偏穂数型	中	中	や短	や密	黄白	黄白	有	中の中	や円	や小	や銀白	中の上	良	—	上川、留萌および網走
穂数型	中	中	や長	や密	黄白	暗褐色	無	—	中	中	純白	良	良	89.0	石狩、空知、胆振、日高の「榮光」の栽培されている地帯
中間型	短	中	中～や長	や密	黄白	黄白	無	—	中	中	鈍銀白	良	良	88.8	空知中央部、上川北部およびこれに準ずる地帯
中間型	中	や弱	中	や密	黄白	黄白	極稀	極短	中	中	や銚	上の中	良	—	上川、留萌の北部および中央部の山間地帯、ならびにこれに類似の地帯
穂数型	短	中	短	密	黄白	黄白	無	—	や円	や小	鈍銀白	良	良	86.5	空知、石狩、上川の道央部および類似の地帯でとくにいもち病発生地帯
穂数型	中	や強	短	中	黄白	黄白	有稀	稀短	中	中	や銚	上の中	良	—	上川中南部、留萌南部、空知全域およびこれと類似の地帯
穂数型	や短	中	や長	中	黄白	黄白	無	—	中	中	鈍銀白	や良	—	—	中生種の作付されている道内各地帯、ならびに中晩生種地帯の冷水田
中間型	長	や弱	中	中	黄白	黄白	少	短	中	中	や鈍白	中の中	—	—	網走の「農林20号」栽培地帯および十勝、上川北部、留萌北部の類似地帯
	や短	中～や弱	短	や密	黄白	黄白	無	—	や円	や小	や良	中の上	—	93.0	十勝、網走の全域、上川北部ならびにこれに準ずる地帯
穂数型	や短	や強	中	中	黄白	黄白	無	—	中	中	や良	上の中	良	89.4	網走、十勝の良地帯、上川、留萌の山間部、道央部の早生地帯
偏穂数型	中	剛	長	中	黄白	淡褐色	有極稀	極短	中	や大	淡銚	良	や良	91.0	渡島半島南部良地帯
穂数型	短	や剛	や長	や密	黄白	黄白	無	—	中	中	鈍銀白	上の中	や良	91.0	空知、石狩の「ほうりゅう」の安全栽培良地帯、ならびに類似地帯
偏穂数型	短	剛	長	中	黄白	黄白	無	—	や長	や大	や銚	上の中	良	90.9	上川、留萌のやや良～良地帯、空知、石狩、後志、松山のやや良地帯
穂数型	中	や強	中	や密	黄白	黄白	有	稀短	中	中	白	上の中	良	—	道央部
偏穂数型	や短	や強	や短	中	黄白	黄白	や少	や短	中	中	白	上の中	良	—	上川中北部、留萌全域、空知北部

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
工 藤 結		水稻 北海道もち 第21号	1971 (1965)		道南農試	「南結」×「多福結」	中生の晩、中稈、穂重型、いもち耐病性強
おんねもち	北育結47号	水稻 北海道もち 第22号	1971 (1970)		北見農試	「北海182号」× 「上育230号」	良質、「もち」良質、多収、耐 冷性やや強、いもち耐病性や や弱～弱
きたこがね	北育 51号	水稻 北海道うるち第23号	1973		北見農試	「北海182号」× 「上育230号」	やや良質、耐冷性やや強、多 収。いもち耐病性弱
さ ち ほ	空育 97号	水稻 北海道うるち第24号	1974		中央農試	「ささほなみ×空 系1号」F ₁ ×「北海 190号」	良質、登熟早い、いもち病は 場抵抗性強、強稈性
キタヒカリ*	北海 230号	水稻 北海道うるち第25号	1975		北海道農試	「しおか」× 「ユウカラ」	中生、偏穂数型、良質、食味 良好、少肥瘠地栽培で少収、 機械化栽培に適する
ともゆたか	北育 103号	水稻 北海道うるち第26号	1977		中央農試	「北海222号」× 「道北1号」	中生の早、短穂数型、初期 生育良好、多収、粒揃良好、 割れ穂多
はやこがね	空育 64号	水稻 北海道うるち第27号	1977		北見農試	「北斗」×「上育 272号」	良質、耐冷性強、いもち耐病 性中～やや弱

2 大 麦

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
春 星	6 号	大麦 北海道春 第1号	1971 (1953)	1975	北見農試	「ハルビン2条」 ×「ボヘミヤ8号」	2角直立種、子実は殻皮やや 厚し、醸造用に適す
ほしまさり	訓系 16号	大麦 北海道春 第2号	1972		北見農試	「春星」× 「女系8号」	大粒、良質で極めて多収醸造 用に適する

3 裸 麦

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
マリモハダカ	北海春裸 13号	裸麦 北海道春第1号	1971 (1966)		北見農試	「サナダ麦」× 「北統3号」	強稈、良質、耐病性強、多収、 多条播適応性大

4 ライ麦

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ベトクーザ		ライ麦 北海道輪第1号	1971 (1939)		ド イ ツ	ドイツより輸入し た種子を供試	長稈、多けつ、耐倒伏、良質 多収、耐寒性、赤さび病や赤 かび病にやや弱い

草型	茎		穂							玄米		品質	食味	揚精歩合	栽培適地
	長短	強弱	長短	粒着密度	稃色	稃先色	芒の有無	芒の長短	形状	大小	色沢				
穂重型	中	剛	長	や密	黄白	黄白	無	—	中	小	白	や良	良		渡島、松山南部、胆振沿岸地帯
穂数型	や短	や強	中	中	黄白	黄白	や少	短	中	中	白	中の上 —上	良		網走、十勝および上川、留萌の北部で「はやもち」、「双豊穂」の作付け地帯
偏穂数型	や短	や強	中	中	黄白	黄白	中	中	中	や大	白	上の中	中— や良		網走、十勝の中生種が作付けされている地帯
偏穂数型	や短	強	中	や密	黄白	黄白	極稀	極短	長	や大	良	上の中	や良	89.0	空知、石狩、後志、胆振、日高、道南北部、上川南部の中生種地帯
偏穂数型	や短	や強	や長	中	黄白	黄白	無	—	中	中	淡白	良	良	90.0	留萌南部、上川中南部、道央部、道南北部の移植栽培、中央部良地帯の機械移植栽培
穂数型	短	や剛	や長	や密	黄白	黄白	極稀	極短	や長	や大	や濃白	上の中	や良	91.0	道央部、道南北部、上川・留萌の中南部の平坦部
穂数型	短	中	短	中	黄白	黄白	極稀	極短	や円	中	淡白	上の中	中— や良		網走、十勝、上川北部、留萌中北部および類似の早生種の作付け地帯

幼苗色	穂の			芒の			子実の		耐倒伏性	栽培適地
	型	粒着密度	下垂度	有無	長短	色	大小	色		
濃緑	二条矢羽根型	や密	や垂	有多	長	黄	大	黄白	や弱	全道の二条大麦を栽培している地域
濃緑	二条矢羽根型	や密	中	有多	長	黄	大	黄白	や弱	全道の二条大麦を栽培している地域

穂の		芒の			子実の		耐倒伏性	栽培適地
型	粒着密度	有無	長短	色	大小	色		
6条(4角)	疎	多	長	黄	中	白	強	網走、上川

穂の強弱	穂型	芒の		粒の		製粉歩合(%)	越冬歩合(%)	栽培適地
		長短	多少	大小	色			
強	短大	長	多	大	灰青緑	91.4	92.0	全道一門に適する

5 小 麦

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ハルヒカリ	北見春2号	小麦 北海道春第1号	1971 (1965)		北見農試	「Midax Pilot」× 「春播小麦農林75号」	各種さび病に強く、耐倒伏性 もやや強、品質はすこぶる良い
ハルミノリ	北見春17号	小麦 北海道春第2号	1971 (1969)		北見農試	「硬質小麦農林42 号」×「北育1号」	耐倒伏性やや強、さび病以外 の病害には比較的強く、安定 多収である
ホクエイ	本系 331号	小麦 北海道秋第3号	1971 (1954)	1978	北見支場	「赤錆不知1号」 ×「東北67号」	短稈、強稈、耐寒、耐病性強 く安定、粉質劣る、多収
改良伊達早生		小麦 北海道秋第4号	1971 (1957)	1975	渡島支場	伊達町広瀬弘夫氏 栽培の「伊達早生 小麦」から選抜	極早生、短稈、耐倒伏耐病性強、 間作に適する、耐冬性劣る
ムカコムギ	北見 11号	小麦 北海道秋第5号	1971 (1968)		北見農試	「Kanred × ナンブ コムギ」×「北成 9号」	黒目粒発生少、原粒性状・小 麦粉性状ともにすぐれ、やや 多収
イービス	(IBIS)	小麦 北海道秋第6号	1971 (1970)		北見農試	オレンジより導入	晩生、耐倒伏性極強、耐冬性 弱、アミロ粘度高い
ホロシリコムギ	北見 23号	小麦 北海道秋第7号	1974		北見農試	「北系8号」× 「北海240号」	短強稈、耐倒伏性強、穂重型、 多収、多肥密植で増収
タクネコムギ	北見 30号	小麦 北海道秋第8号	1974		北見農試	「東北118号」× 「北系221号」	早生、短稈、耐倒伏性強、粒の 外見品質良、アミロ粘度高い

6 えん麦

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
前 進	(原名) オンワード	えん麦 北海道輪第1号	1971 (1942)		北海道農試	—	早熟、草丈やや低く、強稈、 穂は長く中間型過熟になると 穂首から折れ易い、稈節は高く、 多収
ホ ナ ミ	「本系68号」	えん麦 北海道 第2号	1971 (1959)		北海道農試	「黒実」×「ビク トリー1号」	草丈低く強稈、稈節は「前進」 より少ない
オ ホ ー ツ ク	北海 1号	えん麦 北海道 第3号	1971 (1966)		北海道農試	「ホナミ」× 「前進」	やや晩生、散穂、強稈、耐倒 伏性強
モ イ ワ	北海 7号	えん麦 北海道 第4号	1973		北海道農試	「S84×Milford」 ×「前進」	散穂、やや早生、やや短稈、 多収良質

7 とうもろこし

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ゴ ー ル デ ン ク ロ ス バ ン タ ム	ゴールドン クロスバンタム	とうもろこし 北海道 第1号	1971 (1956)		米 国 (北海道農試)	「P39」× 「P51B」	中生の晩、生食加工用、優良質
イエロースイート	札交 5207	とうもろこし 北海道 第2号	1971 (1959)	1975	北海道立農試	「(C13×C30)」× 「セルボア」	早生、生食用、良質
タナバタワセ	札交 5322	とうもろこし 北海道 第3号	1971 (1959)	1975	北海道立農試	「黄早生」× 「C13」	極早生、生食用
ゴ ー ル デ ン ビ ュ ー テ ィ	ゴールドン ビューティ	とうもろこし 北海道 第4号	1971 (1963)		米 国 (北海道農試)	「C13」× 「Ma 21547」	極早生、生食加工用
ホワイトワキシー	マンモスホワ イトワキシー	とうもろこし 北海道 第5号	1971 (1966)	1975	北海道立農試	「(S339×マンモスホ イトデントコーン) × 「マンモスホワイ テントコーン」	加工用、糯種

叢性	株の開閉	穂の		芒の		稈色	粒の			粒質	製粉性	耐病性		耐倒伏性	栽培適地
		型	粒着密度	有無多少	色		形	大小	色			赤さび病	うどんこ病		
	閉	錐	粗	長多	白	白	中	大	赤	硝子質	や良	強	中	や強	全道栽培可能。硬質小麦としての特性上主に網走、上川
	中	錐	粗	長多	白	白	中	大	赤	硝子質	中	中	中～や強	や強	網走、上川およびこれに準ずる地域
中間	閉	紡錐	中	無	—	褐	短	大	赤	中間質	—	強	中	強	十勝、網走支庁管内の肥沃地
直立	閉	紡錐	中	無	—	黄白	中	大	赤	中間質	—	や強	—	極強	道南地方の限定
中間	閉	錐	や粗	短頂芒	褐	褐	中	大	赤	中間質	や良	や強	中	や強	道南の極旱生地帯を除き全道、とくに網走・十勝
匍匐	閉	棒	密	無		白	短	大	赤	粉状質～中間	や良	中	や強	極強	新里郡、網走郡（美幌、津別を除く）網走市南網走、その他冬枯れ少地帯
直立	閉	棒	密	無		白	短	大	赤	中間質	中	中	中	強	道南の極旱生地帯除き全道、とくに肥沃地
中間	や開	錐	中	無		褐	短	大	赤	硝子質	中	中	中	や強	早生品種として全道、とくに道央以南

幼苗の			稈		芒の有無 長 短	穂		粒		耐倒伏性	栽培適地
姿勢	葉色	葉巾	細太	剛柔		型	粒着密度	大小	色		
直立	や濃緑	中	や太	強	多長	中間	密	中	淡灰	強	全道一円
直立	濃緑	中	中	強	少中	散穂	密	中	淡黄白	強	さび病多発地帯を除く、全道一円
直立	濃緑	中	中	剛	中長	散穂	密	中	淡黄	強	宗谷、留萌、根釧のほか道内の倒伏頻発地帯
直立	緑	中	中	中	無	散穂	や密	中	淡黄	中	全道

初期生育	分けつ の多少	稈の 長 短	耐倒伏性	着穂高	粒の種別	粒色	葉色		栽培適地
							苞皮外	苞皮内	
中	多	中	弱	中	S	黄	無	無	道中央、道南
中	多	短	弱	低	S	黄	紅	紅	ゴールデンバントム栽培地帯
良	中	極短	中	低	F.S混	黄	淡紅	無	都市近郊の早出し生食用
や良	微	極短	中	低	S	黄	淡紅	無	全道
—	—	長	中	高	W	白	—	—	道央、道南

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
複 交 4 号	W 275	とうもろこし 北海道 第6号	1971 (1957)	1975	北海道立農試	「(W9×WM13 R)」×「(W49× W11)」	早生、デント子実用、多収
交 4 号*	月交 193号	とうもろこし 北海道 第7号	1971 (1957)	1978	北海道農試	「(N21×N19)」× 「T6」	早生、フリント子実用、初期 生育良
交 6 号*	月交 431号	とうもろこし 北海道 第8号	1971 (1962)		北海道農試	「(D103×D405)」 ×「(T102×T107)」	中生、セミデント、耐倒伏性
ジャイアンツ	本交 3304	とうもろこし 北海道 第9号	1971 (1962)	1978	北海道立農試	「(WF9 ⁻¹ ×W 22)」×「青森エロ ーデント」	晩生、デント、採種易
交 8 号*	長交 347号	とうもろこし 北海道 第10号	1971 (1968)	1979	長 野 (十勝農試)	「岩手エローデ ント」×「W531- (455×466)」	晩生、初期生育良
ヘイゲンワセ*	道交 16号	とうもろこし 北海道 第11号	1973		十 勝 農 試	「(N19×CM7)」 ×「(W41A×W79 A)」	早生、強稈、機械化向
ホ ク ユ ウ*	北交 22号	とうもろこし 北海道 第12号	1974		北海道農試	「(N85×N21)」× 「(T23×T24)」	初期生育、登熟良
ピリカスイート*	十生 7号	とうもろこし 北海道 第13号	1975		十 勝 農 試	「V574」×「Me 21547」	早生、缶詰加工用
北 笛 3 号	HLC 145	とうもろこし 北海道 第14号	1976		北海製缶 (十勝農試)	「Me123」×「Ma 21547」	早生、穂型良、軸付冷凍用
ワセホマレ*	道交S1号	とうもろこし 北海道 第15号	1978		十 勝 農 試	「N19×To15」× 「CM37×CMV3」	早生、初期生育良、強稈
W 5 7 3	W 573	36	1971		米 国 (中央農試)		晩生、デント、強稈
P 3 6 2 0	P 3620	37	1971	1975	米 国 (中央農試)		晩生、強稈
エローデントコ ーン	本第1951号	38	1971 (1923)		北海道 農事試		晩生、デント
マンモスホワイト デントコーン	本第2520号	39	1971 (1923)		北海道 農事試		極晩生、デント、未成熟
J X 1 8 8		154	1976		米 国 (北海道農試)		晩生、耐倒伏性
C 5 3 5		155	1976		オ ラ ン ダ (北海道農試)		早生
P 3 3 9 0		156	1976		米 国 (北海道農試)		晩生、耐倒伏性
P 3 5 7 5		157	1976		”		晩生、耐倒伏性

8 大 豆

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
吉 岡 大 粒	本第2065号	大豆 北海道 第1号	1971 (1914)		北海道 農事試	品種比較	枝豆用、食味佳良、扁球、大 粒、黄緑色粒、脐黑色
中 生 光 黒	十支 第 963号	大豆 北海道 第2号	1971 (1933)		十 勝 支 場	品種比較	中生種の晩、煮豆用、食味佳 良、淡褐毛、白花、大粒、黒 色粒、多収

初期生育	分けつ の多少	根の長短	耐倒伏性	着穂高	粒の稀別	粒色	粗糸色		栽培適地
							苞皮外	苞皮内	
や不	無	中	中	中	D	黄	—	—	早生、道東道北の「坂下」に 代る子実用デント
良	多	中	弱	中	F	橙黄	—	—	道東、道北部における子実用 として「坂下」におきかえる
中	微	中	強	高	F、D	橙黄			道央以南子実用、道東北サイ レーズ用
中	無	長	弱	高	D	黄			全道の「エローデントコーン」 におきかえる
良	無	長	弱	高	D	黄			十勝、網走サイレーズ用
中	微	短	強	中	F、D	黄			十勝、網走、上川北部、サイ レーズ用
良	多	中	弱	や高	F	黄褐			十勝、網走、釧路、サイレー ズ用
中	少	極短	弱	低	S	黄	無	無	全道
中	中	極短	弱	低	S	黄	無	無	全道
良	微	短	強	や低	F、D	黄			道東北、サイレーズ用
や不	無	や長	や強	や高	D	黄			道央・十勝、サイレーズ用
や不	無	長	や強	中	D	黄			十勝、サイレーズ用
—	微	長	中	高	D	黄			北部、東部の冷涼地を除く道 内一円
—	無	長	弱	高	D	白			道央以南
や不	無	長	や強	高	D	黄			道南、サイレーズ用
中	無	短	中	中	F、D	黄			十勝・網走・根釧内陸、サイ レーズ用
や不	無	長	や強	高	D	黄			道南、サイレーズ用
や不	無	長	や強	高	D	黄			道南、サイレーズ用

子葉 の色	幼葉 の色	草姿	葉形	毛茸		花色	熟葉色	粒の				栽培適地
				有無	色			形	大小	色	脐部の色	
黄	紫	直立	円葉	有	褐	赤紫	褐	扁球	大	黄緑	黒	子実用としては気候寒冷な地 方に適し、枝豆用としては全 道各地の栽培に適する
黄	緑	や開張	円葉	有	淡褐	白	褐	扁球	大	黒 光沢強	黒	根室、釧路、宗谷支庁等の寒 冷地を除き、全道各地の栽培 に適する

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
白 鶴 の 子	源支 第1939号	大豆 北海道 第3号	1971 (1934)		渡島支場	「鶴の子」在来種から純系分離	長稈、極晩生、白目極大粒の良質品種
奥 原 1 号	十育 51号	大豆 北海道 第4号	1971 (1940)		十勝支場	純系分離	早生種、耐冷性強、マメシンクイガ被害多、褐毛、赤紫花、黄白色中粒
早 生 緑	北支 第4014号	大豆 北海道 第5号	1971 (1954)		北見支場	在来種から系統選抜	早生種の晩、枝豆用、食味佳良、白花、着莢密、淡黄緑色大粒、精黒色
坂 本 早 生	大野 在来-B	大豆 北海道 第6号	1971 (1954)		渡島支場	在来種(大野村、坂本重太郎氏栽培)	極早生、極短稈の鞍掛け(淡緑色地に黒色斑)種で、食味良好な枝豆用品種
北 見 白	系 50-A	大豆 北海道 第7号	1971 (1956)		北見支場		中生種、耐冷性強、強茎、多収、褐毛、赤紫花、黄白色中粒、精暗褐色
イ ス ズ	系 83-B	大豆 北海道 第8号	1971 (1957)		北見支場		中生種の早、耐冷性強、強茎、長茎、褐毛、赤紫色、やや黄白粒
ホッカイハダカ*	十育 77号	大豆 北海道 第9号	1971 (1958)	1975	十勝支場	「十勝長葉」× 「中生種」	中生種、黄色、小粒、マメシンクイガ被害少、良質
カ リ カ チ*	十育 87号	大豆 北海道 第10号	1971 (1959)	1975	十勝支場	「十勝長葉」× 「上春別在来」	中生種、黄色、中粒、耐冷性強
コガネジロ*	十育 95号	大豆 北海道 第11号	1971 (1961)		十勝支場	「紫花4号」× 「十勝長葉」	晩生種の早、強茎、多収、半無限型、長葉、白毛、黄色小粒、精黄色
アサミドリ	大抽振-1	大豆 北海道 第12号	1971 (1962)		十勝支場	品種比較	中生種、枝豆用、多収、長茎、赤紫花、褐毛、淡黄緑大粒、精黒色
ワセコガネ*	十育 97号	大豆 北海道 第13号	1971 (1964)		十勝農試	「紫花4号」× 「十勝長葉」	早生種の晩、機械化栽培向、強茎、半無限型、主茎型、密植適応性大
オシマシロノ*	凡育 12号	大豆 北海道 第14号	1971 (1964)	1975	北海道農試	「十勝長葉」× 「黄宝珠」	長茎(無限伸育型)で円葉の極晩生種、白目中粒の良質多収品種
ホウライイ*	十育 109号	大豆 北海道 第15号	1971 (1965)	1978	十勝農試	「下田不知1号」× 「十育71号」	晩生種、ダイズシストセンチュウ抵抗性、長茎、分枝数多、白目中粒
トヨスズ*	十育 118号	大豆 北海道 第16号	1971 (1966)		十勝農試	「下田不知1号」× 「十支第7910号」	中生種の晩、ダイズシストセンチュウ抵抗性強、短強茎、白目大粒、良質
キタムスノ*	十育 122号	大豆 北海道 第17号	1971 (1968)		十勝農試	「カリカチ」× 「北見白」	中生種、耐冷性強、多収、中茎、褐毛、赤紫色、黄白色中粒、精暗褐色
ユウヅル*	中育 3号	大豆 北海道 第18号	1971		中央農試	「鶴の子」在来種から系統分離	やや長茎で円葉の晩生種、白目極大粒(鶴の子種)の良質多収品種
白 千 石	十育 63号	大豆 北海道青刈第19号	1971 (1954)	1975	十勝支場	「裸大豆」× 「早生黒千石」	晩生種、黄色、小粒、青刈用
茶 小 粒	本第2429号	大豆 北海道青刈第20号	1971 (1926)		北海道農事試	品種比較	極晩生種、緑肥および青刈飼料用、茎葉の繁茂旺盛で生草収量多い
ヒノユタカ*	十育 161号	大豆 北海道 第21号	1976		十勝農試	「十育129号」× 「カリカチ」	中生種、中茎、枯上の良、赤紫花、白毛、黄白色大粒、白目、多収
キタコマチ*	十育 167号	大豆 北海道 第22号	1978		十勝農試	「十育129号」× 「トヨスズ」	早生種、短強茎、分枝数少、草姿は「トヨスズ」に類似、白目中粒

子葉 の色	幼葉 の色	草姿	葉形	毛 茸		花色	熟葉色	粒 の				栽 培 適 地
				有無	色			形	大小	色	脂肪 部の色	
黄	緑	有限	円葉	有	白	白	淡褐	扁球	極大	黄白	濃黄	道南(渡島、松山)に適する限 定優良品種
黄	紫	や 開張	円葉	有	褐	赤紫	暗褐	球	中	黄白	暗褐	道東部および北部の初霜が早 く、生育期間の短い地帯の栽 培に適する
黄	緑	開張	円葉	有	褐	白	褐	扁球	大	淡黄緑	黒	道北、道東における子実用と して「青島大粒」に比べて安 全に収穫ができる。枝豆用と しては全道各地に適する
黄	紫	有限	円	有	褐	赤紫	淡褐	扁楕円 球	中	淡緑地に 黒のクラ カケ斑	黒	早生種であるため適地の範囲 は広いが、都市近郊あるいは 道南地方の蔬菜地帯に栽培する
黄	紫	開張	円葉	有	褐	赤紫	褐	球	中	黄白	暗褐	上川の北部、十勝、網走支庁 管内等の道東、道北地帯およ び道央の山麓地帯
黄	紫	直立	長葉	有	褐	赤紫	褐	球	小	や黄	褐	道東、道北地帯の冷害に遭遇 しやすい地方、および降雪の 早い地方、道央の山麓地帯で 前者に類似の地帯
黄	紫	直	長楕円	無	—	紫	褐	球	小	黄	黒褐	十勝内陸地帯
黄	紫	直	楕円	有	褐	紫	褐	球	中	黄	黒褐	道南および極端な冷涼地を除 いた全道一円
黄	紫	直立	長葉	有	白	赤紫	淡褐	球	小	黄 光沢強	黄	「北見白」の栽培されている十 勝、上川南部の中晩生種地帯
黄	紫	や開張	円葉	有	褐	赤紫	褐	扁球	大	淡黄緑	黒	子実用は道東地帯。枝豆用は 全道各地
黄	紫	直立	円葉	有	白	赤紫	淡褐	球	小	黄 光沢強	黄	十勝の山麓、沿海、網走のオ ホーツク沿海とそれに類似の 早生種地帯
黄	緑	無限伸 育型	円	有	白	白	淡褐	球	中	黄	黄	道央部以南(石狩南部、後志、 渡島、松山)
黄	紫	開張	円葉	有	白	赤紫	淡褐	や扁球	中	黄白	黄	全道のシストセンチュウの被害 が認められる中晩生種地帯
黄	紫	直立	円葉	有	白	赤紫	淡褐	や扁球	大	黄白	黄	十勝、網走のダイズシストセ ンチュウの被害地域、とくに 中央部で倒伏する地帯
黄	紫	や開張	円葉	有	褐	赤紫	褐	球	中	黄白	暗褐	十勝、上川および網走中央部
黄	緑	有限伸 育型	円	有	白	白	褐	や扁球	極大	黄白	濃黄	石狩、空知の中南部、後志南 西部、胆振、日高、渡島、松 山の各地
黄	紫	直	小楕円	有	褐	紫	褐	球	小	黄	褐	十勝地方および類似の地帯の 青利用
黄	紫	開張	円葉	有	褐	赤紫	黒褐	扁球	極小	褐	褐	緑肥および青刈飼料用としては 全道各地の栽培に適する。採種 栽培は道南地方に限定される
黄	紫	や開張	円葉	有	白	赤紫	淡褐	球	大	黄白	黄	十勝、網走、上川中南部とこ れに類似の地帯、十勝中央部 は除く
黄	紫	直立	円葉	有	白	赤紫	淡褐	や扁球	中	黄白	黄	上川および収穫、乾燥時の天 候がこれに類似する地帯

9 小 豆

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
早 生 大 納 言	本第 98号	小豆 北海道 第 1 号	1971 (1914)	1975	不明	品種比較	晩生種、熟莢は淡褐色、子実 は暗赤色、粒形はやや不整で あるが大粒
茶 殺 早 生	本第2336号	小豆 北海道 第 2 号	1971 (1914)		不明(十勝 地方の在来種)	在来種品種比較	極早生種、草丈低く、葉は円 形、熟莢は褐色、子実は赤色 で小粒である
早 生 大 粒 1 号	十育 5 号	小豆 北海道 第 3 号	1971 (1930)		十 勝 支 場	純系淘汰法(「早生大 粒」より)	中生種、草丈中位で葉は円形、 熟莢は灰白色、子実は大粒で 濃赤色
円 葉 1 号	十育 42号	小豆 北海道 第 4 号	1971 (1937)		十 勝 支 場	「円葉」の純系淘汰法	中生種、熟莢は黒褐色、子実 は赤色、中粒、品質良好
宝 小 豆	小豆 W45	小豆 北海道 第 5 号	1971 (1959)		十 勝 支 場	保存品種の比較試 験により選出	中生種、草丈は中位で葉は円 形、熟莢は褐色、子実は赤色 で小粒
光 小 豆	十育 7 号	小豆 北海道 第 6 号	1971 (1964)	1975	十 勝 農 試	「茶殺早生」× 「早生大粒1号」	中生種、草丈はやや高く葉は 円形、熟莢は淡褐色、子実小 粒でやや淡赤色
晩 大 納 言	十育 62号	小豆 北海道 第 7 号	1971 (1970)		十 勝 農 試	「能登小豆」× 「早生大粒1号」	熟期は中生の晩、草丈やや高 く葉は円形、熟莢は灰白色で 子実は大粒
丹 小 豆	中育 1号	小豆 北海道 第 8 号	1971		中 央 農 試	「能登小豆」× 「早生大粒1号」	中生種、草丈やや高く分枝は 少く、葉はやや鋭、子実は中 粒で赤色
榮 小 豆	十育 70号	小豆 北海道 第 9 号	1973		十 勝 農 試	「3407」× 「早生大粒1号」	中生種、草丈は高く草勢は強 く、葉は円形、熟莢は褐色、子 実は小粒で赤色
アカネ ダイナゴン*	十育 69号	小豆 北海道 第10号	1974		十 勝 農 試	「能登小豆」× 「早生大粒1号」	中生種、草丈は中位、葉は円 形、熟莢は灰白、子実大粒で 濃赤色
ハヤテショウズ*	十育 85号	小豆 北海道 第11号	1976		十 勝 農 試	「宝小豆」× 「斑小粒系-1」	早生種、草丈やや低く葉は円 形、熟莢は褐色、子実はやや 濃赤で小粒

10 菜 豆

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
金 時	本第2850号	菜豆 北海道 第 1 号	1971 (1905)		北海道 農事試	品種比較	中生の早、矮性、軟莢種、良質
大 福	本第6599号	菜豆 北海道 第 2 号	1971 (1905)		北海道 農事試	品種比較	晩生のつる性硬莢種、高級菜 豆として食味が良く多収、子 実の色は白
大 手 亡	十支 第 455号	菜豆 北海道 第 3 号	1971 (1927)		十 勝 支 場	品種比較	中生、半蔓性、硬莢種、子実 は白色小粒、播種期の早晩に よる収量影響少ない
丸 長 鶏	本第 11840号	菜豆 北海道 第 4 号	1971 (1939)		北海道 農事試	品種比較	開花始は7月中旬、成熟期は 9月上旬で長鶏類中最も早い 極早生種
虎 豆	本第 11304号	菜豆 北海道 第 5 号	1971 (1939)		北海道 農事試	品種比較	晩生のつる性半硬莢種、良質 で菜豆品種中最も食味が良い
大 正 金 時	十支 第8390号	菜豆 北海道 第 6 号	1971 (1957)		十 勝 支 場	純系分離	開花始は7月中旬、成熟期は 9月上旬～中旬で早生の矮性 硬莢種
大 正 白 金 時	十支 第9007号	菜豆 北海道 第 7 号	1971 (1960)		十 勝 支 場	純系分離	開花始は7月中旬、成熟期は 9月上旬の早生矮性硬莢種で、 炭そ病に強い
改 良 大 手 亡	十支第8348号 大手亡(清水)	菜豆 北海道 第 8 号	1971 (1961)	1975	十 勝 支 場	品種選抜	開花始は7月下旬、成熟期は 9月下旬の半蔓性硬莢の晩生種
改 良 中 長	十支第9010号 中長鶏	菜豆 北海道 第 9 号	1971 (1961)	1975	十 勝 支 場	純系分離	開花始は7月下旬、成熟期は 9月上旬の中生の早に属する 半蔓性硬莢種

子葉の 色	莖色	葉形	毛茸の 形	花色	熟葉の		粒の			栽培適地
					形	色	形	大小	色	
	緑	円葉	鋭	黄	太く長い	淡褐	短円筒	大	暗赤	南部温暖地帯
緑	緑	円葉	鈍	黄	長、中太 や湾曲	褐	円筒	や小	赤	道東、道北などにおいて、極早 生種を必要とする地帯に適する
緑	緑	円葉	鈍	黄	短、太、 や湾曲	灰白色	烏帽子形	大	濃赤	本道中央部以北および以東に適 する
	緑	円葉	鋭	黄	長太	黒褐	円筒	中	赤	道中央部
緑	緑	円葉	鈍	黄	長、中太 や湾曲	褐	円筒	小	赤	道東、道北および道中央部に適 する
緑	緑	円葉	鈍	黄	長、中太 や湾曲	淡褐	や烏帽子 型	や小	や淡赤	全道一円、特に冷涼な地帯は除 く
緑	緑	円葉	鈍	黄	短、太、 や湾曲	灰白	烏帽子型	大	濃赤	道央、道南部
緑	緑	円葉・葉 縁くびれ	鈍	黄	長、や太、 や湾曲	褐	円筒形	中	赤	道央、道東北
緑	緑	円葉	鈍	黄	長、中太、 や湾曲	褐	円筒形	小	赤	十勝、上川の中南部、冷涼な地 帯はさける
緑	緑	円葉	鈍	黄	短、太、 や湾曲	灰白	烏帽子型	大	濃赤	十勝中央部、上川中南部、道央、 道南
緑	緑	円葉	鈍	黄	や細、長、 先端や湾曲	褐	短円筒形	や小	や濃赤	

草性	幼莖の 色	花色	葉色		葉の 硬軟	粒の			栽培適地
			若葉	熟葉		形	大小	色	
矮性	淡赤紫	淡紅	淡緑	淡黄	軟	楕円	中	赤紫	根室、釧路、宗谷等の寒冷地帯 を除く全道、葉煮食用としては 全道
つる性	緑	白	淡緑、まれに 淡紅飛沫斑	淡褐	硬葉	扁平じん強 形	大	白	本道中部の温暖地帯および南部 の地帯
半蔓性	緑	白	暗緑、成熟 前に暗紫色	淡黄褐	硬	短楕円筋部 がやや突起 する	小	白	寒冷地を除く全道一円
矮性	淡緑	淡紅	淡緑地に鮮 紅色の条斑	淡黄褐地に 斑紋の痕跡	硬	や扁平な長 楕円	中	淡肉色地に赤 紫色の斑紋	全道に適するが、特に北部の極 冷涼な地帯
つる性	淡緑	微紅色を帯 びた白色	淡緑	淡黄白	半硬葉	や長い球	大	白色地に筋部 周囲のみ黄褐 色の紫赤斑	本道中部の温暖な地帯および南 部地帯
矮性	淡赤紫	淡赤紫	淡緑、成熟 前に淡紅色 の斑紋	淡黄白	硬	楕円	や大	淡赤紫	特に寒冷な地帯を除く全道
矮性	緑	白	淡緑	淡黄白	硬	や長楕円	や大	白に極く淡い 鉛色細斑	特に寒冷な地帯を除く全道
半蔓性	緑	白	淡緑、成熟 前に暗紫色 となる	淡黄褐	硬	短楕円	小	白	上川、空知の菜豆栽培地帯およ び十勝、網走の山麓を除く畑作 地帯
半蔓性	淡緑	紅	淡緑地に紫 赤色の斑紋	淡褐地に斑 紋の痕跡	硬	短円筒	中	淡褐地に紫赤 色の斑紋	特に冷涼な地帯を除く全道

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
新 金 時	十育B-1号	菜豆 北海道 第10号	1971 (1964)	1975	十勝農試	「紅金時」× 「大正金時」	開花始は7月上旬、成熟期は 9月上旬の早生矮性良質多収 品種
昭 和 金 時	十育 B-11号	菜豆 北海道 第11号	1971 (1966)	1978	十勝農試	「紅金時」× 「大正金時」	開花始は7月中旬、成熟期は 9月中旬で矮性硬莢の中生種
北 原 紅 長	十支 第9839号 紅長2号	菜豆 北海道 第12号	1971 (1966)	1975		交雑育種	開花始は7月中旬、成熟期は 9月上旬の早生、矮性硬莢種
大 正 大 手 亡	十支 第514号 大正大手亡	菜豆 北海道 第13号	1971 (1969)	1975	十勝農試	品種選抜	開花始は7月下旬、成熟は9 月中旬の半変性硬莢の中生種
十 勝 白 金 時	十育 E-6号	菜豆 北海道 第14号	1971 (1970)	1978	十勝農試	「大正白金時」× 「白丸鶏」	開花始は7月中旬、成熟期は 9月中旬の半変性硬莢の中生種
銀 手 亡	十育 A-22号	菜豆 北海道 第15号	1971		十勝農試	「大手亡(網走)」× 「大手亡(清水)」	開花始7月下旬、成熟期9月 中旬の半変性硬莢の中生種
福 粒 中 長	十育 D-7号	菜豆 北海道 第16号	1972		十勝農試	「大正金時」× 「改良中長」	開花始7月中旬、成熟期9月 中旬の半変性の中生種
福 白 金 時	十育 E-10号	菜豆 北海道 第17号	1973		十勝農試	「十育B-11号」× 「5823-C-B-4」	開花始7月中旬、成熟期9月 中旬の早生矮性硬莢種
姫 手 亡	十育 A-29号	菜豆 北海道 第18号	1976		十勝農試	「十育A-29号」× 「Improved White Navy」	開花始7月下旬、成熟期9月 中旬の費性硬莢の中生種
改 良 虎 豆	中育T11号	菜豆 北海道 第19号	1977		中央農試	虎豆在米種(洞爺 村産)より純系分 離	晩生、つる性、半硬莢種「虎 豆」より着莢数多く多収、食 味良好

11 花 豆

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
大 白 花	中育M5号	花豆 北海道 第1号	1976		中央農試	白花豆(壮瞥町産) より系統分離	晩生をつる性花豆、子実は白 色で極めて大きく、多収で良質

12 えん豆

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
改 良 青 手 無	札幌青手無 1号-40	えん豆 北海道 第1号	1971 (1958)		十勝支場	純系分離	緑色大粒、良質、多収、半変 性、晩生
小 緑	十育 14号	えん豆 北海道 第2号	1971 (1965)		十勝農試	「アラスカ」× 「グリーンピース」	緑色小粒、良質、多収、矮性、 晩生、節詰用
大 緑	北育 37号	えん豆 北海道 第3号	1975		北見農試	「十育11号」× 「6202(F ₁)」	緑色大粒、良質、多収、半変 性、晩生
北 海 赤 花	北育 B-2号	えん豆 北海道 第4号	1978		北見農試	「十育16号」×在 米種赤えんどう (中札内)	褐色中粒、多収、矮性、晩生

草 性	幼 茎 の 色	花 色	英 色		英 の 硬 軟	粒 の			栽 培 適 地
			若 英	熟 英		形	大 小	色	
矮性	極淡 赤紫	淡紅	緑	黄白	硬	や長楕円	や大	紅	特に冷涼な地帯を除く全道
矮性	淡赤紫	淡紅	緑	黄白	硬	長楕円	や大	や暗紅	十勝、網走の中央部および上川 の無霜期間のやや長い地帯
矮性	淡赤紫	淡紅	や濃緑	黄白	硬	腎臓	や大	淡赤紫	特に冷涼な地帯を除く全道
半変性	緑	白	淡緑、成熟 前に暗紫色 となる	淡黄褐	硬	短楕円	小	白	十勝、網走などの道東畑作地帯
半変性	緑	白	淡緑	淡黄白	硬	や長楕円	や大	白に極く淡い 銛色網斑	十勝、網走、上川の無霜期間の やや長い地帯
半変性	緑	白	淡緑	淡黄褐	硬	楕円	小	白	十勝、網走、上川などの畑作地 帯
半変性	淡緑	紅	淡緑地に紫 赤色斑紋	淡黄褐地に 斑紋の痕跡	硬	や長楕円	や大	淡褐地に紫赤 色斑紋	特に冷涼な地帯を除く全道
矮性	緑	白	淡緑	淡黄白	硬	や長楕円	や小	白に極く淡い 銛色斑紋	十勝、網走、上川などの菜豆栽培 地帯
叢性	緑	白	淡緑、成熟 前に暗紫色 となる	淡黄褐	硬	楕円	小	白	十勝、上川、網走などの畑作地 帯
つる性	淡緑								

草 性	幼 茎 の 色	花 色	英 色		英 の 硬 軟	粒 の			栽 培 適 地
			若 英	熟 英		形	大 小	色	
つる性	緑	白	緑	褐	硬	腎臓形	大	白	胆振地方を中心とした道央部お よび北見周辺の畑作地帯

草 性	子葉の色	葉 色	花 色	英 色		英の硬軟	粒 の			栽 培 適 地
				若 英	熟 英		形	大 小	色	
半変性	淡緑	や淡緑	白	淡緑	微褐	硬	扁平球形で 大皺あり	大	淡緑	全道一円
矮性	淡緑	濃緑	白	緑	微褐	硬	球	小	緑	全道の青えん豆栽培地帯
半変性	緑	緑	白	淡緑	微褐	硬	扁平球で大 皺あり	大	緑	網走、上川の青えん豆栽培地帯
矮性	淡黄	淡緑	紫赤	緑	淡褐	硬	扁球で大皺 あり	中	帯緑褐地に 赤褐斑	全道の畑作地帯

13 ばれいしょ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
男 爵 薯		ばれいしょ 北海道輪第1号	1971 (1928)		米 国	「Early Rose」の 芽条変異?	早生種、粒ぞろいよく、いも 着は密、食味良、各種調理に 使用可能
ノークイン		ばれいしょ 北海道輪第2号	1971 (1928)		イギリス	不明	中生種、いもは長卵形で肉色 は黄、越冬後甘味を増す、生 食用
紅 丸	本育 309号	ばれいしょ 北海道 第3号	1971 (1938)		北海道 農事試	「Lembke Frühe Rosen」×「ペポー」	晩生種、極く多収、いも着密、 皮色紅、いも偏卵形、でんぷ ん原料用
ばれいしょ 農 林 1 号	島系 12号	ばれいしょ 北海道 第4号	1971 (1943)		北海道 農事試	「男爵薯」× 「Deodara」	中晩生種、多収、食味やや良、 食用及びでんぷん原料用
ニ セ コ	北海 15号	ばれいしょ 北海道 第5号	1971 (1959)	1975	北海道農試	「農林1号」× 「ミラビリス」	晩生種、いもは鮮紅色、でん 粉価は高いが湿腐病に弱い
ユ キ ジ ロ	北海 30号	ばれいしょ 北海道 第6号	1971 (1961)		北海道農試	「ケネベック」× 「農林2号」	中晩生種、疫病に強く多収、 調理後黒変少ない
エ ニ ワ	北海 22号	ばれいしょ 北海道 第7号	1971 (1961)		北海道農試	「島系267号」× 「島系232号」	中晩生種で疫病に強い、多収 で、でん粉価が高い
ホッカイアカ	北海 41号	ばれいしょ 北海道 第8号	1971 (1965)		北海道農試	「2070 ab(31)」× 「島系290号」	晩生種で、疫病に強く、でん 粉価が高い、いもは赤かつ色 で紡錘形
シ レ ト コ	根育 3号	ばれいしょ 北海道 第9号	1971 (1967)		根 飼 農 試	「北海24号」× 「島系291号」	「ホッカイアカ」程度の極晩 生種、疫病に強く極多収
ビ ホ ロ	北海 45号	ばれいしょ 北海道 第10号	1971 (1969)		北海道農試	「北海29号」× 「Hochprozentige」	極晩生種で、でん粉価が高い、 いもは小さい、疫病には強い
タ ル マ エ	北海 47号	ばれいしょ 北海道 第11号	1971 (1969)		北海道農試	「オオジロ」× 「Hochprozentige」	中晩生種で、でん粉価がやや 高い、いもは偏長卵、軟腐病 に弱い
ワ セ シ ロ	根育 11号	ばれいしょ 北海道 第12号	1974		根 飼 農 試	「根系7号」× 「北海39号」	早生種、熟期の遅くに多収、 「男爵いも」より大粒で、皮 色が白い
ト ヨ シ ロ	北海 48号	ばれいしょ 北海道 第13号	1976		北海道農試	「北海19号」× 「エニワ」	中早生種、還元糖含有率低く、 油加工に適する
ツ ニ カ	Tunika	ばれいしょ 北海道輪第14号	1978		ド イ ツ 民主共和国	「Lü56-186/21N」 ×「Lü51-183/2」	中晩生種、ジャガイモシスト センチュウ寄生型Aに対し抵 抗性がある

II 特 用 作 物

14 て ん 菜

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
つきさっぼ	E 6	てんさい 北海道 第 1 号	1971 (1964)	1975	てん菜研究所	集 団 育 種 法	晩生、極多収、褐斑病抵抗性 強
オポリラーベ	Polyrave	てんさい 北海道輪 第 2 号	1971 (1964)		オランダ	一代雑種育種法	多収、褐斑病抵抗性が極めて 弱い
カーベエルク	KW-E	てんさい 北海道輪 第 3 号	1971 (1964)		西ドイツ	集 団 育 種 法	多収、褐斑病抵抗性が弱い
エージェポリー	AJ Poly-1	てんさい 北海道輪 第 4 号	1971 (1964)	1978	ポーランド	一代雑種育種法	適地では「導入2号」より多 収、高糖性
オカーベポリ	KW-Polybeta	てんさい 北海道輪 第 5 号	1971 (1964)		西ドイツ	"	多収、やや高糖性、褐斑病抵 抗性が弱い

草 姿	茎 色	葉 色	花 色	い も の						疫 病 耐病性	栽 培 適 地
				形	色	表皮の 粗 滑	目 多 の 少	目 深 の 浅	肉 色		
直	緑地に淡赤 色が分布	濃	淡赤紫 先白	球	黄白	滑	中	深	白	弱 r.	全道一円
中	濃緑地に淡 紫色が分布	や濃	紫（白のし ぼりで先白 い）	長卵円形	黄白～ 淡黄褐	滑	少	浅	黄	弱 r.	全道一円
中	緑地に赤色 が分布	中	白	だ円～偏 卵	紅	滑～中	中	や浅	白（紅色を 分布すること がある）	弱 r.	全道一円
直	緑地に淡赤 色が分布	濃～ や濃	白	偏円～偏 球	黄白	滑	中	中	白	弱 r.	全道一円
	緑地に淡赤	や濃	濃淡紫 先白	扁卵	濃紅	滑	少	浅	白	弱	後志、宗谷管内および類 似地帯のてん粉原料用
や開	緑地に淡赤	緑	淡紫	卵	黄	滑	少	浅	白	や強 R ₁	全道、排水のよい肥沃 地
や直	緑	や濃	白	偏円	淡褐	粗・全 面ネット状	中	や浅	白	や強 R ₁	全道、排水のよい肥沃 地
開	淡赤紫	濃	淡赤紫	長紡錘	赤褐	や滑	多	浅	淡黄	強 R ₂ R ₄	全道、てん粉原料用
直	緑地に赤紫	や淡	白	卵	淡黄白	滑	中	や浅	白	強 R ₁ R ₂	全道、とくに道東、道 北および後志
中	緑地に一部 赤紫	や濃	淡青	偏球	淡褐	粗	中	中	白	強 r.	天北、上川北部、網走、 十勝などのてん粉原料 地帯
中	緑	緑	淡紫	偏長卵	淡褐	中	中	中	白	や弱 ～中r.	全道、てん粉原料地帯
や開	緑、一部淡 紫	淡	紫	偏卵～偏 球	淡黄白	滑	中	中	白	や強 R ₁	全道、食用
や開	緑	中	白	偏球～偏 卵	淡黄褐	中	中	浅	白	R ₁	全道
や開	緑	や淡	白	球～偏球	黄褐	粗	中	や深	黄		道央のジャガイモシス トセンチュウ発生地帯

倍数性	胚数性	葉姿	根形	露肩の多少	分岐根の多少	褐斑病耐病性	栽 培 適 地
2倍体	多	直立	長円錐	や多	や多	強	道南部、中央部およびその他の褐斑病多病地域
倍数体	〃	中間	短円錐	少	少	弱	網走、十勝地方の褐斑病発生の少ない地帯、こ れに準ずる地帯
2倍体	〃	〃	〃	〃	〃	〃	根釧、十勝、網走の褐斑病発生の少ない地帯
倍数体	〃	〃	〃	や多	〃	や弱	網走地方の紋別、遠軽地区およびこれに準ずる 地区
〃	〃	開平	〃	〃	〃	弱	根釧、十勝、網走の褐斑病発生の少ない地帯、 これに準ずる地帯

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
台 糖 1 号	台 糖 1 号	てんさい 北 海 道 第 6 号	1971 (1965)	1975	台糖	集 団 育 種 法	褐斑病抵抗性が強く、高収性である。
台 糖 2 号	台 糖 2 号	てんさい 北 海 道 第 7 号	1971 (1965)	1975	"	"	
台 糖 3 号	台 糖 3 号	てんさい 北 海 道 第 8 号	1971 (1965)	1975	"	"	
○てんけん1号*	T 1002	てんさい 北 海 道 合 第 9 号	1971 (1968)	1978	てん菜研究所	合 成 品 種 育 法	初期生育良好、多収、褐斑病抵抗性強
キタマサリ	支 7 号	てんさい 北 海 道 第 10 号	1971		"	"	早生、極多収
○ソローラベ	Solorave	てんさい 北 海 道 輪 第 11 号	1971		オランダ	一 代 雑 種 育 種 法	収量、糖分が多胚の「Plyrave」と同程度の単胚品種
○カーベノガモノ	Kareme-gamaro	てんさい 北 海 道 輪 第 12 号	1972		西ドイツ	"	倍数体の単胚品種、根重はや多収型
○モノヒル	Monohill	てんさい 北 海 道 輪 第 13 号	1973		スウェーデン	"	単胚品種で褐斑病抵抗性は弱いが多収性である
○モノホープ*	T 1013	てんさい 北 海 道 第 14 号	1973		てん菜研究所	"	単胚、多収、良質、褐斑病抵抗性強

注) ○印を付けた品種の特性は「昭和52年度 種苗特性分類調査報告書～てん菜、さとうきび」昭和53年3月、甘味資源振興会、よりとった。したがって、品種決定時(農業試験会議成績書)の記載とやや異なる。その他の品種についても、男沢(十勝農試)が前出「～分類調査報告書」の分類基準によって訂正した形質がある。

15 は っ か

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
は う よ う *	北 交 8 号	はっか 北 海 道 第 1 号	1971 (1965)	1978	北海道農試	種 間 交 雑	中生種に属し、草型は直立型で耐倒伏性が極めて強く、機械化向、高収率、多収品種である
あ や な み *	北 交 12 号	はっか 北 海 道 第 2 号	1971 (1968)		北海道農試	種 間 交 雑	銹病、倒伏、線虫などに強い安定多収型で、機械化集団栽培に適す
わ せ な み *	北 系 J 15 号	はっか 北 海 道 第 3 号	1973		北海道農試	種 間 交 雑	早生短秆で耐倒伏、耐病性で高収、油率多収型で連作栽培にも適する
さ や か ぜ *	北 系 J 16 号	はっか 北 海 道 第 4 号	1975		北海道農試	倍 数 体 利 用 種 間 交 雑	中生の晩で高脂肪、多収型品種であるが耐倒伏性は中程度

16 除 虫 菊

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
わ っ さ む	26S-6 -1	除虫菊 北 海 道 第 1 号	1971 (1961)		北海道農試	ケニア導入種からの 栄養繁殖系統	中生、分枝数が多いため着花数多く多収、ピレトリン含有率もやや高い

倍数性	胚数性	葉姿	根形	露肩の多少	分岐根の多少	褐斑病耐病性	栽 培 適 地
2 倍体	多	直立	長円錐	少	中	強	道南地域の褐斑病が多発する低台地帯
"	"	"	"	"	"	"	道南地域の一般低台地帯
"	"	"	"	"	"	"	道南地域の高台地帯
"	"	"	"	多	"	"	道南、道央およびその他褐斑病多発地帯
"	"	やや開平	短円錐	"	少	弱	根釧、天北地帯およびこれに準ずる地帯
3 倍体	単	"	円錐	"	"	"	道東、道北などの褐斑病少発地帯およびこれに準ずる地帯
倍数体	"	やや直立	短円錐	中	"	"	根釧を除く道東、道北の褐斑病少発地帯、これに準ずる地帯
3 倍体	"	開平	円錐	"	"	"	道東などの褐斑病少発地帯、これに準ずる地帯
"	"	やや開平	"	少	"	やや強	全道一円に適應するが、特に道央および道南における適應性が大きい

和洋種別	花色	茎 の			葉 の						さび病耐病性	耐倒伏性	栽 培 適 地
		形	色	毛茸の多少	形	葉脈の色	葉縁	着生状態	葉柄の長短	葉色			
和種	中	四角柱状	赤紫	無	旋紡錘	明緑	鋸歯	中	短	緑	やや強	強	全道の薄荷栽培地帯
和種	濃	四角柱状	赤紫	少	やや旋紡錘	淡赤紫	鈍鋸歯	垂	短	濃緑	強	強	全道の和種薄荷栽培地帯
和種	濃	四角柱状	淡赤紫	少	皮針		鈍鋸歯	垂	中	淡緑	強	やや強	全道の和種薄荷栽培地帯
和種	濃	四角柱状	赤紫	少	紡錘		鋸歯	垂	短	緑	強	中	全道の和種薄荷栽培地帯

草 姿	毛茸の多少	葉 の		舌 状 花 の				管状花の直径	栽 培 適 地
		形	色	数	長さ	巾	着生密度		
叢生	や多	や広	白緑	や多 24枚	並 17.2mm	やや狭 6mm		並 19mm	全道の除虫菊栽培地帯

注) 「北海1号」対比

17 ラベンダー

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
おかむらさき	遅咲1-4	ラベンダー 北海道第1号	1971 (1964)		中央農試	在来種より系統選抜	中生、花茎極長、花色やや濃紫、花茎収量やや多、収油率中、油質良
よ う て い	早咲1-3	ラベンダー 北海道第2号	1971 (1964)		中央農試	在来種より系統選抜	早生、花茎やや長、花色やや淡紫、花茎収量中、収油率極高、油質良
は な も い わ	中咲2-2	ラベンダー 北海道第3号	1971 (1968)		中央農試	在来種より系統選抜	中生種、花茎長中、花色極淡紫、花茎収量多、収油率定植当初低い

18 な た ね

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
岩 内	本第 11054号	なたね 北海道第1号	1971 (1935)		北海道農試	在来種(岩内郡地方、別名「九葉」)	洋種の秋播晩生種、含油量多く良質、冬損に弱い
ハンブルグ1号	本育 357号	なたね 北海道第2号	1971 (1937)	1975	北海道農試	「ハンブルグ」から純系淘汰	洋種の秋播晩生種、含油量多、冬損に強い
タイセツナタネ*	北系87号	なたね 北海道第3号	1971 (1961)		北海道農試	「ハンブルグ1号」より選出	洋種の秋播晩生種、耐寒耐病性強、良質多収、含油率高い
イワオナタネ*	MR 1号	なたね 北海道第4号	1971 (1961)		北海道農試	「岩内」より選抜	洋種の秋播晩生種、強悍、耐寒耐病性強、多収、含油量多

III 果 樹

19 り ん ご

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
祝	American Summer Pearmain	りんご 北海道輪第1号	1971 (1924)	米国原産	両親不明	中生種としては品質良く、樹体も強健、生理的落果が多い
旭	McIntosh Red	りんご 北海道輪第2号	1971 (1924)	カナダ(オンタリオ州)	偶発実生	結果早く年々豊産であるが、老衰は割合に早く、30年を過ぎると減収傾向
紅 玉	Jonathan	りんご 北海道輪第3号	1971 (1924)	米国(ニューヨーク州)	ツェンブルグの実生	結果年令到達早く豊産、独特の風味で品質がよい
陽 玉 (デリシャス)	Delicious	りんご 北海道輪第4号	1971	米国(アイオワ州)	偶発実生	食味は良いが、着色は良くない。結果年令到達おそく生産力は高くない
黄 冠 (ゴールデン デリシャス)	Golden Delicious	りんご 北海道輪第5号	1971	米国(ウェストバージニア州)	偶発実生	結果年令到達早く豊産性、無袋では果面の锈が多い
印 度		りんご 北海道第6号	1971	青森県	白龍の偶発実生と推定	果汁少なく、甘味強い独特な味、隔年結果性強い
タイズマンレッド	Tydemans Red	りんご 北海道輪第7号	1971 (1966)	英国(イーストモーリング研)	「旭」×「ウォーセスターベアーマン」	早生種としては品質は良い。収穫前の落果がやや多い
早 生 旭	Early McIntosh	127	1973	米国(ニューヨーク農試)	「黄冠」×「旭」	樹勢強健で、早生種としては品質優良隔年結果性が強い
レッドゴールド	Redgold	128	1973	米国(ワシントン州)	「ゴールデンデリシャス」×「リチャードデリシャス」	結果年令到達が早く、豊産性で貯蔵性は劣るが、風味良好である

花 茎 の			花 色	花序の長短	栽 培 適 地
姿	色	硬 軟			
半平伏 先端曲	緑	や硬	や濃紫	中	現在栽培されている各地
や直立	淡緑	や硬	や淡紫	長	現在栽培されている各地
や直立	淡緑	や硬	極淡紫	中	現在栽培されている各地

和洋種の別	春秋の別	草 姿	葉 色	花 色	粒 の		冬枯歩合	栽 培 適 地
					大 小	色		
洋種	秋	Ⅳ型	濃緑	黄	大	黒褐	*21.5	北海道中部以南の気候温暖な地帯に適する
洋種	秋	Ⅳ型	淡緑色	黄	大	黒褐	*24.8	北海道東部、北部の寡雪極寒冷地帯を除く各地に適す
洋種	秋	Ⅳ型	濃緑	黄	大	黒	17.8	冬枯多発地帯、菌核病多発地帯主として道南
洋種	秋	Ⅳ型	濃緑	黄	中	黒	21.8	倒伏し易い地帯、多肥栽培に適し道南の菌核病多発地帯

注) *印は1956～1959年4ヵ年平均

樹 勢	樹 姿	収 量	熟 期	貯蔵性	果 形	果実の大きさ	果皮色	肉質	風 味	栽 培 適 地
強健	や直立性	中	8月下～ 9月上・中	低	長円～楕円形	160～200g	黄緑地に 紅褐の縞	緻密	果汁多く微酸、甘 味に富み、味優	全道一円
頗る強健発 育旺盛	開張、枝 下垂せず	多	9月下	中	円～扁円形	180～220g	緑黄地に 濃紅色	頗る 緻密	最初酸味強いが漸 次甘味増し、味優	全道一円
中	開張しや すい	多	10月中	稍高	円～やや長円	160～230g	満面鮮紅 色	緻密	果汁稍多く、酸味 強いが味優	全道一円
強健、発育 旺盛	結実後開 張	中	10月下	稍高	長円～卵円錐	200～300g	緑黄地に 暗紅の縞	緻密	果汁多く甘味芳香 有、味秀	全道一円
強健、発育 旺盛	半開張	多	10月下	高	長卵～長円形	200～300g	鮮黄色	緻密 極めて良	果汁稍多、甘酸適 和、芳香有、味秀	全道一円
強健	結実後開 張	多	10月下～ 11月上	高	長円で頂部円 錐	200～300g	緑、緑黄 地に淡赤 褐色	緻密 甚だ堅い	果汁非常に少く芳 香強く、酸味なく 甘味強、味良	道央以南
強健	や開張性	中	9月上～ 9月中	低	楕円形	180～200g	全面淡紅 色、陽光 面濃紅色	緻密	果汁多く、芳香有 味優	全道一円
強健	半開張性	中	8月中～ 下	低	扁円(円錐)	160～200g	黄緑地に 褐紅	緻密 で軟	果汁多く、やや酸 多いが味優	全道一円
強健	や開張性	多	10月上～ 中	中	円	200～250g	全面濃紅	粗	果汁多く、甘味強 く、微酸、味優	全道一円

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
陸 奥		129	1973	青森県りんご試	「ゴールデンデリシャス」×「印度」	3 倍体であるため授粉樹に用いられない。隔年結果性やや強い
ふ じ	りんご農林 1 号	130	1973	東 北 農 試	「国光」×「デリシャス」	「デリシャス」に比べ生理的落果少く豊産性、食味良好で貯蔵品種として優
スターキングデリシャス	Staking Delicious	131	1973	米国(ニュージャージー州)	「デリシャス」の枝変わり	果実の外観食味ともに優れるが、結果年令到達おそく、生産力高くない
リチャードデリシャス	Richared Delicious	132	1973	米国(ワシントン州)	「デリシャス」の枝変わり	果実の外観食味ともに優れるが、結果年令到達遅く、生産力高くない

20 りんご台木

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
EMVII	M 7	33	1972	英国(イーストモーリントン研)	在来系統を分類し命名	各樹品種とも接木後の親和性良好で、半わい性となり「マルバ」台の2倍程度密植可。
EMIX	M 9	34	1972	英国(イーストモーリントン研)	在来系統を分類し命名	各樹品種との親和性は良好で、わい性となり「マルバ」台の3～4倍程度の密植可
MM111		35	1972	英国(イーストモーリントン研、ジョン・インクス試)	「ノザンズバイ」×「M793」	各樹品種とも接木後の親和性良好で、「マルバ」台程度の生育をし、樹体強健

21 な し

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
身 不 知		なし 北海道第1号	1972 (1936)	不明	余市地方で実生から発見	晩生種、果実は洋ナシ形、370g 内外、収量は多、品質はやや不良
長 十 郎		なし 北海道第2号	1972 (1924)	神奈川県当麻長十郎	1895年ころ偶然実生として発見	晩生種、果実はやや円形、280g 内外、収量は多、品質は良
バートレット	Bartlett	なし 北海道第3号	1972 (1924)	イギリス原産	不明	中生種、果実は円すい形、250g 内外、収量は多、品質は良。
ブランデーワイン	Brandy-Wine	なし 北海道第4号	1972 (1924)	不明	不明	中生種、果実は短円すい形、180g 内外、収量は中、品質は最良。
日 面 紅	Flemish Beauty	なし 北海道第5号	1972 (1924)	ベルギー原産	不明	中生種、果実は円すい形、300g 内外、収量は多、品質は良。
ウインターネリス	Winter Nelis	なし 北海道第6号	1972 (1924)	イギリス原産	不明	晩生種、果実は短円すい形、150g 内外、収量は中、品質は良。
初 見		なし 北海道第7号	1972 (1957)	北海道農試	「長十郎」×「身不知」	早生種、果実は短紡錘形、180g 内外、収量は多、品質はやや良。
甘 玉		なし 北海道第8号	1972 (1957)	北海道農試	「長十郎」×「身不知」	中生種、果実は円形、250g 内外、収量は中、無袋不可、品質はやや良。
北 洋		なし 北海道第9号	1972 (1957)	北海道農試	「二十世紀」×「長十郎」	晩生種、果実はやや不整な偏円形、250g 内外、収量は多、品質は良。
北 星	北農1号	なし 北海道第10号	1972 (1966)	北海道農試	「身不知」×「二十世紀」	中生種、果実は紡錘形、250g 内外、収量は中程度、品質は良。

樹 勢	樹 姿	収 量	熟 期	貯蔵性	果 形	果実の大きさ	果 皮 色	肉 質	風 味	栽 培 適 地
強健	半開張性	中	10月下	高	長円～円	350～400 g	黄緑～黄	や粗 維	微酸、甘味も有 2月以降味秀	全道一円
強健	開張性	多	10月下～ 11月上	高	円～長円	250～300 g	緑黄又は 黄の地に 暗紅縞	黄白 緻密	果汁多く、微酸、 甘味多く味秀	全道一円
強健旺盛	結実後開 張	中	10月下	や高	長円～卵円錐	200～300 g	満面濃暗 紅	緻密	果汁多く、甘味芳 香有り、味秀	全道一円
極旺盛	結実後開 張	中	10月下	や高	長円～卵円錐	250～300 g	全面鮮紅	緻密	果汁多く甘味芳香 有り、味秀	全道一円

樹の大きさ	樹勢	樹姿	収量	熟期	貯蔵性	果形	果実の大きさ	果皮色	肉質	風味	栽 培 適 地
半わい 性	中	や開張	中	や早ま る	平常	平常	平常	やまさ る	平常	や糖度 上る	現在のりんご産地全道一円
半わい 性	中	開張	少	早まる	や劣る	平常	平常	やまさ る	平常	糖度上 る	現在のりんご産地全道一円
標準	旺盛	平常	多	平常	平常	平常	平常	平常	平常	平常	現在のりんご産地全道一円

樹勢	樹姿	収量	収穫期	追熟期 間	貯蔵性	果形	果実の 大きさ	果皮色	肉質	風味	品質	栽 培 適 地
強	開張性	多	10月中 ・下		中	円錐形	370 g 内外	緑黄色	粗	や良	や良	本道独特の品種で耐寒性強く、 本道一円に栽培できるが、品質 的経済的栽培は道央以南の地域
中	直立性	多	10月下		高	や扁円 形	280 g 内外	淡褐色	や粗	良	良	晩生種で耐寒性に弱いことから、 道央南部以南の地域
強	開張性	多	9月上 ・中	7～10 日	短	円錐形	250 g 内外	橙黄色	密軟	良	良	耐寒性は「身不知」より弱い。 道央以南で最低気温が-25～ -26℃以下にならない地域
強	開張性	中	9月下	2週間 前後	短	短円錐 円	180 g 内外	黄緑	密軟	良	最良	耐寒性は「身不知」に近い。 道央以南の地域
強	開張性	多	10月上	2週間 前後	短	円錐形	300 g 内外	黄緑	密軟	良	良	耐寒性は強く「身不知」に近 いか、経済栽培は道央以南の地域
中	や開張 性	中	10月下	2～3 ヶ月	短	短円錐 形	150 g 内外	暗緑色	や粗軟	良	良	耐寒性は強く「身不知」に近 い。道央以南の地域。
強	や開張 性	多	9月中		低	短紡錘 形	180 g 内外	緑褐色	や密	良	良	耐寒性が強く早生種であること から、道央以北の遠品種のなか った地域の自家用栽培に適する。
強	開張性	中	9月下 10月上		中	円形	250 g 内外	淡緑黄 色	や粗	良	良	耐寒性の点からみて、胆振以 北の最低気温が-27～-28℃ 以下にならない地域。
強	開張性	多	10月下		高	不整な 偏円形	280 g 内外	淡褐色	密	良	良	空知以南、胆振以北の中部地 方に適する。黒星病の被害少 なく、粗放栽培に耐えるので 道南の一部地方にも適する。
中	開張性	中	9月下		中	紡錘形	約 250 g	緑黄	や粗	良	良	「長十郎」の栽培されている 地域

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
北 都	北農2号	なし 北海道第11号	1972 (1966)	北海道農試	「二十世紀」×「身不和」	中生種、果実は短紡錘形、230g内外収量は中程度、品質は最良

22 ぶどう

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
キャンベルス アーリー (カメルスアーリー)	Campbells Early	ぶどう 北海道輪第1号	1972 (1924)	米国(オハイオ州)	「ムーアアーリー」の実生	黒色種、果房果粒共に大きい。極めて豊産性である。
デラウェア	Delaware	ぶどう 北海道輪第2号	1972 (1924)	米国(オハイオ州)	偶発実生、1849年発表	赤色種、果房果粒共に小さい。甘味多い。耐寒性はやや劣る。
ナイアガラ	Niagara	ぶどう 北海道輪第3号	1972 (1924)	米国(ニューヨーク州)	「コンコード」×「キャサディ」	白色種。豊産性で甘味多いが、熟期遅い。狐臭強い。
ブライトン	Brighton	ぶどう 北海道輪第4号	1972 (1924)	米国(ニューヨーク州)	「ダイアナハンブルグ」×「コンコード」	赤色種、甘味多く品質は良いが、自家不受精のため結実不安定。
バッファロー	Buffalo	ぶどう 北海道輪第5号	1972 (1966)	米国(ニューヨーク州農試)	「ハーバート」×「ワトキンス」	黒色種。糖酸共に多く、独特の香りがある。耐寒性はやや劣る。
ポートランド	Portland	133	1973	米国(ニューヨーク農試)	「チャンピオン」×「ルテー」	白色種
フレドニア	Fredonia	134	1973	米国(ニューヨーク農試)	「チャンピオン」×「ルシール」	黒色種、熟期やや早く、酸味やや少ない。脱粒し易い。

23 オウトウ 23

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
日 の 出		その他 北海道第10号	1971 (1922)	イギリス原産	不明、1988年以前に発表	極早生種、果実は紫黒色でやや小さい。多汁であるが甘味やや乏しい。
北 光(水門)		その他 北海道第11号	1971 (1922)	小樽市で発見	偶発実生、1912年(明44)	中生種、果実は中位で軟らかく、多汁である。裂果が少ない。
ナポレオン		その他 北海道輪第12号	1971 (1922)	欧州在来	不明、1700年以前に発表	晩生種、果実は大きく肉質はやや硬い。甘味多く、品質は良い。加工適性有。
佐 藤 錦		135	1973	山形県佐藤栄助	「ナポレオン」×「黄玉」	中生種。果実は黄赤色で中位。甘味多く、品質は良い。

24 ウ メ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
豊 後		その他 北海道第13号	1971	不明	不 明	耐寒性が強く、大果で果肉が厚く加工向きだが梅干に不適、耐病虫性弱。
大 野 豊 後		153	1974	道南農試	大野町の豊後梅の在来種中より選抜	耐寒性強く、結実期早く、豊産性で果実も小さく梅干にも向くが、樹勢弱く樹形維持に難点がある。

樹勢	樹姿	収量	収穫期	貯蔵性	果形	果実の 大きさ	果皮色	肉質	風味	品質	栽 培 適 地
強	開張性	中	9月下	中	短紡錘 形	約 230g	白緑黄	密	良	最良	中生種「身不知」の栽培されている地域

樹勢	収量	熟期	果房形	着粒の 疎密	果粒形	果房の 大きさ	果粒の 大きさ	果皮色	肉質	風味	そ の 他	栽 培 適 地
中	極多	9月下 ～10月上	長円錐	密	円	大	や大	黒	軟	酸や多		道央南部以南
強	中	10月上	円筒	や密	円	小	小	赤褐色	軟	酸味少 甘味多	G A 処理により 種なし化、 熟期促進可	道央南部以南
強	多	10月上 ～中	円錐	密	円	中	中	黄緑	軟	甘味多 酸味強		道央南部以南
強	少	10月上	長円錐	中	円	中	中	暗赤	軟	甘味多	自家不受精	道央南部以南
や強	中	9月下 ～10月上	円錐形	や疎	円	中	中	紫黒	軟	糖酸芳 香		道央南部以南
中	中	9月中 ～下	円筒	中	円	中	中	緑黄	軟	甘味多		道央南部以南
強～中	中	9月下	短円筒	密	扁円	中	中	青黒	軟	酸や少		

樹勢	樹姿	収量	熟期	果形	果実の 大きさ	果皮色	肉色	肉質	風味	品質	裂果	栽 培 適 地
中	直立性	中	6月下	心臓形	中	紫黒	紫赤	軟	甘味中 微酸	中	中	道央以南
強	半開張 性	多	7月上	心臓形	中	赤帯黄	淡黄	軟	甘酸中 位	中	少	道央以南
強	直立性	多	7月中 ～下	長心臓 形	大	赤帯淡 黄	黄白	やや硬	甘味多	上	中	道央以南
強	直立性	多	7月初	短心臓 形	中	黄赤	黄白	軟	甘味多	上	中	道央以南

樹の 大き さ	樹勢	樹姿	収量	自家結 実性	収穫期	貯蔵性	果形	果実の 大きさ	果皮色	風味	そ の 他	栽 培 適 地
大	強	や直立	や多	有	8月上	有	円～長 円	大 (30～ 60g)	黄緑地暗 紅斑暈	中	縫合線不明 不整果多 玉摘不良	道南、道央
小	弱	開張	多	有	8月上		円	小～中	黄緑	良		道央、道南

25 ス モ モ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ビ ュ ー テ イ		136	1973 (1925)	米国	不 明	極早生、豊産なるも小果で食味不良、日焼多、黒斑病弱、貯蔵性劣る。
大 石 早 生		137	1973 (1952)	福島県 大石俊雄氏 園	フォーモサ実生 (含ビューティー)	極早生、豊産なるも、小果で食味不良、日焼少しも黒斑病に弱い。

26 モ モ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
倉 方 早 生		138	1973 (1951)	東京都 倉方英蔵氏 園	「長生種(タスカ ン×白桃)」×「実 生種」	外観美麗、食味多甘、貯蔵性良好なる も肉質や硬で自家結実性乏しい。
白 鳳		139	1973 (1931)	神奈川県農 試	「白桃」×「橘早生」	食味、色沢良好なるも、中果、中産、 弱勢、耐病性弱、等で栽培管理注意。
大 久 保		140	1973 (1925)	岡山県 大久保重五 郎氏園	白桃実生	果実外観優れ、貯蔵輸送性良好なるも、 弱矮開張下垂性と食味淡白注意。
砂 子 早 生		141	1973 (1958)	岡山県 上村璋男氏 園	偶発実生	大果、外観美麗、食味良好、貯蔵性良 好なるも、自家結実性なし。

27 カーランツ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ロンドン マーケット		142	1973	不明(イギ リスで古く から栽培)	不 明	樹は大きく開張性、ごく豊産、熟期7 月中～下旬、果実は赤く大きい。
ローズオブ ホーランド		143	1973	不明(フラン スで古く から栽培)	不 明	樹は大きく直立性、熟期7月下旬～8 月上旬、ごく豊産、果実の大きさ中 で濃赤色。
レッドレーフ		144	1973	アメリカ (ミネソタ 農試)	不 明	樹の大きさは中、開張性、収量中、熟 期7月中旬、果実は大きく赤い。
ボスクープ ジャイアント		145	1965 (1965)	オランダ	不 明	樹は大きく開張性、収量中位、熟期7 月下旬～8月上旬、果実は黒く大きい。

28 ハイブッシュブルーベリー

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ジ ュ ー ン	June	146	1974	米国	「(ブルックス)× (ラッセル)」×「ル ーベル」	早生種、樹姿はやや開張性で大きく、 収量は多い。凍害に強い。
ランコカス	Rancocas	147	1974	米国	「(ブルックス)× (ラッセル)」×「ル ーベル」	中生種、樹姿はやや開張性で大きく、 収量は多い。凍害に強い。
ウェイマウス	Weymouth	148	1974	米国	「ジューン」×「キ ャボット」	早生種、樹姿は開張性で小さく、収量 は多い。凍害に強い。
ハーバート	Herbert	149	1974	米国	「スタンリー」× (「ジャージー」× 「バイオニヤ」)	中生種、樹姿は開張性で大きく、収量 は多い。凍害にやや強い。

樹の 大き さ	樹勢	樹姿	収量	自家結 実性	熟期	貯蔵 性	果形	果実の 大きさ	果皮色	肉色	肉質	風味	その他	栽 培 適 地
や少	良好	直立～ 開張	極多	有	8月中 ～下	劣	円錐心 臓形	小 (100g)	鮮紅	黄色～ 淡紅	柔軟、 多汁	少甘、 少酸	黒斑病弱 日焼多	道南、道央、道東
や大	強	直立～ 開張	多	不良	8月中 ～下	劣	円錐心 臓形	小 (100g)	鮮紅	黄	柔軟	少甘、 極少酸		道南、道央、道東

樹の大 きさ	樹勢	樹姿	収量	熟期	果形	果実の 大きさ	果皮色	肉色	肉質	核の粘 性	風味	品質	そ の 他	栽 培 適 地
や大	強	や開 張	多	8月下	楕円	中の小 (150g)	果頂紅 暈	白色	緻密	粘核	多甘少 酸良	良好	耐病性強、 核割少、核 周着色	渡島、松山、胆振、 日高(中西部)
や大	中～ や弱	開張	中	9月上 ～中	円～長 円	中 (180g)	乳白色 紅暈	白色	緻密や 硬	半離粘	多甘極 少酸	良好	耐病性や弱 核周淡紅、 剥皮容易	渡島、松山、胆振、 日高(中西部)
中～小	弱	極開 張	多	9月中	円	大 (230g)	乳白鮮 紅斑暈	白色	や粗	離核	甘酸共 や淡白	や良	日焼多、核 周淡紅穿孔 病弱	渡島、松山、胆振、 日高(中西部)
大	や強	開張	多	8月下	楕円～ 円	大 (250g)	乳白色 斑暈	白色	緻密緻 維や少	半離粘	多甘少 酸	良好	耐病性強、 核割少、剥 皮容易	渡島、松山、胆振、 日高(中西部)

樹の大 きさ	樹 勢	樹 姿	収 量	熟 期	果房長	果 形	果実の 大きさ	果皮色	耐寒性	栽 培 適 地
大	強	開長	ごく多	7月中下	や長	円	大	赤	高	全道
大	強	直立	ごく多	7月下～ 8月上	長	円	中	濃赤	高	全道
中	中	開張	中	7月中	や長	円	大	赤	高	全道
大	強	開張	中	7月下～ 8月上	短	円	大	黒	高	全道

樹の大 きさ	樹 勢	樹 姿	収 量	熟 期	果 形	果実の 大きさ	果皮色	風 味	耐凍性	栽 培 適 地
大	中	や開張性	多	7月下～ 8月下	や扁円	中	濃藍	甘味中位	強	道央以南
大	中	や開張性	多	8月上～ 8月末	や扁円	中	濃藍	甘味多	強	道央以南
小	弱	開張性	多	7月下～ 8月中	や扁円	や大	濃藍	甘味多	強	道央以南
大	中	開張性	多	8月中～ 9月中	扁円	大	濃藍	甘味中位	や強	道央以南

29 グースベリー

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ピックスウェル	Pixwell	158	1976	米 国	「リベス・ミズリエンシス」×「オレゴンチャンピオン」	熟期7月下旬，果実は大さき中位で円形，紫紅色，糖度高い，ごく多収。
グレンデール	Glennedale	159	1976	米 国	「グロスラリア・ミズリエンシス」×栽培種の子孫	熟期7月下旬，果実は大さき中位で円形，紫紅色，糖度中位，多収。
オレゴン チャンピオン	Oregon Champion	160	1976	米 国	「クラウン・ボブ」×「ホートン」	熟期7月下旬，果実は大さき中位で円形，緑黄色，糖度高い。
ホ ー ト ン	Houghton	161	1976	米 国	アメリカ種×ヨーロッパ種	熟期7月下旬，果実はやや小さく円形暗赤色，糖度高い，多収。

IV 花 卉

30 花 ユ リ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育 成 方 法	主 要 特 性
ハゴロモ	交配2号	花ユリ 北海道第1号	1971 (1960)	1979	北海道立農試	「あかひらと」×「おくきんぶせん」	開花7月下旬～8月上旬，花色朱紅色，花弁反転，珠芽なく下向咲，切花用。
岩内透3号	146号	花ユリ 北海道第2号	1971 (1964)	1979	北海道立農試	自生「エソスカシユリ」より選抜	開花期6月上・中旬，花色鮮紅色，斑点少くコップ状で上向，促成切花用。
えぞあか	岩宇7号	花ユリ 北海道第3号	1971 (1967)	1979	中央農試	「えぞ透」×「千草」	開花期6月中・下旬，花色赤橙色，斑点少，反転少く上向咲，促成切花用。
えぞこがね	岩宇16号	花ユリ 北海道第4号	1971 (1967)	1979	中央農試	「えぞ透」×「透ゆり」(不明)	開花期6月中・下旬，花色黄橙色，斑点中，上向咲，稍々大輪，促成切花用。
岩内黄金	4503	花ユリ 北海道第5号	1975		中央農試	(3711)×(F系)	開花期6月下旬～7月上旬，花色濃黄色，斑点少く横向咲促成切花用。

V 野 菜

31 トマト

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性						栽 培 適 地
					草勢	熟期	果型	果色	果重	耐病虫性	
あ か ぎ	25	1972	1979	東京レード	強	中	豊円	緋赤	148 g		全道一円
宝 冠 1 号	26	1972		武蔵野種苗	中	早～中	豊円	濃桃	146		〃
新 豊 紀	27	1972	1979	ヤマト種苗	中	早～中	扁円	桃	152		〃
豊 緑	28	1972	1979	サカタ種苗	強	中	扁円	濃桃	162	F	〃
スーパーキング	29	1972	1979	ヤマト種苗	中～強	早～中	扁円	濃桃	177		〃
福 寿 2 号	50	1972 (1930)	1979	タキイ種苗	中	早	豊円	濃桃	157		〃

樹の大きさ	樹 勢	樹 姿	収 量	熟 期	果 形	果実の大きさ	果皮色	品 質	栽 培 適 地
大	強	や開張性	ごく多	7月下	円	中	紫紅	良	全道。土壌適応性は広いが排水の良い粘質がかった土壌が適す。
大	強	や開張性	多	7月下	円	中	紫紅	良	全道。土壌適応性は広いが排水の良い粘質がかった土壌が適す。
中	や強	や開張性	中	7月下	円	中	緑黄	良	全道。土壌適応性は広いが排水の良い粘質がかった土壌が適す。
中	や強	や開張性	多	7月下	円	や小	暗赤	良	全道。土壌適応性は広いが排水の良い粘質がかった土壌が適す。

開花期	草丈	葉数	花色	花形	花序	花梗	蕾毛	萼色	木 子	珠 芽	葉の着生	葉色	葉形	球根の色
月 日 6. 10	70 ^{cm}	78 ^枚	鮮紅色	上向	輪生	やや長	少	緑	普通	なし	密	緑	披針形	白
6. 10	70	78	鮮紅色	上向	輪生	やや長	少	緑	普通	なし	密	緑	披針形	白
6. 21	37	93	赤橙	上向	輪生	中	有中	緑	僅かに有	なし	水平		披針形	白
6. 20	48	86	黄橙	上向	輪生	中	有中	緑	ほとんどなし	ほとんどなし	垂下		披針形	白
6月下旬～7月上旬	35～40	60	濃黄	スカシ横向	輪生	中	なし	緑	僅かに有	なし	水平		披針形	白

トマト

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性						栽 培 適 地
					草勢	熟期	果型	果色	果実	耐病虫性	
ひ か り	51	1972 (1961)	1979	園芸生産研	中	中	豊円	濃桃	172		全道一円
宝 冠 2 号	52	1972 (1963)		武蔵野種苗	中～強	早～中	豊円	濃桃	200		"
米 井	53	1972 (1965)	1979	タキイ種苗	中～強	早～中	豊円	濃桃	171		"
東 光	54	1972 (1961)		む さ し	中	早～中	豊円	濃桃	175		"
強 力 米 井	55	1972	1979	タキイ種苗	強	中	豊円	濃桃	200	F. TMV C L	"
強 力 五 光	56	1972	1979	む さ し	強	中	豊円	鮮桃	156	F. C L. N	"

トマト

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性						栽培適地
					草勢	熟期	果型	果色	果重	耐病虫性	
強 力 月 光	57	1972	1979	む さ し	強	中	豊円	濃桃	180	F.C.L.N	全道一円
ウ ル バ ー ナ	トマト北海道 道輪第1号	1972 (1965)	1979	導 入	強	早～ 晩	扁円 球 豊満	赤	100	中	"
ファイアー ボール	トマト北海道 道輪第2号	1972 (1966)	1979	導 入	強	早	豊満	濃赤	100		"
早 生 だ る ま	164	1977		松 永	強	早	豊満	濃赤	70		道央以南
交 1 号	165	1977		北 農 試	強	早	豊満	赤	110		"
れ い ぎ ょ く	166	1977		長野農試	強	早	豊満	濃赤	120	F	"

注) 1) 果重は主として北農試のデータ(1970年)

2) 耐病虫性: F(萎ちょう病) TMV(タバコモザイク病) CL(はかび病) N(根こぶ線出)の略

32 ナ ス

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	草姿	熟期	分枝	果形	果色	収量	栽培適地
金井新交鈴成	58	1973 (1960)	1979	金 井	開張	早	多	長卵	濃黒紫	多	全道一円
新 橋 真	59	1973 (1960)	1979	ヤマト種苗	開張	早	多	長卵	濃黒紫	多	"
郡 真 5 号	60	1973 (1970)	1979	群 馬	や立	早	多	長卵	漆黒	多	"
金 井 早 真	61	1973 (1970)	1979	金 井	立	極早	多	中長	濃黒紫	多	"
千 岡	62	1973		タキイ種苗	半 開張	早	多	長卵	漆黒	多	"
長 岡 長	63	1973	1979	タキイ種苗	半 開張	極早	多	長	漆黒	多	"

33 ビーマン

品 種 名	登録番号	決定年	廃止年	育成場所	特 性						栽培適地
					草 勢	熟 期	分枝性	果 形	果 重	果肉の 厚 さ	
緑 王	64	1973 (1963)	1979	む さ し	開 張	極 早	多	4 角 長 果	40 g	中	全道一円
エ ー ス	65	1973 (1970)		タキイ種苗	開 張	極 早	多	中獅子	50	中	"
に し き	66	1973 (1970)	1979	園 芸 研	半 開	中 早	多	長獅子	40	厚	"

34 キュウリ

品 種 名	登録番号	決定年	廃止年	育成場所	特 性									栽培適地
					草勢	葉の 大小	低温伸 長性	着果 習性	果形	果色	いぼ の色	収量	作 型	
長 日 青 節 成	30	1972	1979	ヤマト種苗	強	大	良	主	長	緑	黒	多	促成用	全道一円
久留米落合H型	31	1972	1979	久留米原種 育成会	強	中	良	主	長	濃緑	黒	多	促成用	"
夏 崎 落 3 号	32	1972	1979	埼玉原種 育成会	強	中	良	主	長	濃緑	白	多	露地用	"
小 城 節 成	41	1973 (1956)	1979	フジイ種苗	強	中	良	主	長	濃緑	黒	中	露地用	"
翠 青 2 号	42	1973 (1956)	1979	タキイ種苗	強	中	良	主	長	濃緑	黒	多	促成用	"
ときわ夏節	43	1973 (1963)	1979	サカタ種苗	強	小	中	側	中	濃緑	白	多	露地用	"
亀 交 春 秋	44	1973 (1964)	1979	渡辺農事	強	大	良	主	長	淡 濃緑	黒	多	抑制用	"
松 の み どり	45	1973 (1965)	1979	日本園芸 生 産 研	強	中	良	主	長	濃緑	黒	多	促成用	"
長 交 ときわ	46	1973 (1970)	1979	タキイ種苗	強	中	中	主	長	濃緑	白	多	露地用	"
さつきみどり	47	1973 (1970)	1979	サカタ種苗	強	小	中	側	長	濃緑	白	多	露地用	"
み な づ き	48	1973 (1970)	1979	カネコ種苗	強	大	良	主	中	濃緑	黒	多	促成用	"
な つ み どり	49	1973 (1970)	1979	神田育種	強	大	中	側	長	濃緑	白	多	露地用	"

35 メロン

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	分 類	草勢	果形	果皮 色	果肉 色	果重	成熟 日数	栽 培 適 地
北海道キング系	67	1973	1979	各 社	ネット	強	長円	灰緑	桃	kg 1.8	45	全道一円
アールス フェボリット	68	1973		"	ネット	中	円	灰緑	緑	1.4	55	"
ブ リ ン ス	69	1973 (1967)		サカタ種苗	ノー ネット	強	長円	灰緑	桃	0.6	40	"

36 スイカ

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	分類	草勢	果皮 色	果肉 色	果 重	糖度	成熟 日数	栽 培 適 地
大 和 西 瓜	スイカ北海 道移第1号	1972	1979	大和農園	摘皮	強	鮮緑 条斑	緋赤	kg 6~7	% 11	日 40	全道一円
新 三 笠	70	1973 (1962)	1979	南都農園	摘皮	強	鮮緑 条斑	緋赤	5~6	12	40	"

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	分類	草勢	果皮色	果肉色	果 重	糖度	成 熟 日 数	栽 培 適 地
綺 王	71	1973 (1968)		大和農園	縞皮	強	鮮緑 条斑	鮮赤	kg 5~6	% 12	日 40	全道一円
早生金剛	72	1973 (1970)	1979	みかど	縞皮	強	濃緑 条斑	鮮黄	7	11	45	"

37 カボチャ

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	草 勢	果 形	果皮色	果 重	成熟 日数	収 量	栽 培 適 地
美國デリシャス	73	1973 (1954)	1979	雪印種苗	強~中	ハート 型	暗 緑	2.6 kg ~3.5	55	多	全道一円
芳 香 青 皮	74	1973 (1969)	1979	渡 辺	強	扁 円	帯灰緑	1.0 ~1.5	30	中	"
錦 芳 香	75	1973 (1970)	1979	渡辺園研	強	扁 円 突	濃 緑 白緑斑	1.0 ~1.5	30	中	"
え び す	76	1973 (1972)		タキイ種苗	強	扁 円	濃 緑 淡緑条斑	0.9 ~1.2	25	中	"

38 イチゴ

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性								栽 培 適 地
					草勢	葉の 大きさ	ランナ 発生数	果色	果の 大小	果形	熟期	収量	
ホ レ ラ	23	1972	1979	導 入	強	中	中	鮮紅	中	球円 錐	中	多	全道一円
盛 岡 16 号	イチゴ北海 道移第1号	1973		野 菜 試	強	大	中	淡紅	大	円錐	中	少	〃
幸 玉	77	1973 (1961)	1979	玉 利 氏	強	中	多	紅赤	中	円錐	晩	多	〃
ゲ ナ ー	78	1973 (1961)	1979	導 入	強	大	中	濃紅	中～ 大	円錐	中	中	〃
レ ッ ド コ ー ト	79	1973 (1965)	1979	〃	強	中	多	濃紅	中	円錐	中	中	〃
キ ャ ベ リ ア	80	1973 (1965)	1979	〃	中	中	多	紅	中	円錐	中	中	〃
宝 交 早 生	81	1973 (1970)		兵庫農試	強	中	多	鮮紅	中～ 大	円錐	早	多	〃

39 キャベツ

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							性 性			栽培適地
					草勢	球形	シマリ	肉質	球重	耐暑性	結球 日数	収量性	作型		
コペンハーゲン マーケット	キャベツ 北海道輪第1号	1972 (1924)	1979	導 入	中	丸	良	不良	中	中	日 90	小	早出	全 道	
サクセション	キャベツ 北海道輪第2号	1972 (1924)	1979	〃	強	扁円	中	良	や大	強	120	中	秋	〃	
札幌甘らん	キャベツ 北海道輪第3号	1972 (1924)		各 社	強	扁円 腰高	良	中	極大	中	150	多	秋貯	〃	
中 村 仲 秋	82	1973 (1950)	1979	中 村 採 種	強	扁円	良	中	大	中	120	中	秋	〃	
ア ラ ス カ	83	1973 (1967)		導 入	中	球	良	極良	小	中	90	小	早出	〃	
C M	84	1973 (1967)		タ キ イ	中	球	良	良	小	中	95	小	早出	〃	
四 季 穫	85	1973 (1969)	1979	タ キ イ	強	扁円 腰高	良	不良	大	強	120	中	夏秋貯	〃	
晩 抽 理 想	86	1973 (1969)		タ キ イ	強	扁円	良	中	中	強	120	中	秋貯	〃	
S E	87	1973 (1970)		長野農試	強	扁円	良	良	中小	強	120	中	秋	〃	
夏 蒔 理 想	88	1973 (1970)	1979	タ キ イ	強	扁円 腰高	良	中	や大	強	115	中～ 多	秋	〃	
2 月 穫	89	1973 (1970)	1979	タ キ イ	強	扁円	良	良	中	中	120	中	秋	〃	
初 秋	90	1973 (1970)	1979	タ キ イ	強	扁円	良	良	中～ 小	極強	120	中	夏秋	〃	
大 丸 と も え	91	1973 (1970)	1979	中 村 採 種	強	扁円	良	良	大	中	150	多	秋貯	〃	
長 岡 早 生	92	1973 (1970)	1979	タ キ イ	強	扁円	良	良	中	強	120	中	早出	〃	

40 カリフラワー

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					草 姿	花蕾色	シマリ	花蕾重	成 日	熟 日	収 量	
アーリー スノーボール	その他北海 道輪第2号	1972		導 入	半開張	白	良	kg 0.8	45	日	中	全道一円

41 ハクサイ

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地	
					草勢	球形	シマリ	1 球重	収量	結球 日数	耐病 虫性		作型
仲 秋	93	1973 (1963)		渡 辺	強	円筒	良	4	多	85	中	秋	全 道
王 将	94	1973 (1963)		タ キ イ	強	円筒	良	4	多	85	強	秋	〃

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性								栽培適地
					草勢	球形	シマリ	1球重	収量	結球 日数	耐病 虫性	作型	
大 関	95	1973 (1963)	1979	タ キ イ	強	円筒	良	3～4	多	85～ 90	強	秋	全 道
オ リ ン ピ ア	96	1973 (1966)		渡 辺	強	円筒	良	4～5	多	90～ 100	強	秋	"
春 蒔 極 早 生	97	1973 (1967)	1979	タ キ イ	中	円筒	良	1.5～ 2.0	小	70	強	早出	"
長 交 2 号	98	1973 (1970)	1979	タ キ イ	中	短円筒	良	2.2～ 2.6	小	70	中	早出	"
横 綱	99	1973 (1972)	1979	タ キ イ	強	円筒	良	4	多	85	強	秋	"
無 双	100	1973 (1972)		タ キ イ	中	円筒	良	2.5～ 3.5	中	75	強	早出	"
60 日 み どり	101	1973 (1972)	1979	タ キ イ	中	円筒	良	2～3	中	75	強	早出	"

42 つけ菜

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					分類	草姿	葉形	葉色	葉柄色	辛味	収量	
白 茎 体 菜	その他北海道 第3号	1972	1979	各 社	体菜	立	半結球	緑	白	なし	中	全道一円

43 タマネギ

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽 培 適 地
					草姿	抽苔	倒伏指	球形	外皮色	球重	貯蔵性	
オータム フライド	24	1972		導 入	や立	少	月日 9. 5	球	黄	g 160	良	全道一円
札 幌 黄	タマネギ 北海道輪第1号	1972 (1924)		導 入 選 抜	中	少	9. 1	球	黄	160	並	"
アーリーイエロー グローブ	123	1973 (1962)	1979	導 入	立	少	9.12	球	黄	150	並	全道一円
ア ン コ ー ル	124	1973 (1962)	1979	導 入	や立	少	9. 4	球	黄	144	並	"
北 見 黄	162	1976		北見農試	中	少	8.30	球	黄	160	並	網 走

44 ネギ

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性								栽培適地
					分類	分けつ	葉色	葉しよ う部色	1株重 g	低 温 伸長性	越冬性	収量	
加 賀 太 葱	長ネギ 北海道移第1号	1972	1979	各 社	2年	中～少	濃緑	白	200	不良	強	中	全道一円
札 幌 根 深	108	1973	1979	"	2年	中～少	濃緑	白	200	不良	極強	中	"
松 本	109	1973	1979	"	2年	中～少	濃緑	白	250	不良	強	中	"
石 倉	106	1973 (1967)		"	1年	少	緑	白	350	良	弱	多	"
金 長	107	1973 (1967)		協 和	1年	少	緑	白	350	極良	弱	多	"

45 ホウレンソウ

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					草姿	株張	葉欠刻	葉柄	作 型	種子形	収量	
キングオブ デンマーク	ほうれん草 北海道輸第1号	1972 (1933)	1979	導 入	半匍	中	無	長	月 6.7	丸	多	全 道
ノ ー ベ ル	ほうれん草 北海道輸第2号	1972	1979	"	半匍	中	無	短	5.8	丸	多	"
ピロフレー	ほうれん草 北海道輸第3号	1972	1979	"	半匍	大	無	中	4.8	丸	多	"
ミンスター ランド	ほうれん草 北海道第4号	1972		"	半匍	大	多	長	3.9	針	多	"
札 幌 大 葉	ほうれん草 北海道第5号	1972 (1953)		北 農 試	半匍	中	無	短	4.8	丸	多	"
伊 達 在 来	102	1973 (1954)		伊 達 農 園	半匍	大	無～小	中	2～4	丸	中	"
バイキング	103	1973 (1954)		導 入	半匍	中	無	短	5.8	丸	多	"
ニューサッポロ	104	1973 (1970)		雪 印	半立	中	中	中	4.8	丸	多	"
ニューアジア	105	1973 (1970)		永 池	立	大	大	長	2～3 9～10	針	中	"

46 セルリー

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					草 姿	草 長	葉 色	葉柄色	ス入り	せんい質	収 量	
コーネル 619	110	1973 (1962)		導 入	半 立	長	黄 緑	黄 緑	小	小	中～多	全道一円
ユ タ 系	111	1973 (1972)	1979	導 入	立	長	緑	緑	小	中	多	"

47 レタス

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					分類	球形	シマリ	球重	抽苔	耐寒性	耐病性	
ワイヤヘッド	その他 北海道輪第1号	1972	1979	導 入	半結球			中	遅	強	強	全道一円
ペンレーク	112	1973 (1964)		"	結球	円	良	や大	遅	中	中	"
プレート レークス	113	1973 (1964)		"	結球	円	良	大	遅	強	強	"

48 パセリ

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					草勢	株張	葉色	葉形	耐寒性	日持	収量	
エメラルド1号	その他 北海道輪第4号	1972	1979		強	良	濃緑	縮葉	強	良	中	全道一円

49 アスパラガス

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					草丈	太さ	色	先 端 し まり	鱗片	品質	収量	
カリフォルニア500	114	1973 (1966)		導 入	高	太	緑	良	密	良	や多	全道一円
カリフォルニア500W	115	1973 (1966)		導 入	高	太	緑	良	密	良	多	"

50 ダイコン

品 種 名	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性							栽培適地
					草 姿	葉色	根色	根形	根長 cm	収量	作 型	
練馬尻細	だいこん 北海道第1号	1972	1979	各 社	や開張	濃緑	白	円筒 尻細	50	多	秋	全道一円
宮 重	だいこん 北海道移第2号	1972 (1924)		"	や立	濃緑	青首	円筒 尻細	60	多	秋	"
時無大根	だいこん 北海道第3号	1972 (1924)	1979	"	半開張	濃緑	白	円錐	30	小	春～夏	"
みの早生系	116	1973 (1954)		"	半開張	濃緑	白	円錐 中太	70	多	秋	"
大 蔵	117	1973 (1970)		石井泰次郎	開 張	濃緑	白	円筒 尻詰	40	多	秋	"
聖 護 院	118	1973 (1970)		各 社	立	濃緑	白	長球	15	多	秋	"
理 想	119	1973 (1970)		み か ど	や立	濃緑	白	円筒 尻細	60	多	秋	"
秋 づ ま り	120	1973 (1970)	1979	各 社	や開張	濃緑	白	円筒 尻詰	40	多	秋	"

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性				根 長	収 量	作 型	栽 培 適 地
					草 姿	葉 色	根 形	根 色				
日 の 出	121	1973 (1970)	1979	各 社	半開張	濃緑	白	円筒	40	中	春～夏	全道一円
(廿日大根) ラビットレッド	その他 北土道輸第5号	1972 (1927)	1979	導 入	立	濃緑	赤	球	2	小	春～秋	"

51 カ プ

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性				根 長	成 熟 日 数	収 量	栽 培 適 地
					草 姿	葉 色	葉 柄 色	根 形				
札 幌 紫	その他 北海道輸第6号	1972 (1924)	1979	導 入 選 抜	立	濃緑	帯紫緑	扇円	紫	50	多	全道一円
大 野 紅 熊 青	その他 北海道移第7号	1972 (1924)	1979	渡 島 支 場	立	紫紅	鮮 紅	扇円	鮮紅	50	多	"
寄 居 熊 青	その他 北海道移第8号	1972 (1924)	1979	各 社	立	鮮緑	淡 緑	扇円	白	30	中	"
金 町 子 かぶ	122	1973		各 社	立	鮮緑	淡 緑	扇円	白	30	中	"

52 ニンジン

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性				芯の 大 小	成 熟 日 数	収 量	栽 培 適 地
					草 姿	葉 色	根 形	根 色				
アーリー チャンテネー	にんじん 北海道輸第1号	1972 (1924)	1979	導 入	立	濃緑	長円錐 尻 詰	橙	中	H 120	多	全道一円
中 村 鮮 紅 太	125	1973 (1950)	1979	中 村 採 種	立	濃緑	長円錐	濃橙紅	中	120	多	"
5 寸 系	126	1973 (1972)	1979	導 入	立	濃緑	長円錐 尻 詰	濃橙紅	中	120	多	"

53 ゴボウ

品 種 名	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	特 性				太 さ	根 色	す 入 り	栽 培 適 地
					草 姿	葉 色	根 形	根 長				
札 幌 大 長	その他 北海道第9号	1972	1979	各 社	立	緑	長	cm 80	cm 2.5	褐色	中	全道一円

54 食用ユリ

品 種 名	系統番号	登録番号	登録年	廃止年	育成場所	特 性								栽培 適地
						草姿	草丈 cm	花色	球形	球色	球重 g	苦味	収量	
角 田 百 合		ゆり 北海道第1号	1972	1979		立	80	橙紅	圓球	白	100	なし	中	全道 一円
北 海 白 百 合	空系1号	ゆり 北海道第2号	1972 (1965)	1979	空知支場	立	60	橙紅	圓球	白	150	なし	多	"

VI 飼 料 作 物

55 オーチャードグラス

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
北海道在来種		オーチャードグラス 北海道第1号	1971 (1914)		日高種牧	アメリカから導入	早生。茎太く、茎数が多い。 葉幅・葉長大。再生力旺盛	全道
フ ロ ード	Frode	オーチャードグラス 北海道第2号	1971 (1958)	1979	スエーデン	スエーデンから導入	晩生。多葉型で葉長・葉幅 比較的大。耐寒性大。耐病 性にやや弱。再生力旺盛。	オーチャードグラス 栽培地帯
キタミドリ*	月寒在来	オーチャードグラス 北海道第3号	1971 (1968)		北海道農試	集団選抜	早生。草型は中間、再生良 好。すじ葉枯病に強、雲型 病にやや弱。耐寒性	全道
フロンティア		オーチャードグラス 北海道合第4号	1972		雪印種苗	合成品種法	中生。葉長。葉幅が大、茎 が太い、直立、すじ葉枯病 に強、雲型病にやや弱、多収	全道
オカミドリ*	北海2号	オーチャードグラス 北海道合第5号	1976		北海道農試	合成品種法	晩生。葉長。葉幅が大、耐 病性大、耐寒性は強。	全道
ホクレン改良種		1	1971		ホクレン	集団選抜法	キタミドリとはほぼ同様	根領地域を除く全道
ヘイキング	雪印 改良1号	2	1971		雪印種苗	集団選抜法	極晩生。葉部率が高い。耐 病性は並。	道東地域を除く全道
ドリーゼ	Dorise	4	1971		オランダ	オランダから導入	中生。葉部率が高い。葉は 極細。	オーチャードグラス 安定地帯
フィロックス デンフェルト	Phyllox Daehnfeldt	5	1971		デンマーク	デンマークから導入	中生。茎数多、耐寒性、永 続性やや弱。	オーチャードグラス 安定地帯
マスハーディ	Masshardy	6	1971		アメリカ	アメリカから導入	晩生。大粒置核病に強、雲型 病に強。耐寒性大。	オーチャードグラス 安定地帯
ケ イ	Kay	175	1978		カナダ	カナダから導入	晩生。葉長。葉幅が大、茎 が太い、大粒置核病および 小粒置核病に強。	オーチャードグラス 安定地帯

56 チモシー

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
クライマックス	Climax	チモシー 北海道第1号	1971 (1962)	1979	カナダ	カナダから導入	採草型、中生。多葉性、黒 さび病に強、再生良好	全 道
北 王	雪印 改良1号	チモシー 北海道第2号	1971 (1969)		雪印種苗	集団選抜法	採草型、早生。耐病性大、 多収	全 道
セ ン ボ ク*	北系 4305	チモシー 北海道第3号	1971 (1969)		北見農試	集団選抜法	採草型、早生。強悍、耐倒 伏性。多葉性、再生力良、 耐病性大、多収	全 道

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
ノ サ ッ プ*	北見2号	チモシー 北海道第4号	1977		北見農試	合成品種法	採草型、早生、茎が太い、 多葉性、再生良好、耐病性大	全 道
ホ ク シ ョ ウ*	北見7号	チモシー 北海道第5号	1977		北見農試	集団選抜法	ほふく型、晩生、耐病性大 再生良好、採草・放牧兼用	全 道
ホクレン改良種		7	1971		ホクレン	集団選抜法	採草型、早生、耐病性大、 多収	全 道
ノースランド	Heidemij	8	1971		オランダ	オランダから導入	ふほく型、極晩生、分けつ 数多い、耐病性弱	全 道

57 イタリアンライグラス

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
ビ リ オ ン	Billion	11	1971		オランダ	オランダから導入	春播性高い、早生、生育期 間は短い、直立型、稈は太 く、葉幅が広い、斑点病強。	全 道
マンモス イタリアンB		12	1971		雪印種苗	倍数性育種 法 母系選抜法	春播性高い、早生、生育期 間は短い、直立型、稈は太 く、葉が大きい、冠さび病に弱	全 道

58 ペレニアルライグラス

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
リ ベ ー ル	Reveille	168	1978		オランダ	オランダから導入	中生の晩、葉幅広く、茎は 太い、耐病性強、再生良好	道北、道央 道南地域
ピ ー ト ラ	Petra	169	1978		オランダ	オランダから導入	極晩生、再生良好、耐病性 強、雪ぐされ大粒菌核病に は弱	道北、道央 道南地域
マ ン モ ス		170	1978		雪印種苗	集団選抜法	晩生、葉幅は広い、冠さび 病強、雪ぐされ病弱	道北、道央 道南地域

59 メドーフェスク

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
レトー デンフェルト	Leto Daehnfeldt	13	1971		デンマーク	デンマーク から導入	早生、直立型、網斑病に強	全 道
タ ミ ス ト	Tammisto	171	1978		フィンランド	フィンランド から導入	出穂始は「レトー」よりやや 遅い、越冬性は良、耐病性 は並	全 道
ト レ ー ダ ー	Trader	172	1978		カナダ	カナダから 導入	出穂始は「レトー」よりやや 遅い、越冬性は並、耐病性 は並、再生良好	全 道
フ ァ ー ス ト	雪印 合成1号	173	1978		雪印種苗	合成品種法	出穂始は「レトー」並、越冬 性良、再生良好、耐病性は並	全 道

60 トールフェスク

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
ホ ク リ ョ ウ*	北海 1 号	トールフェスク 北海道台第 1 号	1972		北海道農試	合成品種法	晩生、草丈高く多葉性、網斑病に強、雪腐病に強、夏枯に弱、多収	全 道
ヤ マ ナ ミ*	北海 2 号	トールフェスク 北海道台第 2 号	1972		北海道農試	合成品種法	極早生、葉の病害に強、雪腐病に弱、夏枯れに強、多収	全 道
ケンタッキー 31フェスク	Kentucky 31	14	1971		アメリカ	アメリカから導入	早生、草質は粗剛、越冬性はやや弱	全 道

61 ケンタッキーブルーグラス

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
ケンブルー	Kenblue	15	1971		アメリカ	アメリカから導入	早生、茎が密生、銹病に弱多収	全 道
トロイ	Troy	174	1978		アメリカ	アメリカから導入	早生、銹病にやや強、めん羊の採食は不良、春季の草勢がすぐれ秋季の草勢低下が小	全 道

62 リードカナリーグラス

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
アイオリード		9	1971		アメリカ	アメリカから導入	草丈が高く粗剛、嗜好性は劣る。	全 道

63 マウンテンブロームグラス

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
テイネ		10	1971		雪印種苗	母系選抜法	早生、病害低抗性は強、多収	道央地域

64 アカクローバ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
サ ッ ポ ロ*	月系37-1	クローバ類 北海道第 1 号	1971 (1966)		北海道農試	集団選抜法	早生、葉は大きく葉斑は鮮明、再生は良好、耐病性强、小粒菌核病にやや弱、多収	全 道
ハ ミ ド リ		クローバ類 北海道第 2 号	1971 (1966)		雪印種苗	集団選抜法	早生の晩、冬枯に強、茎割病にやや強、さび病抵抗性は並	全道、特に道北地域
レッドヘッド	Red Head	クローバ類 北海道輪第 3 号	1972		オランダ	オランダから導入	早生の晩、葉は大きく、葉斑はやや不鮮明、草姿は巨大、耐病性はやや強	道央、根釧地域

65 シロクロローバ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
カリフォルニア ラジノ	California Ladino	19	1971		ア メ リ カ	アメリカから導入	はふく茎の密度が大、開花期が早い。	全 道
ミルカバイピア		20	1971		デンマーク	デンマークから導入	冬枯に強く、放牧適性が大コモン型	道北、道東
ニュージーランド ホホワイト	Newzealand white	21	1971		ニュージー ランド	ニュージー ランドから 導入	葉は大きく、密性、多収。 耐病性強、再生力良好、コ モン型、ラジノ型	道央、道南
ロディギアノ	Ladino Digante Lodigiano	151	1975		イ タ リ ア	イタリアから導入	葉は大きく、葉柄は長く、 はふく茎も太い巨大型、多 収、ラジノ型。	全 道
リ ー ガ ル	Regal	152	1975		ア メ リ カ	アメリカから導入	耐寒性、耐旱性は強、耐病 性は強、多収、ラジノ型	全 道

66 アルファルファ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
デュピュイ	Du Puits	アルファルファ 北海道輪第1号	1971 (1958)	1979	フ ラ ン ス	フランスから導入	早生、紫花種、草型は直立、 葉部病害抵抗性大、冬枯れ 少、多収。	全 道
サラナック	Saranac	アルファルファ 北海道輪第2号	1971		ア メ リ カ	アメリカから導入	早生、草型は直立、紫花種、 耐病性強、冬枯れ少、多収。	道北、道央の アルファル ファ栽培可能地 帯
ウィリアムス バーグ	Williams- burg	18	1971	1978	ア メ リ カ	アメリカから導入	同 上	同 上
ア ル フ ァ	Alfa	17	1971		スウェー デン	スウェーデ ンから導入	早生、紫花種、草型は直立、 耐病性強、冬枯れ少、多収。	東北、道央
ヨーロップ	Europe	150	1975		ア メ リ カ	フランスから導入	早生、紫花種、草型は直立、 倒伏に強い、多収。	根領地域を 除く全道
ソ ア	Thor	167	1978		ア メ リ カ	アメリカから導入	早生、紫花種、草型は直立、 耐病性強、冬枯れ少、多収。	全 道

67 バーズフットトレフォイル

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性	栽培適地
バイキング	Viking	22	1971	1978	ア メ リ カ	アメリカから導入		

68 飼料用ビート

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性
シュガー マンゴールド	Sugar Mangold	飼料ビート 北海道輸第1号	1971 (1939)		英 国		多収、肉質ち密で乾物多く、貯蔵性に富む

69 飼料カブ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性
紫 九 蕪 菁		飼料用カブ 北海道第1号	1971 (1931)				早生であり、比較的低温でもよく肥大する。肉質は食用かぶに比して硬いが、飼料かぶのなかでは比較的軟かく、根部の乾物率も低い。貯蔵性も低い。

70 ルタバガ

品 種 名	系統番号	登 録 番 号	登録年	廃止年	育成場所	育成方法	主 要 特 性
ネムロルタバガ		ルタバガ 北海道第1号	1971 (1954)		根室支場	集団選抜法	白腐病に対して強く、収量は年次偏差少なく多収、肉質は硬い
マゼスチック 1号		ルタバガ 北海道第2号	1971 (1959)		根室支場	集団選抜法	白腐病にはかなり強く多収、肉質はルタバガとしてはやや軟かい
グリーントップ	Green top	40	1971 (1963)				根部にき裂を生じやすく、白腐病罹病性はやや高いが、根腐病には極めて強抵抗性を示す。

草 丈	葉 数	根 形	根 色		肉 色	そ の 他	栽 培 適 地
			地上部	地下部			
中	中	紡錘形	緑	白	白	根部4割露出	全道一円

姿 勢	葉 色	葉柄色	根 形	根 色		肉 色	肉 質	そ の 他	栽 培 適 地
				地上部	地下部				
直 立	緑	淡紫色	球	紫	白	白	軟	根部4～5割露出	全道一円

姿 勢	葉 色	葉 柄 色		頸 長	頸 色	根 形	根 色		肉 色	側根の 多 少	その他	栽 培 適 地
		生育盛期	収穫期				地上部	地下部				
中 間	緑	下部 淡赤紫	下部 赤 紫	中	暗 紫	球	赤 紫	白	白	少	根部 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 露出	全道とくに根頸の内陰部の白腐病多発地帯
や直立	や淡緑	下部極 淡赤紫	下部 淡赤紫	長	暗 紫	円 錐	鮮赤紫	クリーム	クリーム	少	根部 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 露出	全道とくに根頸の白腐病の多発しない地帯
や開張	淡緑	黄白色	淡黄緑	短	黄緑	や球形	黄緑	クリーム	クリーム	中	根部 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 露出	根頸、天北で根腐病多発地帯に適す

既刊「北海道立農業試験場資料」一覧

- 第1号 北海道の菜豆
北海道立農業試験場（昭和32年3月）
- 第2号 甜菜試験成績集（十勝支場）
北海道立農業試験場（昭和35年3月）
- 第3号 農作物優良品種の解説
北海道立農業試験場（昭和35年3月）
- 第4号 草種・草地に関する試験成績集
（昭和25年度～昭和37年度）北海道立農業試験場（昭和39年3月）
- 第5号 分析成績集〔昭和13年度～昭和41年度〕Ⅰ肥料 Ⅱ加工原料 Ⅲ飼料 Ⅳ水質（北海道立中央農業試験場資料）北海道立中央農業試験場（昭和45年7月）
- 第6号 水稲紙筒苗ばらまき栽培技術
北海道立中央・上川・道南農業試験場（昭和49年6月）
- 第7号 昭和51年北海道水稲冷害要因の技術解析
北海道立中央農業試験場（昭和52年8月）
- 第8号 北海道農用地の土壌成分
北海道立中央農業試験場（昭和52年12月）

北海道立農業試験場資料 第9号

農作物優良品種の解説（1961—1977）

昭和54年3月31日 発行

発行所 北海道立中央農業試験場

069 13 北海道夕張郡長沼町

印刷所 株式会社 正文舎印刷所

札幌市白石区菊水2条1丁目

T E L (代)811-7151